Contrast

WGAP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｏｎｔｒａｓｔ

【Ｎコード】
Ｎ４６０４Ｌ

【作者名】
ＷＧＡＰ

【あらすじ】
中澤誠は高校一年生。
彼はその整った容姿とクールなキャラクターから、校内の女子たちの人気を一身に集めていた。
しかし、彼にはある悩みがあって…？
迷える少年と男前な少女が織りなす、裏表ハイテンポラブコメディー！

1．"A May-day" -a1 『序章』

-a1 『序章』

例えばモノの裏表。
最初に見たほうを“表”と勝手に思い込むから、“裏”ができるだけの話であって、裏も表もひっくるめてそのもの自体だ、と俺は思う。
それが自分にとって不満で気に入らない“裏”であっても、だ。

だから、「あのこ、裏があるよね」とか、大変迷惑な話である。
てか、余計なお世話だ。
そんな概念、自分が“最初に見た方の一面”を勝手に表と思い込むから成立するだけで、人の性格には多面性があることを完全に無視している。

いろいろな側面があって当然。
同じ側面でも人によって受け取り方も違う。
だから、こんな決めつけの概念なんて捨てちゃって、何もかもありのままを受け入れてくれるような世界になればいいな、って思う。

けど、まぁ。
この世界、そんなにうまくいくはずもない。
世の中は思い通りにいかないことが山ほどいっぱい。

ぐだぐだ考えているだけで仕組みをいじれてしまうような単純な構造はしていない。
何かしら行動は必要である。

…いや、もしかしたら、アクションを起こす勇気が何より必要かもしれない。
もしそれが俺にあれば、今現在こんな状況にはなってなかっただろうし、まず、この話は始まってもいない。
自分の壁を打ち破る“勇気”、“強さ”、“行動力”。
これが俺のロストワード。

だから……

1．&quot；A May−day&quot； −a2 『危機』

−a2 『危機』

この状況はどうにもなりそうになかった。
廊下の角を曲がった瞬間、目の前に女子が三人。
なぜかそれぞれが携帯を握りしめて、俺の行く手を阻んでいる。

五月も半ばにさしかかっていた。
高校に入学し、それなりの受験勉強三昧生活に別れを告げた俺は、ゴールデンウィークも特に意味なく過ごし、なんでもない学校生活を送っていた。
今日は最後の授業が移動教室だったので、今から教室に帰って掃除にでも取り掛かろうかといったタイミングでの、この状況。

…なんですか、この娘たちは。

「あの…えっと……」
ショートカットの子がもごもごと言った。
何故かうつむいていて、表情はよく見えない。
その方が俺にとっては都合がいいが。

「恵美ちゃん、頑張って！」
「チャンスだよ！今しかないよ！」
「え、やっぱり私が言わなきゃだめなの？！」
「そりゃそうじゃん！」
「最初に聞きたいって言い出したのは恵美ちゃんだよ！」
「けど、２人とも携帯持ってる…」
「そら、あわよくば…ねえ？」
「誰だって知りたいんだよ、中澤君のメルアド。」
「じゃあ二人も頑張ろう？！！」

彼女たちだけで盛り上がり始めた。
俺は完全においてけぼりだったが、一連の会話を聞いて大体の状況が飲み込めた。
彼女らは俺のメールアドレスが欲しいらしい。
用途は全く分らないが、そういうことは、要するに、あれだ。
俺はこのままいくと、よく知らない人に連絡先を教えるということになるわけであって、つまり。

そんなの無理。絶対にできない。

そう思ってしまえばこっちのもので、こういう時の俺の行動力は通常の比にならない。
情けないことに。
この場合、前を塞がれているだけだから、後ろのガードはがら空きだった。
彼女たちが身内だけでごちゃごちゃしている隙に俺はくるっと後ろ

を振り返り、今曲がってきたばかりの角に飛び込んだ。

後ろで、俺がいきなり消えたことに気づいた女子三人の「あれ、中澤君は?!」という驚いた声が聞こえたが、気にしないことにして、すぐにもうひとつ角を曲がった。

さらに進んで、また曲がった。

そこには人気がなかった。

俺は壁を背にして廊下に座った。

心拍数が尋常じゃなかった。

1．"Ａ　Ｍａｙ－ｄａｙ"　－ａ３　『遭遇』

－ａ３　『遭遇』

中学生の時だ。俺は初めて携帯電話を買ってもらった。
向かいに住んでいる幼馴染の女の子が携帯を買ってもらって、それが凄くうらやましくて、母にねだったのだ。
そんなすぐには買ってもらえなかったのだが（…あれは大変な戦いだった）、ようやく買ってもらった携帯で俺はその夜、事前に彼女が渡してくれていたメールアドレスを書いたメモを見ながら、メールを送った。
…つまりは、これがしたかっただけだった。
まぁそれはいい。
しばらくメールして、何となく気分がほっこりして、いつもより早めに眠った。

翌朝。
携帯を見て、俺は真剣に携帯がバグったと思った。
宛先の分らないメールが５０件近く入っていたのだ。
それは軽くホラー映画だった。
種を明かせば、その幼馴染が友達にふと俺が携帯を買ったことをメールで話題にしたのがきっかけで、メルアドを無理やり聞きだされてしまって（メールの群れの中にそのことに対する断わりのメールが入っていた）、そこからクラスの女子のほぼ全員にメルアドが流出していた、というだけのことだったのだが、それは俺を『知らない人からのメール恐怖症』にするには十分なものだった。

ただでさえ顔の見えないコミュニケーションは誤解を招きやすいのに、よく知らない人とメール交換とかどうしたらいいんだ、と思っていたのもあったせいで、もうその後ほとんど誰ともメールしなくなってしまって、携帯はただのネットツールになっていた。

そういうわけで、親しくなるまでメルアドはもちろん、連絡先さえも明かさないように心掛けていたのだったが、ああいうパターンは想定外だった。
これは対策を考えないといけない…と思った時。

「おー、誠。急に教室からいなくなったと思ったら先に行ってたのかー。一緒に帰ろうと思ったのによぉ。」

前から声をかけられた。顔をあげると、前髪がつんつん上に跳ねている、見慣れた顔が目に入った。

「あ…矢吹。」
「てか、何してんだよ。廊下に座ったら汚いぞ。」
「休憩だよ。あとつまんないトラウマの回想。」
「あん？虎馬？」
「…いや、いいよ。」

俺は立ち上がってお尻を軽く払った。
確かに汚かった。

ここでもう少し考え事をするのも悪くなかったが、矢吹と出くわした以上、それを振り切ってまでここにいる理由もない。
あの女子三人組を捲いてから適度に時間もたっていた。

「お前は神出鬼没をモットーにでもしてんのか？まさかこんなとこで出くわすとは流石のオレでも思わなかったぞ。」
「反論はできないけど……お前こそなんでここにいるんだよ？ここ帰り道から大分外れてるじゃないか。」
「盛大に迷った。」
「…迷いすぎだろ！」
「だってここの校舎複雑すぎじゃね？入り組んでてよー。ダンジョンかっつーの。」

ははは、と、矢吹は心底楽しそうに言った。
確かに入り組んではいるが…どんな風に遠回りしたらここに出たのか。
これは道に迷う域を超えているような気がする。

この矢吹という男は、俺が高校に入って最初に話したクラスメイトである。
というか、一方的に話しかけられた。
どうやら天性の調子乗りであるらしく、クラス内でもムードメーカー的ポジションを有している。
そんな奴がなぜ俺に話しかける気になったのかは謎だが、一度話して以来、矢吹はひどく俺を気に入ったらしかった。
まず、名前を呼び捨てで呼び、“オレと誠は仲がいいんだぜ！”ア

ピールを周りに繰り返した。
そして俺の鉄壁ガードをたやすく破り、メルアドもゲット。
うむ、あなどれない。

こんな矢吹だが、調子には乗るが悪ノリはしないタイプらしく、人を不快にさせることが（あまり）ない。
だからか、基本人とつるまない俺でもなんとなく気を使わずに付き合うことができた。
…だからといって移動教室まで一緒に行動する約束などをしているわけではない。
うん。

まぁ、出会ってしまったので仕方ない。
矢吹に先導させると危険だということがわかったので、俺は矢吹と一緒に元来た道を戻ることにした。

1．"A May－day"　－a4　『移動』

－a4　『移動』

さっきの角を曲がっても、もう女子たちには出くわさなかった。
その点には少し安心したが、だからと言って教室まで無事に帰られる保障ができたわけではない。
実際、俺は“学校の廊下”という場所が得意ではなかった。
誰に見られているか分らない上に、沢山の視線や会話が飛び交っている中を歩かなければいけないのだ。
できるなら身体を全面的に隠して歩きたい。

そして、苦手な理由はこれだけではなくて。

「つかさー。お前はどんな気分なんだよ?ずっと聞きたかったんだけど。」
「なにがだよ。」
「なーにとぼけてんだよっ!この!廊下を歩くだけで!女子たちがざわめき黄色い声が飛び交う状況だよ!誠君!!」

矢吹は俺の背中を思いっきりどついてきた。
できれば上手くはぐらかしたかったのだが、予想より高いテンションでの切り返しだった。

あなどれない。
俺は矢吹に『声を抑えろ』の視線を向けた。
気づいたかどうかはわからないが。

そう、それこそ俺が学校の廊下を歩くことが苦手な主な理由だった。
朝教室に向かう時や、教室に向かう時、トイレに行く時でさえ、何故か道行く女子が俺を見て、歓声だったり黄色い声だったりをあげるのだ。
『こっちをちらちら見ながらコソコソ話』など日常茶飯事で、時には取り囲まれたり、現在のように『遠巻きから黄色い声援』の遠隔攻撃を仕掛けたりしてくることもある。

もうこれが小学校の時から続いているので、諦めた。
今ではいかに回避するかを考える一方だ。
今も尚、そのコソコソ話の遠隔攻撃は行われていたりして、俺の意識はチクチクとつつかれていた。

「…俺としてはできたらやめてほしい。」
「あー、なるほど。お前はきゃあきゃあ言われてテンションが上がるタイプじゃないのか。」
「逆だな。テンション下がる。」
「なんだよー!もっと楽しめばいいんじゃね?せっかくモテモテなんだからよ。」
「モテモテじゃないよ…陰口みたいなものだろ。」
「かーっ!謙遜しちゃって誠君!!思ってもないこと言っちゃって!!」

…本心なんだけど。

「容姿バッチリ！スポーツ万能！！そんでもって、きっとそのクールなキャラクターも人気の一因なんだろうな。」

「別にクールなわけじゃ…」

「ミステリアスっていうのかな。掴みどころがないっていうか…お前からはそういう雰囲気が漂っている。きっと女子もそういう所に惹かれんだろうな。『その瞳にハートを射抜かれましたぁ！』みたいな！お前のモテっぷりは尋常じゃないもんな。まったく！！」

矢吹が人の話をちゃんと聞かずに暴走している。

「人気って…。そんなに良いものじゃないんだけど」

俺のげんなりした顔を見て、矢吹は俺の肩を掴んだ。

ガシッと音がしそうだった。

「いや、人気者っていうのは絶対いいことだ、誠よ。オレはそんな人気者なお前が誇らしいぞ。マジでだ。」

「なんでお前が誇らしいんだよ。」

「とにかくだ。誠はもっと自分に自信を持つべきだな。オレだったらもっとその状況を楽しむけどなー。あーもったいねー！」

矢吹は頭の後ろで手を組んで、またぶらぶらと歩きだした。

俺はその後ろを何となく歩く。

なんだか会話が噛み合っていなかった気がする…。

教室が見えてきた。

1．"A May－day"　－a5　『翻弄』

－a5　『翻弄』

教室ではもう掃除が始まっており、ガヤガヤとしたにぎわいに包まれていた。
俺の通っている高校には朝礼と終礼がなく、担任からの連絡事項などは昼休みと5限目の間に設けられたＳＴ（ショートホームルーム）の時に行われる。
だから、この放課後の掃除が一日の締めくくりとなるわけだ。

「うっわ、掃除まだ終わってねえじゃん！！タイミング悪い…」
矢吹がその様子に気づいて渋い顔をした。
「お前、やっぱりサボるつもりだったのか。」
矢吹はわがクラスでは教室掃除のサボり魔として有名である。
学校が始まってまだ一ヶ月も経っていないのにそんな噂が出ているなんて、きっとよほどこいつは人目をはばからずに堂々と掃除をさぼっているのだろう。

「いい感じに道に迷ったから、帰るころには終わってるかと思ったのによ…残念だ。」
「諦めて掃除するか？」
「いんや。見つからないうちにもう一回道に迷いに行こう。」
矢吹は大まじめに答える。
やはり今回も掃除をさぼるつもりらしい。

俺は頷いて軽く左手を振った。
「うん、それじゃあな。」
「ぬぁーーにをいっとるか、誠よ！お前も来るんだろうが！」
矢吹のハイキックが背中に命中。俺は咳き込んだ。
「な…」
「男が一人でぶらぶらしてんのなんて寂しすぎるだろ？」
男が二人でぶらぶらしているのも微妙な気もするが。
「よし、じゃあ食堂でも行ってジュース買って飲もうぜ。」

矢吹はさっさと来た道を戻ろうとしている。
俺は引き留めようかと思ったが、『何が何でも掃除をしなければいけない！』という正義感も湧いてこなかったので、矢吹についていくことにした。
そう、何となく。

するとその時。

「駄目だよ、二人とも！男の子は机運んでくれなきゃー。」
踵を返した俺の後ろから、聞きなれた高い声がした。
驚いて振り返ると、そこには小柄な女子生徒が立っていた。
毛先のふわふわした二つくくりをした彼女の手には大きなゴミ袋が二つ下げられている。

「うお、谷口さん？！」
矢吹が驚く。
彼女は小柄なので、俺の陰に隠れて見えなかったらしい。
矢吹は慌てて言い訳を始めた。

「あー、オレ、今日用事あってさ～」
「ジュースを飲みに行く用事？」
「あー、…いや、それとは別にあんだよ！な、誠？！」
「え？！」
「もー、本当？まことくん。」

谷口さんが急に、俺の方へどこかからかったような笑顔を向けた。
俺はいきなりのことに頭が動かなくなる。
それは、突然話の矢面に立たされたから、ということもあるけど、
それだけではなくて。
いきなり名前を呼ばれたとか、いきなり目が合ったとか、それもあるけど他にも要因があったりして。
耳に体温が集まっていくのがよくわかった。

矢吹はしどろもどろになっている俺を視界の端にとらえて何かに気づいたのか、俺の方を見て『ニヤリ』とした。
あいつなりのアイコンタクトだったのだろうが、余計なお世話だった。
矢吹に“察せられた”という事実が、さらに俺を焦らせた。
動悸が激しい。

「え、あ、えっと」

「ところでさぁ、谷口さん。」
俺に助け船を出すように矢吹が谷口さんに話しかけた。
谷口さんは矢吹の方を見た。
俺は彼女の視線から解放された。

「その手に持ってるのって、ゴミ袋だよな？捨てに行く感じ？」
「そうなの、ちょっと中庭にね。」
「じゃあオレらが捨ててきてやるよ！な、誠？」
「え？！あ、…」
頼むから俺に話を振らないでくれ！！
「わぁ、本当？じゃあ頼んじゃおうかなあ。」
谷口さんはキラキラした表情をこちらに向けた。
俺は緊張のあまりぐっと唾を飲み込んだ。

「任せとけ。ばっちり捨ててきてやろう！」
矢吹は心なしかそわそわしながら、片手を差し出し、言う。
谷口さんは矢吹にゴミ袋を渡し、丸い眼を人懐っこく細めて俺達に笑いかける。
「ありがとう、まことくん、矢吹くん！」

…完全に詰まされた感じだった。

1．"A May－day"　－a6　『発覚』

－a6　『発覚』

「…そうか、どうして彼女がいないのかと思ったら、そういうことだったのか…。」
谷口さんから受け取ったゴミ袋を受け取った後、中庭に向かって歩いきながら、矢吹は心底納得したようにこう言った。
まだ矢吹はそわそわしている。
俺は内心、飛び上るほどビビったのだが、何とか平静を取り繕った。

「な…なにがだよ。」
「とぼけんなよ！水臭いぜ、このっ！！」
矢吹が肘で俺の脇腹をつついてくる。
「だからぁ！こういうことだろ？誠君よ。お前谷口さんのことがす」
「やめろやめろやめろやめろ矢吹やめろ！！！」
思わず叫んでしまった。
矢吹が俺の大声に驚いてフリーズした。

「…おう？！」
「止めろ！！！」
「…お前がそんな大声出してんの初めて聞いたぞ。」
高校で初めて叫んだからな。

「けど、そこまで必死に止めるってことは、図星だろ？」
矢吹はまだめげない。

にやにやと、なんだか嬉しくて仕方ないみたいに、笑っている。
これはもしかして、墓穴を掘ってしまったか？

「いやぁ、なるほどなぁ。納得納得。お前もオレらと変わらない健全な男子高校生だったわけだ！」
「な…だから…」
「谷口さん、可愛いもんな。」
空気を読んだのか、今度は小声で言った。
俺はその言葉で、思わず彼女を思いだす。
また耳のあたりが熱くなった。

そんな俺を真正面にとらえた矢吹は、考えごとをするように腕を組む。
「確か、谷口さんとは幼馴染だろ？家が前だとか…。」
「…え？お前、なんで知ってるんだよ。」

谷口和。
俺の向かいに住んでいる幼馴染とは、彼女のことだ。
だがしかし、矢吹はおろか、俺は高校に入ってから誰にもこのことを話していないはずだった。
矢吹はそんなこと何でもないという風に右手をひらひらさせる。
「オレっちの情報網を舐めちゃいかんぜ。特に誠、お前は目立つからな。情報も多く集まってくる。あーんなこともこーんなことも。」
「…え、うそ。」
……信じたくない事実だ。
「まあ、ほとんどが中学時代とかの“中澤君かっこいい伝説”だがな。
『あんな時も中澤君はクールで落ち着いてたのよ！』とか、『こんな時も中澤君だけは一人かっこよかったの！』とかだ。女子の噂話

っておもしれーぞ！」

矢吹はカハハと笑って、尚も続ける。

「幼馴染っていうのも、女子たちの噂話で聞いたんだ。谷口さんのことをしきりに羨ましがってたよ。おいしい境遇だぜ？幼馴染ってのは。」

「……。」

矢吹のその言葉に、

「…言う程、いいことばっかりじゃないよ。」

すこし考えて、言った。

確かに、家が向かいだから、小さい時から一緒に遊んだし、中学の時に彼女が買った携帯のメルアドもすぐにメモ帳に書いて渡してくれたし、今でも“まことくん”と呼んでくれているけれど。

それは“幼馴染”の特権なのかもしれないけど。

もし俺が…もう少しフツウな性格してたら、“どちらかというとマイナスの方が多いんじゃないか”とか、思わないんだろうな、と、思った。

「あー、なるほどな。やっぱりそうなのかー。幼馴染から付き合うパターンって多い気がするけど、関係性を変えるのが結構大変だったりするって聞いたことあるぜ。」

矢吹は俺の含みある言い方に気づかなかったようで、気楽な調子でこう相槌を打った。

どこかにやけたような表情はまだ残っていて、さっきよりもそわそわしている。

「いや、けどなんか、いいなよな、こういうの。青春だな。」

「…そうか？」

「おう…俺好きなんだよ、こういう熱い展開。」
「ベタな感じだろ。」
「いや……とびっきり素敵な感じだ！！！」

矢吹はそういうと、持っていたゴミ袋を俺に手渡して、満面の笑みで言った。
「ジュース奢ってやんよ！先にゴミ捨てといてくれ！！」
そして走って行ってしまった。
矢吹の姿が階段の下に消えていった。

…なんでそこでジュースなんだよ。俺も少し笑いだしたい気持になった。

1．"A May－day"　－a7　『目撃』

－a7　『目撃』

“ウワサ”っていうものは、おひれはひれがつくものだ。
それが事実に基づいていようが全くの想像であろうが、ウワサは同じだけの話題性を持って伝えられていく。
矢吹がさっき言っていた『中澤君かっこいい伝説』なんていうのがそのいい例だ。
ただ単に、俺が「黙って」、「誰とも目を合わせないように」毎日を過ごしていた頃の副産物である。
自分の“欠点”を隠そうとしていたら、いつの間にか周りに勝手に創られてしまっていた不都合な“表”。

嬉々として語られたウワサによって創られた“表”の『中澤誠』というイメージは、さらなる空想を呼び、勝手な妄想を育て、より肥大していった。
その結果が、俺の学校という場での居辛さ、息苦しさにつながっている。

高校での“新しい環境”に多少は期待していた。
だが、世間というものは思っているより狭いらしい。
俺がどれだけ気をつけていても、どこからか話は漏れ、伝わり、そこに根付いてき始めている。
もしかしたら、結局はまた同じ結果を招くことになるのかもしれな

い。

いつからこうなってしまったのだろうか。この悪循環。
こんなことを言っていても結局は周りの目を気にしていて。
好きな人を昔のように名前で呼ぶことすら怖くて出来ない。

行動力がない。
強さが見当たらない。
勇気がどこから湧くのか分らない。

矢吹は『素敵だ』といってくれたが、この恋だって、もっと早く決着してもいいはずだった。
ずっと向かいに住んでいるのに、何の進歩もないなんて。
俺は思わず一人で苦笑いをする。

中庭に着いた俺は、ゴミ捨て場でゴミ袋を処理するために、廊下から扉を出て石畳の中庭に入った。
この学校の中庭は四角形で、そのうち三辺を校舎が囲み、もう一つの辺は食堂に面している。
食堂と反対側の辺には、細い入り口を右に少し入ったところに奥まったスペースがあって、そこには芝生が青々と茂り、大きな木が何本も植わっていた。ゴミ捨て場はそのスペースの一番奥にあった。

矢吹は食堂にジュースを買いに行ったのだろうか。
後でのぞいてみようか…。
そんなことを考えながら、俺はゴミ捨て場にゴミ袋を放り込んだ。
俺は新入生なのでよく分らないが、ここは仮設ゴミ捨て場らしい。

スペースの一角にゴミ袋の山が出来上がっていた。

さて、無事ごみも捨てた。
ひとりで思考の深みにはまるのもひとまずお終りにしとこう。
矢吹と合流して、教室に戻って…ジュースも飲もう。
俺は来た道を戻ることにした。

が、しかし。

「あの…実は自分、あなたのことを、好きに、なってしまいまして。よかったら、つ、付き合ってくれないでしょうか？」
奥まったスペースから出ようとしたところで、俺は逆戻りをすることになってしまった。
スペースの入り口をちょうど塞ぐような形で、男女二人が向かい合って立っている。

それはまさかの、告白現場だった。
このタイミングで、この場所で、俺はそんな場面に居合わせてしまったのだ。

このスペースの入り口は若干狭くなっており、食堂の方に抜けるためには、この二人の真ん中を抜けないといけない。
そして、その告白現場を突っ切っていく勇気が俺にあるはずはなかった。

俺は入口の折れ曲がっている部分の陰に身を隠した。
もっと奥に入ってもよかったのだが、できれば早くチャンスを見つけてこの状況から抜け出したいという気持ちが強かった。
あと、今時こんな古風な告白をする人がどんな人なのか気になったという好奇心も少し。
中庭に呼び出して告白なんて、今時の少女漫画でも見ないシチュエーションではないだろうか。

俺はそっと眼だけを動かして、二人を観察した。
男子生徒の方はそれなりに筋肉質で、短く刈った短髪がいかにもスポーツマンといった感じだ。
彼が告白しているようで、キリっとした顔立ちが緊張で強張っている。

女子生徒の方は肩付近まで伸ばした黒髪をハーフアップにしており、学校指定の制服をきちっと着ていた。
この高校は私服登校が許可されているので、これは少し珍しい。
可愛らしいというよりは、綺麗。そう表現するのが正しい。
すっきりと整った顔立ちをしており、言うならば“クールビューティー”と表現したくなるような雰囲気を持っている。
あー、この人はモテるだろうな、と俺は直感で納得した。

彼女は先ほどスポーツマンの彼からの告白を受けたにも関わらず、ずっと沈黙していた。
困ったような、無表情のような、どちらとも取れる表情で彼の方をじーっと見ている。

「……えーっと。あの……お名前は？」

あっ、と、彼が間の抜けた声を出した。
どうやら彼は名乗ることをしていなかったらしい。
というか、初対面で告白したのか。
がんばったな、彼。

「えっと、自分は、田辺っていいます。１－４の。」
「タナベ君。」
彼女の方は、彼…田辺君の苗字を繰り返すと、また黙った。今度は何か考えているようだった。

しばらくすると、田辺君が沈黙に耐えかねたようにしゃべり始めた。
「ほら、あなたは知らないかもしれないんですが、自分、朝に、あなたと同じくらいの時間に、登校してて。それで、一目見て、素敵な人だな、と、…。」
田辺君は話し続ける。
どこで初めに見かけたか。その時の天気、気温、どのくらいの時間に見かけるのか…。

彼女の方はそれを聞きながらも特に表情を変えず、しげしげと田辺君を眺めていたが、ひとつ息を吐くと、彼の話を軽く制して、言った。

「えっと…タナベ君。あたしはあなたの気持に応えられません。ごめんなさい。」
彼女はぺこりと頭を下げる。

「え、…けど、そんな…」

田辺君はまだ何か言いたそうに口を開いたが、彼女はそれにかぶるように話し続ける。

「えっとですね、あたしはまず、よく関わり合いになっていない人とお付き合い、ということは考えられません。
内面がどんな方か分らないのに、いきなり順序を飛ばしすぎだとも思いますし。
もう少し踏むべきステップがあったかなとも思います。
第一、あたしはタナベ君を今日初めて見ましたから。
それに、付き合うということもよく分らないんですよね。」

彼女はこう言った。
…言ってのけた。
というか、“思ったことをそのまま言いました。”って感じだった。
言葉をまるでオブラートに包んでいない。
田辺君も、このあまりにど直球の駄目出しに唖然として、状況が飲み込めていないようだった。

「けど」
…だが。彼女の話には続きがあった。

「そんなことといってくれて、嬉しいです。」

そう言って、彼女は。
切れ長の目をゆるりと細めて、微笑んだ。
男子でも女子でも、見た人すべてがハートをかっさらって行かれるような魅力的は微笑みだった。

「ありがとう。でも、ごめんなさい。」

彼女はくるりと踵を返すと、髪をなびかせて、さっそうと、校舎の方へ消えていった。

中庭には、その場に打ちとめられてしまったように微動だにしない田辺君と、今見た女性は一体何だったのかと、何とか理解しようと必死な俺が取り残された。

1．"A May－day" －b1 『噂話』

－b 『噂話』

「なー、誠よ。オレの近所に住んでるいっこ上のねーちゃんの話なんだけどさ、昨日久々に幼馴染の友達を家に連れてきたんだよな。その人がだな、会ったのが小学校以来だったんだけど、もーめっちゃ美人になってたんだよ!!」

「へー、そうなんだ。」

「超がつく美人!!その人昔から可愛かったんだけど、より磨きがかかっててびっくりしたよ!!」

「そら、何年も会ってなかったんだろ?化粧もしてるだろうしな。」

「だろうなー。今は有名私立女子高に通ってんだってさ。もう住んでる世界が違うよ。」

「へー。矢吹ってそんな美人な知り合いがいたんだな。」

「近所のねーちゃんは化粧で化けてるタイプだけどな。」

「いいのか?そんなこと言って。」

「あー、聞かれたらオレ殺されるわ。」

「ははは…、そうだろうな。」

「笑うなよ!けど、昨日の人以外にも美人な知り合いはいるんだぜ。」

「えー、ほんとか?」

「嘘じゃねえよ!幼稚園から中3までずっと同じクラスだった奴が、大分美人でモテてたんだよ。オレ、ずっと同じクラスだったから顔なじみでよー。周りの友達にうらやましがられたんだ。ほんとに12年位同じだったからな、これはもう腐れ縁としか思えねえ!」

「１２年って…長いな。」
「だろー？高校も同じになっちまったからさー、また同じクラスになったらどうしようかと思ったんだが、離れたからよかったぜ。」
「また同じクラスだったら逆に面白かったのにな。」
「いやー、そんなのよからぬ噂が立っちまいそうだ……
……そういや、おい。なんか今すげー噂話あんの知ってっか？」
「俺、そういうの疎いから多分知らない。」
「偶然耳にした話なんだけど、入学してから今までで、１１人に告られて、全員をすっぱり振ったつわものがいるらしい。」
「１１人って…今日が5月１９日だから、１カ月ちょっとで１１人？…うそだろ。」
「それがマジらしいんだよ！それもありとあらゆる学年から告られてんだって。しかも面白いのはここからでな。」

「それだけでも大概なのに、まだ何かあるのか？」
「大ありだ。振られた全員が、揃いも揃って、そいつを嫌いになったり諦めたりするどころか、よりファンになって帰ってくるんだと！」
「…どういうことだ？」
「なんつーか…例えば、ファンクラブを結成したり。」
「振られた者同士で？」
「そう。」
「…一種の慰安会じゃないのか？」
「いや、そんなんじゃないんだよ！なんか…アイドルを追っかけてるみたいな…。……そうだ、親衛隊！親衛隊みたいなことしてるらしいぞ！」
「…その人たちって、振られてるんだろ？」
「ああ、間違いなく振られてる。一体どんな振り方をしたらそんなことになるんだろうな。さっぱり分らん。」
「なにかものすごい振り方をしてるのかもしれない。」

「なんだそれ、全く想像つかねえ！すげえよな、どんな奴なんだろう。会ってみたいぜ。」
「ああ、そうだな。」

1．"A May－day"　－c1　『心索』

－c1　『心索』

五月下旬。
今年は何故か気候が不安定で、春らしい気温がほとんどないままに、もう初夏の陽気が見え始めていた。
ゴールデンウィークも開けて数週間。
五月病のウイルスがそこら辺を飛び回っているようで、あたりは何となくかったるいような雰囲気である。
こんな時に運悪く連続して降っている雨も相まって、このじめじめした空気は重たい霞のようにねっとりと体にまとわりついていた。

俺が矢吹に例のことを“察せられた”あの日から、もう幾日かが過ぎていた。
矢吹には、谷口さんの件でいろいろお節介を焼かれたり、いらないフォローを入れられたりと、ドギマギさせられることばかりである。
本当に、一番ばれたら駄目な人にばれてしまったのかもしれない。
そのドギマギを回避したくて最近、俺は谷口さんをより避けるようになっていた。
…どこに行くんだい、俺の青春。

そして。
あの日に起こったこともう一つの出来事……告白現場に蜂合わせことを、俺は誰にも話さないでいた。

そこはデリケートな問題だから、言いふらすのは良くないと思ったのが半分。
もう半分は、あの出来事を他の誰にも知られたくないという気持ちだった。

あの事件が俺にもたらした衝撃は、想像以上に大きかったらしい。
あの後矢吹と合流してジュースを飲んだ時も、家に帰った時も、その後何日かを過ごしても、まだあの時の感覚は消えなかった。
心の端が落ち着かないような、そんな感覚。

それは、いくらか“羨望”にも似ている気がする。
彼女は、凄い。
俺が間違いなく言えない、出来ないことを、さらっとやってのけた。
それが良いことなのかそうでないのかは別にしても、彼女のあの行動には“俺にないもの”が沢山詰まっていた。

きっと彼女は、俺が持っていないものを、欲しくてたまらないものを、沢山持っているのだろう。
両手から零れるほどに。
零れ出て、意図せずとも相手にそれが伝わってしまうほど沢山、持っているのだろう。

今までそんなことを感じる人に会ったことがなかったから、俺は少なからず動揺したのだろうと思う。
また同時に、これはチャンスでもあるのではないかと思う。
自分の持っているもので相手に影響を与えてしまうようなカリスマ

性。
もしかしたら、この俺の性格も、彼女に関わればなんとかなるのではないか…？

そうは言うものの。
だからと言ってぱっと彼女のところへ行ってこの胸の内を打ち明ける、なんてことできるはずもない（その点で俺は田辺君を尊敬したい）。
それ以前に、俺は彼女の前に出ることすら怖かった。
俺が隠してきた“裏”を、知られたくない“内側”を、簡単に見抜かれるような気がして。

俺は相手が何処の誰なのかも知らない。
もちろん、相手は俺の存在すら知らない。
『結局、チャンスを見つけたにも関わらず、目前にして逃す』。
そんな諦めがかったビジョンが頭の片隅で明確になってきた5月最後の日。

きっかけは突然やってきた。

1．"A May-day" -c2 『切迫』

-c2 『切迫』

5月31日、放課後。
今日は最後の授業が大幅に延長し、掃除を済ませた時にはもう本来の終了時刻を大幅に過ぎていた。
今日は珍しく真面目に掃除していた（逃げ切れなかったのだろうか）矢吹と合流した俺は、帰り道をのんびりと歩いていた。

俺は高校から少し離れた所に自宅があるので、電車通学をしている。
一方矢吹は家が高校の近所のマンションなので、自転車通学だ。
だから一緒に帰るといっても、本来は高校から駅までのほんの短い間なのだが、今日は特に急ぐ用事もなかったので、高校の近所にある総合体育施設（大きな貝殻みたいなドームが立っている）の付近を散歩して帰ることにした。

「タッチパネル付き2画面ゲーム機の最新モデル！カメラ付き！！待ちに待った！！明日発売だ！！」
「え、とうとう明日発売なのか？！」
「そうだぜ！前回のモデルチェンジからもう3年たってるからなー、やっとって感じだ！」
矢吹は自転車を押しながら、興奮した様子で目をキラキラさせている。

俺も少なからずゲーマーなので、この話題には冷静ではいられない。
「確か大画面になるんだよな！」
「おう！一回り大きいぞ！！」
「あー、けど、俺前回のモデル持ってるからな…とり急いで買わないかもしれない。」
「えー！！なんでだよ、これは速攻で買いだろー！！」

俺たちはワイワイ話しながら、体育施設の敷地を抜け、隣接する公園の入り口付近までやってきていた。
公園は結構広さがあり、木や花壇の花、時には足もとに生える雑草などで自然を満喫することができる。
ベンチもいくつか備え付けてあるので駄弁る時にも便利だった。いつもそのベンチは空いているので利用しやすい。

だが、今日はそこに。
あの時、田辺君を振っていた彼女が、一人で、座っていた。

俺はギョッとした。
まさかこんな所でもう一度出くわすなんて思っていなかった。
このまま真っすぐ公園に入れば、絶対に彼女の眼の前を通らなければならない。
俺は普通にそれをできる気がしなかった。
絶対、変に意識してしまう。
不審に思われてしまう。

だからと言ってここで急に方向転換をするのは不自然すぎる。
第一、その場合矢吹になんて言い訳すればいいんだろう？
俺はとっさにその解答が思い浮かばない。

ああ、もう、なんでこんなことになるんだ。
こんなことなら、寄り道なんかせずに真っすぐ駅に行っていればよかった…。
グダグダと後悔しながらも、もう仕方ないと諦めたその時。

「あれ？原野じゃねーか。」
矢吹が彼女に声をかけた。
「うへ？！」
思わず間抜けな声が出た。矢吹が俺の方を向いて
「ほら、前に言ってただろ。１２年間同じクラスだった奴だよ。」
と補足。
…あの時の美人さんって、彼女のことだったのか？！

彼女…原野さんは、俺達の方を向いた。
しばらく俺と矢吹を交互に見ていたが、矢吹の顔をじっとみて、ハッと思いだしたような表情をすると、
「あ、ヤブキ。」
と言った。
まるで“今まで忘れていたけど、何とか思い出した”といった感じだった。

「久しぶりだな、こんなところで何してんの？」
矢吹が気さくに話しかける。

原野さんは相変わらずきちっと制服を着ていて、ベンチの横に自転車を止めていた。
「あー、うん。ちょっと。」
「誰か待ってたりするとか？」
「いや、誰も待ってない。」
「じゃあ日向ぼっこか！」
「うーん…ちょっと違う。」

矢吹と原野さんがそんな会話をしている間、俺は半歩ほど後ろから矢吹の陰に半分隠れるようにして原野さんを見ていた。
相変わらず凛とした雰囲気を醸し出している。
だが、今日は前回見た時より、自信というか、そういう強いオーラを感じないように思った。
狼狽したような、疲れたような…。

そういえば原野さん、手元と足元が不自然に土で汚れている。
どうかしたのだろうか。
それはまるで、膝をついて地面を探ったような汚れ方だった。

「…探しもの…？」
無意識のうちに呟いていた。
矢吹が俺を振り返る。
原野さんの視線がこちらに向く。
俺は二人がこちらを向くまで、自分が声を出していたことに気が付いていなかったので、注目されて逆にびっくりした。
「え、えー、あ…いや…、手……手と足が汚れてるから、ほら、何か探したのかな、と…」

…情けないほどうろたえてしまった。

　すると原野さんは少し驚いた顔をした。
「よくわかったね…。うん、そう、ちょっと探し物をしてて。」
「へえー、そうなんだ。もう見つかったのか？」
矢吹が応じる。矢吹も感心したような視線を俺によこしていた。
「まだ。けど、大丈夫。ひとりで探すし。」
「ちなみに、何を落したんだ？」
「いや、ちょっとしたもんだよ。」
「ふうん。キーホルダーとか？」
「んー、…財布。」

「・・・全然ちょっとしたもんじゃねえじゃん！！！」
矢吹が容赦なく突っ込んだ。原野さん相手でも矢吹は矢吹のノリのままである。
「うわー、それ凹むわ……いくら入ってたんだ？」
「え…うん。２万円。」
「・・・普通の高校生が持ってる金額じゃねえよ、それ！！！」
その通りだった。
なんでそんな大金を学校に持ってきていのだろう。

「めっちゃ緊急事態じゃねえか、それは！」
「うん、まあ…」
「一緒に探してやんよ！な、誠？」
「？！」
俺は声が出なかった。
…なんで余計なところで声が出て、今出なかったのだろう。
しかし矢吹は俺の同意も待たずに話を続ける。
「一人よりもきっと見つかりやすくなるぜ、原野！」

「え、いいよ、一人で探すし…それに、迷惑かけたくないし…」
原野さんはちょっと困惑した様子で矢吹を制そうとしている。
…これってもしかして、迷惑がられてるんじゃないのか？

だか、持ち前のまっすぐな正義感に火がついてしまった矢吹を止められる人間は、この場にはいなかった。

「いや、なんせ2万円だ、絶対早く見つかった方がいい！！手分けして探そうぜ！！」

1．"A May－day"　－c3　『未遂』

－c3

その後、矢吹はしきりに断ろうとする原野さんをのらりくらりとかわし、半ば無理やり押しきるような形で財布探しを開始した。

この日、授業を定刻通りに終え、掃除も済ませた原野さんは、自転車に乗ってこの付近を抜け、裏道に入った。

そこで、ふと前かごに乗せていた鞄に目をやると、サイドポケットのチャックが開いていた。

いやな予感がしたので中を確認してみると、そこに入れていたはずの財布がない。

掃除の前に財布を確認した記憶があったので、学校に忘れたかと思い教室に取りに帰ったが、見当たらない。

これは自転車に乗っている最中に落としてしまったのかもしれないと、彼女は学校から自然公園までの帰り道で財布を探して歩いていたが、全く見つからないので、疲れてベンチに座っていた……

……このようないきさつだったらしい。

俺たちは、まだ原野さんがまだよく探していないと言っていた、裏道のあたりを探していた。

「けど、この道って、原野の家に行くには遠回りだと思うんだよな。」

矢吹が道端に目を凝らしながら言った。

ここは住宅地で、若干薄暗く、視界も良くない。

「2万なんて大金持ってたわけだし、どこかに買い物にでも行く予定だったのかもな。」
「…本とかか？」
「2万円分の本って、どんだけ買い込む気だよ！」
矢吹がカハハと笑う。
俺は道のあちこちを探しながら、矢吹に言った。
「けど、お前、凄く強引だったけど…もしかしたら原野さん、迷惑だったんじゃないか？」

それに、また俺をまきこんだだろ、と。
言おうとも思ったが、止めた。
俺だって、困っている人を見て知らん振りをするのは嫌だった。
いつも怠けて寝ているが、俺の中にだって正義感はいる。
だからってあんなに強引に助太刀を申し入れる度胸はないのだが。

「あん？いいんだよ、原野は昔からあんな感じなんだ。絶対人に助けを求めない。自分がどれだけ困ってても。だから多少強引にでも言っていかないと……あれ、電話だ。」

矢吹の話を遮るようにリリリリと携帯が鳴った。
矢吹は俺に「わりい、出るわ。」と断りを入れると、少し離れて電話をとった。

へえ、原野さん、そんな性格なのか。
あの凛とした威勢の良さはそこから来るものなのだろうか？
俺も人に助けを求めないが、俺の場合と原野さんの場合とでは訳が違うのだろう。
少なくとも彼女の場合、俺みたいに“困っている姿を見られたくな

い”とかいう理由ではないだろうから。

…。

そう考え始めると、俺は、一体、どうしてこんなに…

「えー！なんだよ、いきなりすぎんだろ！！」

俺の思考はそこで途切れた。

矢吹が何やら大声を出して話し始めた。

なんだ、口喧嘩か？

俺は矢吹に少し近づいた。

電話の相手も興奮しているようで、声が大きいのか、音が携帯から漏れて聞こえてくる。

『なに言ってんのよ！約束してたじゃん、今日発売なんだって！！』

「約束した覚えはねえ！！雑誌くらい自分で買えばいいだろ、なんでいちいち俺をぱしるんだよ、お前は！！」

『いいじゃーん、そんくらいー。』

「俺は今忙しいの！！」

『…ふーん。そんなに忙しいなら、ケーキもいらないね？』

「え」

『お母さんがケーキ一個多く買ってくれてるんだけど…、これは私の明日の朝ごはんに決定することにする。』

「…ずりーぞ」

『なら、買ってきて！今すぐ！３０分以内！！だっしゅ！！』

「あ、おいちょっと待て、佳代っ……」

電話が切れたようだ。

矢吹はむすっとして携帯をポケットにしまった。

「彼女か？」
「違う。近所のねーちゃん。」
「…なんで近所のねーちゃんにぱしられてるんだよ、お前。」
「こっちが聞きてーよ……、てわけでだ、誠君よ。」

矢吹が俺の肩を掴んだ。…いやな予感がするぞ、これは。
「財布探索ミッションはお前に信託させていただく！！」
「な、お前、自分から言い出しとて」
「わりい！！原野には“矢吹は急用ができて先に帰った、ホント申し訳ない！”って言っといてくれ！頼んだ！！」
「お、おい！！」

俺の呼びかけ虚しく、矢吹は自転車にまたがると俺に後ろ手を振りながら一気に裏道を抜けて、見えなくなった。

1．"A May－day" －c4 『探索』

－c4 『探索』

一人取り残された俺は、しばらくそのまま裏道を探していたが、財布を見つけることは出来なかった。
俺は公園に戻ろうかと考え始める。

矢吹がいなくなった今、もう俺の代わりに彼女と話してくれる人はいない。
だからと言って、このまま困っている（であろう）原野さんを放って帰るなんて絶対にしたくない。
…こうなっては仕方がなかった。

俺は一人で原野さんのところに戻ることにした。

原野さんはさっきのベンチから少し離れた道を探しているようだった。
そこは背丈の長めな雑草が生い茂っていて、視界が悪い。
何か落ちていてもパッと見では気づかなさそうだった。

原野さんは俺が返ってきたのを見つけると、軽く眼を見開いた。
“あれ？”と、不思議そうな表情。
俺は言った。

「あ、えっと矢吹は、急用ができたので、帰りました。」
「え、…そうなんだ。」
「あ…、そこ、探すの、お、俺も手伝います。」

彼女に何も言わせないうちに、俺は茂みの中にしゃがみ込んだ。
緊張からか、何故か息が上がり、上手くしゃべれなかった。

原野さんはそんな俺をしばらく見ていたが、また手元に目線を落した。

陽が傾いてきた。
俺は西日に目を細める。
額がうっすら汗ばんで髪がはりついてくる。
俺はそれを思いっきりかきあげて、額を袖で拭い、さっきとはまた別の茂みを探し始めた。
財布はまだ見つからない。
原野さんと会ってから、もう一時間近くたっていた。

俺はだんだん意地になってきていた。
どうして見つからないんだろう。
他の誰かが先に見つけて、持って行ってしまったのだろうか？
だとしたら、ちゃんと交番に届けてくれただろうか。
いや、けど、２万円も入っていたら、そのままネコババする悪い奴もいるかもしれない。
そう思うと、普段まるで起きてこようとしない俺の正義感が、久々

の活動し始めたような気がした。

トントン、と。

肩が叩かれた。

俺は振り返った。

しゃがんだまま見上げると、原野さんが覗き込んでいた。

申し訳なさそうに目を細めて。

「あの…。ごめん。もういいよ。」

俺は焦った。

原野さん、諦めてしまうのだろうか？

それはだめだ、２万円も入っているのに…。

俺は食い下がった。普段の俺らしくもなく。

財布が見つからないせいで、頑なになっていたのかもしれない。

「いや、大丈夫です。俺、時間ありますし。」

「いや、そうじゃなくて…」

「それに、まだあっちの方は見てないんですよ。そこにあるかも知れません。」

「あの、だから…」

「もしそれでなかったら、交番に行きましょう。きっと見つかりますよ。」

「だから、これ」

原野さんは俺を制すると、何か差し出した。

それは、黒い落ち着いたデザインの、財布だった。

「え！あ、それ！！見つかったんですか！？」

思わず声が大きくなる。

「あー、うん。その…」
「どこにありました？」

俺がそう聞くと、原野さんは申し訳なさそうに、自分のスカートのポケットを、指さした。
「…え？」
「…ごめん、本当に申し訳ない！スカートのポケットに入ってたのに今まで気がつかなかった…。本当にごめん！！」
掌を顔の前で合わせて、何度も何度も謝る原野さん。それはまさしく平謝りだった。

だが。
俺は、思わず笑いが込み上げてきた。
もう見つからないかも、と焦っていたからだろうか、安堵感が込み上げてきたのだ。
怒りとか、腹立たしさとか、そういった感情は全く湧いてこなかった。
ただ、財布が見つかって嬉しい。

「…よかった…」
半分にやけている俺を見て、原野さんは一瞬不思議そうな顔をしたが、直ぐにゆるりとほほ笑んだ。
切れ長の目を細めて、輝かしい笑顔で笑って。
「ありがとう。」
と言った。

その後。荷物を自転車のかごに詰め、スタンドを外した後、原野

さんはいきなり俺にこう言った。
「あのさ、これからちょっと時間ある？」
「あ、…え？！」

さっきは普通に彼女と話していた俺だったが、財布が見つかった瞬間、達成感とともに、使命感に満ちたいつもより強気な俺はまた怠けだしてしまったようで、俺は例によって、うろたえた。
「あ、え、あり…ます。はい、あります。」
「ちょっとお礼がしたいんだけど、一緒に探してくれたお礼。いい？」
「あ、いや、けど、そんな、」
「じゃ、決まりで。」

原野さんは俺の返事を待たずに言った。
…さっきの仕返しだろうか。
原野さんは自転車を押して、突然のことに全く付いていけていない俺を取り残して歩きだした。

俺は無理やり我に返ると、先に歩いていってしまう原野さんを追いかけた。
もうこれ以上、何をどう話せばいいのか分からないのに、と心の中で泣き言を言いながら。

1．"A May-day"　－c5　『契約』

－c5　『契約』

陽はすっかり沈んでしまって、あたりは薄暗くなっていた。
俺は駅前のファーストフード店のテーブルに一人で腰かけていた。
原野さんはいない。
彼女は俺にこの席を取っておくように言うと、カウンターの方に姿を消してしまった。

あの後、細い道をたどり、田植えが終わったばかりの水田を横目に見ながら、俺たちは裏道を進んだ。
俺は原野さんから3歩ほど離れた後ろを歩いていた。
原野さんは何もしゃべらず、無言。
視線が遠くを泳いでいるので、何か考えごとをしていたのではないかとも思う。
もちろん、そんな彼女に話しかける勇気は俺にはなかった。

この世界的に有名なハンバーガーのファーストフード店は、学校から少し離れたところにあった。
実を言うと、学校の付近にもう一軒同じチェーン店があるのだが、原野さんはあえてこちらを選んだようだ。
俺にとってもそれはとても嬉しかった。
あの場所は放課後、我が高校の生徒で大賑わいするスポットである。

彼女の言う“お礼”とはここのファーストフードだったらしい。
確かに高校生の身としては、『奢る・奢られる』の話にこの店は使いやすかった。
１００円のラインナップもあるしな…。

そんなことをぼんやり考えていると、目の前にカタンとトレーが置かれた。
原野さんが俺の正面の椅子を引いて、座る。
一連の動きに無駄がなく、こんなことを言うのもなんだが、美しかった。
それなりに込んでいる店内が軽くざわつく程度には（主に男性だったが）。

原野さんは、トレーを自分の正面にきちんと据えると、買ってきたポテト（Ｍサイズ）２つを自分が食べやすい向きにそろえた。
…あれ？自分で食べるの？

「えっと。」
そこで、改まって。
原野さんは俺の方を見据えた。
俺は思わず姿勢を正す。

「私は、原野唯陽（ハラノユウヒ）と言います。唯一の陽と書いて、唯陽。」
「あ…あ、はい。」
「お名前は？」
「え、あ…えー。俺は、中澤です。」
「中澤君。」

繰り返して、原野唯陽さんは続ける。
「今日は、一緒に探してくれてありがとう。」
ぺこっと頭を下げた。
俺は例の如く、テンパる。
「あ、いや！そんな、そんな大したことはしてない…です。結局、まあ、あんまり…てか、全く、力になれなかったし…はい。すいません。」
「なに言ってるの。」
何故か謝った俺に、原野さんはこう返した。
「まったくの他人の持ち物を、あんなに一生懸命探してくれる人、なかなかいないわ。」

俺は驚いて、ぐっとのどがつまったような錯覚を覚えた。
なんだ、この人は。
こんな真正面から、まっすぐ、しかも内面を。
褒められたのは、はじめての経験だった。

「だからね、あんなに一生懸命探してくれたから、何か、お礼がしたいと思って。」
彼女はこう言って、黙った。
しばらくは、同じく黙ったままの俺を見ていたが、やがて視線をテーブルのポテトにやって、それを食べ始めた。
時が流れる。
ポテトがみるみるうちに無くなっていく。

一箱目のポテトを食べ終わったくらいで、彼女は再び俺を見ると、口を開いた。
「本当は、このポテト一箱、奢ろうって思ったんだよね。けど、途

中から、なんだかそれじゃ安すぎるような気がして。」
「い…いや、全然安くないです。十分、です。」
「そうはいかないよ…。だって、無駄働きさせちゃったわけだし。吊り合ってないっていうか。あたし、“借り”を作るのって好きじゃないの。」
「そんな、いや、見つかっただけで、よかったじゃないですか。えっと、俺のことは、気にしないでください。」
「…けどなあ」

原野さんは何か思案するように、頬づえをつくと、また黙った。
今度のこの沈黙は、長かった。
原野さんはずっと何かを考えている。
俺は何もすることがなく、だからと言って話しかけることもできず、ただ彼女が何か言うまで待つしかなかった。
のろのろと。
もしかしたら時間が俺に意地悪をして全神経を注いでじりじりと進んでいるのかもしれないと思うほど、長い。
『可愛い娘と一緒にいると時が飛ぶように過ぎる』というが、この場合はまるで逆だった。

「あ、そうだ。」
沈黙が切れたのは突然だった。
彼女はいいことを思いついたと言った調子で、こちらを見る。
「何か悩み事とかって、ある？」
「え？！あ、悩み事…ですか？」
「ない？」

いきなりの質問に、俺はうろたえた。
悩みなんて、山ほどあった。
「…えー…あー」
「あるのね。」
原野さんは言葉を濁す俺の様子から、その答えを“ＹＥＳ”と断定してしまった。

「どんな悩み?」
「え、いやその…」
「勉強?」
「いや…あの」
「家庭環境?」
「あ、ええと…」
「恋愛?」
「え?!あ!あー…え、えと」
「そっか、恋愛なのね。」
…しまった、反応がわかりやす過ぎた。

「けど、どうして恋愛で悩んでるの?あなた、モテそうな容姿なのに。」
原野さんはちょっと首をかしげて、言った。
…またこの人は!そういうことをさらっと言う!!
「いや、それは…あの」
「あ、わかった。うまくしゃべれないのね。」
「…はい。」
彼女の言葉があまりに正確だったので、俺はこう返事するしかなかった。
「さっきからずっと口ごもってるしね。」
「……はい。」
「それは、どうして?」

『どうして』、か。
俺は一瞬冷静になった。
どうしてなのだろう。
これは、性格なのだろうか。
自分のこの性質について、いつも考えてはいた。
ただ、これが一体何なのか、自分でもまだ明確な答えは出せていない。
少し落ち着きを取り戻した頭が、やっといつものように回りだした。

俺は答える。
今度はちゃんと、言葉で。

「…分からない、ですね。性格なのかもしれない。」
「ふうん。性格？」
「はい。だから、どうしようも、ないですね。」
「どうしようもないの？」
「少なくとも、今まではどうしようもなかった、です。」
「んー…。どんな性格なの？貴方は。」
「……。」
「どんな性格？」
「…人見知りが激しくて、」
「うん。」
「あがり症で」
「うん。」
「注目されることが怖いです。」
「ふうん。」

原野さんは、俺の目をじっと見て話を聞く。
その眼差しに促されるように、俺は始めて、自分の胸中を言葉にして吐き出した。
他人に自分のことを話すなんて、はじめてのことだった。
“見透かされてしまう”、と。
最初に思ったのは、正しかったようだった。

「さっきおもったんだけど」
そして彼女は俺の目を見つめたまま言った。
「貴方、いろいろと“どうしようもない”って済ませてるんじゃない？」
「…は？」
「自分から変わろうとしてないのよ。」
そう言って彼女は、二箱目のポテトにとりかかる。
「諦めちゃってるじゃない。」
「いや、けど…性格なんてそう簡単に変わるものじゃないし、それに」
「だから、それ！」
「あい？！」
「変わろうと思わないから変わらないのよ。」

彼女はまた一つ、口にポテトを運ぶと、軽い調子で、言った。
「ま、言ってみれば“ヘタレ”、ね。」

ズガンっ、と。
俺は脳天を殴られたような気になった。
…“ヘタレ”って…そんな…。
俺は少なからずショックを受けた。

今まで自分のことをそんな風に思ったことはなかったのだ。

ポテトを食べていた原野さんは、みるみるうちに凹んでいった俺をみて、ちょっとびくっとしたが、あまり気には留めなかったようで、さらに続けた。
容赦なかった。
「だから、その想ってる女の子ともうまくいかないのね。」
「……、…はい。」
「このままでいいの？」
「……よくない、ですね。」
「じゃあ、」
原野さんは、ちょっと微笑んで、言った。
「あたしが、協力してあげる。」

「…は？」
俺は、状況が飲み込めない。原野さんは続ける。
「あたし、人に借りを作るのが嫌なの。恩を受けたら、“自分もそれ相応の恩で返さなきゃ”って思う。今回のこともね。」
「…はい」
「貴方、ヤブキに無理やり手伝わされて、挙句押しつけられたのに、文句ひとつ言わないであたしの財布を探してくれたでしょう。あたしは、この恩にそれ相応のお返しをしないと気が済まない。」
「…はい」
「だから、貴方のヘタレ矯正、手伝ってあげるよ。」
「…はい？！」
「そうすれば、恋もうまくいくでしょう？」
「…そ、それはそうでしょうけど…」
「けど、あんまり長く手伝うわけにもいかない。性格矯正なんてきりがないし。だから、“告白”をゴールにする。」

「いや、けど、矯正なんて…。それに、こ、告白…」
「大丈夫。あたし結構“強い”性格してるから。」
「そ、それはわかるんですけど、そんな…」
「文句言わない！！！」
「は、はい？！」
「じゃあ、そういうことで決定で。いい？」
「いや、けど…」
「…いいね？」

彼女の有無を言わせぬ圧力のかかった口調に
「……はい。」
俺はこう答えるしかなかった。

「よし、決定。それで、さ」
彼女は晴れ晴れした表情で、またポテトを口に運ぶ。
「告白の件、あんまり伸ばすわけにもいかないし、夏くらいでどう？」
「無理ですそれは無理です絶対無理ですそれだけは勘弁してください」
「…どうして。」
「どうしてもです。は、早すぎます、それは。」
そういう時ははっきり意思表示できるんじゃない、と原野さんは少し文句を言ったが、
「わかった。じゃあ冬。」
秋が飛んだのはなぜだろう。まあその方が俺にとっても都合が良いが。

「これで契約成立ね！」
と言って。
彼女は笑った。

例のとびっきり魅力的な笑顔で。
まるで、お礼の清算ができてすっきりした、とでも言うようだった。

こうして。逢うはずのなかった原野唯陽との縁は、幾つもの偶然によって、こんな“契約”という形で結ばれることとなった。
強いて言うなら、期間限定の『師匠』と『弟子』。
俺のこの性格を正すための、奇妙な師弟関係。

俺の師匠は、ポテトをきちんと完食すると、言う。
「あ、じゃあ、メルアドでも。」
弟子の俺は、答える。
「わ、わかりました。じゃあ、…メルアドでも。」

これからの未来のことを、俺は知らない。
だが、かすかな予感はした。
この縁によって俺は変われるかもしれない、と。
今まで悪い方にばかり回っていた運が、違う方向に回り始めるかもしれない、と。
大きな不安とともに、小さな期待を、俺は感じた。

送られてきた俺のフルネームをみて、彼女はこうつぶやいた。
「ナカザワ……セイ?」
「…まことです。」

店から外に出た俺たちを、しとりと闇の香りがつつむ。
街灯と月の光がちらちらと踊る。
もう5月も終わるというのに、どこか肌寒い、そんな夜だった。

A May-day(M'aider) is temporarily end.
To be continue….

2. "the Sixth sense" ―a1『行路』

6月というのは何とも微妙な時期である。
まず、気候が春の陽気からだんだん夏の熱気に近づいてくる。
それに加えてこれまた厄介なのが、梅雨。
熱気に湿気がプラスされてさらに相乗的に不快指数が増大。
秋のような爽やかな空気は微塵もなく、じめじめ、べたべた、むしむし、と。
そんな気候にどうしようもなくイライラ。
学校も丁度中だるみの時期で、せっかく五月病を乗り切ったというのに降り続く雨にどうも憂鬱になりがち。
それが、俺のイメージする6月である。

そんな6月も始まってもう二週間ほど経とうとしていた。
朝降っていた雨は上がったようで、埃が落ちてひんやりと澄んだ空気がそれなりに心地よい。
靴を履き替え下駄箱の前に立った俺は、目だけを動かしてあたりをうかがった。
あたりに目標物は見当たらない。
よし、今日は大丈夫な日のようだ。

俺は早足で裏道を通り駅に向かうと、直ぐに到着した電車に飛び乗った。

本来の帰宅時だとあと４駅程電車に乗ってさらに乗り換えをするのだが、今日は一駅しか乗らないので運動がてら歩いてもよかったのだが、何せ徒歩では危険が伴う。
それに待ち合わせ相手を必要以上に待たせるわけにはいかない。
それは絶対にいけなかった。

数分電車に揺られて駅に到着した俺は、ここ最近よく歩くルートをたどりだした。
この駅の界隈はまだ田んぼや畑、古い町並みが多く残っており、のんびりとした雰囲気を醸し出している。
俺の住んでいるところは多少開けているので、こういった景色はやはり見慣れない。
田圃の畦道ではカエルがせわしなく鳴き、この近所の中学生たちがわいわいと列をなして下校している。
俺はそんな列に逆行し、ちょっとした勾配の坂を上ると、古い家屋が並ぶ横道に入った。
この道をしばらく行けば、目的地である。

道中、すれ違う中学生（主に女子）が何度も俺の方を振り返った。
俺は平静を保つ。
よくあることだ、慣れなければ。
俺を振り返った彼女らが数人で固まって何か興奮した様子でささやき合うのが目の端に入る。
どこからか、「見てよ、あのおにいさん！」という高く上ずった声。
女子特有の、クスクスという鼻にかかった笑い声。
だめだ。
ここで歩みを速めてはいけない。

ここで負けては、意味がない。

左に曲って、右に入り、左に折れて、右を向くと。
そこは待ち合わせ場所の神社である。
その神社には公園が併設しており、沢山の遊具が設けられていた。
降り立つところに雨水がたまった滑り台、大人でもぶら下がるのがやっとな大きな鉄棒とその下の砂場、青く塗られた金属棒で地球儀のようにかたどられたくるくる回る遊具、小さすぎるシーソー、柵が付いていないむき出しのブランコ。

俺は入口に立ち、そこに自転車が止めてあることを確認した。
最近すっかり見なれてきた、シルバーのかご付き自転車。
公園に人気はなく、いつも通り閑散としている。
俺は地球儀の遊具に向かって歩みを進める。
よくよく見ると、地球儀の中には人が一人。
今日は長い黒髪を後ろでまとめ、キャップをかぶっている。
俺はその影に声をかけた。

「あの…、遅くなってすみません。」

影は声に気付いてこちらを振り返る。
地球儀内に作られている椅子に腰かけ、膝に肘を乗せて頬杖をついていた彼女は、俺の顔を見るなりため息交じりに言った。
「…すっごく待ったんですけど！」

師匠、原野唯陽は、少々不機嫌なご様子だった。

2．"the Sixth sense"　－a2『条件』

「…5組って、よほど丁寧に掃除してるのね。」
地球儀から出てきた原野さんはぼそっとこう言った。
その言い方に若干の棘が感じられる。

…俺は内心、しまったと思った。
ちょっと待たせすぎたかも知れなかった。
しかしここで言い訳をしてはいけない。
俺はこの数週間の間に様々なことを学習したのである。

「いやー…掃除自体はそこまで時間がかかってるわけではないんです…よね。」
「…じゃあどうしたっていうの。」
…棘がある。
こ…ここでめげてはいけない、頑張れ俺！

「矢吹がですね。」
「矢吹？」
「はい。矢吹が最近、放課後俺の後をつけてくるんですよ。」
「…え、どういう状況よ、それ。」

原野さんは目を見開いて眉を寄せる。
確かに、そんな反応をされてもおかしくない状況だ。

俺は当初、この事を原野さんに言うつもりはなかったのだが、現在の状況打破のために、伝えておくことにした。

「5月の終わりまで、矢吹と一緒に帰ることが多かったんですが、近頃それがなくなったんですよね…ほら、俺に用事ができたから。」

「うん。」

「この事を、矢吹に話すのはちょっと…危険かなと思ったんで言ってないんですけど。」

「…うん、正しい判断。」

「…はい。だから最近、矢吹に黙ってサッサと教室を出るようにしてたんです。見つからないように。そしたら、この前いきなり…」

「後をつけてきた…のか。」

「はい。だからまくのが大変で…今日もわざと電車に乗ったんです。」

「なるほどね…そうか、矢吹のことを忘れてた。」

原野さんはすっかり思案顔だ。

ちょっとは状況を飲み込んでもらえたようなので、俺は少し安心する。

あの後。六月の頭から早速、俺と原野さんの“ヘタレ矯正”は始まった。

基本的な活動は、放課後この神社の公園に集まって行う。

学校から多少距離はあるのだが、何より人通りが少なく誰かに見られる心配がない。

暗黙の了解ではあったが、お互いにこのことは誰にも話していなかったし、“学校の生徒にバレると何かしら厄介なことが起きる気が

する”という予感もあった。
だから、学校でお互いを見つけても“知らんふり”である。

それに、ここは原野さん宅のご近所らしい。
原野さんににとって勝手がよかったことも、彼女がここを活動拠点に選んだ理由の一つにあたるだろう。

初日に、俺たちはこのある種の“契約”の内容を詰めた。
まずメインとなる内容は俺の『ヘタレ矯正』、そしてそれに伴う（と思われる）『恋愛成就』である。
この内容の達成目標は、冬。
アバウトだが、冬、ということだった。
この期限までに、原野さんはこのミッションを必ずやり遂げると宣言した。

そのために彼女が俺に出してきた条件は二つ。
・課題は必ず期限までにクリアすること。
・普段から早足をやめ、ゆっくりと歩くこと。

俺はこの意図がよく分からなかったのだが、結果的にこの条件を飲むことになった。
…いや、飲まざるを得なかったのだがまあそれはいい。
そして、この放課後の会合は一日の反省会と位置付ける。
――以上がこの契約の全貌である。

契約が施行されて2週間と少し。
梅雨入りなども重なって、会合が流れることもあったが、俺は何とかまともに彼女と話せるまでに成長した。

まだ敬語こそ抜けていないが、これは俺にとって大きな変化である。
女性と普通に話すなんて、小学校以来といっても過言でないくらい久しぶりのことだった。
原野さんの“修業”は少しずつ効果を示しているのかもしれない。

「矢吹のことは…慎重に対応しないといけないかもね。」
思考を終えた原野さんが言う。
「悪い奴ではないんですけど…口が軽い…ですからね、アイツは。」
「これからも要注意で。」
「はい。」

原野さんはうんうんと頷くと、今度は地球儀の入り口のところに座った。
足で地面を蹴り、ゆらゆらと揺らす。
彼女はしばらくその揺れを楽しむと。
俺に悪戯っぽい微笑みを向け、言った。

「ところで…今日までの課題、ちゃんとやったの?」

…さすがにこのままはぐらかせるわけないか。
俺はどこから話そうか考えながら、頭をかいた。

2. "the Sixth sense" ―a3『修行』

俺が今日の放課後までの期限で与えられていた課題。
それは、“世界史の授業中に手を挙げて発言すること”、だった。

わが高校には世界史教師がいる。
その名も山野先生。
彼の世界史の授業は身ぶり手ぶりの演技付きで行われるため大変面白く、生徒間でも人気が高い。
そしてその授業形式も今時の高校にはない珍しいものだった。

山野先生は授業中、生徒に「自発的に手を挙げて発言すること」を求めるのである。
発言した生徒には内申点プラス。
一応、わが高校はこの近所で一番レベルの高い進学校なので、高内申を獲得して大学の推薦を狙いたい生徒などは、このチャンスに飛びつくわけだ。

しかし、まあ。
俺のような小心者は、そんな、いかにも目立ってしまう“自発的発言”などを積極的に行えるはずはなく。
そこら辺の事情をお見通しな原野さんは、今回意図的にこの課題を選んだようだった。

最初の課題が「大きな声で話すこと」、次の課題が「人と目を合わせて話す」ということで、日常の些細なことを取り上げたものだったため、この課題は俺にとってかなり困難を要したのだった。
…まあその二つも大概難しかったのだが。

「えっとですね…。やるにはやったんですよ。」
俺の煮え切らない言い方に、原野さんの表情がまた険しくなる。
「どういうこと?やったの?やってないの?」
「いや、俺はやろうとしたんですけど…。えっとですね、若干邪魔が…。」
「…まさかまた矢吹とか?」
「いや…矢吹でなく、クラスの女子です。」

…原野さんの頭の上に疑問符が飛んでいるのが見えるようである。
俺は説明を付け足した。
「世界史が四限目だったんですけど、俺が発言しようとして、こう、手を挙げながら『先生…』って呼んだんです。そしたら、クラスの…ほら、化粧バッチリでよくしゃべる派手な感じの女子たちが、ですね、『中澤くぅω、どしナ二のぉ??!!気分悪しヽ感じィ??』じゃあうちらが保健室連れてってあげるよお!!!』とか言い出してですね、俺が焦ってる間に保健室に引きずって行かれたんです。」

「…だから四限目の授業中、廊下がうるさかったのか…。」
「4人がかりでくるし、授業中なのにきゃいきゃい話かけてくるし、…正直大変でした。」
「貴方ってクラスでそんなに人気なのね…。まさかそこまでだとは思わなかった。」

「まあ…心配してくれたんでしょうけど…はい。」

そうかもね、と原野さんは苦笑いする。
俺もつられて少し笑いそうになったが、ここでずっと気になっていたことを思い出した。
一気に笑いが引っ込んだ。

「これって、課題的にはセーフですか。アウトですか。」
「……うーん。」
原野さんはさっきからゆらゆらしていた地球儀から立ち上がると、その側面を持ち、彼女はそこに立ったまま手だけを動かして本格的に回し始めた。
地球儀がグルングルンと回り、スピードを上げていく。

「課題的にはアウトよね。条件を半分満たしてないもん。」
そういうと、がたがた言いながら回っている地球儀に飛び乗った。
…危険行為だ。
よい子は真似してはいけない。

原野さんはその中でしばらく回っていたのでが、スピードがゆるんでくると、こう言った。
「まあ…授業中にちょっとでも言葉を発しただけでも進歩かなあ…。」
「はい。そうです。まさにそうです。」
「…そんなにそこを強調してるようじゃまだまだなんだけどね。」
原野さんは大分スピードの落ちた地球儀の中で、また苦笑い。
…そう言われてしまうと少し情けなくなってくる俺。
やはりヘタレ脱却はまだ遠いようである。

「けど、今回はまあ良しとしようかな。」
「…ほんとですか?!」
「頑張りは認めることにするわ。不可抗力なところはあるし。」
はあああ、と俺は息をつく。
よかった…また同じ課題をもう一度などと言われたらどうしようかと思った。

俺のそんな様子を見ていたのかいないのか、原野さんはすっかり止まってしまった地球儀から降りると、またそれをグルングルンと回し始めた。
…また、乗るのだろうか。

「……原野さん、…酔わないんですか?」
「うん?」
「俺は見てるだけで酔いそうなんでけど…。」
「えー、こんなの全然じゃない。もっとスピードでないのかな。」
そう言ってさらに回す。地球儀が高い音でキイキイいっている。

「てか、この程度で酔ってるようじゃ駄目だよ。遊園地とかいけないじゃない。」
「遊園地は行きませんね。」
「えええ??!!!!!」
原野さんがいきなり叫んだ。地球儀を回す手が止まっている。
俺は真剣にビビった。

「え…え?!遊園地なんて、もう4年位行ってませんけど…。」
「なんで?!耐えられるのそれ!!」

…今までにないくらいの食い付きである。

「いや…むしろ今行っても、ほら、あんまり乗るものがないっていうか…。」

「どうして!!ジェットコースターがあるじゃない!!」

「え、だって、ジェットコースターとか、怖いじゃないですか…。」

「なーーーー!!!!」

原野さんは俺の頭をひっぱたいた。

「いた?!!」

「ジェットコースターに乗れないとか!!乗れないとか!!」

何故かわなわなと怒っている原野さん。

「そんなの、自分のヘタレさを主張してるようなもんじゃない!!ジェットコースターに乗れないとか、人生の半分くらい損してる!!」

「いや、大袈裟…」

「いいやっ大袈裟じゃないわ!!あんなに楽しいのに、あれに乗れないなんて、信じられない!!」

食ってかかってきそうな勢いだ。

俺はたじたじになる。

「よし、決めた!!」

原野さんは俺に人差し指を突き付ける。

「行くわよ、遊園地!」

「え?!」

「今週の日曜日、あいてるわよね?!」

「え、あいて…ますけどそんなに急に…」

「丁度行きたいと思ってたとこなのよ!今回の課題も中途半端に終わってるし、丁度いいわっ!」

「…ジェットコースター乗るんですか。」

「ジェットコースターしか乗らない縛りで。」
「……あの、嫌で」
「却下！！！」
…最後まで言わせてもらえなかった。
「これも修行の課題にします！」
「えええええ…、そんな…」

「じゃあ日曜日、舞園ランドに行くわよ。あそこなら私、チケット持ってるから。それに貴方の家からも近いでしょう？」

原野さんはもう何を言っても聞いてくれそうにない。
俺は諦めるしかなさそうである。
彼女に口答えなど、まだ出来るはずがなかった。

休日はゆっくりゲームでもするつもりだったのに…。
それがジェットコースター三昧に変わってしまったなんて、信じたくない事実である。

「よーっしテンションあがって来た！！楽しみね、セイ！」
「…まことです。」

2．"the Sixth sense"　－b1『陽鬱』

あれ？今って梅雨の真っ最中なんだよね？
まだ夏じゃないよね？
なんでこんなに晴れてるの？
余計なことしなくていいよ、お天道様……と言いたくなる程の快晴。

日曜日１０時過ぎの舞園ランドは、久々のいい天気に大繁盛である。
俺も住んでいる舞園市にある遊園地、舞園ランドは、地元密着型の遊園地として長年地域住民から人気を博してきた。
夏にはプール、冬にはスケート、たまに人気お笑い芸人がやってきたりすることも人気の秘密なのかもしれない。
それもあってか、あまり大きくない遊園地ではあるが、この近くに住んでいる子供たちはことあるごとにこの舞園ランドに遊びに来る。
よって、アトラクションの種類や場所、時には攻略法まで覚えている子がたまにいるほどである。

そして、もちろん。
今俺の隣で高まるテンションを隠しきれないでいるうちの師匠も、そんな子供たち（？）の一人である。

「あーー！舞園ランド、久しぶり！！！」
見るからにウズウズした様子の原野さん。

彼女は洒落たデザインの半袖パーカーにGパン、スニーカーにキャップといった出で立ちで、もう遊ぶ気満々なのがうかがえる。

「ほら、セイもテンションあげて！！」
「…まことです。」
「今はそんなのどっちでもいいから！」
…そろそろ覚えてほしいんですが。

原野さんのたっての希望で、開園時間ぴったりに入口ゲート前に集合した俺たちは、もう持参の入場券で手続きを済ませ、園内に入っていた。
舞園ランド、略して舞ランは全体として大きな森をイメージした造りになっており、園内にちょっとしたラグーンや自然公園がある。建物の作りも中世のファンタジーの世界観で統一してあるという手の込みようだ。

そんな異世界的な雰囲気も、うちの師匠のテンションを掻き立てるようで。
原野さんはさらにテンションが上がってしまっているらしかった。

「せっかく久しぶりに来たんだから！乗って乗って、乗りまくるわよっ！！」
「あの、すいません原野さん。」
「どうしたのっ」
「これってもしかして、ただ原野さんが遊びたかっただけの企画」
「ちーがーうーわー」
やはり食い気味できた。
原野さんはテンションをそのままに、俺の肩をガシッと掴んだ。

…なんだか矢吹を彷彿とさせた。

「これはあくまで修行よ、セイ！貴方が絶叫系に乗れるようになるための、ね！！」

「まことです…いや、俺はやっぱり絶叫系は遠慮したいんですが…」

「却下。」

すがすがしいくらい即答である。

「これも修行の一環！絶叫マシンを楽しめなきゃ、ヘタレ克服なんてできないわよ！てか、乗れない内は私が認めない。絶対認めない。」

いつもと比べ物にならないくらい饒舌の原野さん。

いつもの3割増しの切迫感に俺はより気圧されて、何も言えなくなる。

「よっし、まずはあれに乗らないと、舞ランに来た気がしないのよね！よし、セイ、行くわよ！！」

軽快に、スキップでもしているみたいに飛び跳ねながら進んでいく原野さん。

比べて、足が進むのを拒否しているみたいにべったり地面について、引きずられているようにずるずると進むしかない俺。

こうして、俺と師匠の、修行という名のどきどき遊園地巡りがスタートしたのであった。

――だが。

このときは、このただでさえ大変な“修業”が、さらに輪をかけて大変になるなんて、思っていなかったのだ。

この時は…。

2. "the Sixth sense" ―b2『恐行』

まず原野さんが向かったのは、「スプラッシュサークル」。円形の乗物に乗って川のような水路を進んでいくアトラクションである。

これはエントランス近くにあるラグーンに沿う形で作られているため、移動時間はほとんどかからなかった。

「スプラッシュサークルって、あんまり怖くない割には濡れるのよね。」

慣れた調子で手首につけたフリーパスを係りの人に見せながら、原野さんが解説する。

「波の感じと進行方向によってはびしょ濡れになるのよ。」

「…初めて乗ります……。」

「これは舞ランのアトラクションの中でも難易度は低い方。」

俺達が乗り込んだのを見て、係員の人が円形のボートのような乗物を水路に押し出す。

ボートは何度も水路の壁にぶつかりながら進んだ。

その間ボートはくるくると回り波を起こすため、水が何度となく内側に入ってくる。

原野さんの言ったとおりあまり怖くはなかったのだが、それでもやはり急に変わるスピードやいつ濡れるかわからないということもあって、乗っている最中、俺は絶えずビクビクしていた。

うん。

ボートが一周し、（心情的に）やっと地面に足をついて一息もつかないうちに、原野さんは、
「よし、次、行くわよ。」
と俺をせきたて進ませる。
…落ち着く暇もない。
ほとんど初めて乗った絶叫（？）マシーンの余韻に浸る暇さえなかった。

次に連れてこられたのは「ウォータースラッシュ」。
これはスプラッシュサークルから少し園内に入ったところにあるアトラクションで、いわゆる普通の“急流すべり”だった。
「じぇ……じぇっとこーすたー、ですね。」
「ジェットコースターじゃなくて急流すべりよ。」
「お、落ちる系は、俺にとっては、じぇっとこーすたーです。」
「落ちるって言っても一回だけよ?それに降下速度が遅いし。もっとスピードが出たら面白いのに。」
「けどこわ」
「これも難易度低いわよ。小学生でも普通に乗ってるもの。」
「…はい……」

問答無用である。
乗り込んでみると、木でできた乗り物は確かに俺が乗るには少し小さく、子供向けに作られてあるんだなあと改めて実感した。
少しばかり悲しくなった。

原野さんが言うとおり、大きくジェットコースターのように下降したのは最後の一回だけで、後は比較的穏やかだった。
いや、けど、その最後の一回が俺にとっては大分答えた。

あの落ちる瞬間内臓が宙に浮く感じが…あれが嫌だ…だからジェットコースター系には乗りたくないんだ…。
だが、原野さんがあまりにも平然と、むしろニコニコしながら乗っていたので、思いっきり叫ぶこともできなかった。
まあ、一瞬ヒヤっとして、後は耐えられたことを考えると確かに難易度は低かったのかもしれない。
だが、黙って恐怖に耐えた俺はもう冷汗がだらだらである。

「じゃあ、次はあれね！」
降りた瞬間走っていってしまったうちの師匠。
次のアトラクション、空中ブランコ「スカイウォーク」は急流すべりの近くにあった。
これは結構大型の空中ブランコで、鎖で吊下げられた小さな椅子に座る形式になっている。
「これもまだ絶叫系というには軽い方かな。」
「…ひたすらぐるぐる回るんですか？」
「たまに上の鎖がつながってる円盤が傾くから、波打ってるみたいに高低差がつくわよ。それが何とも言えない。」
「…原野さんが好きそうなアトラクションですね。」
「いや、私はコーヒーカップ高速回転の方が好きよ。」
…思わず黙ってしまった。

で、いざ乗ってみると、だ。
もう遠心力が半端じゃなかった。
自分の三半規管の貧弱さを思い知った。
俺が酔いのあまり鎖にしがみついてうつむいている後ろで、原野さんが「浮遊感！！！！」と叫んでいるのが聞こえた。

乗り終わって。
「…セイ、大丈夫？」
俺は、原野さんを心配させるくらい青ざめていたらしい。
視界がぐるぐる回っているせいで目が半分しか開かない。
「…あい。」
「さすがに休憩を入れないとまずいかしらね。」
原野さんが俺の荷物を持ってくれていた。
ささやかな優しさである。
「…は、はい…そろそろスピードものは…キツイ…です…。」

「んー、じゃああれで休もうか。」
原野さんが指した先には、小さなプレハブのような建物。
それは夏季限定、「ひんやりボックス」だった。
まるで冷凍庫の中に入るような冷気を楽しませてくれる施設である。

正直、ベンチでジュースを飲むとかを期待していたので、“…休めねえじゃん！！”と心の中で突っ込んでしまった。
だが師匠にはこの突っ込みは聞こえない。
俺の荷物を持ったまま「ひんやりボックス」の方へさっさと歩いて行ってしまうので、俺は千鳥足に鞭打ちながら原野さんを追いかけ、そこに入った。

まあ、一言で言うと、すっげー寒かった。
今日は晴天でなかなか高い気温ではあったが、１０秒もしないうちにもう外に出たくなった。
「これさあ、昔からうちの兄と、何秒とどまれるか競ってるのよ。」
原野さんは腕組みをして、難しい顔をしている。
「けど、絶対負けるのよ。うちの兄、ここに5分も6分もとどまれるんだから、勝てるわけないのよね。」

「お…お兄さん、すげーれすね…」
寒すぎて呂律が回らない。
「あたしも頑張ってるんだけど。3分しかいられないのよね…頭痛くなって。けど今日ならなんかいける気がする。テンション的に。」
原野さんの目が決意に燃えていた…。
これはまずい。
俺の体調的にまずい。

「そ…そんなの絶対、無理、れす!!!!」
俺はもう、原野さんをその場に置いて、外に出た。
後ろから「あ!ちょっと!!」という声が聞こえたが、構っていられなかった。
自分の身の安全が最優先である。

俺が外でベンチに座って酔いを醒まし始めて2分とたたないうちに、原野さんも外に出てきた。
心なしかさっきまでのテンションが下がっているように思った。

「次からなんだけど。」
ベンチに二人で座ってしばらくボーっとした後。
原野さんはテンションが回復してきたのか、俺にこう言った。
「本格的に絶叫三昧に突入するわよ。」
「…え、なんですって」
「動揺して女言葉になってるわよ。絶叫。絶叫マシーン!乗りまくりフルコース!!」

…もうここまでのコースで俺は自分の限界を突破しまた一つナイスガイへ近づいたように感じていたというのにそれでも尚貴女は俺に絶叫系に乗せようというのですか、師匠!!!

「…そ…そんな……」
「今までのはただの慣らし！！よし、行くわよ、セイ！！！」

…ここからの俺の恐ろしき心境は、わざわざ話さなくても察してもらえるのではないかと思う。
がっくんがっくん揺れ、ぶんぶん揺さぶられ、ときにレールから放り出されるような錯覚を受け、ときに走行中レール外の木に頭がかすりそうになり、体中のあちこちをぶつけまくり、落下時の浮遊感を耐え忍び、何よりも楽しそうにきゃあきゃあ言っている原野さんの隣で１００％恐怖で構成された無残な叫び声を上げ続けた俺は、もう心も身体もなけなしのプライドも、ずたずたになったのは言うまでもない。

そして、時は１２時過ぎ。
「もう無理です。吐きます。充分です。ほんと、もう有難うございました。」
「なによ、“有難うございました”って。」

俺たちは園内のファーストフード店にいた。
先月原野さんともいったこのファーストフード店は園内にもばっちり進出しており、一階がカウンター、二階は屋外にテーブルを設けたバルコニーのような作りになっている。
俺たちが今いるのは二階の端っこの席。

俺は二階の端っこのテーブルに突っ伏して休んでいた。
その向かいには原野さんが座っている。
ここは園内を鳥瞰でき、同時に風通しも良かった。

「にしても、貴方ほんとに絶叫系だめなのね…今にも吐きそうな顔してるわよ。」
「…ずっと言ってたじゃないですか…」
「まあね。いや、けど、頑張ったわよ。叫び続けてはいたけど、喰らい付いてきてたもの。」
師匠からお誉めに預かってしまった。
なんと珍しい。
「…ありがとうございます…」
「仕方ない、あたしが何か買ってきてあげるわ。」
立ち上がる原野さん。
俺は顔を少し持ち上げて、「すみません」と言った。
原野さんが奥の階段に姿を消す。

俺は怒涛の午前中を思い返した。
たった2時間だったのに、ここ数年分の勇気と気力を使い果たした気がする。
てか、もう残ってない。
むしろマイナスだ。
自分が凄まじくビビりだったということを、改めて思い知らされた。
分かってはいたんだけど…再確認がここまで屈辱的だとは…。
あのメニューには、それだけの破壊力があった。

午後からは何をするのだろうか。

ゆっくりしたい…射的とか、観覧者とか乗りたいな…。
そんなことをボヤーと思ったとき。

「やばいやばいやばいやばい!!起きて!!!!」
原野さんの声がいきなり耳元でしたかと思うと、俺の肩が激しく揺さぶられた。
「え、な?!なんですか?!」
顔をあげると眼の前に髪を振り乱した原野さん。
俺は何が何だか分からない。
「逃げるわよ!!」
「え、なにが」

「いるのよ!」
原野さんは凄く焦った顔で、俺に小声で、しかし普段の彼女らしからぬ冷静さを欠いた調子で言った。

「下に、ヤブキがいるのよ!!!」

2．"the Sixth sense"　―b3『突破』

「…え?ヤブキって、あの矢吹ですか?」
あまりに突拍子のない原野さんの発言に、まだ意識が朦朧としている俺は思わず聞き返す。
「あのヤブキよ!!なぜか分からないんだけど、下のレジのところに並んでて…」
「…え?どうしてあいつ、舞ランに…」
「わかんない…けど、茶髪の女子高生風の女の子と小学生くらいの男の子と、3人でいたわ。あの人たちと遊びに来たのかもしれない。」

なるほど、その茶髪の女子高生が、例のご近所のお姉さんかも知れないな。
一緒に舞ランに来る仲なのか…なかなか仲がいいじゃないか。
やるな、矢吹。
けど、男の子ってどのポジションだ?
矢吹は一人っ子のはずだし…でことは、お姉さんの弟とかか。
1階のテーブルもいっぱいだったし、3人もいたら席をとるのも大変だろうなあ。
俺はぼんやりとどうでもいいことを考える。

……。
…そこまで考えて、ふと、第一に考えないといけないことに思い当

った。

「…え？てことは、このままここにいたら、まずいことになるんじゃ…」

「もう、まずい！すっごくまずい！！」

原野さんはよほど焦っているのか、体をぴょんぴょん跳ねさせながら手をぶんぶん振っている。

「このまま2人でいるのを矢吹に見られちゃったりなんかしたら、一体どうなるか分かんないわよ！！」

俺はここで初めてこのピンチに気がついた。

矢吹にこの場面を見られてしまうこと。

それは、俺と原野さんが1カ月近くこそこそと、誰にも話さずにやってきたことがすべて無駄になることを意味していた。

しかも相手は矢吹。

奴にこの事実を知られるということは、学校の生徒の3分の1に知られることと同義だ。

矢吹は悪い奴じゃない…むしろイイ奴なのだが、肝心なところで口が軽いのが玉に瑕な男なのである。

だから俺は、いつ俺が谷口さんのこと…ごにょごにょ、…うん、そういう噂が広がるかもしれないと恐ろしい思いをしているのであるが、まあそれは別の話。

なにより、一番この状況をまずくしているのはこの店の構造だった。

この店内に2階と1階をつなぐ階段はひとつしかないのである。

「ど…どうしましょう？！とりあえずここから離れないと…」

「あたしもそう思ったんだけど、考えてみたら、けどあの位置で並

ばれてると私たちが階段から出口まで気づかれないように移動するのは無理かもしれない…」
「え?!そんな…じゃあ…」
「けど、ここにいるのはもっと危険!だって、気づからたら逃げ場がないのよ?!」

つまり、だ。
実質、俺達がこの状況を回避する方法は1つしかない。
「無理矢理でも、1階を突破するしかない…んですね。」
「そうね、早くしなきゃ、もうすぐ来ちゃうかも知れないから、早く!!」

原野さんが俺を急きたててそのまま早足で階段に向かおうとする。
「だああ!!だめです原野さん落ち着いてください!!」
俺は慌てて原野さんが進もうとするのを後ろから制した。
「なに!!」
「俺、このまままいったら顔さらしたまま矢吹の前を通らないとだめなんですけど!!!」
それだけはごめんだった。
あいつが友達の顔を見間違えるはずがない。

「…あたしは帽子かぶってるから大丈夫。」
「俺がまずいんです!!!!」
「じゃ、じゃあ、これつけてといて!!」
原野さんが自分のリュックサックの中に手を突っ込んで、何かを取り出すと俺に何かを押しつけてきた。
…それは、大変いかついデザインのサングラスだった。
「…これをかけるんですか?!」
これでは逆に目立つ気がした。
悪目立ちである。

しかし原野さんは俺にそれを無理やりかけさせると、
「似合う！いける、似合うから、セイ！自信持って！！」
こう適当なことを言って。
彼女はうん、と俺の目を見て頷いた。
……これは今までの傾向からして俺の意見は聞きいれられないパターンだろう。
かなしいかな。

だが、今回に関しては、これ以上異議申し立てをしたところで時間の無駄であるし、他にもっと良い解決策があるわけではなかった。

　嗚呼、もう仕方ないか…、と。
そう思った時。
「屋上とかあちぃぜ、カンカン照りじゃん！」
俺の耳が、確かに、矢吹の声をとらえた。
俺たちは予想より早い矢吹の登場に、階段近くで押し問答していた俺たちは思わずその場で硬直。
原野さんはキャップをより深くかぶり、俺はとっさに階段に背を向けた。

「きよひこー！あそこ開いてるぜ！！」
小学生高学年くらいの男の子の声がする。
きよひこ、つまり矢吹清彦は、その男の子の後ろから階段を上がってきたようだった。
「おい現太、走ってジュースこぼしてももう奢ってやんねーぞ！オレっち万年金欠なんだからよ。」
「ケチだー！たかが１００円じゃん！！」
「お前な、１００円を馬鹿にしちゃいけねーんだぞ。１００円は偉大なんだかんな！」

男の子が俺の横を通り抜けて、原野さんの側へ抜けて行った。
男の子はちょうど俺たちが座っていた隣の席にぴょんと飛び乗る。
それに続くように、矢吹が俺の横を通る・・・・。

「・・・？」
矢吹が、俺の顔を眼の端でとらえて違和感を覚えたのか、二度見してきた。

凝視。
歩きながらすれ違いざまに、凝視。

やばい。
やばい。
これは本格的にやばかった。
サングラス程度で何とかなる相手ではなかったかも知れなかった。

原野さんは俺に向かって小刻みに顔を横に振る。
口の動きが、“もう、限界、早く”と言っている。
俺はサングラス越しに、顔をこわばらせている原野さんにＯＫの合図で軽く首を縦に振ると、くるっと振り返って、階段に早足で直行した。
早いとこ矢吹の視界から逃れないとすぐ見破られそうで怖かった。

店内が人で溢れ返っていたためか、俺が急ぎすぎていたためか。
途中で茶髪のおねえさんとぶつかりかけたり、子供を弾き飛ばして

しまいそうになったりと、出口までの道のりは、本当に長いものだった。
本当に。

そして、やっと、外に出て。
俺はサングラスを外した。
うっすらセピア色に色づいていた世界が明るく転換する。
原野さんが追い付いてきた。

俺たちは無事、矢吹から逃げおおせたのだ。

2．"the Sixth sense"　－b4『対策』

「にしても、らんでヤブキが舞ランに来てふのかひらね」
「…こんなにタイミング良く居合わせるなんて…。」
「ヤブキも、こふっ、舞ランが好きらのよ、きっと」
「たぶんそうだと思いますよ。アイツ、絶叫系とか大好きそうじゃないですか。」
「ふあーー！気があふわ！」
「今は、そんなこと言ってる場合じゃないですよ……。…もう出ませんか？」
「らに言ってうの！今からが修行の本番なんれひょーが！！」
「……原野さん、食べながらしゃべらないでください…。」

俺たちはファーストフード店から遠く離れたベンチで、昼ごはん替わりのクレープを食べていた。
あたりには気を配っているが、念のため原野さんはキャップを目深に着用し、俺は例のサングラスをかけたまま。
…道行く人に二度見されるのが辛いのだが…。

原野さんは食べていたクレープの最後の一口をもぐもぐとほおばる。
彼女は苺とカスタードとバニラジェラートがトッピングとして入っているクレープをおいしそうに食べていた。

甘いものが好きなのだろうか。

甘いもの。

俺は甘いものはあまり得意でなかった（さっきもカツがはさんであるクレープを食べていた）が、そういえば。

…谷口さんは甘いものが大好きだったな、と急に思い出す。

甘いものと可愛いものが好きないかにも女の子らしい谷口さんは、よく俺にも自作のお菓子を差し入れしてくれる。

それがどれだけ嬉しいか…。

うまく話せなくて褒めることもままならないが、気分的には天にも昇るほど舞い上がる。

原野さんと、谷口さん。

さばさばしたクールビューティ系女子と、ふわふわしたラブリー系女子。

俺の師匠と、思いの人。

これだけタイプが違っても、やはり女の子というのは共通なのだろうか。

と、ふと思った。

そんな散漫な思考の俺の隣で、師匠は指についてしまったクリームをペロッと舐めると、何かを思案するように遠くを見ていたが、しばらくして。

「問題は、どうやってヤブキを避けるのか、よね…。」

と、言った。

…“帰る”という選択肢はないようである。

「貴方はどうすればいいと思う？」
「…矢吹は絶叫に乗りに行くしょうから……わざと絶叫系に乗らない、とかどうで」
「却下。」
「う……、じゃあ、…より変装するとか。」
「これ以上何かしたら逆に目立つわよ。」
「…それもそうですね…」

「あー、どうしたもんかな…」
師匠は考え込む。
もうこれ以上考えがなかった俺は、何となく思いついたことを口にした。
「それこそ第６感でもあればいいんですけどね…」
「…第６感？」
ぴくっと、反応する原野さん。
俺は意外な反応に少し驚いた。
「あ…ほら、人間の未知なる６つ目の感覚ってやつです。簡単に言うと、“カン”みたいな…。」
「…カン…」
「いや、けど、信憑性もありませんし、使いこなせなければ役に立ちませんし、それこそＳＦの世界でしか…」
「…それだ」
「…え？」

「第６感を自分たちで“作っちゃえば”いいのよ…！」
「…え、な…作るって…？」
思わず聞き返した俺に、原野さんは素晴らしい案を思いついたと云わんばかりの満面の笑顔を向け、意気揚々と言った。

「よし、“人工第６感でヤブキを回避して　Ｏｎｅ　ｍｏｒｅ　絶叫マシーン計画”に修行テーマを変えよう！！」

2．"the Sixth sense" ―b5『施行』

つまり、師匠の言いたいことはこうである。
第６感というのはある種不確かな“カン”のようなものである。
だが、その“カン”に事実に基づいた情報を組み込んで利用すれば、より確かな“カン”となる。
“カン”はそれ自体だけならあてずっぽうに過ぎないが、事実と照合して推理すればより精度を上げられるのだ。
…具体的な話をすればつまり、俺が矢吹にメールを送って、矢吹が今どうしているのか探り、その事実をもとに彼の次の行動パターンを割り出し、俺たちはそれを避けて行動する、ということである。
幸いなことに矢吹は大変筆まめで、今はやりのブログのボイス機能も頻繁に利用するタイプだった。

「あまり時間が経っていないし、たぶんまだご飯を食べてる最中だと思うのよ。」
原野さんが言う。
「今送れば４分くらいで帰ってくるんじゃないかしら。」
「…４分ですか？」
「メール返すのが早い人って、たいてい４分前後で返してくるのよ。たまに２分とかの人もいるけど。」
…未知の世界である。
俺はネットツールとしてしか使わない形ばかりの携帯のメール機能

（2カ月ぶりくらいに開いた）を使って矢吹にメールを打つことにした。
…なんせメールをしないものから何を打ったらいいのかわからなかったので、原野さんの横からのアドバイスに素直に従う形になった。

『よう、お前今何してる？』

…あまりに直球である。

「あんまり回りくどいのは好きじゃないのよ。」
と、原野さん。
「このくらいはっきり聞かれたらこれ以外のこと答えようがないじゃない？」
「確かにそうですが…これって、『オレ、今遊園地来てんだ』みたいに事実だけ答えられたらどうするんですか？」
「その時はブログのボイス機能をみる。」
「…知ってるんですか？矢吹のブログ。」
「いや、直接は知らないけど、たぶん中学の時のクラスメイトのブログリンクから飛びまくればいけると思う。」
「…なるほど！」

俺は素直に関心する。
確かに矢吹の友好関係は幅広すぎて驚くほどなので、必ず行きつくことができるだろう。

ぴぴぴぴ！
次の瞬間、携帯が鳴った。

…送ってからわずか2分の早業だった。

『おう！お前がメールくれるなんて珍しいな！（@@）
オレは舞ランで遊んでるぞー。今からスカイウォーク乗るぜ＼（＾ｏ＾）／』

「…１００点満点の回答が来たわね。」
「…さすが矢吹ですね。」
肝心な所で期待に添うてくれる男である。

「スカイウォークか…てことは、あっち方面にはいけない…か。」
原野さんは園内地図を広げている。
そして中央のラグーンを指さすと、言った。
「よし…じゃあ、絶叫リバイバルの最初は、スプラッシュサークルに決定。」
「…やっぱり、乗るんですね…」

矢吹の件もあって少し落ち着いていた俺のテンションは、また急降下線に突入した。

2. "the Sixth sense" －b6『再行』

“慣れ”というものは偉大である。
一番初めにチャレンジしてびくびくしっぱなしだったスプラッシュサークルは、あの怒涛の絶叫地獄を見た俺にとっては、ただのくるくる回るボートとなっていた。

「…実はあんまり怖くなかったんですね、これって。」
乗り終わった後の俺の一言に原野さんは、
「ほらー、だから言ったでしょ？」
満足そうにうなずいた。

次の矢吹の行動チェックによって、彼が全て木で造られたジェットコースターである『ジュピター』に乗るらしいことがわかったので、俺たちはそれを避けて子供向けコースター『わにくん』へ向かうことになった。

『ジュピター』も『わにくん』も午前中の絶叫地獄のコースにばっちり含まれていたのだが、この二つ、なかなか凶悪だった。
特に『わにくん』に至っては、どこが子供向けなのかと製作者を問い詰めたくなるハイスピードで巧みに小回りを利かせながらコースを二週も回るのである。
これに喜んで乗るちびっこの気がしれない。

「この調子で『わにくん』も克服出来るわよ、きっと。」
「…あれ、『わにくん』なんてかわいい名前にしないでほしいです。そんなかわいいもんじゃないです。」
くくくと笑う師匠。
俺も可笑しいような、情けないような、よくわからない心境になった。

スプラッシュサークルから園の内部に向かって移動する俺たちは、子供向けエリアに差し掛かった。
メリーゴーラウンドや射的、コーヒーカップ、ゴーカートなどが並んでいる。
…楽しそうである。

このエリアをもう少し奥に入ったら、夏はプール、冬はアイススケートリンクに利用されているスペースがある。
舞ランのメイン施設の一つである。
この付近に『わにくん』はあった。
あと少し歩けばたどり着くだろう…という、そんな時。

「?!」
俺は、前方に矢吹を発見したのだ。
こちらに向かって三人で歩いてくる。
焦る。
焦る。
パニクる俺。

「ちょ…セイどうした……、?!」

その様子に驚いた原野さんも、気づく。
目を丸くして一瞬固まったが、さすがは原野さんだった。
「行くわよ」
小声で言うと、俺の腕をひっつかんで道の端っこに向かって歩いて行く。

「ど、どこかに隠れたほうが」
「アトラクション！何かアトラクションに乗れば隠れられる！！」
小声のやり取り。
原野さんは、ひっきりなしにあたりを見渡し、アトラクションを探す。
そして。
「こっち！！」
原野さんは俺を引っ張るように、『コーヒーカップ』に入った。

一番奥まったところにあるカップに乗り込む。
すっぽりはまるようにカップの中にしゃがみ込み、道側をうかがうと、矢吹たちが通り過ぎて行くのが見えた。
…なんとか気がつかれずにやり過ごせたようである。

「…びっくりした…！！！」
大きく息をつく原野さん。
俺もホッとして、カップの背もたれにぐたっと背中を預けた。
「けど…なんで矢吹がこっち方面に来てたんでしょう…。」
「…そういえば、こっちを通っても『ジュピター』に行けるんだった…。舞ランに詳しくないと使わないような道だから注意してなかったわ…。」
…ということはつまり、矢吹は舞ランに大分詳しいということになる。

流石だ。

ぷぷぷぷぷぷ、とコーヒーカップの開始のベルが鳴る。
乗客は俺達しかいない。
「まあ良かったわ、見つからなくて。結果オーライね。」
原野さんがきちんと座りなおし、中央のレバーに手をかけた。
…目が真剣(マジ)である。
ここで、俺は思い出す。
午前中、彼女が“いや、私はコーヒーカップ高速回転の方が好きよ。”などと恐ろしいセリフを吐いていたことを。

「ちょ!!は、原野さん、ここは、あの、平和的なですね、回転を楽しみませんか?」
「何言ってるのよ、コーヒーカップは高速回転に限ります。」
「や…やめてください!」
「スプラッシュサークルをクリアした貴方なら大丈夫!!」
「い、いやですあああああああああおおおおおお!!!!!!!!」

この瞬間、俺は、星になった。
…いや、冗談でなく。
もう体から魂もろとも吹っ飛んだような錯覚を受けた。

恐ろしき回転が終わって。
「…大丈夫?」
罪悪感を覚えているのか、もはや動けない俺の目の前で手をひらひらして意識を確認する原野さん。
……大丈夫でないです。
と、言う元気もなかった。

さて、コーヒーカップまでも絶叫マシーンに変えてしまったうちの師匠。
彼女の辞書に容赦という言葉はない。
容赦の“よ”の字もなければ、情けの“な”の字もない。
もし多少でもその概念を知っていてくれたならば、こんな状態の俺を、予定通り『わにくん』に乗せ、その後きちんと『ジュピター』にも乗り、『ウォータースラッシュ』、『スカイウォーク』、その他舞ランにある限りの絶叫マシンに立て続けに乗せたりはしなかったはずである。

午後三時を回って。
俺はベンチに座っていた。
動悸と冷や汗と眩暈と頭痛と手足の震えがひどかった。
叫びすぎて喉ががらがらである。

「はい、お疲れ。」
ベンチにうずくまるように座っていた俺に、原野さんがスポーツ飲料を差し出した。
俺はそれを受け取ると、少し飲んだ。あまり飲みすぎるとクレープをリバースしそうだった。

「いや、ホント、よく頑張りました。」
「……はい。」
「ナイスファイトでした。」
「……はい。」

「ヤブキからメール返ってきた？」
「……今、帰ったみたいです。」
「なるほど。」
「……俺たちも帰りませんか。」
「…いや、それがね。」
原野さんが何か言いたげに口をもごもごさせている。
俺は嫌な予感がした。
凄く嫌な予感がした。

「ちょっと、今日の締めくくりに乗りたいアトラクションがあと一つあるのよ。」
「…いやです。」
何に乗るか聞く前に言った俺をたしなめるように、原野さんが言う。
「もうね、これに乗ったら絶対もう絶叫は怖くなくなる！」
「……もうこれで充分です！！！！」
思わず涙声になった。

だが原野さんは引かない。
…引いてくれない。
「いける！！貴方ならいける！！！」
師匠が根拠のないことを言ってくる。
彼女はそのまま、俺の背後を指さして、言った。
「これで最後！絶叫マシン巡りの締め！！これに乗ったらもう何も怖くない！！！」

俺はゆっくり、後ろを振り返った。
原野さんの指が指す先。
そこには。

一際高く赤く存在する、単純垂直落下、『フリーフォール』がそびえ立っていたのである。

2．"the Sixth sense"　－b7『絶叫』

舞ランの中での『フリーフォール』の立ち位置を紹介しよう。
まず、乗る人のパターンが三種類に分かれる。
第一に、喜んで乗る絶叫フリーク。
次に、テンションが上がりすぎて乗っちゃうグループ客（学生が多い）。
そして、絶叫好きに無理やり乗せられる人。
今回の場合、原野さんが最初のパターンで俺が最後のパターンである。

そして、このアトラクション、乗りたいお客さんがやってきた時点でそのつどスタートするので、あまり動かない。
…それだけ『フリーフォール』に乗る人は少ないのである。
だから、動き始めると付近に見物客が現れる。
『…うわあ、あの人フリーフォールに乗っちゃってるよ…』みたいな感じで、のぼっていく人たちを見上げるのだ。
…よく考えるとおかしな光景である。
まあ、その見物客がいる中に乗った人の叫び声が響き渡るわけだから、乗る人が減るのもうなずけるが。

とまあこんな感じで、乗るだけで目立っちゃう『フリーフォール』。

確かに乗る人は少ないが、その強烈なインパクトと根強いファンにより、この舞園ランドを象徴するアトラクションとなっているのである。

そして、俺たちは。

今その麓に立って、このてっぺんを見上げていた。

「これに乗ったら目立っちゃうから、矢吹がいるうちはやめとこうって思ってたんだけど、ちょうど良かったわ。」

原野さんが嬉しそうに話している。

俺はもう青ざめるのを通りこして、顔面蒼白になっていた。

「…これは……」

「いやー、フリーフォール久々！じゃあ行こうか！」

「ちょ、ちょっと待ってください！！！！！」

俺は搭乗口に歩きだした原野さんを、腕を掴んでとめた。

「これはダメですって！！これはダメです！！！！」

「死にはしないから大丈夫よ。」

「それは分かってますけど！！！これはダメです！！！俺のキャパをはるかに超えてます！！！！」

「貴方は今日、そのキャパを大きく広げたわ！いける！！」

「いけません！！！！！」

必死な俺。

原野さんは珍しく食い下がる俺に、少しためらいを見せた。

「ううん・・・わかった。」

「ほんとですか！？」

「流石にフリーフォールは難易度高いものね。じゃあ、後でジェラートでも奢るわ。」

「……。」

思わず無言になった。
「あたし、人に奢るとかほとんどしないのよ。けど仕方ない、今回は特別。」
……それ、原野さんがジェラート食べたいだけでしょう！！？？

口をパクパクさせて抵抗したが、原野さんはそれで交換条件成立とでも云わんばかりに、彼女の腕をつかむ俺の手を逆につかみ返して、俺を搭乗口に引きずりこんで。手荷物とサングラスを俺から取り上げてかごに入れて。
無理やり座らせて。
俺は係員の人にシートベルトを締められて。
安全バーが下がってきて。
そして。

“３・２・１・ＧＯ！！！！！”

アナウンスが響き、俺たちの乗るマシーンは、急上昇した。

カチッと。
てっぺんでマシーンが固定される音がした。
下にいる人たちが豆粒のように見える。
例によって、見物客が集まってきていた。
「あああああああ」
俺はもう、極限状態である。
これから落ちるのか？
……この高さから落ちるのか？！

「…これ、登るときにカウントダウンしてくれるのに落ちる時は何も言わずに急に落ちるのよね」

隣で、流石の原野さんも顔が強張っている。
「…やっぱりカウントはいると思うの。心の準備とかあるじゃない。ねえ、セイ」
「…あああああああ」

低く唸る俺。
ひょーーーーっと、風の吹く音。
遠くで響くがやがやとした楽しそうな声。
カチッと、金属音。

…え、カチ？
その瞬間、一瞬時間が止まった。
体がふわっと宙に浮いた。
そして。

俺たちは、多くの見物客が見守る中、声帯がすりきれんばかりの絶叫を上げて、地上に落ちて行った。

2．"the Sixth sense"　―b8『展望』

「いや、ホント、今日はお疲れ様でした。」
「…お疲れ様です。」
「様々なハプニングにも見舞われましたが、結果的には目的は達成した、ということで。」
「…はい。」

あの後。
『フリーフォール』に乗り終えた俺たちは、しばらく近くのベンチで放心状態に陥った後、観覧車に乗ることにした。
原野さんが「…修業とは言え、せっかく来たから、最後に好きなアトラクションに乗っていいよ」と言ってくれたためである。
俺は観覧車をリクエストした。射的もしたかったが、この状態でハイスコアを出せる気もしなかった。

そして今、観覧車の頂上近くである。
「にしても、絶叫はだめでも高所恐怖症ってわけじゃなかったのね。」
「高いところは好きですよ。」
「へえ、意外。」
原野さんはゆるりと笑い、続ける。

「もし高いところもダメだったら、これだけは気合いと根性で直しようがなかったもの。」
「…原野さんなら、そこも矯正するかと思いました。」
「いや、気の持ちようだけでどうにもならないこともあるから。」
原野さんはちょっと困ったように笑う。
俺にとっても、そんな彼女が少し意外だった。

夕方の赤い日差しが窓から入ってくる。
俺は窓の方へ眼をやった。
赤と青のグラデーションを作るように色づいた空に雲の白色が映り込んだ、幻想的な景色。

「綺麗ね。」
師匠が言う。
「そうですね。」
俺も応える。

今日経験した恐ろしいことがまるで夢だったかのように錯覚させる、眺めだった。

「……あ!!!忘れてた!!!!」
「え、…え?!!」
原野さんがいきなり叫んだので、俺は自分の世界から無理やりひき

ずり出された。
「あれ、買わなくちゃ！！！あー、せっかくの好機を逃すとこだったわ、よかった、気がついて！！」
「…え、なにがですか？！」

「ぎりぎりセーフよ、よかったわね、セイ！」
「いや…だからまことですって、いい加減覚えてください！！！」

2．"the Sixth sense"　－c1『余談』

「おーっす、誠。今日こそは一緒に帰ろうぜー。」
「矢吹。おう、今日は大丈夫だ。」
「…最近お前、すぐ帰っちまうからオレっち寂しかったぞ。」
「なに言ってるんだよ…。だからって後をつけるのは止めてくれ。」
「あちゃ！気づかれてたか！」
「分かりやすかったからな…。」

「まあまあ、いいじゃん、これからしねえよ！…ところで、昨日はお前、いきなりメールが来てびっくりしたぞ。」
「え、あ、…ああ、ちょっと暇で。」
「ふうん。昨日は近所の姉ちゃんと姉ちゃんの弟と舞ランに行ったんだけどよ、そこでさ、すっごくかっけえ人がいたんだぜ！」
「…かっけえ人？」
「そうだ！めっちゃいかついグラサンしてんの！あのデザインは秀逸だったな～、思わず二度見しちまったよ。」
「……おう。」
「まあ、すれ違っただけだったんだけどな。一緒に行ってた近所の姉ちゃんとその時別行動とってたんだけど、後で話聞くと、その姉ちゃんもその人を見たって言ってたんだ！顔も格好よかったってさ～。」
「……へ、へえ。」
「やっぱ、格好いい人は持ち物もイイんだな！あれ、どこで買ったんだろ。うらやましいぜ！」

「……そ…そうか。」

「ところでさ、誠って私服どんななんだ？お前もカッコいいの着てるんだろ！休日とかどんなの着てんの？」

「…俺は普通にシャツとジーパンだよ。」

「へえ～。…そういや、昨日のお兄さんもそんな恰好だったぜ！」

「え？！…そ、そうか。」

「なんだよ、今流行ってんのか？シャツとジーパンって。俺も取り入れちゃおうかな。」

「…矢吹は今のままでいいと思う。」

「？お前、俺の私服見たことあったっけか？」

「！…いや、い、イメージだけど」

「…そうか？じゃあそのままで行っちまおうかな！かはは！」

2．"the Sixth sense"　－c2『後談』

……危ない、色々とぼろが出るかと思った…。

月曜日の放課後。
今日は昨日とは打って変わって雨降りである。
体のあちこちが濡れて気持ち悪い。
矢吹と別れた俺は、電車で最寄り駅まで出て、傘を差しながら帰路をたどっていた。

昨日はあの後、原野さんが思い出した用事を済ませ、舞園公園駅前で解散した。
次の日の学校なんて考えたくないほど疲労していたが、休むわけにもいかなかった。
というのも、師匠、原野さんから宿題を出されたからである。

本当は、“学校で”と言われていたんだけど…。
俺は苦笑いする。
流石に矢吹が見てる前じゃ駄目ですよ、原野さん。

けど、俺は。

昨日の舞ランでの一件で、少し“踏ん切り”というものがついたらしかった。
…“諦め”とも言うのかも知れないが、ここは前向きに捉えることにする。
ビビりが完全に直ったわけでは決してなかったが、『できない』『無理』だけで終わらせるのが、なんだかもったいないような気もしてきていたのだ。
昨日、あれだけ『できない』『無理』だったことをやった今となっては。

それに今回は、原野さんが言ったから『仕方なく』だけではなく、俺もそうしたいから『自分から』。
少しだけでもそう思ったのは、確かに修行の成果なのだろう。

俺は、家の前にたどり着く。
いつもならそのまま家に直行するが、今日は家に背を向けて。
チャイムを押した。

「…はあい？」
女の子の声。
「あ、あの。中澤です。」
俺は何とかこう言った。
口がどうしようもなく乾く。

インターホンの向こう側の彼女は、
「え！まことくん？！」
と驚いた声をあげると、そのままインターホンを切り。

とととと、と足音がして、玄関の扉があいた。
「どうしたの!?珍しいね!」
眼をまん丸くして驚いた様子で、俺のお向かいに住む、谷口和が現れた。
学校から帰って間もないからか制服姿だった。
「入る?お茶入れるよ!」

ニコニコとこちらに微笑む谷口さんにどうしようもなく緊張しながら、俺は、
「い…いや…いいよ。すぐ、終わるし…。」
と言って。
手に持っていた袋を彼女に差し出した。
「これ…昨日、舞園ランドに、行ったから。……お土産。」
「え!いいの!?」
谷口さんが手を口元にやって、驚いた表情をする。
…可愛らしい。

「ありがとうっ!!すっごく嬉しいっ!!」
俺から袋を受け取ると、彼女は弾けんばかりの笑顔をこちらに向けた。
「開けていい?」
谷口さんの問いに、俺は頷いて応じる。
喉がつまって声が出なかった。
「…わあ!!可愛い!!!」

原野さんがあの時思い出したこと。
それは、谷口さんへのお土産を買うことだった。
俺たちはあの後舞ランのお土産屋さんでその品を選んだ。
小さなガラス細工のオルゴール。

「ありがとう…！すっごく大事にするね！！」
「う、うん…よかった…」
俺はもういっぱいいっぱいだったので、ぺこっと頭を下げるとその場を立ち去ろうと踵を返した。
しかし。

「あ！まことくん、やっぱり帰っちゃダメ！」

谷口さんが、不意に。
玄関から出てきて、俺の腕を。
ぎゅっと、掴んだ。
俺は心臓が跳ね上がる。
思わず体が硬直する。

「…え？！谷口さ」
「やっぱり上がっていって！昨日、ケーキ焼いたの。だから、お返しに。」

微笑む谷口さん。俺は、その微笑みにどうしようもなく心惹かれる。
大丈夫か、俺。
ちゃんとケーキ、食べられるのか…？

しとしとと降る雨も、水滴がかかってじんわりと濡れる肩も、不

思議とさっきほど不快には感じなかった。

To be continue….

3．"A title of 7" －a1 『雑談』

【Ｃｏｎｔｒａｓｔ】、３章目に突入です。
今回は初夏、７月のお話です。

今月は誠にどんな出来事が降りかかるのでしょうか…？
どうぞお楽しみください！

＊感想、評価、誤字脱字報告などありましたら、ぜひよろしくお願いします！＊

3．"A title of 7" ―a1『雑談』

―a1『雑談』

「よう、誠―！はよーっす。土曜に補修とか、マジだりぃな！」
「あっ！矢吹じゃねえかっ。おはようっ。」
「…お？どうした、今日は何か機嫌いいな、お前。」
「どうしたって…お前、まさか忘れたとは言わせない。」
「……誕生日だっけ？いや、誠は確か誕生日冬だよな……。」

「なに言ってるんだ、矢吹よ。今日は…アレの発売日だろ。」
「……おあ！！すっかり忘れてた！！あれか、じーちゃんクエスト7の発売日だ！！」
「そう！あの国民的ゲームソフト、じちゃクエの発売日！！」
「オレ、ネットで予約して家に届くようにしてあったから、すっかり忘れてたぜ…。」
「俺は今日放課後にすぐゲーム屋に行くんだ。帰ったらすぐプレイしたいからな！」
「おー流石ゲーマー！オレっちに負けず劣らずのゲーム好きっぷりだな！」

「学校でゲームの話はしないようにしてるんだけどな…今日ばかりは話してしまった。ずっと楽しみにしてたからな…！」
「ん？なんで学校でゲームの話しねえの？」
「なんでって……なんか、恥ずかしいだろ。」
「なーーーに言ってんだ、誠よ！！」

「った！なにすんだよ、おい！」

「…お前はありのままの中澤誠で十分カッコいいじゃねえか……恥ずかしがることなんてねえ……。」

「…矢吹……なに言ってるんだ、お前は。」

「っかー！お前は！またそうやって謙遜ぶりを発揮するだろ！」

「いや、そんなことないって。」

「お前ほどモテたら、もっと自意識過剰になってもいいはずなんだけどな。誠はすげえよ。」

「……買いかぶりすぎだよ。」

「ま、俺はそんなお前が好きでつるんでんだけどな。かかか！」

「…ありがとうな、矢吹。」

「？オレお礼言われるようなこと言ったか？…まあいいや。そういや誠よ。」

「どうした矢吹よ。」

「5月位にさ、4月から1か月も経たないうちに11人に告られて、全員をすっぱり振った凄い奴がいるっていう話したの、覚えてるか？」

「ああ…なんとなく覚えてる。確か全員が親衛隊になって…とか、だよな。」

「そうそう！そのだな、11人斬りの主が誰なのか、オレっち分かっちゃったかもしんない。」

「えっ、そうなのか？」

「有力な噂話を入手してな…。それによると、2年生にそれが出来るにふさわしい人がいることが分かったんだ！」

「2年生か。そういや、あんまり俺らと関わり無いから、どんな人がいるのか知らないよな。」
「そうなんだ…その人は、噂によると、”フランソワ先輩”と言うらしい。」

「……フランソワって、外国人……？？」
「そう！聞く話によるとドイツ人とのハーフらしいんだ！」
「それは、…いかにもモテてそうだな…。」
「だろ？！絶対この人だ、１１人切りの主は！間違いねえ！」

「可能性あるな…。けど、”フランソワ先輩”てファーストネームに先輩ってつけてるんだな。」
「いや、フランソワはミドルネームだそうだぜ。本名は“シュナイダー・H・明星”。」
「しゅ…シュ？」
「“シュナイダー”だ。にしてもいかつい名前だよな！」
「…え、いやまて。ミドルネームが”H”で”フランソワ”って、おかしくないか？”フランソワ”だったら、普通イニシャルは”F”だろ。」

「…確かにそうだけど、あれは”フランソワ”だって！もう、いかにも”フランソワ”な顔だちだから！」
「どんなだよ、それ！」

「お前もみればわかる！絶対”フランソワ”だから！」

3．"Ａ　ｔｉｔｌｅ　ｏｆ　７"　－ａ２　『同時』

－ａ２『同時』

７月１３日、土曜日。
天気、豪雨ときどき晴れ。
まだ梅雨が明けていないのか、限りなく蒸し暑い感じ。
現在地、学校付近のゲームショップ。
補修終りに急いでやってきたため、時刻は午後１時を少し回ったところ。

そして。
現在、俺は、困っている。

奥まった場所に位置するゲームショップ『ＡＬ』の店内。
こじんまりした小さいスペースの中にゲームソフトはもちろんのこと、ハード、備品なども所狭しと並べられている。
ＡＬは小さい店ながらも品ぞろえが豊富で新作入荷も早いため、この辺りではちょっとした有名店だ。
そこで俺は、“じーちゃんクエスト７”のパッケージを目の前にして、硬直しているのである。

俺の横には大学生のような風貌のお兄さんが立っている。
背丈は俺よりもだいぶん高い。
というか、ひょろ長い。

風が吹いたら折れてしまいそうだ。
顔はよく見えないのでわからないが、彼もまた俺と同じく硬直していた。

俺が困っている理由。
それは、ＡＬに残された最後のじちゃクエパッケージに、俺とこのお兄さんが、同時に手をかけたからだった。

矢吹と話したあの朝から、ほとんどなにも手つかずの状態で学校を終え、学校の最寄駅から電車で一駅移動し、下車した後さらに横断歩道を渡り、歩道に沿って早足でここにやってきた俺。
学校からかなりの距離はあったが、５月と６月でごたごたして、不覚にもすっかりソフトの予約を忘れてしまっていた俺にとっては、近所のゲームショップに行くよりもＡＬに行く方がより良い安全策に思われたのだ。

聞く話によると、学校を休んで買いに行った奴も多いらしかった。
前作もすぐ売り切れて品薄状態になったのだ、いくらＡＬといえども、在庫数には限りがある。
そう思って、できる限り早く学校を出発し、走るような勢いでここまでやってきた…というのに。
新タイトル発売の情報が出てから早１年ちょっと。
致命的なバクの発見やらなんやらで発売日が二度も延期になるという騒ぎもあったが、ようやくこの日がやってきたというのに…！

「えっと…うん。」
おもむろに、現在俺と同じような状況に置かれているであろう、隣のお兄さんが声を発した。
俺は現実に引き戻される。
突然のショックでいろいろなモノがフラッシュバックして、意識が明後日の方向に飛んでしまっていたようだ。

「え！あ…はい。」
「最後の一個だったんだね…。」
お兄さんがこちらを向いて苦笑いをした。
目が合う。
その人は、男性にしては長めの黒髪を後ろでちょっと束ねており、大変中性的な雰囲気を醸し出していた。
格好いいというよりは、綺麗。そう表現するのが正しい。
すっきりと整った顔立ちをしており、言うならば（この表現が男性に当てはまるのかはわからないが）“クールビューティー”と表現したくなるような雰囲気を持っている。
あー、この人はモテるだろうな、と、思った。

……？ん？あれ、なんだかデジャヴ。
なんだったっけ、この感じ。
何か引っかかるものがあったが、今の俺にそこから突っ込んで考えるような余裕はなかった。

お兄さんは切れ長の目を細めてゆるりと笑うと、残念そうに、俺に話しかけてくる。

「仕方ない…ここは、君に譲ることにするよ…」
「え！そんな！！」
俺は申し訳なさで一杯になった。
手をかけたのはほぼ同時だったのだ。
ここで譲ってもらうのは、俺の良心が許さない。

「い、いや、ここは俺がお譲りします。もう、全然構わないんで。」
「そういう訳にはいかないよ…僕にも良心があるからね。」
そう言って手を離すお兄さん。俺も慌てて手を離す。
「い…いや、そんな、俺も譲ってもらう訳には…」

そう言って、俺はソフトから一歩下がった。
ここは本気でお兄さんにソフトを譲るつもりだった。
だが、お兄さんも一歩下がって俺の隣にやってくる。
「君…、僕の見たところでは、相当のじちゃクエファンなんじゃないのかい？」
「え！なんで…！」
驚く俺。
お兄さんはふふふと笑って、続ける。
「いやあ、さっきの君の悲壮な表情を見たら、簡単に察しがつくよ。」
そう言ってより柔和に笑うお兄さん。
俺は恥ずかしさを覚えた。
…というか、もうかなり恥ずかしかった。
この人と話していると、なんだかすごく心の中を見透かされている感じがした。

「…う…は、はい。そうです…」
「やっぱり。すぐわかったよ！」

お兄さんは嬉しそうに笑う。
ゆるり、と。
年齢に見合わない、少年のような無邪気な微笑みで、俺に惜しみない笑顔を向ける。

「だって僕も、筋金入りのじちゃクエファンだからね！」

3．"A title of 7" ―a3『投合』

―a3『投合』

ここで、これまでずっと話題の中心にあった、”じちゃクエ”というゲームについて少し説明を加えておきたいと思う。
“じーちゃんクエスト”とは何か？
その実態は、全年齢向けロールプレイングゲームである。
主人公があらゆる危機や困難に立ち向かいながら、魔物を倒したりミッションをクリアしたり、時にはじーちゃんの畑を耕したりと奮闘し、じーちゃんの為にクエストするのだ。
決してじーちゃんがクエストするわけではない。

その斬新なネーミングセンスとストーリーの面白さから、このじちゃクエは発売と同時に大ヒットを記録。
今では日本のゲーム界を代表するタイトルの一つになった。
続編も次々に発売され、今日発売するのは7つ目のタイトルというわけだ。
今回は特に新たな機能を多く搭載しているようで、制作会社のこのタイトルに掛ける意気込みがうかがえる。

俺は、人には話さないのでほとんど誰にも知られていないのだが、無類のゲーム好きだ。そして、そのきっかけとなったゲームがこの“じーちゃんクエストシリーズ”。
新作発売でテンションを上げずして、どこで上げろと云うのか。

というわけで、俺は。
そんな話題を振られちゃったらもう、人見知りにも関わらず食い付いてしまうわけで。

「そ…そうなんですか！！」
「もちろんだよ！今回は不覚にも予約をすっかり忘れていてね…」
「俺もなんです、ばたばたしてて…」
「奇遇だね！」
さらに微笑むお兄さん。
この笑顔は一体どこからやってくるのだろう。

「君はじちゃクエシリーズはどのバージョンから始めたんだい？」
「え、えっと…4からです。ちょうどゲームを始めたのがそのソフトからで…」
「4は名作だね！あれは僕も4、5週はしたな…」
「お、俺もです！！隠しダンジョンとか、出しましたか？じーちゃん家の裏庭の…。」
「もちろんだよ！あれはじちゃクエファンなら基本だよね！」
「…ですよね！けど…あそこのラスボスがなかなか倒せなくて苦戦した覚えがあります。」
「ああ、あそこで苦戦する人は多いみたいだね。だけど、あのボスには弱点があってだね…」

…さっきも言ったが、俺は自分のゲーム好きを他の人に殆ど話していない。

矢吹にはいろいろ聞きだされる過程で話してしまったのだが、アイツは例外だ。
師匠こと原野さんはもちろんのこと、かなり付き合いの長い幼馴染かつ俺の思いの人、谷口さんも知らないだろう。
よって、俺はずっとゲームを一人で楽しんできていた。
こんな風にそのシナリオを人と語ったりすることはなかったのだ。

だから。
俺は、このお兄さんとの会話がとても楽しかった。
好きなキャラクターやシナリオを話せるなんて、初めての経験である。
こんなに、しかも初対面の人と、話すのが楽しいと思ったのはおそらく初めてだろう。この2カ月で多少なりとも気持ちが強くなったおかげもあるのかも知れない。

語り、語り。
話し、笑い、盛り上がり。
瞬きの如く束の間に感じられる楽しいひと時を過ごし。
話もひと段落したところで、お兄さんが勢いよく言った。

「よし、ここまで意気投合したことだし、どちらかが抜け駆けするのも忍びない。もう今回のこのソフトは諦めて、一緒に次の入荷に合わせて予約しておかないかい?!」
「あ、予約ですか!それ、いいですね。」
なるほど、そうすれば確かに確実だった。
直ぐにプレイできないのは痛いが、まあ今日は楽しい会話ができた

ので良しとしようか。

「是非そうしよう！あの、すみません。」
そう言ってお兄さんはレジに歩み寄り、声をかけるお兄さん。
俺もそれに続く。
レジに座ってこっちを眺めていたのか、店員らしきおじさんがちょっと半笑いで「はい。予約ですか？」と言った。
これは確実に聞かれていたな、と思って少し恥ずかしくなった。

「はい、二人分お願いします。」
そんな俺をよそに、例のシャイニングな笑顔でゆるりと対応するお兄さん。
店員さんは二枚の紙を取り出し、レジの上に置いた。
「ここにご記入くださいね。三日くらいで届きますよって。」

お兄さんに目で促されるまま、俺は先にペンを手に取り、記入を始める。
この予約表、名前と住所、電話番号欄の他に、所属団体名を書く項目があった。
珍しいな…そう思いながら記入していると、後ろからちらっと覗き込んでいたのか、お兄さんがボソっと言った。
「ナカザワ…セイ君？」
「…いや、まことです。」
…もう条件反射的に答えてしまった。
なんだ、今“誠”一文字で“セイ”って読み間違える人が大量発生でもしているのか？

そのまま全欄を記入して、お兄さんにバトンタッチ。
お兄さんは長い体を折りたたむように前かがみになって予約表を書いている。
体の陰に紙が隠れるような感じになっていたため俺は、お兄さんの名前を伺い見ることができなかった。

「じゃあ、僕はここでもう少しソフトを物色してから帰るとするよ。」
予約表を書き、それを店員さんに渡してから。
お兄さんは俺に言った。
「じちゃクエが届くまでの間、暇つぶしするゲームが要るからね。」
「なるほど。確かにそれは必要ですね。」
俺は少し笑って応じる。

お兄さんも、また俺に惜しみなく笑顔を向ける。
「今日はありがとう。話が出来てとても楽しかったよ。」
「お…俺もです。ありがとうございました。」

そう言って軽く会釈をしてから。
俺は、踵を返した。

「また、縁が逢ったら会おう。」
後ろから声が聞こえた。

その声に振り返りまた頭を下げると、店から外に出て。
俺は、どこか充実した気持ちを胸に、帰路に着いた。

3．"Ａｔｔｉｔｌｅ　ｏｆ　７"　－ｂ１『誘惑』

－ｂ１『誘惑』

雨が降ったり止んだりなおかしな天気の週末を終えると、気温が驚くほど高くなった。
とうとう梅雨明け、夏の到来である。
ほとんど何も考えずに終えた高校生の永遠の腐れ縁、期末テストもなかなか残念な結果に終わり、まあこんなもんかとぼんやりとしているうちに、夏休み。
…時が経つのは驚くほどに早い。

こんな暑い日に学校なんて憂鬱だ。
俺は最寄駅から学校に向けて歩いていた。
周りは同じ高校の生徒ががやがやとしゃべりながら登校していく。
やたらとゆっくり歩いている俺を、何人もの生徒が追い越し、そして何人かの女子が振り返って俺を何やら二度見しては、キャッキャ言いながら去っていった。

気がつけばもう蝉が鳴き始めている。
朝からやたらと高い太陽も鬱陶しくて、俺は目を細めた。
午前中だけしか授業しないんだったらもう学校なんて休みにしてしまえばいいんじゃないのだろうか。
我が高校、鷹尾高校は最寄駅から徒歩１５分もかかるのだ。
しかも坂を登っていくので日差しは強くなるばかり。

俺はなんだかうんざりしてきた。
今は授業も大したことをしてないし、もう高校なんて出なくてもいいんじゃないだろうか。
どうしてこんなに暑い思いをしながらコツコツ歩いているんだ、俺は。
行ってもぼんやりしているだけだし…帰って二度寝でもする方がよっぽど建設的なような気もする。
それに家にいれば二度見されることもない。
…師匠には“耐えないと駄目！”って言われたけど、やっぱりいい気はしないのである。

……いやいやいや！
けど、ちゃんと学校は行かないと駄目だよな…。
“出席”は最低限だし…。
義務教育と違ってお金もかかっている。
今まで無遅刻無欠席なんだぞ、俺。
しっかりしろ、ここで悪魔の誘惑に負けては駄目だ、誠。

うん。
…だめだ、負けては…。
…だめ……。

……。

…もういいか…暑いし…。

…俺は案外あっさり誘惑に負けた。
それほど行くのがめんどくさかったのですよ、うん。
…よし、もう帰ろう。
先生には矢吹にうまく誤魔化してもらおう。
俺はそう決意して踵を返した。

…するとその時。
ヴーーヴーーヴーーと、やかましく震えだす俺の携帯。
普段メールなんて殆ど来ないので、焦る俺。
さ…サボろうとしてたのがばれたか?!

メールの送り主は、原野さんだった。

『ちょっと今日渡すものがあるから、放課後に中庭に12時30分に集合。時間厳守!』

…帰れないじゃないですか、師匠……。

3．"Ａ　ｔｉｔｌｅ　ｏｆ　７"　－ｂ２　『急変』

－ｂ２『急変』

今頃はベッドにダイブしている筈だったのに。
二度寝するつもりだったのに。どうして今日に限って学校で用事とか。
いつもは学校で会うなんて絶対にしないのに。
どうして、今日！
どうしてですか師匠、やっぱり隠れて見てたんですか！

“サボる”という選択肢が消えてしまった、だから。
俺は仕方なく学校に来た。
…本当に仕方なく、来た。
もうすっかり家に帰るテンションになっていたので、もうさっきの５割増しで気だるい。
案の定、俺は授業中も、休み時間中も、ぼんやりと上の空で過ごしていた。
いつの間にか二時間目が終わってしまっている。
次は移動教室だったが、俺はなんだか動きたくなかったので、机に座ったままいつもよりだらだらと準備をしていた。

そしてこんな時に限って矢吹は学校を休んでいる。
文句の一つでも言ってやりたいが、あいつは何気に成績が良いのだ。
俺の順位－１５０番位の好成績。

悔しいかな、俺は“勉強しろ！”なんて言える立場でなかった。
例え、奴がおそらく家でじちゃクエに勤しんでいるであろうことが分かっていても、だ。

じちゃクエ。
俺はそこで思い出さないようにしていたことを思い出してしまった。
あの後、矢吹がいちいちプレイ報告をしてくるのを俺は聞かなければならなかった。
…これが案外応えた。
矢吹がプレイしてるのに俺ができないなんて、あまりにも酷い仕打ちである。
どうして、どうして予約しておかなかったんだ、俺。
学校帰りに何度でもチャンスはあったはずなのに…、あ、そうか。
師匠こと原野さんとの神社での修行があったのか。
修業は（契約により）何より最優先であったので、行くタイミングを完全に逃したのである。

だけれども！休日とか、時間はあったはずだったんだ！
今更感の漂う後悔ばかりが募っていく。
…いや、けど！
あの時あの楽しいお兄さんと一緒に予約したんだし、もう直ぐ届くはずだ。
もう直ぐ……。…あれ？

そこで俺は、ふとした疑問にぶち当たった。
そういえば、ソフトっていつ届くんだ？

というか、どうやって受け取るんだ？
俺は記憶を辿る。
お兄さんと話して、予約を頼んで、予約表を書いて、そして…。
…あれ？
…あ、あの時、俺……。
予約表の控え、もらわなかったぞ？

俺は文字通り、青ざめた。
予約表の控えがなかったら普通、予約の品って、受け取れないんじゃないか…？
なにしてんだよ、俺、なにしてんだ？
どうして今まで気がつかなかったんだ？
もしかしたら、ここ数日をまるで無駄に過ごしてしまったかも知れなかった。

あー…。何やってんだ。
ほんと、馬鹿だろ、俺。
もう嫌だ……。
俺は思いっきり机に突っ伏した。
かろうじて残っていたモチベーションも完全に消えてしまった。

もういい。
ここで不貞寝することにする。
もういい。
授業なんて知らない……。

「あの…まことくん？」
突然、頭の上から聞きなれた高い声が降ってきた。
あまりのタイミングの良さに俺はびっくりして、まるでばねにでもはじかれたように、机から跳ね起きた。
「え！あ、はい！」

見ると、俺の席の前に、谷口和（たにぐちのどか）が立っていた。
谷口さんは俺のクイックな動きに驚いたのか、目をぱちぱちさせて、ぽかんとした表情をしている。
いつの間にか教室には俺達だけしか残っていなった。

「…わあ、まことくん、急に起きたからびっくりしちゃった。」
えへへと笑う谷口さん。
…思わず和んでしまった。
「え、あ…ごめん…俺も、ちょっとびっくりして……」
「あ！私こそごめんね？急に声掛けて。」
「……っ！あっ！……い、いや、全然……」

…危ない、気を抜くと息がつまりそうになる。
俺は落ち着くためにも、彼女に気づかれない程度に深く息を吸った。
ここで喋られなくなったら、師匠との苦しい修行を乗り越えた意味がない。
性格矯正に効果があるのかどうか分からなかった“走り込み”や、結構な精神的負荷を伴った“クラスの女子と会話して盛り上がる”課題、１日のうち矢吹との会話の中で“矢吹より多く話す”課題を

始めとする、めくるめく修行のメモリアル。
あの日々を無駄にするわけにはいかなかった。

気を引き締めて顔をあげると、谷口さんの大きな瞳と目があった。
…いきなりくらっときた。

「あのね、ちょっともらって欲しいものがあるの。」
そう言って、俺に小さな包みを手渡す谷口さん。
受け取ったものは、薄いピンク色のセロファンでできた袋にラッピングされたカップケーキだった。

「これね、部活で作ったの。一つおすそ分け。」
そう言って彼女はまた柔らかく微笑む。
そうか、確か谷口さん、料理部に入ってたっけ。
俺の頭の中は大きくなりすぎた心臓の拍動音で埋め尽くされていて、思考は停止しかけていた。

次が移動教室でよかった。
教室に誰も残っていなくてよかった。
矢吹が学校を休んでいてよかった。
今日帰らなくてよかった。
どうでもいいことがぐるぐると頭を回る。

「あっ…ありがとう」
俺は、なんとか、言った。
だけど。
今回はこれだけじゃ足りない。
言っておきたいことがある。

頭に血が回りすぎてくらくらしたが、俺はつまりそうな、消え入りそうな声で、付け加えた。
「す…す、凄くうれしい。」

しばらく、俺は彼女の方を見られなかった。
うつむいて手元を見ていた。
…だが、あまりに謎の沈黙が続くので、俺は顔を上げざるを得なかった。
な、なんだ、なぜここで沈黙?

谷口さんは。
簡単に表現すると、大きい瞳を、さらにまんまるにしていた。
目が合う。
すると、その瞳がわずかに揺れた。

「うわああ」
「え」
「まことくんが“うれしい”って言ってくれた!」
「…え?」
「はじめて言ってくれた!今まで、迷惑なのかもって思ってたから、凄くうれしい!!」

今度は俺が一瞬ぽかんとした。
迷惑って……そんなわけないじゃないか!
「え…あ、ごめん。……今まで言ってなかったっけ…?」
「うん、初めてよ。」
なんだかすごく嬉しそうな谷口さん。

幻覚だろうか、彼女の周りにキラキラしたエフェクトが見える気がする。

「……め…迷惑なんて、そんなの思ったこと、無い。……ずっと、うれしいと、思ってたよ」

「……ほんと？」

「……うん。」

緩やかな沈黙が流れる。

夏の日差しが俺たちを包む。

熱を含んだ風が俺の頬を撫で、彼女の髪を揺らす。

俺と谷口さんの、目が合う…。

「あ…あ！！」

谷口さんが沈黙を破るように声を出した。

「わ、私、もう行くね！まことくんも早くおいでね！次、移動教室だよ！」

谷口さんはわたわたと言うと、転がるように教室を出て行った。

…だが。

もう一度、戻ってきたのか、彼女は扉から顔だけ出して、言った。

「えっと…いっぱい話せて楽しかった。ありがとう。」

そして、視線が合い、彼女はまた瞳を少し揺らして。

その顔が引っ込んで、ぱたぱたという足音が廊下に響き。

…やがて聞こえなくなった。

…嗚呼。

頑張っていたらいいこともあるものなんだな。

とりあえず、後で師匠にお礼を言わないと。

俺は手元のカップケーキを見つめながら、耳の奥で鳴り響く自分自身のビートを聞いていた。

3．"A title of 7" －b3『成果』

－b3『成果』

“人間、気の持ちようでどうにでもなる”というのはどうやら本当らしい。
さっきまで津波のように押し寄せて俺の精神状態を危機に陥れていた絶望感はもうすっかり引いて、代わりに俺は、暖かな春の日差しの中で日向ぼっこをしているような心地よさに包まれていた。

いやあ、もう、うん。
精神が健康なことは、大切だ。
さっきまでは悲観しかできなかった状況もどうにかなりそうな気がしてくる。
何の根拠もないけど、だ。
気だるいのも、眠たいのも、イライラするのもすっかり無くなって、体は羽でも生えたように軽くなっていた。

“谷口さんとちゃんとした会話をすること”。
こんな普通のことを、俺はここ数年、出来ていなかった。
…好きだと自覚してからは特に。
これには原野さんにも呆れられた。
そう言われても、いざ彼女を目の前にすると頭の中がチカチカとフラッシュし、耳の奥で鼓動音が暴れ、喉が張り付き息が浅くなって

しまうのだ。
この症状で、俺は何度も決定的チャンスを不意にしていた。

その最たる例が、六月の終わり――舞園ランドのお土産を渡しに行って、その後ケーキを御馳走になったあの日である。
俺は全く谷口さんと話せなかった。
いや、というか、家に帰った時、何が起こったのかを殆ど覚えていなかったのだ。
…この時ばかりは、原野さんにこっぴどく怒られた。
そりゃそうである。
あの状況は絶対的な“ビックチャンス”だったのだから。

『次、チャンスがあったら、絶対に掴まなければいけない』。
あれから、師匠にそう言われ続けた。
修業もより一層、“精神を強化する”、“口下手を解消する”方向のものが増え、難易度も高くなった。
それこそ、じちゃクエの予約を忘れるくらい。

その甲斐あってか、今回は。些細ではあったがチャンスを掴んだのだ。
谷口さんとちゃんと話ができた。
少しは仲良くなれたかも知れない。
そのことが俺の気分をさらに高揚させた。
そして、修行の成果が発揮できたことも、素直に嬉しい。
これも合わせて原野さんに報告しなければ。

あの休み時間からあっという間に時は過ぎ、時は１２時１５分ごろ。
終礼が早めに終わったので、俺は原野さんとの約束を果たすべく、中庭で待機していた。
時間より早いが、遅れるよりは断然いいだろう。

彼女と俺が学校で顔を合わせるのはこれでほぼ二度目だ。
たまに廊下ですれ違うこともあるが、その時はお互いにチラッと目を合わせるだけで、スルーする。
変な噂を立てられないためだ、仕方ない。
だが、その一瞬の視線のぶつかりだけで、師匠は様々なテレパシー（？）を俺に送ってくる。
『ちゃんと課題進んでる？』、『明日が期限よ』、『胸張って歩く！』……などなど。
彼女は器用だ。うん。

そして、今回のこの場所。
俺はますます愉快な気分になった。
原野さんはあの告白現場を俺が目撃していたことを知らないはずなのに、図らずしてこの偶然。
面白いこともあるもんだ。
俺は思わず口角が上がる。

「…貴方なに一人でニヤニヤしてるの？」

突然、後ろから聞きなれた落ち着いた声がぶつかってきた。
俺は思わず口元を引き締め、振りむく。
すると、そこには師匠、原野唯陽（はらのゆうひ）の姿があった。

「あ、原野さんっ！」
「…あれ。今日、機嫌いいわね。」
「いや、ちょっといろいろと良いことがあったんです。」
「それなら良かったんだけど、こんなに奥まった所にいるからなかなか気がつかなかったじゃない。」
「あ…、すみません。」
思わず謝る。
俺はちょうど例の告白現場をのぞき見していた部分に立っていた。
…確かにここは待ち合わせには不向きだったかも知れない。

「まあ、周りから見えづらくていいんだけどね。要件、直ぐ終わらせるわ。」
原野さんはスペースには入らず、俺が立っている入口部分に正対し、中庭に背を向けるようにして身を落ち着かせると、俺に右手を差し出した。
その手には細長い紙が握られていた。

「これ。貴方のでしょう？」

それは。
数時間前、俺を絶望の淵に追いやったきっかけとなった、あれ。
“じーちゃんクエスト7”の予約用紙だった。

3．"A title of 7" －b4『偶然』

－b4『偶然』

「……え?!」

俺は我が目を疑った。

一瞬それが自分の欲求が見せた幻覚かとも思った。

俺は原野さんにじちゃクエの話をしたことはなかったし、もちろん予約表をもらい損ねたことなんて話していない。

なのに、何故かその紙を原野さんが持っているのだ。

彼女から受け取り確認もしてみたが、それは、確かに、間違いなく、例の予約用紙控えだった。

「ど…どうして原野さんが、これ、もってるんですか?!」

「んー…。」

原野さんは頭を掻くと、ふいっと俺から目線を外した。

いつもの師匠には珍しい煮え切らなさだ。

「貴方、ほら。ゲームショップで、大学生くらいの男の人としゃべらなかった?」

「え…」

「こう…ひょろっと縦に長くて、柔和な感じの…。」

「あ、はい…確かにそんな感じの人とは話しましたけど…。」

ど…どうして原野さんにここまで状況が割れているんだ?

俺は少々混乱し始めた。

ＡＬでお兄さんとはなした事は、誰にも話していない。
あの時店内には俺たちと店員さんしかいなかった。
ということは、つまりだ。
考えられる可能性は。

「も、もしかして、あのお兄さんと知り合いですか?!」
導き出したこの問いに、原野さんはやっと、今まで何故かそらしていた視線を俺に戻した。
なんだか苦笑いしているような、恥ずかしがっているような、微妙な表情をしている。
そして。

「あれね、…うちの兄なのよ。」
と、言った。

……え?
「えええええええ!!!!!」

思わず驚愕の声をあげてしまう俺。
お…お兄さん、て!!!
どうして、そんな偶然!!!

「いやあ…ね。あたしも見た時、すっごくびっくりしたんだけど…。」
まだ微妙な表情のままの原野さん。
よほど気恥ずかしいのか、指先をいじっている様子がもじもじして

いるように見える。
こんな師匠、滅多に見られるものではない。
「鷹尾高校の生徒で、舞園市に住んでる“中澤誠”なんて、二人もいないでしょ？」
「そ…それはそうですが…。」

「貴方が帰った後、店員さんが控えを渡すのを忘れてたことに気がついたらしくって。けど貴方は帰っちゃってたから、どうしようかってなったらしいんだけど、兄がそこに書いてあった高校名を見てね。」
「はい。」
「妹が鷹尾高校に通ってるからって、引き取ってきたらしいわ。」
「…え？同じ高校ってだけで？」
「……そうなのよ…それがうちの兄の厄介なところでね……。」
原野さんがため息をつき、眉間のあたりに手をやった。
「ちょっとでも自分と関係があることにすぐに首を突っ込んでいくのよ…。今回は偶然知り合いだったから良かったようなものを……。」

確かにそうである。
もし原野さんの全く知らない人だったら、どうなっていたのだろうか。
…この様子だと、今までもそのことで結構苦労しているようだった。

だがしかし、そう思うのと同時に。
「けど……良かったです。これ、もらい忘れていることに気がついて、本当に焦ってたんで……。」
俺は感謝の気持ちでいっぱいになる。

よかった、じちゃクエの予約が無駄にならなくて良かった……。
この件に関しては、いくら谷口さんの件で気が晴れたといえども、心の引っ掛かりになっていたのだ。
これが手元にやってきただけで、心の晴れやかさが段違いに増したのが分かった。

「うん。世の中、狭いわね。」
原野さんもそう言って、ゆるりと微笑んだ。
…なるほど、この笑い方、あのお兄さん（というか原野さんのお兄さん）にすごく良く似ていた。
というか、今思い返せば、切れ長の目も、整った顔立ちも、綺麗と表現するにふさわしい雰囲気も、そっくりだ。
あの時感じたデジャヴはこの事だったのかと、俺は痛く納得した。

「でね。本題はここからなんだけど。」
原野さんの顔を見てしきりに頷いていた俺をちょっと制するように右手を振って、彼女は続ける。
「兄がね、貴方にまた会いたいって言ってるのよ。」
「え…お兄さんが、俺に？」

「貴方のこと気に入ったらしくって。話が凄く合ったとかなんとか。」
「あ、はい。凄く楽しかったです。」
「それに、そんな偶然めったにないから、せっかくの縁だって。」
…なるほど、お兄さんは確か、別れ際にもそんなことを言っていた。
縁が合ったら…とかなんとか。

きっと、そういう出会いを大切にする人なのだろう。
「確かに、俺も、凄く縁があると思います。」
「もうすぐ夏休みだし…、私の兄は一人暮らしをしてるし。じちゃクエを持って遊びにおいでってしきりに言ってくるんだけど…どうする？」

…あのお兄さんとまた話すことができる。
今度は最新作を片手に。
これは俺にとってもとても嬉しいお誘いだった。
“師匠のお兄さん”という点が唯一気になるところではあったが、この際、それは関係ない。
俺に断る理由など、何もなかった。

「ぜひ！ぜひ行きたいで」

「…！ちょっと隠れて！！！」
言い終わらないうちに。
俺は原野さんによって後ろに突き飛ばされた。
奥まったスペースに後ろ向きによろける。
原野さんはこちらに向いていた身体を１８０度回転させて俺に背を向けると、足早に歩いてこのスペースから完全に外に出た。

どうしたんだ、誰か来たのか…？
俺は体制を立て直すと、入口付近の陰に身を隠し、外を伺った。
ちょうど2か月前に原野さんをはじめて見たときと同じような感じである。
すると、程無くして。

「ユ・ウ・ヒ・サァァーーン！！」

独特になまった感じの日本語が俺の耳に飛び込んでくるのと同時に、師匠の前に躍り出てくる姿。

それは、金髪で蒼い瞳をした、一言で形容するならば、“王子さま”のような男子。

彼はあたりに薔薇の花でも飛ばしかねない勢いでフェロモンのようピンク色の空気をばらまきながら、非の打ちどころのない笑顔を原野さんに惜しげなく向けていた。

「ユウヒサーン、逢イタカッタノデースヨ！」

そう言って、彼は白い歯を太陽光に輝かせて、さらに微笑む。

原野さんはその“圧倒的美男子攻撃”にあてられてもひるむことなく、むしろ少しうんざりしたような様子で、こう言った。

「……どうも、シュナイダー先輩。」

なるほど、君の言っていたことは間違いじゃなかったようだ、矢吹よ。

この人は間違いなく、“フランソワ”だ。

3．"A title of 7"　－b5『暴露』

－b5『暴露』

フランソワ…基、シュナイダー・H・明星先輩。
鷹尾高校二年生。
ドイツ人とのハーフ。
（おそらく）1カ月で11人斬りの達成者。
これが、俺が矢吹から聞いていた事前情報だ。
だが、俺は今、これまでの自分がいかに周りに対しての無関心であったかを改めて痛感していた。
学年は違うとはいえ、どうして。
どうして、こんなキャラの濃いヒトを知らなかったんだ、俺。

「ユウヒサン！ココ何日カ連絡モ取レナイシ、ドウシテイルノカト思ッタデスヨ！」
かなり片言のイントネーションで日本語を話すフランソワ先輩。
この間も王子様オーラは全開。
この短いセリフの間だけでも、身振り手振りのオーバーリアクションである。
外国人ならでは、…なのだろうか。

「あ……はあ。」
それに比べて若干テンション引き気味の原野さん。
ここでこのオーラにあてられないのは流石師匠とでも言うべきである。

…というか原野さん、フランソワ先輩と知り合いだったのか?!

「モウスグ夏休ミダカラ、今日ハユウヒサンヲｄｉｎｎｅｒニオサソイニ来マシタ！」

…ｄｉｎｎｅｒの発音がやたらと良かった。

いや、それは良いんだけど。

…師匠、ｄｉｎｎｅｒに誘われるなんて、ただならぬ関係じゃないですか！

凄いですよ師匠！

俺は心の中で感服する。

だが、肝心の原野さんは全く反応を示さない。

ただ黙ってフランソワ先輩をまじまじと見ている。

“見つめている”とか、そんな乙女チックな要素が入りようのない視線のやり方であった。

しかしフランソワ先輩はそんなことは気にしない。

「Ｍｅｉｎ　Ｖａｔｅｒノ会社ノＤａｓ　Ｒｅｓｔｕｒａｎｔカラ見エル夜ノＤｉｅ　Ｌａｎｄｓｃｈａｆｔはｓｅｈｒ　ｇｕｔナノデス！ゼヒイッショにニマイリマショウ！」

…何を言っているのか全くわからなかった。

先輩、今度はドイツ語をふんだんに混ぜてきたらしい。

「…えー、あの。」

ここで、原野さんがようやく口を開いた。

今まで一人でテンション高く話し続けていたフランソワ先輩は、「

Ｊａ！」と声を出すと、話すのを止めた。
蒼いパッチリした目で、期待感を一身に投げかけながら、原野さんを見つめる。

「あの…ずっと気になってたことがあるんです。聞いていいですか？」
「Ａｈ，ｓｏ！！　ユウヒサンの質問ナラナンデモ答エマスヨ！」
そう言ってまた白い歯を輝かせて微笑むフランソワ先輩。
薔薇オーラも増強。
うっ、これは眩しい。

しかし、やはりそれはうちの師匠にはなんの効果も表わさないようで。
そのまま、対象を観察し何かを検討するような感情のこもらない視線を向けて、言った。
「先輩って、ドイツ人とのハーフですよね？」
「Ｊａ！！　ソノトオリサ！」
「じゃあどうして瞳が蒼いんですか？」
「……ｏｈ？？」

「瞳の色を決める遺伝子の優劣って、確か黒色が優勢で、その他…つまり蒼色とか鳶色って、劣勢なんです。この条件で日本人とドイツ人のハーフを考えたとき、日本人の瞳の色はほぼ１００％黒か茶色です。ドイツ人の片親が蒼色の瞳を持っていたとして遺伝子的に考察すると、日本人の親が持っている黒色瞳の遺伝子をＡＡ、ドイツ人の親が持っている蒼色眼遺伝子をａａと置くことができます。ということはつまり、ハーフの子供がもらうことになるのは日本人の親のＡの遺伝子とドイツ人の親からもらうａの遺伝子。子供の瞳の色の遺伝子は必ずＡａとなって、優勢形質の黒色が表現型として

表れるはずなんです。」

ペラペラと。
非常に流暢に、噛むこともなく。
師匠はこの説明を一息で言い切った。
フランソワ先輩はポカンとしている。
…もちろん俺も、ポカンとしている。

原野さんはそう言ってゆるりと微笑み。
「…と、本で読みました。」
と言った。
そして続ける。
「だから、シュナイダー先輩の瞳が蒼色なのって、遺伝学的におかしいなって、ずっと考えてたんです。」

……沈黙。
沈黙が続いた。
フランソワ先輩は、固まったまま動かない。
原野さんも、にこやかな表情のまま動かない。
俺は、この状況が恐ろしくて動けない。

うちの師匠、今、触れてはいけないことに触れた。
絶対そうだ。
俺はそう直感していた。

すべてはフランソワ先輩の強張った顔から察することができた。
先輩はもうすっかり硬直。
王子様感も薔薇オーラも消し飛んでしまっていて、太陽光に晒されたままの白い歯だけが虚しく輝いている。

「おおふ…瞳の色はカラコンでハーフっぽさを醸し出すための演出だなんて言えない…。」
フランソワ先輩が、何かぼそっと早口に呟いた。
…え、なんだか絶対聞こえちゃ駄目なことが聞こえた気がしたんですが……。
それに、何故か今、日本語がかなり流暢になったような気がしたのだが…気のせいかも知れない。
いや、気のせいのはずだ。
キャラづくりを保つのを忘れた、とかではないだろう。うん。

「シカァーシ!!　ソノ聡明サ!!　ユウヒサン、私ハマスマス貴女ヲ気ニイッタノデス!!　Ｇｅｆａｌｌｅｎ!!　諦メマセーーン!!」
そう言って、また例の大きなジェスチャーや王子様感、薔薇オーラを見事復活させるフランソワ先輩。
白い歯も今度はちゃんと自身に満ち溢れた輝きを見せる。

だが。
原野さんはもう一度ゆるりと微笑むと。
「あ、そうそう。先輩のお父さんの会社の夜景が素晴らしいレストランでのディナーの御誘いの件は、丁重にお断りさせていただきます。」

と。

とびっきり魅力的なあの笑顔で、言い放ったのだった。

原野さん、生物だけじゃなくドイツ語も嗜んでいたようである。

3．"Ａ　ｔｉｔｌｅ　ｏｆ　７"　－ｃ１　『徒歩』

－ｃ１『徒歩』

刺すような痛い日差しが肌に突き刺さるお昼前。
もうすぐ7月も終わろうとしている。
終業式が済み、夏休みに突入してから早一週間が経過していた。
どこからか蝉がやかましく騒ぎ立て、うだるような暑さで頭がぼんやりする。
夏休みに入ってからほとんど家に引きこもっていた俺は早くも夏バテ気味。
倦怠感と疲労を押しながら、また一歩、重い歩みを進めていた。

一方遥か前方には、愛用の自転車に乗る原野さん。
のんびりとペダルをこいでいる。
何せ彼女、さっきから俺を置いて先先行ってしまうのだ。
この暑さの中、普通は電車で3駅の距離を歩けというのだから、師匠は相変わらずのスパルタだった。

師匠のお兄さん、原野陽翔（ハラノハルト）さん。
俺たちは、彼のアパートへ行くためにこうして歩いていた。
お兄さんは鷹尾高校から比較的近くに立地している私立大学に通っているそうで、現在2回生。
大学の近所に一人暮らしをしているそうだ。

俺は汗を拭い、持参のキャップを深くかぶりなおした。
暑い。
体中の水分が奪われていくようだ。

「よし。じゃあ今から修行ね。体力づくりの一環！」
そう言って師匠が、電車に乗るつもり満々だった俺を制した時、俺は正直血の気が引いた。
この炎天下、まさか、徒歩など…！
原野さんが自転車に乗っていたので二人乗りに期待をかけてみたが、うちの師匠が交通ルール違反などするはずはなかった。

というわけで今現在。
駅から高校へ行くための坂道をさらに上った延長線上を、俺は歩き、原野さんは自転車で、進んでいるのである。

「ちょっと、遅い。ダッシュって言ったじゃない！」
原野さんの声。
Uターンして帰ってきたようだ。
俺の歩く横に自転車を並列させて、並んでゆっくり走行する。
俺はぼーっとしながら応じた。

「いや……すみません。けど、これ以上早くは、…ちょっと…。」
「……。…まあ、確かにこの暑さはね…仕方ないか。」
師匠も暑いのか、手で額をぬぐう。
そらそうだ、この日差しの中、平気でいられる人がいるわけがない。

「ところでなんだけど、セ…いや、マコト。」
……今、絶対言い直したな、師匠。
いや、だけど、ちゃんと名前を覚えてくれたという点では進歩かも知れない。
俺は、そこには口には出さず、相槌を打つ。

「はい、なんですか。」
「あのカップケーキ貰ってから、例の彼女とはどうなの？上手く話せてるの？」
「あ！？……え、あ、まあ…。」
唐突に谷口さんの話が振られたので、俺は思わず言葉につかえた。
…これをどうにかしないといけないのに、全く俺は。
昔よりはましになったが、まだまだ全然である。

俺は気持ちを落ち着けながら続ける。
「…ま、まあそれなりには、話せてます…。」
「夏休みだったけど、会う機会あった？」
「…はい、まあ一応は。家が向かいなので…。」
「よかったじゃない？成長ね。」
師匠が俺の顔を見てにやにやと笑う。
「全く話せなかった時のことを思うと……。ぐっと最終目標に近づいたわね。」
「さ…サイシュウモクヒョウって」
「告白。分かってるでしょう？」
原野さんがよりにこやかに俺に笑いかける。
それが何故だか怖い俺。
やめて、そこに触れないでください師匠……。

だが師匠はやめない。
俺の内心は通じない。
「やっぱり修行方法は間違ってなかったのね…。貴方の問題点は会話力不足とあがり症。ここが何とかなればもっと最終目標に近づくわ！」
「いや…ですけど……」

「分かってるとは思うけど」
師匠が俺にぐいっと顔を近づける。
俺は思わず身を引いた。
びしびしと感じる、圧迫感。
「到達点をあやふやにすると、絶対失敗するの。そこだけは失念しないように。」
「は……はい……」
俺はぐっと唾を飲むと、何とか返事をした。
言いかけたことがあったはずなのに、それもどこかに飛んでしまったのだった。

しばらく歩みを進め、２つほど駅を通りこし、俺たちは学校から３つ向こうにある駅「長山」に到着した。
この駅から山の方へいくらか歩くと、原野さんのお兄さんの通っているという大学がある。
だが原野さんはそちらとは反対方向に進み、駅をさらに突っ切り裏手の道に入る。

ここで俺は疑問を口にした。
「…大学の目の前、とかに住んでるんじゃないんですね。」
「そうなのよ。うちの兄は一人暮らしの理由がちょっと他とは違うみたいだから。」
「え…、それ、どういうことですか？」
「あたしもよく知らないんだけどね。教えてもらえなかったから。」
原野さんはそう言って渋い顔をする。

一般に、一人暮らしは家から学校が遠い人がするというイメージがある。
だが原野さんの自宅からここまで、電車で1時間もかからない距離なのだ。
確かに疑問ではあったが、原野さんが知らない以上、俺に分けを知る手だてはなかった。
まさか出会って数回しか話したことがないお兄さんに直接聞くことができる度胸はまだない。

駅の裏手を少し行くと、小さなアパートのような敷地が現れた。
周りの学生マンションに比べて広めで、小綺麗な印象を与える3階建ての建物だ。
ちょっとした庭もあり、そこに花や木が綺麗に植えられている。
原野さんは敷地の玄関口にある扉を開いて、そこに入っていく。
「…いいところですね。」
「家賃の半分を自分で出してるみたいだから、いいところに住めるんだと思うわ。部屋もなかなか広いのよ。」
原野さんはそう言いながら階段を昇る。

俺もそれに従った。
階段もきちんとしたコンクリート造りになっており、比較的新しく綺麗だ。
学生が住むマンションと言うと、ボロくて階段がギシギシいうだとか、お化けが出そうだとか、そう言った印象があったのだが、ここはそのイメージとはあまりにかけ離れていた。

二階の廊下に出て奥から2つ目の部屋の前で立ち止まると、彼女は。
「お疲れ様です。ここがうちの兄の部屋です。」
そう俺に言うと、チャイムを押した。

「はーい、はいはいはい！！」
チャイムが鳴り終わらないうちに、ドアがガチャっと勢いよく開いて、そこから。
あの時のお兄さん、つまり師匠の兄、原野陽翔（ハラノハルト）さんが現れた。

そして俺を見て、例のゆるりとした微笑みをこちらに向ける。
「よく来たね！セイくん！」
「いや…まことです。」

……なるほど、流石兄妹としか言いようがなかった。

3．"A title of 7" ―c2『訪問』

―c2『訪問』

「いやー、もうずっと待ってたんだよー。」
お兄さんは俺の手を握りぶんぶん振る。
笑顔がシャイニングである。
今日もあの時と変わらず端正な顔立ちで、こう、並べて見てみるとやはり原野さんとそっくりだった。
なんて美男美女兄妹なのだろうか。
だがお兄さん、よく見るとエプロン姿だ。
しかもひよこの。

「ユウヒちゃんったら、もっと早く連れてきてくれたら良かったのに！」
「兄が大学のテストだろうと思って。」
原野さんはそう言いながらもう玄関で靴を脱いでいる。
…あれ、原野さん、お兄さん本人にも“兄”って呼ぶの？
“おにいちゃん”とかじゃなくて？

お兄さんは俺にも中に入るように促すと、自分も中に入り扉を閉める。
「大学のテストなんてちょちょいと何とかなるんだから気にしなくても良かったのに！」
「そうもいかないでしょ……あれ兄―、なに作ってるの？」

原野さんはさっさと中に入り、台所にいったようだ。
俺は靴を脱ぎ始めた。
お兄さんが俺を後ろから追い越して原野さんの入ったところに入っていく。
「冷麺作ってるんだよー。だからユウヒちゃん、アイス食べるのは止めときなさい。」
「えー」
師匠の文句が聞こえてきた。
俺はこんな彼女は見たことがなかったので、少なからず驚いた。
原野さんが怒られている…。
最近お兄さん関連で師匠の意外な一面を沢山見ているような気がした。

「あ、セ……マコト、兄が奥の部屋で待ってって。」
俺が玄関から中に入ると、原野さんが台所から出てきた。
言い間違えそうになったところは突っ込まないことにしよう。
台所の方を見ると、お兄さんがルンルンした様子でお皿を出していた。
俺は原野さんに連れられ、奥の部屋に入る。

部屋はとても明るく、学生の住むアパートとは思えないほど広かった。
地面はマットレスになっておりふかふかで、扉から入って正面の壁には大きな窓がある。
部屋の中央には大きなテーブルと座布団がしっかり三枚。
隅にはテレビ、左手の壁には本棚３つと金属のラック、回転式の服かけや観葉植物なども配置されている。

さっきの台所はリビングと対面式になっていて、こちらから楽しそうに料理の支度をするお兄さんの姿が見えた。
また右側の壁にはさらに引き戸があり、ここにも一部屋あるようだ。
…これはちょっとしたマンションほどの広さである。

「……原野さんの家って、もしかしてお金持ちですか？」
「いやいや。一般家庭。」
原野さんは早々に座布団に座ると、唖然としている俺を手招きする。
俺は気を取り直して座ることにした。
テーブルにはもうコップやお箸が準備されている。
俺は原野さんの後方を回り、扉を正面に見る位置に座った。
俺の左手に原野さん。
机の傍には食卓の準備のためにのけたのか、ガラス製の灰皿やノートパソコン、紙や本、ゲーム機などが積んであった。

「兄は去年の今ぐらいからここに住んでたんだけど、一時期ルームシェアしてたのよ。だから広めの部屋みたい。」
原野さんがお茶を飲みながら解説を入れた。
俺は納得する。
なるほど、そう考えたら丁度いいくらいの広さだった。
「これは、かなり一人暮らしを満喫できそうですよね…。」
「うん、だからあたしもちょくちょく遊びに来てるの。兄も部屋に人を呼ぶのが好きみたいだわ。」

「なになにユウヒちゃん、なんの話―？」
前方から声がした。
顔を上げると、そこには冷麺の皿を器用に三つ持ってこちらにやっ

てくるお兄さんの姿があった。
彼はテーブルにそれを置くと、俺の右手に腰を下ろす。
「特製冷麺だよ！遠慮せずに食べてね！」
「はーい。いただきまーす。」
原野さんがパンと手を合わせて、早速冷麺に取り掛かった。
俺も手を合わせて「いただきます」と言ってから、冷麺をいただくことにする。
冷麺にはキュウリや卵焼き、トマト、カニカマなどが彩よくトッピングされている。

一口ほおばってみると。
「…うわあ、凄く美味しいです！」
思わず感嘆の声が漏れた。
横でうんうんと原野さんもうなずいている。
お兄さんはにこにことした表情をさらに緩める。
「よかったよー！まあ冷麺は簡単だから、誰でも美味しく作られるんだけどね。」
そう言って嬉しそうに、お兄さんも冷麺を食べ始めた。

冷房の心地よい風、程よく射す陽の光、おいしい夏のメニュー。
これが“楽しい夏休み”かと、俺はふと思った。

3．"A title of 7" ―c3『呼称』

―c3『呼称』

「ところでセイくん！」
しばらく食事を楽しんでいると、お兄さんに声をかけられた。
俺はトマトを口に入れたところだったので、一瞬もごもごとなる。

「ふぁ…まことです。」
「自己紹介がまだだったね！まあユウヒちゃんに聞いているかも知れないんだけど。」
「あ…はい、一応聞いてはいます。原野陽翔さん…、ですよね。」
「そう！僕は原野陽翔といいます。陽に翔ると書いて、陽翔。」
お兄さんがにっこりと笑う。
俺もつられて笑う。
師匠は真剣に冷麺を食べている。

「僕のことは是非、“ハルトさん”と呼んでね、セイくん！」
「あ…はい、わかりました、陽翔さん。」
「そうそう！」
陽翔さんは嬉しそうである。

「兄は下の名前で呼んでもらうのが好きよね。」
横から、今まで冷麺を黙々と食べていた原野さんも口をはさんできた。
「そりゃあそうじゃないか！名字呼びなんて他人行儀だと思わない

かい？」
「んー。」
原野さんはちょっと考えた様子を見せる。
「あたしはあんまり名前で呼ばれないからなぁ。みんな苗字で呼ぶ。」
「ええ！？誰もユウヒちゃんを名前で呼ばないの？！」
かなり驚く陽翔さん。
その様子に流石に原野さんも驚いたようで、
「い…いや、全員ってわけじゃないけど。けど、あたしはどうも“原野さん”って雰囲気みたいね。」
と付け加えた。

だが陽翔さんはその事実に納得いかなかったらしい。
「ねえ、セイくん。なんでユウヒちゃんは名前で呼んでもらえないんだろう。」
なぜか俺に話を振ってきた。
「…え？あ…なんででしょう。」
「せっかくいい名前なのに…そんなの寂しすぎると思わないかい？」
「あ…はい。」
「漢字の読み方が難しいからかな？まあ僕もユウヒちゃんも漢字に弱いから、クラスメイトにこんな感じの名前の読みの人がいたら絶対正しく読めないと思うんだけどね。」

なるほど、この兄妹、漢字に弱かったのか。
俺は痛く納得した。
普通なら“誠”という漢字一文字で“セイ”とは読むまい。
「…分かります。」
「そうなんだよー。僕的には、もっとユウヒちゃんが自分の名前をアピールしていった方がいいと思うんだよね。」

「なんでアピールしなくちゃいけないのよ。」
師匠が苦い顔をして口をはさむ。
「あたしは別にいいのよ?そんなに呼称にはこだわってないから。」
「またユウヒちゃんはそんなこと言うでしょー。」
陽翔さんは不満げである。
「呼び方って親しみの現れじゃないか。もっと大切にしないといけないよ、ユウヒちゃんは。」
「…そんなものかな。」

「そうだよ!僕はそう思ってる。ところでセイくん。」
「は…あ、いや、まこと…なんですけど」
「セイくんは周りの友達になんて呼ばれてる?名前呼び?あだ名?名字?」
「え…」

俺は考えを巡らせた。
そう言えば、呼称など意識したことがなかったのだ。
今までの友達、矢吹、師匠、…谷口さん。
俺は何と呼ばれている…?

「…ほとんどみんな、名前呼びですね。」
「へえ、なるほど。」
陽翔さんは頷くと俺にまた、シャイニングな笑顔を向けた。
「セイくんは皆に好かれてるんだねえ。」
「…え!?」
「さっきも言ったけど、呼称は親しみの表れだからね。名前で呼ばれるってことは、好かれている証拠だよ。」

俺は今までそんなことを考えたことがなかった。
俺は…好かれているのか？
矢吹から、…谷口さんから。
あ、そういえば、師匠も最近は名前で呼んでくれるな…。
そう思うと、耳に体温が集まっていくのを感じた。
なんだか嬉しくて、恥ずかしいような気持だった。
谷口さんや師匠には絶対に出来ないが、今度会ったとき、矢吹は名前で呼んでやるくらいはしようかな、とちょっと思った。

「…そうなんでしょうか」
「絶対そうだよ！自信持ちなよ、セイくん！」
「…はい。」

「そういや、セイくんはユウヒちゃんのことをなんて呼んでるの？」
「え？」
「仲良しなんでしょ？」
「あ…いや…俺も“原野さん”、です。」
俺のその答えに、陽翔さんは。切れ長の目をこちらがびっくりするほど丸く見開いた。
「なんでセイくんまでっ！！」
悲しそうである。

だが。
陽翔さんはすぐ名案でも思いついたのか、また微笑みを浮かべてこう言った。

「よし分かった、なら、今日からセイくんも“ユウヒちゃん”って呼んだらいいよ！」

俺は思わず口にした麦茶を吹いた。

3．"Ａｔｔｉｔｌｅ　ｏｆ　７"　－ｃ４『食後』

－ｃ４『食後』

「じちゃクエ7のすれ違い通信、もうやったかい？セイくん。」
「いや、まだですね。」
「あれは是非やったほうがいいよ！知らないプレイヤーと交流できるのが良い！！」
「なるほど。」
「まあだからと言って、ユーザーネームを見られるだけなんだけどね…相手のフィールドに助けに行けたりしたら面白いだろうに。」
「ですね、面白そうです！」
「主人公のグラフィックを自分でカスタマイズできるのもいいよね！物語の幅が広がる！」
「あれは俺もいいアイディアだと思います。」
「自分に似せるのもいいし、好きなキャラクターを作ってもいい。あれは名案だ。…ところで、ユーザーネームは何にしてるんだい？」

「俺は普通にマコトです。」
「“セイ”にすればいいのに。」
「いや…遠慮します。陽翔さんは何ですか？」
「僕はイカロス。」
「…神話のですか？」
「ああ。太陽に向かって翔け続けて、？の羽が溶けてしまったイカロス。僕の名前にちなんでいるだろう？」
「なるほど。いいですね、そういうユーザーネーム。」

ご飯を食べ終わって、それから俺たちは、そのまま部屋でくつろいでいた。
じちゃクエトークで盛り上がり始めてもう二時間はたっている。
原野さんはさっきから、机の傍らに置いてあった陽翔さんのものと思われる教科書を読みながらアイスを食べていた。

「ところでセイくん、気になってたんだけど。」
「……はい、なんでしょう。」
「君とユウヒちゃんって、どういう関係？」
「……はい？」
唐突な質問に俺は素っ頓狂な声を出した。
「ど…どういう関係って」
「いやあ、ユウヒちゃんが男の子と仲良くしてるのって珍しいからねえ。」
陽翔さんはにこやかである。

それとは裏腹に、俺は適切な言葉を見つけ出せない。
どう表現したらよいのだろうか。
目が泳ぐ。
「え……えーー、あのですね、まあちょっと助け助けられというか、お世話してもらっているというか」

「ちょっと助けてもらったお礼にね、性格の難を矯正するのを手伝ってるのよ。」
原野さんが助け船を出してくれた。
「ほら…5月に、財布落としかけたって話、したじゃない。」
「ああ！あの時一緒に探してくれたのがセイくんだったのか！」

陽翔さんが目をキラキラさせて驚きの声を上げる。
原野さんはまた教科書に目を落しながらそれに応じる。
「そうそう。今、あの時のお礼してるのよ。」

「そうか…君だったのか、セイくん！」
陽翔さんが俺の手をがしっと握ってくる。
「あ……え！？」
「あの時、実は僕がユウヒちゃんにお遣いを頼んでたんだよ。ほら、君なら知っていると思うんだけど、五月にタッチパネル付き2画面ゲーム機の最新モデルが発売されただろう？」
「あ……はい。」
俺は思い出す。
そういや原野さんと偶然会ったあの帰り道、矢吹とその話題で盛り上がったっけ。

「あの日ね、僕が大学の講義でどうしても受け取りに行けなかったから、ユウヒちゃんにお金を預けてＡＬに取りに行ってもらったんだよ。ＡＬの店主さんが発売前日に特別に取引してくれてね。」
…なるほど、そういうことだったのか。
あの時、どうして原野さんがあんな大金を学校に持ってきていたのか疑問に思ったのだ。
そういう理由なら、２万円という額だったのにも納得だった。

「そうかそうか～、あの時の親切な人が君だったんだね！セイくん！」
「…親切なんて…とんでもないです。」
「なに言っているんだい！」
陽翔さんは握ったままの手をぶんぶん振る。
「まったくの他人の持ち物を一生懸命探してくれる人なんてなかな

か居るものじゃないよ！」
俺はぐっとのどが詰まりそうになった。
これもデジャヴだった。
確か、あのファーストフード店で原野さんにも同じようなことを言われたのだ。
この兄妹、見た目も中身も本当に似ている。
「あ…ありがとうございます…」
だが、ここでちゃんとお礼を言えるようになったのは、2か月前に比べて進歩かもしれない。

またしてもゆるりと笑うと。不意に立ち上がる陽翔さん。
俺の手が解放される。
…ちょっとほっとした。
触られていると落ち着かないのだ…どうやら俺、ボディータッチが苦手なようだった。

「いい時間だし、なにかお茶でも入れるよー。セイくん、紅茶は大丈夫かい？」
「はい、好きです。ありがとうございます。」
そう言ってキッチンへ歩いて行く陽翔さんの後ろで、原野さんがまた、ぴりっとスティックアイスの袋を開けた。
…何本食べるのだろうか。
教科書を閉じ、もとあった場所にきちんとそれを積んで、机にたまったアイスのごみをゴミ箱に捨てて机を整頓する。
それがひと段落つくと、ふう、と息を吐いてこう言った。

「じゃあ、そろそろ修行でも始めようと思います。」
「え」

……ここで修行するのか?!
「なになに、修行って!なんだか楽しげじゃないか!」
キッチンから興味津々に聞いてくる陽翔さん。
「兄もやる?マコトのメンタルを強くするための練習なんだけど。」
「あ…あの、原野さん」
「なに?」
「なにも、ここでやらなくても…」
「なに言ってるの。ここだからこそできることがあるんじゃない。」
原野さんはシレっと返してくる。
「いやあ、それは僕もぜひ参加したいなあ!やろうじゃないか!」
ノリノリの陽翔さん。

この後、“陽翔さんと一緒にじちゃクエ”しようとか、思ってたのにな…。
俺の計画は、どうやらもろくも崩れ去ってしまったようである。

3．"A title of 7" ―c5『宣言』

―c5『宣言』

「えー…、では、修行を開始します。」
紅茶とクッキーがテーブルに並んだ、午後三時ごろ。
なんだか畏まって、師匠が開始宣言をした。
胡坐をかいて座っている原野さんの向かいで、俺と陽翔さんはなぜか正座である。
但し、陽翔さんは楽しくて仕方ないのか、はた目から見ても分かるくらいルンルンしていた。

「えっと、ここにトランプがあります。」
原野さんが自分の膝の上に置いていたトランプを持ち上げた。
「さっき兄の部屋で発見しました……丁度いいので、ばば抜きでもしようかと思います。」
「わーー」
陽翔さんが歓声を上げる。
「え……ばば抜き、ですか？」
俺は思わず尋ねた。
意図が読めない。

「……言っておくけど、ばば抜きを只のカードゲームだと思ったら大間違いよ。」
「え」
原野さんの目がマジである。

「…ばば抜きは心理戦。いかにさりげなく、且、巧妙に相手にばばを押し付けるか、これに全てがかかっているのよ。今回は修行ということもあるから、精神的負荷をもう半端なくかけますのでそのつもりで。くれぐれも油断しないように、相手の動向をよく観察して対策をとってこちらからも仕掛ける！！」
「は…はい。」
…ばば抜きってそんな過酷なゲームだったっけ。

「はいはいユウヒちゃん！」
思わず自分の知っているばば抜きのルールを思い返して確認した俺の隣で、陽翔さんが手を上げる。
「なんですか、兄。」
「負けたら罰ゲームとかにしない？その方が盛り上がるでしょ？」
「あ、いいね。それ採用。じゃあ、負けたら腹筋１００回ね。」
「ひゃ…１００回？！」
なんだか多いような気がするんですが、それ！！

「そのくらい多い方がみんな真剣になるでしょう？」
にっこり笑う師匠。
「そんなこと言っちゃって、ユウヒちゃんはいっつもゲームには真剣で本気じゃない～。」
ずっとにこにこしている陽翔さん。
「私はその姿勢を兄から受け継ぎましたが。」
原野さんが陽翔さんを一瞥しながらカードをシャッフルし始めた。

「兄はいつも本気でくるし。容赦ないし。コテンパンにされるし。そりゃこっちも本気になるわよ。」
「それはユウヒちゃんのプレイの仕方が真面目だからだよー。もっと裏の裏をかかないとね！」

「そうしても兄はまたその裏をかいてくるから結局結果は一緒なの！」
「そんなこと言っちゃって！」

原野さんのとげとげ攻撃にもまるで動じずに、陽翔さんはさらっと笑って見せた。
なるほど、師匠のあの性格はこの兄在りきだったのか。
「…とりあえず、本気ね。分かった？マコト。」
原野さんがカードをこっちによこしながらそう言った。
「……あ、はい。」

そんな、この流れで“嫌です！”なんて俺はとても言えない。

3．"A title of 7" ―c6『決戦』

―c6『決戦』

時しばらくして。
かち、かち、かち、と時計の針が動く音。
コオオ・・・とクーラーの風の音。
それ以外に音は聞こえない。
そんな中、俺と原野さんは向かい合って硬直状態を続けていた。

いざババ抜きが始まると。
・・・陽翔さんが早々に一人であがってしまった。
本当に序盤だった。
カードは俺が陽翔さんから引き、陽翔さんが原野さんから引き、原野さんが俺から引く、という順番だったのだが、いきなりはじめの一回目で、俺は見事に陽翔さんからババを引いてしまったのだ。
もともと手札が少なかった陽翔さんはそこからみるみるうちに手札をそろえてしまい、４週した時にはもう、陽翔さんは１抜けを果たしていたのだった。

俺も原野さんも、決して油断したわけではない。
この暑い中腹筋なんて絶対ごめんである。
だがしかし、彼のプレイにはこちらを震撼させるものがあった。
原野さんがさっき言っていたことが身を持って実感できた。
華麗な指さばきによって相手に自分の引かせたい札を引かせ、相手

の心理を読み自分の欲しい札を引き取る。
そのようなことが実際に出来るのかは何とも言えないところだが、陽翔さんの強さを見ていると、その手の技術を習得しているとしか思えないのだった。

加えて彼は、微笑みという名のポーカーフェイスの仮面を持っている。
そんな相手に対して心理戦を挑むこと自体、無謀だったのかもしれない。

そんなわけでババを見事に押し付けられてしまった俺はもう必死である。
何とか師匠にババを引かせるべく、ババを角っこに持って行ったり、さりげなくババを原野さんの良くとる所に持って行ったり、様々な作戦を試みた。
だが、それで簡単にババを引いてくれるほど師匠はババ抜きが弱いわけではなかったようである。
それらのフェイントを見事にかわし、次々に手札をそろえて捨てていく。
だが俺も負けてはいなかった。
ババがあるなりにも手札の数を減らし、そして。

残り手札は俺が2枚、師匠が1枚。次は原野さんが引くターン。
もしここで俺の持つスペードの6を原野さんが引き当てたら、そこで俺の負けが確定する。

この決定的な場面で、俺たちは硬直状態を保ったまま向き合って座っているのである。
原野さんがこっちを凝視している。
これはきっと眼力で俺を怯ませる作戦だ。
流石師匠、俺の弱点をよく理解している。
原野さんの読み通り、俺はたじたじに怯む…そう、いつもなら、そうだ。だが、俺だって最近の修行でそれなりには得たものがあるのである。

俺はふうっと息を吐くと、目をつぶった。
もう、小細工じみた作戦は止めだ。

俺は手に持っていた二枚のトランプを地面に平行に並べて置いた。
師匠の目がちょっと見開かれる。
俺は沈黙を破るように、言った。

「どうぞ、選んでくだしあ」

……大事なところで噛んでしまった。
横で陽翔さんが笑いを押し殺している。
…こ…ここで負けてはいけない。

「どうぞ！好きな方を！選んでください！！」

原野さんもちょっと吹き出しそうな顔をしていたが、直ぐに真顔

に戻って、トランプを見定める。
「……よし、これだ！！！」
原野さんが右の一枚を勢いよく引いた。
そう、それは。

「よっし！！！！」
俺の喜びの声とともに、カードの中身を見た原野さんが地面にべたっと倒れ込んだ。
彼女はジョーカーを引いたのだった。

「ファインプレーだ、セイくん！」
陽翔さんの歓声。
「カードを地面に置くことでユウヒちゃんの目線押しをクリアにしたんだね！」

そう、俺は地面にその二枚をただ機械的に横に並べていた。
そこに感情の入る余地はない。
手で持っていると、どうしても震えたりして自分の感情が出てしまう。
俺が押しに弱いことは最近の修行でよく理解していた。
だから、敢えて。
俺は感情の入らない方法を選択したのだった。

「やるわね、マコト。」
原野さんが苦い表情をしながら腕を後ろにやってカードを繰っている。

「だけど…ここであたしが簡単に負けると思ったら大間違いよ！」
そう言って師匠は俺の前にカードを付き出した。
それは。

「なっ……！」

それは一般的な扇のように広げる持ち方、だった。
…片方のカードが極端に飛び出していること以外は。

これは、…どういうことだ。とってほしいカード、つまりジョーカーを強調しているのか、それとも、俺がそう考えることを見越して、もう一方にジョーカーを仕込んでいるのか…？
うろたえる俺を見て、原野さんがにやりと笑う。
陽翔さんが「おお！」と小さく漏らす。
俺は軽く下唇を舐めて、また眼をつぶった。

落ち着け。
ここはよく考えるんだ。
きっとなにか、原野さんの心境を読む鍵があるはず…。

俺は思い返す。
記憶を巻き戻す。
何か、何かヒントは…？

そこで。

ピンと。

思い当った。

これだ、きっとそうに違いない。

俺は、カードを引いた。

3．"A title of 7"　－c7『提起』

－c7『提起』

「……。」

「大丈夫ですか、原野さん。」

「……くそう、兄の提案になんて乗らなきゃ良かった…。」

「仕方ないです。罰ゲームの内容を設定したのは原野さんですから。」

「だからって！！そんな、自分が3連敗するなんて思わないじゃない！！！」

夏の長い日が傾いて、オレンジ色の光を投げかけている。

俺たちは陽翔さんの家を後にして帰路についていた。

痛い陽射しはもう引いて、あたりにはベールのような湿気に包まれた暑い空気が漂っている。

原野さんは俺の横に並んで、自転車を押しながら歩いていた。

あの試合で俺が引いたのは、ハートの6だった。

俺の読みが当たったのである。

そして。

俺が上がった後、最初に動いたのは陽翔さんだった。

「ユウヒちゃん！腹筋だよ！」

そう言うなり原野さんに罰ゲーム遂行を命じたのである。
「…えー」
原野さんは抵抗を試みたようだったが、
「ほらー、ユウヒちゃんが言ったんでしょ？セイくん、足持って！」
陽翔さんには勝てなかった。
師匠は若干の抵抗虚しく、腹筋１００回の罰ゲームを実行することになったのである。
…そう、しかも三回も。

「けど」
原野さんが腰をさすりながら言う。
「よく分かったわね、私がジョーカーじゃない方のカードを飛び出させたこと。」
「ああ、あれですか。」
絶対の確信があったわけではなかった。
だが“原野さんは真実しか語らない”というちょっとした先入観が、俺の背中を押した。

「確か原野さん、カードを配る時に言ってましたよね、陽翔さんが『ユウヒちゃんのプレーは真面目、裏の裏をかけ』って言ったとき、『兄が裏の裏をかいてくるから結局結果は一緒』だって。」
「…うん、確かにそんなことは言ったけど。」
「てことは、原野さんは裏の裏の裏、つまり裏しかかかないのかな、と。」
「……ほ、ほう。」
「この場合、“裏”はジョーカーじゃないカードを飛び出させるってことですから。」
「…なんだか分かったようで分からない説明ね、それ。」

「…そうですか？」
「……まあそれが実際的中してるわけだし、今回は負けたってことか…。」
原野さんは首をふるふる振っている。
…意識的に俺を見ないようにしているようだった。
よほど悔しかったのかもしれない。

「…まあ、貴方のその推察力をこれからはもっと別の方面に生かしてもらわないとね…」
「え…あ、まあ…はい。」
「もう夏休みに入っちゃったし…例の彼女と、意識して会う機会を設けないと一ヶ月ちょっと疎遠になっちゃうわよ。」
「そ……そうですよね…」
「彼女の行きたい所とか推察できないの。」

……棘がある。
ジト目で見てくる。
…不機嫌だ。
これ以上刺激するといろいろ危険だと直観が察知したので、俺は
「…それができたらこんなに苦労はしていないと思います。」
と言って、誤魔化した。
「……確かにそうよねー…。」
原野さんは棘のある口調を少し緩める。
「何か誘いやすいイベントでも、あるといいんだけど……。」

そう言って、目線を遠くへ投げかける。
端正な横顔が夕日に照らされる。

原野さんの黒い髪に朱色が映り込み、さらにそれを艶やかに見せている。
正面をまっすぐ見ている瞳に斜めから光が入り込み、キラキラと光らせ…。

いきなり。
その切れ長の目が見開かれた。
俺ははっと我に返る。
原野さんが叫んだ。

「これだ！いいのを見つけた！」
少し離れたところの電柱に駆けていく原野さん。
慌ててそれを追う俺。
その電柱には、張り紙。

『鷹尾フェスティバル　８月某日開催！』

「夏祭りよ！これに誘えばいいじゃない！」
張り紙を指さして、彼女は言った。

師匠のこの発言により。
俺の“精神的平穏を謳歌する夏休み”のビジョンは、見事打ち砕かれた。

鳴呼、蝉が鳴いている。
カラスも鳴いているなあ。
などと思考回路が現実逃避を始めて。

この蒸し暑い中、俺は体中からすっと汗が引いて行くのを感じたのだった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…．

4."Odd August"　－a1『不解』

－a1『不解』

夏休みももう後半にさしかかり、お盆まで残り数日となった8月半ば。
空は曇っているため陽射しこそ緩やかだが、肌にじっとりとまとわりつく湿気と熱気にじわじわと体力が奪われていく。
暑い。
喉が渇いて倒れそうだ。
俺はもうへとへとになりながら、やっとのことで辿り着いた陽翔さんのアパートの敷地の玄関口にある扉を開けた。

7月の終わりに陽翔さんの家に遊びに行ってから、俺と師匠、原野唯陽さんの主な修行場所は陽翔さんのアパートに移された。
提案したのは陽翔さんだったのだが、これは俺にとってとても有難いことだった。
この猛暑の中、あの公園で活動し続けたら倒れてしまうこと確実であっただろう。

当初は公園で活動する気満々だったらしい原野さんも、陽翔さんのこの提案にはすんなり乗った。
流石の師匠でも暑さには勝てなかったようである。
だが、ここでもやはり“師匠節”は炸裂した。
そう、彼女の辞書に容赦という言葉はない。

容赦の“よ”の字もなければ、情けの“な”の字もないのである。
原野さんはこの殺人的な暑さの中、俺に学校の最寄り駅からアパートまで、徒歩で来ることを命じたのだ。

正直、もうどうしようかと思った。
だが、『これも修業の一環！』などという魔法の言葉を言われてしまうと、従わざるを得ないのだ。
俺は半分以上めげそうになりながらもこの罰ゲーム的な“修業”を続けていた。
そして今日も徒歩でここまで来たのである。

よく頑張ってるぞ、俺。
もうこの夏、何ｋｍ歩いたか…。
だんだんこの長い道のりもそこまで苦しくなくなってきた。
確かにこれは体力が付いているのかも知れない。
俺はそんなことを考えながらアパートのコンクリート造りの階段を登り、二階の廊下を進む。
奥から二つ目の部屋、そこを目指して歩く……。

その時。陽翔さんの部屋の扉が開いた。
「じゃあ、帰るわ……」
そこから出てきた男性が言った。
「はーい…」
追って、原野さんの声。

ぼさぼさの黒い短髪にTシャツとジーパンという、絶対に陽翔さんではないその人影に、俺は思わず身構えた。
だ…誰だ?!
男性が扉から上半身を出した状態で、こちらを向く。
目が合う。
彼は眩しそうに細めていた目をもっとしかめると、中を振り返って言った。
「おい、ハルト……誰か来てんぞ。」
「えー?」
中から声がすると同時にぱたぱたと足音がして、陽翔さんがひょこっと顔を出した。
「あ、セイくんじゃない!!遅かったね!!」
陽翔さんがシャイニングに笑いかけてくる。
俺は無意識に硬直していたらしく、ハッと我に返った。
「え、あ…はい、こんにちは…。」

「…それじゃあ。」
男性はそのやり取りの後、陽翔さんに右手を軽く振って、扉から出てくる。
「じゃあね、大輔くん!また来てね!」
陽翔さんがニコニコしながら手を振り返している。
すれ違いざまに俺に軽く会釈をして、彼は階段の方に消えて行った。

「あの……誰ですか?」
「彼は大輔くんだよ。……ところでセイくん!いいところに来てくれたね!!」
陽翔さんは俺の質問に不十分な解答しかしないまま、いきなり話題

を変えてきた。
俺はその切り替えの早さと高いハイテンションに、思わず飲まれる。

「えっ……はい…？」
「僕はね、今からまさに買い物に行こうと思ってたんだよ！いやあ、本当にいいところに来てくれた！」
陽翔さんは心なしか取って付けたようなテンションである。
だがそれを不審に思う隙さえ与えず。
「……それじゃ、後は頼んだよ、セイくん。」
俺の目をじっと見て、謎の視線を送ると。陽翔さんはそのまま俺の隣をするりとすり抜け、行ってしまった。
何故だか、逃げていくようにも見えた。

俺は状況が良く飲み込めないままである。
結局誰なんだ、あの男の人。
それに、頼むってなんだ？
だが、このままここに立っていても埒があかない。
俺は扉を開けて、部屋にお邪魔することにした。

詳しいことは原野さんに聞こう。

4. "Odd August" ―a2 『追加』

―a2『追加』

“詳しいこと”など聞いている場合ではなさそうである。
リビングの扉を開けて中を覗くと、そこにはこちらに背中を見せるようにテーブルに向かっている原野さんの姿があった。
……全身からこれでもかという程の怒りのオーラを放っている原野さんが、そこにいたのである。

表情を見なくても分かった。
彼女は今、怒っている。
しかも激怒している。
彼女の後姿とこの部屋に漂うぴりぴりした空気が、それを十二分に物語っていた。
全くの状況が飲み込めていない俺でも十分に理解できるほどに明確で、分かりやすい激高である。

気配に気がついたのか、原野さんがぐるりとこちらを振り向く。
扉から半身を乗り出して動けなかくなった俺は思わずびくっとする。
目が合った。
…これでもかと云う位、ジト目。
俺に対しての明るい感じの感情が全く籠っていない、視線。
これは、つまり、あれだ。

……なぜだかは分からないが、……彼女の怒りの原因は、俺、のようである。

「……ちょっとこっち、座って。」

原野さんが驚くほど無感情な声で言った。

テーブルをはさんだ彼女の目の前の席を指さしている。

これ以上原野さんの怒りに触れていはいけない。絶対にいけない。

俺は今できる最大の機敏さで部屋に入り、彼女の指す席に座った。

正座して背筋を正したが、目は合わせなかった。

……さっきの『頼んだよ』って、この事だったのか…。

あまりにも辛い、沈黙が続く。

原野さんはジト目でこちらに視線をやったまま、動かない。

辺りの空気がさらに重くなり、張り詰めていく。

無情にも、クーラーの風に煽られた風鈴がちりんちりんと風流な音を出した。

「……ちょっとさあ、聞きたいんだけど。」

沈黙を破ったのは原野さんだった。

俺は思わず身構える。

「は、はい?!」

「おとつい、何してたの?」

「……え」

“家の用事”、だったわよね?」

原野さんはあくまで無表情で、俺に問うてくる。
俺は思い出す。
おとついは……。

……そうだ、あれか?!
俺は気がついた。原野さんが怒っているのは、あの件だ。
「え、あの、えー……」
「あたしに秘密で、嘘までついて、兄と一緒に行った、じちゃクエのイベントは、楽しかったかしら?」

ゆっくり、俺にかみしめさせるように区切り区切りで、彼女は言って。
俺の目の前に写真を置いた。
そこには、じちゃクエのモニュメントの前でピースする陽翔さんと俺の姿が映っていた。

そう、おとつい。
俺は陽翔さんに誘われて、じちゃクエのイベントに行ったのだ。
陽翔さんの提案で、これは原野さんに内緒で計画された。
“ユウヒちゃんにばれるといろいろとうるさいから”ということだったのだが、その日彼女に“修業”を言い渡されていた俺は、この計画がばれないように嘘を吐くしかなかったわけである。

つまり、動かない証拠を握られた今、言い訳もできない。
そして、陽翔さんが出かけてしまっているこの状況。
俺はもう一人の当事者に、上手い具合に『押しつけられて』しまったのであった。

「……すみません！！！！！」
俺は机に手をついて机におでこがつくほど頭を下げ、素直に謝った。
これ以上の解決策が浮かばなかったのだ。
だが原野さんは無表情。
そんな俺にさっと視線をやると、言った。
「……あたしに黙って二人だけで行くなんて。この日どれだけ暇だったと思ってるの。一言くらいいいえばいいじゃない。信じられない。なんで嘘つくのよ。」
淡々としていたが、口調に確かに怒りがこもっている。
あのクールな印象の原野さんがここまで怒るなんて。
俺はますます申し訳なくなって、さらに頭を下げた。
おでこが机にくっついた。
「いや、ほんと……すみません。反省します。」
「……あたりまえでしょうが！！！！！！！！！」
とうとう、彼女の怒りが爆発した。
バーンと机を両手で叩くと、彼女はその場で跳ねるように立ちあがった。
俺はいきなり机に与えられた振動がおでこに直撃し、目の前がちかちかしたが、急いで顔をあげて彼女を見る。
怒りのあまりか顔が真っ赤に上気し、目が潤んでいた。
そのまま原野さんは俺に右手人差し指を突き付けると、叫んだ。
「これからは絶対、あたしに、嘘つくな！！これも契約に加えま

す！！！」

俺はその迫力に気圧されながら、

「ほ…ほんと、すみません……」

と消え入るような声で言った。

4．"Odd　August"　－a3　『対処』

－a3『対処』

あの後。
何が大変だったって、それはもう原野さんと仲直りすることだったということは言うまでもない。
俺が何をしても反応しない、目も合わせてくれない。
無い勇気を振り絞って話しかけても、尽く玉砕である。
コミュニケーションが取れなければ仲直りなんてできるはずがなかった。

そんなツーンとした態度を崩さない彼女と、どうにもできなくてオロオロする俺。
成す術もなく時間だけが過ぎていく。
もうどれだけ緊張状態が続いたのだろう…という、そんな時。
やっと、やっと……この部屋の主、陽翔さんが帰宅した。

「……ただいま？」
陽翔さんがリビングの扉の陰からひょこっと頭だけ出して、言った。
原野さんはちらっとそちらを一瞥して、また無反応を決め込む。
彼の帰りを待ちわびていた俺は思わず立ちあがった。
「陽翔さん！！」
陽翔さんは俺に向かって、顔の前で手を合わせて『ごめんね』とい

った表情をする。
俺は首を横に振ってそれに応じると、口パクで状況を伝えようと試みた。
『原野さん、かなり怒ってます。』

このメッセージはきちんと伝わったらしい。
陽翔さんはこくんと頷くと、そろりと部屋の中に入ってきた。
俺もいつまでも立っているのも何だったので、座る。
陽翔さんは原野さんの近くによると、彼女の肩をトントンと叩いた。
「ユウヒちゃん、ユウヒちゃん。」

原野さんは、不機嫌な様子を崩さないままではあったが、陽翔さんの方に顔を向けた。
流石にボディータッチされてまで無反応を貫くわけにはいかなかったらしい。
そうか、そうすれば反応してもらえたのか。
覚えておこう。

「ごめんね、ユウヒちゃん。もう絶対こんなことしないから。」
「……謝罪ならもう何回も聞いた。」
「うん、分かってるよ。だから、これ。」

そう言って。陽翔さんは体の後ろから右手を出してきて、彼女に差し出した。
手にはコンビニのビニール袋。
原野さんは眉間にしわを寄せながらも、訝しげにその袋を受け取った。

陽翔さんは言う。
「これは僕からのせめてものお詫びだよ。」

袋の中身を覗き込む原野さん。
その表情が、ぱっと、変わった。
「……いいの？これ。くれるの？」
「そうだよユウヒちゃん。全部ひとりで食べていいよ。」

原野さんが黙る。
何かを考えている。
俺は袋の中身が分からないのでよく分からないが、どうやら彼女の機嫌が直りつつあるようだ。
一体何を買ってきたんだ、陽翔さん。

原野さんは考えがまとまったのか、うん、と一つ頷くと、言った。
「……兄、もう一回謝って」
「ごめん。」
かぶり気味だった。
だが、原野さんはそれで何やら満足したらしい。
また、うん、と頷くと。

「分かった、許す。マコトもさっき沢山謝ってくれたから、許す。」
と、言った。

にっこりと笑う陽翔さん。
俺は陽翔さんのナイスプレイに感謝しながらも、この展開の速さに少し驚いていた。

やはり兄妹。
喧嘩など、何回もしているのだろう。
適切な対処は人間関係を鮮やかに修復する。

『許す』と宣言した原野さんは、何やら落ち着かない様子で、ビニール袋に手を入れて、中に入っていたものを取り出した。
小さめのカップが５つ。

そう、それは。
某ドイツの高級アイスクリームたちだった。

……なるほど、だった。

4．"Odd　August"　－a4　『充電』

－a4『充電』

原野さんが無類のアイスクリーム好きだという事は、俺が最近知った事実である。
そのアイス好きっぷりといったら、陽翔さんの家に遊びに来させてもらうようになってから、彼女が部屋でアイスを食べていない日はなかったのではないかと思うほどだ。
冗談抜きで、原野さんは細いスティックアイスの詰まった箱を2日で消費する。

そして今も。
さっきまでの不機嫌さはどこへやら、彼女はとても幸せそうに高級アイスクリームを味わっていた。

「いやあ、やっぱりこのアイスは高いだけあって味が違うね！」
ご機嫌である。
原野さんはもうすでに5つのうちの2個をたいらげてしまい、3個目に突入している。
「このバニラの濃厚さが他のとは段違いなのよ！シンプルなフレイバーほど、そのアイスの本来の美味しさが分かるのよね！」

「もう、ユウヒちゃんは……もっと大事に食べたらいいのに…。」
台所から陽翔さんがぼそっと言う。
買い出しの時に買ってきた食材を冷蔵庫に直しているようだ。

その言葉に、原野さんは一瞬だけ黙ると。
「……いいの。心の栄養にして精神的に充電してるんだから。」
ボソッと言った。
裏にいろいろなものが込められた言葉だった。
彼女の背後に、なんだか黒いオーラのようなものが見えた気がする。
陽翔さんもそれを感じたのか、ひゅっと台所の奥に隠れてしまった。

もくもくとアイスを頬張る原野さん。
それを斜め前に座って見ている俺。
目の前のテレビは高校野球中継を映し出している。
ちりんちりんと、風鈴の音。
テーブルの上にはいつものように、新聞と灰皿。
そう、いつもの……て、あれ?

「あの……原野さん。」
「どしたの」
「この灰皿、どうして吸殻が入ってるんですか?」
いつもはぴかぴかの灰皿が、今日は使われていたのだ。
そう言えば、心なしか部屋の中がヤニ臭い気がする。
原野さんは、「ああ。」と言って俺の方を向き、続ける。
「兄の友達よ……ここに来るとき、すれ違わなかった?」

俺は思い出す。
あの男の人。
陽翔さんからあまりに大雑把な説明しか受けられなかったから全く誰か分からなかったあの人だ。
「陽翔さんの友達だったんですか……。」
「他に何があるのよ?」

……言われてみれば、確かにそうだった。
けど、原野さんがあんまりナチュラルに、あの男の人の言葉に反応を示していたから。
「……原野さんの友達？……とか。」
「はあ？！」
原野さんは思いっきりしかめっ面をすると、俺の方を向いた。
「どうしてあたしが男友達を兄の家に連れてくるのよ！」
「確かにそうですけど」
「本当は貴方だって連れてくるつもりなかったんだから。それに、あたしは基本的に、用もないのに男子とつるまないわ。」

俺は陽翔さんの言葉を思い出した。
『ユウヒちゃんが男の子と仲良くしてるのって珍しいからねえ。』
いくら契約とはいえ、俺がこうしてここにいるのは、もしかしたら奇跡に近いのかもしれない。

「あの人はね、兄の高校時代からの友達で、一時期ルームシェアもしてたの。ほら、話したことあったでしょ？昔は実家にもよく遊びに来てたわ。」
原野さんがアイスを食べ進めながら続ける。
もうすでに、３個目のカップもたいらげられようとしていた。

そうか、陽翔さんの友達だったのか。
俺はふっと胸の奥にたまっていたものが抜け落ちた気がした。
なんだ、原野さんが何だか親しげに返事してるから。

俺はあの時に感じた、何とも言えない焦燥感を思い出す。
俺は、一体、何に焦ったんだろう。

「よし、充電完了。」
3個目のカップが空になって。
それをテーブルに置くと原野さんは、俺の方に向き直り、言った。
「本題に入るわよ、マコト。」
全く違うことを思考していた俺は、慌てて意識を引き戻す。

「本題って……なにかありましたっけ」
「とぼけても無駄。」
原野さんが、にやりと笑う。
その不敵な微笑みに、俺は、原野さんが“師匠”にモードチェンジしたことを感じ取った。
……そして、“本題”の内容も。

「“例の彼女をお祭りに誘うぞ計画”、今から具体的に詰めるわよ!!」

4．"Odd　August"　－a5　『計画』

－a5『計画』

ネーミングをもう少し考えて欲しいと思ったのは言わないことにして。
俺は7月後半からずっと自分に重くのしかかっていたにも関わらず知らんふりを決め込んでいたこの問題に、とうとう直面しないといけなくなった。

鷹尾祭り。
それは、原野家から徒歩1分の所にあるらしい大きな空き地で行われる、鷹尾市が主催するお祭りのことである。
この祭りは、お盆休みが明けた後の土日に、二日間にわたって開かれる。
敷地が広いためか、鷹尾市中から募った有志団体が模擬店を出したり、ステージでライブパフォーマンスが行われたりするらしい。
まあ、俺はお隣の舞園市に住んでいるので、このお祭りの存在も、概要も、原野さんにこの修業を言い渡された日に見たチラシで知ったのだが。

「このお祭りなら学校から立地的にも離れてるし、鷹尾高校の生徒が沢山集まることもないと思うのよ。」
師匠は言う。
先ほどからテーブルの上にルーズリーフとお祭りのパンフレット、

シャーペンを広げている。

「けど……俺も谷口さんも舞園市に住んでるのに、行っても大丈夫なんでしょうか……。」

「大丈夫に決まってるでしょ？観光で有名なお祭りをわざわざ見行く人もいるんだから。」

「……確かに。」

「それに、……あたしはこのお祭りを熟知しているのよ。」

にやりと、不敵な笑みを浮かべる原野さん。

彼女はトントンと目の前に置いてあるパンフレットをたたくと、言う。

「私の経験と、このパンフレットさえあれば、ばっちり素敵なお祭りデートを演出できるわ！」

なるほど、と俺は思う。

確かに、このお祭りは原野さんの家の本当に近所、まさに目と鼻の先で行われるのだ。

原野さんはこの祭りにもちろん小さい頃から行きまくっているだろうし、この広場の立地も、把握しつくしているのだろう。

それは6月に行った舞園ランドでの彼女の様子からも、容易に想像できた。

師匠はシャーペンを持ってルーズリーフの一番上に何やら大きな文字で、『鷹尾祭り　デートプラン』と書き付ける。

「まずは、どっちの日に行くか考えないといけないのよ。」

そう言って、パンフレットを開いた。

そこには、二日間のステージの進行表や、簡略化された店の配置図、出店の種類がずらりと記載されていた。

「おっ、二日目は結構派手な演出をやるみたいね。てことは、行くのは二日目で決まりかしら…。」

そう言いながら、ルーズリーフに二日目の進行表を写し始める原野さん。

俺はその前から、ぼんやりとパンフレットを眺めていた。

太字のゴシック体で書かれた『鷹尾市最大のお祭り！鷹尾市民なら楽しまなきゃ損！！』というあおり文句、模擬店の詳細説明、協力している団体の名前たち。

そんなものが、様々な太さの黒いミミズのように見える。

意味内容が全く頭に入ってこない。

「あの……すみません。」

「どうしたの？」

原野さんはルーズリーフから目を離さずに返事を返してくる。

俺にはずっと気がかりだったことがあった。

この計画を実行するためには絶対に通らなければいけないが、俺ができたら通りたくない過程。

コレがあるから乗り気になれないのだ……。

その師匠に言えずにいた不安点を、俺は口にする。

「……やっぱり、谷口さんを……、ほら、俺が、誘わないといけないんですよね？」

原野さんが、ピタッと止まった。
俺は少し焦って、さらに言葉をつなぐ。
「え、えっと……だって、俺、谷口さんにメールなんて、もう……何年もしてなくて、…はい、正直、上手く出来るか、凄く不安で……」

原野さんは無言のままでくるっと首だけ動かして、俺の方を見る。
その表情は、彼女が口を開くまでもなく、『……は？』と俺に語りかけてくるようだ。

そして。

「……は？」
やはり、彼女はそう言った。

4．"Odd　August"　－a6　『作成』

－a6『作成』

「貴方ね、流石に誘うところから私が面倒見ないといけないとは思わなかったわよ。」
師匠の呆れ声が心に突き刺さる。
「ほ……ほんとすみません……」
「次からは一人でやってもらうからね！」
「はい……」
「分かったらさっさと手を動かす！！」
「え、あ、はい！」

俺は慌てて手元のルーズリーフに集中する。
原野さんは俺の目の前で腕組みし、ついさっき台所から戻ってきた陽翔さんは後ろでクスクス笑いながら本を読んでいた。

手元のルーズリーフには俺がさっきからやっとのことで絞り出している文章が並んでいた。
俺は今、谷口さんをお祭りに誘うためのメールの原案を書きだしているのだ。
本当は携帯で作っても良かったのだが、携帯のタイプだと思考が止まってしまうので、紙に書き出すことになったのだった。

「まったく……まだ誘ってなかったなんて……。」

「す……すみません…」
「少しはヘタレも矯正出来てるかと思ったのに……やっぱりまだまだみたいね……。これで冬に間に合うのかしら……。」
師匠がわざとらしくため息を吐く。
「ほんと、期限を夏にしなくてよかったわ……。」
原野さんはまた一つため息をついて、立ち上がり、台所へと消えて行った。
４個目のアイスクリームにでも取り掛かるのだろうか。

「セイくんも大変だねえ。」
陽翔さんが後ろからこそっと声をかけてきた。
俺は振り返り、力なく笑う。
「…はは……ちょっと尻込みしてしまって……遊びに誘ったことなんてないので……。」
「分かるよ。僕も経験あるから。」

陽翔さんがにこりと笑った。
しかしその笑顔は、いつもの陽翔さんのものとは少し違う雰囲気だった。
なんだか、寂しそうな微笑み……。
だが、そんなことを思ったのもつかの間。
直ぐにその笑顔はいつものゆるりとした柔らかいものに変わる。
「ユウヒちゃんはそこら辺の男の心情を分かってないよね！」

「ちょっと、何こそこそ話してるのよ。」
後方から、原野さんの鋭い声が飛んできた。
俺は慌てて視線を台所の方に向ける。
彼女はカウンターに方杖をついて、訝しげにこちらをうかがってい

た。

「早く案を書いてしまってね、進まないから。」
「あ、……はい。」
「もう、ユウヒちゃんは容赦ないんだから！」

慌ててルーズリーフに向き合う俺の後ろで、陽翔さんが笑いながら言う。
原野さんはやはり4個目のカップを手に持って部屋に帰ってきた。
「兄は黙ってて！マコトにはこれくらいが丁度いいの！」
「もう、ユウヒちゃんは。せっかくできた男の子の友達なんだから、大事にしなきゃだめだよ！」
「なに言ってるの、兄は。」
原野さんの渋い顔。
またさっきと同じ場所に座った彼女は、こう言う。

「マコトとは、冬までの付き合いって契約してるんだから。」

…俺は。
そう言う彼女に、バッと、ルーズリーフを差し出した。
書きかけていた最後の文章案は、適当に仕上げて。

「原野さん出来ました。」
「え？……なんだ、案外早かったわね。」
ちょっと驚いた様子の原野さん。

ルーズリーフを手に持つと、それを眺め始めた。

「ねえ……、なんだい、『冬までの契約』って。さっきから。」

本を読むのを止めた陽翔さんは、俺の近くまで乗り出してきてぼそっと言う。

俺は答える。

「俺と原野さんが仲良くする期限のことですよ。」

「なにそれ。」

陽翔さんの心底不思議そうな声。

俺は手元に視線を落として、応じる。

「そういう、約束ですからね。」

陽翔さんが首をかしげるのが、目の端に映った。

4．"Odd　August"　－a7　『送信』

－a7『送信』

「あのね、マコト。この中だったら、最後の案が一番シンプルでいいと思うのよ。」
ルーズリーフを熟読した後、原野さんは俺にこう言った。
「え、最後のって……あの凄く短いやつですか？」
「そう。ぐだぐだ長文を書くより、さっぱり仕上げてしまう方が読むほうも分かりやすいわ。」
「……なるほど。」
同じことをちょっと前にも聞いたような気がする。
それに、最後の文章って、一番適当に書いたやつなのに……。
分からないものだ。

「よし、そうと決まれば、早速メールを送るわよ。」
アイスカップの蓋をあけながら、さも当然のことのようにこう云う原野さん。
「え？！ちょっと待ってください、今ですか？！」
心の準備をしていなかった俺は、いきなりのことに慌てた。
い……今から、谷口さんにメールするなんて…！
もう凄く長い間、メールなど送っていないのに！！
今、なんて……。
心拍数が異常なくらい跳ね上がって頭の中がかあっと熱くなってく

るのが分かった。
だが、原野さんはいつも通り、シレっと返してくる。
「そうよ。最近の高校生の夏休みは忙しいんだから！早めに押さえとかないと。」
「え……」
原野さんから『最近の高校生の夏休みは忙しい』なんてフレーズが出るとは思わなかった。

「それに。」
原野さんはここで一呼吸置くと、ぐっと身を乗り出してくる。
「貴方、今ここで私が送信させとかなかったら、ずっとしない気がするもの。」
……図星である。

「だから、今！はい、携帯を出す！！」
俺の目の前でパンッ！と手をたたくと、原野さんは元の位置に収まり、またアイスを食べ始めた。
こうなってはもはや逃げ道は無い。
俺は頭がくらくらするのに耐えながら、鞄から携帯を取り出すと、机の上のルーズリーフに書かれた原案を見ながら、メールを作成し始めた。

『こんにちは。もし暇だったら、一緒に鷹尾祭りに行きませんか？』

……本当にこんなのでいいのだろうか。

「分かりやすくていいと思うよー？」
今では俺の隣に来て座っている陽翔さんが、朗らかに言った。
「……そうですか？」
「うん、大丈夫。それなら相手も誘いを受けやすいし、断る時も断りやすいわ。」
師匠も応じる。

俺はその言葉に、断られた時のことをふと想像した。
……あ、やばい。悲しすぎる。

「あの……やっぱり送らないとダメですか……？」
「駄目ですね。」
失敗した時の恐怖に負けた俺の発言を間髪入れずに却下する師匠。
それどころか。
「はい、もう今送っちゃいましょう。」
なんて言って俺の携帯を取り上げて。

「そうしーん」
……メールを、送って、しまった。

「……あああああああああ！！！！！！！」
思わず叫んだ。
ビクッとする原野さん。

「え？！なに？！」
「ど、どうしてそんなことするんですかあああ！！！！」
「え？！」
「そうだよユウヒちゃん！今のは酷いよ！残酷だよ！！」

「え、え、」
「お……俺にだって心の準備とかあったのに……」
「そうだよユウヒちゃん！男心を分かってないよ！駄目だよ！」
「ちょ…！ちょっと、悪かったって、えっと、ごめん……」
「ごめんで済んだら警察はいらないよユウヒちゃん！！」
「あ～～もう！いいから兄は黙ってて！！！」

原野さんも叫んだ。
俺はもはやショックで声も出ない。
陽翔さんはそんな俺の代わりをしてくれているのか、まだ「駄目だよユウヒちゃん！」と野次を飛ばしている。
……そんな時。

ぴぴぴぴ！

原野さんの手の中の俺の携帯が、鳴った。

4．"Odd　August"　－a8　『高低』

－a8『高低』

まだ送ってから2分と経っていないのに、メールの受信を知らせた俺の携帯。
普段メールをしないので分からないが、もし、谷口さんからの返信だとするならば、これ。
……ちょっとタイミングが早すぎないか？

「え！返事来たんじゃないの？！」
「よかったねセイくん！よかったよかった！！」
余りの早さに戸惑いを隠せない俺を差し置いて、原野さんと陽翔さんが盛り上がる。
ちょっと待て、メールの返信速度って、みんなこんなものなのか…？！
それとも、…残念なお返事だから、こんなに早いのか…？
頭の中を杞憂がグルグルと回って、俺のテンションを下げる方向に引きずっていく。

だが、テンション絶賛上昇中の二人がそんな俺の変化に気がつくはずがない。
原野さんなんて手の中の携帯を開いて、メールを見ようとしだした。

「ちょ……！ちょっと待ってください！！！」
俺はそれを全力で止める。

……この行動には焦った。

「え、なによ、早く確認しないと」

「さ……さすがにそれは、自分で見たら、駄目ですか……？」

「そうだよ！それは駄目だよ！まったくユウヒちゃ」

「あぁもう兄うるさい！！分かったから！！！！」

勢い余ったのか、陽翔さんの頭をバシッと叩いて、原野さんは俺に携帯を差し出した。

「はい！どうぞ、もうバシッと確認しちゃって！」

俺は携帯を、恐る恐る受け取った。

開く。

待ち受け画面に表示された、『新着メール１件』。

一つ深呼吸。

メールの受信ボックスを開く。

一番上には『谷口　和』の文字。

跳ねるように鳴りだす心臓。

おそるおそる決定ボタンに指をかける。

ああ、もう、見たくない。

周りで、師匠と陽翔さんが静かにこちらを見守っている。

俺は、ぎゅっと目をつむって、それを押した。

「……。」

……薄眼を開けてみた。

携帯の画面には。

『行く！＾□＾』

という、文面。

「よかった！！！」

「おめでとう、セイくん！！」

二人の声が同時に響いて、張りつめた空気が解放された。

ストンと気が抜ける俺。

まだ頭の中で血が巡っている音がしたが、それと一緒に、体中に安堵感と幸福感が巡り行く気がした。

「いやあ、まさか誘いのメールを送るだけでここまでドキドキするとは思わなかったわ！」

ひとしきり騒いだ後、元の位置に戻ってきてまたアイスを口に運ぶ原野さん。

もう４個目のカップも底をつこうとしている。

「もう、分かってないなあ、ユウヒちゃんは。男の子が女の子をデートに誘う時は、いつもこんなドキドキの緊張感なんだからね！」

陽翔さんは、いつにもましてルンルンと嬉しそうに、鷹尾祭りのパンフレットを眺め始めた。

「鷹尾祭りは鷹尾市民ならみんな毎年楽しみにしているお祭りだからね！楽しみにしているといいよ！」

俺はその言葉に心からの笑顔で応える。

すっかり安心して気が抜けてしまった。
頭の中がほわほわとしていた。
そんな良い心地の中をふわふわと漂いながら、俺はぼんやりと考えた。

そうか、谷口さんとお祭りかぁ……。
そんなの、幼稚園の時くらい振りだ。
ちゃんと緊張しないで話せるだろうか……お祭りって、どんなことをすればいいのだろうか……。
あ、そこは師匠がばっちりプランを立ててくれるんだっけ。
俺は陽翔さんの言葉を反芻する。
『鷹尾市民ならみんな毎年楽しみにしているお祭り』……。
どんなのだろう。
盛り上がるのかな？
けど、そういえばどんなお祭りなのか原野さんに聞くまでは知らなかったな…。
鷹尾高校なら鷹尾市民も多いだろうに……。
いや、けど、矢吹…そうだ、矢吹は鷹尾市民のはずだ、どうしてあいつから聞かなかったのかな……。
……あ、そうか、学校が休みだったから矢吹と話す機会が無かったんだ。
なるほど、あんなお祭り男が、そんな大きな祭りのことを話題にしないわけないからな。
あいつも楽しみにしているのかも……え？
いや、ちょっと待て。
……ちょっと待て？？？

俺は、良い心地サーっと引いてくのを感じた。
なんで忘れてたんだ……あいつも、鷹尾市民じゃないか……？！

「あの……原野さん」
「なにー？今、続きの返信しちゃう？」
軽く答えてくる原野さん。
俺は、今までの努力が無駄になってしまうかもしれない、この事を、口にした。

「あいつ……矢吹って、鷹尾祭りに来るんじゃないですか……？」

彼女にも、この一言だけで十分すぎるほど十分、伝わったらしい。
原野さんの動きが、止まった。

あー、どうしようかなぁ。
これはやばいかもしれない。

4. "Odd August" ―a9『帰宅』

―a9『帰宅』

『……分かった、この件については、あたしが責任をもって今日中に考える。今夜寝るまでに対策をとっとく。だから、マコトは例の彼女とのメールを頑張って続けといて…。』

俺は家の最寄り駅、里坂駅から自分の家に向かって歩いていた。
夕方の斜めの陽射し。
だんだん夏が終わりに近づいているためか、陽の落ちる時間が心なしか早くなっているように思う。

あの後、俺たちは必死に矢吹対抗策を考えた。
だが、流石の原野さんもクリティカルな解答を咄嗟に導き出せなかったらしい。
気がつけばもういい時間ということで、この件はとりあえず保留として、本日の会はお開きになったのだった。

俺は歩きながら考える。
なんだか分からないが、今日は疲れた。
ずっと逃げていたことに直面したからだろうか。
それとも、思ってもみなかった原野さんの怒りに触れたからだろうか。

いや、それ以外にも、いろいろな要素が折り重なったからのような気もする。
もやもや気持ち悪いような、ふわふわ心地いいような、掴みどころのない感情たちが渦巻いているのだ。
きちんと考えて整理したいが、今、俺の思考は疲れでよく分からないことになっていた。

家の前までたどり着いた俺は、玄関を開けて、チャイムは押さずに中に入った。
台所の水が流れる音が聞こえてくる。

「ちょっと、誠―？帰ってきたのー？」
リビングに入ると、台所の方から母さんの声がした。
「うん、ただいま。」
「ちょっとこのお皿運んでくれないー？お父さんがもうすぐ帰ってくるから、ご飯にするわ。」
「はいはい」

俺は軽く返事をすると、鞄を椅子にかけて、台所へ向かった。
今日の晩御飯はどうやらビーフシチューらしく、テーブルにはサラダのボウルが乗っていた。

「ちょっと誠、最近よく出かけてるわね。どこ行ってるの？矢吹君の家？」
母さんは鍋をかきまぜながら、俺に話しかけてくる。
「……まあ、そんなとこ。」
「仲いいわねー。あんたももうそろそろ、男友達とばっかりつるま

ないで、ガールフレンドと出かけたりしたらいいのに。」

「え?!なっ」

「女の子のお友達とかはいないの?」

……うちの母さんは、こうやっていつもナイスタイミングで的確なことを聞いてくる。

妙に感がいいのだ。

その話好きな性格も相まって、俺は昔から母さんの詮索を逃れて隠し事をするために大変な労力を要してきたのであった。

俺はどうはぐらかそうか考えながら、サラダボウルをテーブルにやたら丁寧に置いた。

そして言う。

「……まあ、いないよ。」

「……ふうん?」

母さんの、あまり納得していないような相槌。

これは嘘ではない。

俺と原野さんは、“師弟関係”だ。

“友達”ではない、何かなのである。

それは今日、原野さんも言っていたではないか。

『冬までの付き合い』と。

確かにそう契約はしていた。

ただ、俺が忘れていただけだった。

冬まで、か。

俺はもやもやと、契約の内容を思い返した……。

「ちょっと、誠―？次はお茶を頼むわ。」
「…あっ、はいはい。」
ぼーっとして動きが止まっていたのか、その声で現実に引き戻された俺は、また慌てて台所に向かう。母さんは今度はパケットを包丁で切り分けていた。

「ところで、お向かいの和ちゃんがね、今朝会ったんだけど、あの子可愛くなったわねー！」
「？！あ、おう。」
また母さんは、なんでこうピンポイントに良いところをついてくるんだ…？
俺は焦ったのを母さんに悟られないように、表情を引き締める。

「ちゃんと挨拶もしてくれて。ほんと良い娘よねー。誠、同じクラスなんでしょ？和ちゃん。」
「ま…まあそうだけど。」
「和ちゃん、モテるんじゃない？」
「……どうなんだろう、女子の友達は多いみたいだけど……。」
「でしょうね！」
母さんはパケットをオーブントースターに放り込みながらまだ続ける。

「いいわね誠、幼馴染じゃない、オサナナジミ！」
強調してきた。
俺は必死に気持ちを落ち着ける。
気を抜くと赤面しそうだった。
だが母さんは、まだまだ話を止めない。

「あんたも昔は“のんちゃん”って呼んでたのにねー……いつからやめちゃったんだか。」
「……いつの話だよ」
「あら、幼馴染の特権でしょう？」

その時。
ピンポーン！と、玄関のチャイムが鳴った。
「あ、お父さん帰ってきたわ！誠、お茶頼むわね！」
そう言って母さんは、いそいそと玄関の方へ消えて行く。
玄関から父さんの『ただいまー』という低い声が聞こえてきた。

俺は質問攻めから解放されて、はあっとため息をつく。
なんだかさっきより疲れた気がした。

4．"Odd　August"　－a10『電話』

－a10『電話』

プルルルル　プルルルル……

『…はいはいはい、もしもーし』
「あ、矢吹か？お前、さっき電話したか？」
『お、誠じゃん！！したした！ちょっと話したいことがあってさ。』
「悪い、ちょっと夕飯食べてて今気がついた。」
『いいぜいいぜー。オレもさっき飯食ってきたからな。』
「……で？なんだ、話って。」

『……そ、それなんだよ！！ちょ、大変なんだぜ！マジで！！』
「お、おう？！どうした」
『……オレっちにも、とうとう春が来た……のかもしれないぜ、誠よ。』
「……なに言ってんだ？お前。」
『もう大変なんだよ！！お前さ、鷹尾祭りって知ってっか？』
「え……あ、まあ、知ってるけど。」
『それにさ！行こうって！！誘って来たんだ！！！！』
「……例の近所の姉ちゃんが、か？」
『違――う！！あいつは毎年友達と行くんだよ……。てか！そうじゃなくて！！』

「じゃあ誰だよ。」
『ハ・ラ・ノ!!原野唯陽!!』
「……はあ?!」
『お、その様子だと覚えてたんだな!あの、美人の原野だ!原野が、一緒に!オレにだぞ?!鷹尾祭りに行こうって!!』
「……なるほど」

『おい、もうちょっとテンション上げてくれよ!!二人っきりだぜ?!思春期の男女が二人っきりで、祭りとか!もうこれ恋じゃん!発展しちゃうかもじゃん!!噂になっちゃうじゃん!!!』
「……。」
『いやー、気づかなかったなあ、オレっちとしたことが……。まさか、あの原野がオレのことを……いや!でもオレは、もうタダの幼馴染としか……!』
「……。」
『おーい誠、黙るなよ!!電話は言葉を発してくれないと通じないぞー?』

「…あ、悪い。ごめんちょっと聞きたいんだけど」
『なんだ?』
「その祭りに誘われたのって、一日目?二日目?」
『ん?えーとなー、確か一日目だったんじゃないかな。』
「……なるほどな。なるほど」
『?お前、何ひとりで納得してんだ?』

「…あ、いやいや、こっちの話。それより、よかったな。うん、よかったよかった。」
『おう、ありがとう!!オレっちの青春が今、始まろうとしてるぜ……!』

4．"Odd August" －b1 『進行』

－b1『進行』

つまり、原野さんの計画はこうだった。
決戦の鷹尾祭りにおいて、俺と谷口さんが参加する予定の二日目に矢吹が祭りにやってくれば、矢吹に見つかって計画が大幅に狂う可能性がある。
だからと言って、矢吹に「二日目の鷹尾祭りには来ないでね」なんて直接言えるはずはない。
そこで、だ。
一日目に祭りに参加せざるを得ない状況を作れば、二日目には流石に来ないのではないか…？
師匠はこう考えたのである。
他の人をけしかけるのは少々手間と苦労が多かったため、ここはシンプルに、と、師匠は自らが『一日目に矢吹を誘う』という行動にでた。

……だがしかし、彼女の想定の範囲だけでことは動かなかった。
矢吹が想像以上にこの誘いを喜んだのである。
想像力豊かな矢吹にとって、『思春期の男女が二人きりで祭り』なんて状況は歓喜対象以外の何物でもなかったのかも知れない。
あの日から、原野さんの携帯には、矢吹から毎日大量のメールが送られてくるようになった。
これには原野さんも流石に面喰って、「……ちょっとあの計画は変な誤解を生みかねなかったわね……軽率だった…。」と渋い顔をし

ていたのだが、何はともあれ。
これで矢吹対策はひと段落。
心配の種が一つだけ消えたのだった。

一方、肝心の谷口さん。
こちらも何とか、ぎこちないながらもメールのやり取りを続け、彼女と具体的なアポイントを取ることができた。
これは原野さんの協力もあってだったが、俺も何とか頑張った。
まだ、どんな反応が返ってくるか怖くて、メールがきてもしばらく開けないのことが多かったのだが……。
それでも、送ることさえできなかったことを考えると大きな進歩だと思いたい。

時間は刻一刻と、飛ぶように過ぎていく。

陽翔さん宅で計画を立てて、作戦を練って、指示を受けて。
谷口さんからのメールにビクビクして師匠に怒られたり、原野さんが矢吹からのマシンガンメールに頭を抱えたり、陽翔さんに昼ごはんを御馳走になったり、ときに修行と称してトランプをしたりして。
あっという間に。

俺は、鷹尾祭り当日をむかえた。

4. "Odd August" －c1『確認』

－c1『確認』

「……とりあえず言いたいのは、あたしの努力を無駄にしないでください。本当に。」

場所は陽翔さんのアパート。

いつもの席に腰かけての『直前会議』での原野さんの第一声は、これだった。

……師匠、見ているこちらにもヒシヒシと伝わってくるくらい、ぐったりしている。

「朝からずっとこんな調子なんだよー。」

陽翔さんがクスクス笑いながら言う。

「昨日よっぽど疲れたみたいだね……一体どんなだったんだろう、凄く気になるよ。」

「ちょっと兄、もうその話には触れないで、本当に。」

原野さんがさらにゲンナリした調子でぼそっと言った。

……あの矢吹に負けず劣らずのお祭り好きの原野さんをこんなにぐったりさせるなんて、一体どんなだったんだろう。

というか、矢吹は一体なにをしたら原野さんをこうも疲れさせることができたのだろうか。

原野さんはしばらく机の上に顎を乗せてぼーっとしていたが、急に姿勢を正すと首をぶんぶんと横に振って、両手で自分の頬を包み

込むようにした。
はぁーっと、長くため息を吐き、うん、と一つ大きく頷く。
「ああ、もう、いい加減気合い入れるわ。よし！！」
大きな声でそう言うと、バンっと机を両手でたたいた。
そこに乗っていた、鷹尾祭りのパンフレットとここ一週間でびっしりと文字の埋まったルーズリーフが軽く跳ねる。

「今日はとうとう、決戦当日です。」
原野さんはさっきまでとはうって変って、いつもの力強い眼差しで俺を見据えて、言う。
「プランはちゃんと頭に入ってるわね？」
「は……はい、大丈夫、です……。」
俺は思わず目をそらす。
無意識に、自信のなさが声に出てしまった。

俺だって、ここ一週間きちんとプランを練って、それを頭に入れる努力はしていた。
だが、いざ本人を目の前にするとなってはワケが違う。
机上の理論と実践では、精神において使う部分が大きく違うのである。

うまく出来るのか？
ちゃんとプラン通りに進められるのか？
もしできなかったら、師匠や陽翔さんの尽力を無駄にすることになるんだぞ……？
そんなことが頭の中をグルグル回って、ただただ、不安が募った。

師匠は。
そんな俺の様子を見るなり、短くため息をついた。
少し呆れているようにも見えた。
そして。
「貴方ね……プランはあくまでプランなのよ。分かってる？」
彼女は、まるで俺の心の中を見透かしたかのように、こう言った。
俺ははっとして原野さんの方を見る。

「プランばっかり気にして相手の気持ちをまるで無視。計画を消化することにばっかり全力を使って、相手が楽しんでくれてるかどうかは気にもかけない。……これが絶対的に、最悪よ。」
原野さんは言い放つ。
陽翔さんも隣で、軽く頷いて同意する。
「これはよくある失敗でもあるわ……彼女を楽しませようと計画を練るあまり、それに縛られて逆にデートを台無しにしてしまうの。」
俺は思わずうつむいた。
……こうやって言われなければ、陥ってしまっていたであろう状況だった。
確かにその通りだ。
こんなことに言われないと気がつかないなんて。

「“この通り進めなかったら、原野さんに申し訳ない”なんて、絶対思わないこと。」
またもや俺の心の中の言葉をトレースしたようにこう言って。
「絶対に、彼女にペースを合わせること。“彼女と一緒に楽しむこと”が目的なのを忘れないこと。自分一人で突っ走って滑って転んで空回り、なんてことにならないように。もしも彼女が『違うところに行きたい』と言うんだったら、その場で全部プランなんて捨て

てしまって構わないから。」

そして、原野さんは、ゆるりと。
ゆるりと笑う。
「こういう形式の修業は始めてだから、緊張するとは思うけど、あたしは心配してないわよ。貴方は人の気持ちをちゃんと察せられる人だと思うから。」

俺は。
この言葉に胸が熱くなる。
ああ、大丈夫だ。
俺、なんとか頑張れそうだ。

今まで感じたことのなかったささやかな、だがちゃんと熱のこもった炎が、心の片隅に宿るのを感じた。
俺はしっかり前を見据えて、師匠の視線を正面から受け止めた。
真っすぐで力強い瞳。

俺は、こくんと頷く。
それに合わせるように、師匠も頷く。
陽翔さんは嬉しそうに微笑んでいた。

…しかし、彼女は。
そんな何となく和やかになった空気の中、仕切り直しとでも言わん

ばかりに咳払いをすると。

「……まぁとりあえず、今日の修業クリア条件は『浴衣を褒めること』。いろいろ言ったけど、それだけは忘れないように。」

スパンと効果音が付きそうなくらい鋭い口調で言った。

……そんな、谷口さんが浴衣を着てこなかった場合、どうしたらいいのだろうか。

どんな状況下でもきちんと“条件”を出してくる師匠には、流石としか言いようがない。

4．&quot；Odd August&quot；　－c2　『待合』

－c2『待合』

夕方、である。
ツクツクボーシが鳴いている。
ああ、もう夏も終わりなんだなぁ、としみじみと感じさせる鳴き声。
思えばもう学校が始まるまで一週間を切っているのだ。
夏休みの終わりが俺にとっての『夏』の終わり……。
小学校の時からよく思っていたものだ。
だがしかし、この異常なまでに高い気温だけは全く下がらない。
だたひたすらに暑い。
それだけはもうどうしようもなかった。

会議の後。
ここ、祭り会場の最寄り駅、大田駅の改札の前に来ていた。
今の時刻は１７時５０分。
『あまり顔が見えて目立つのは良くない』という陽翔さんの提案でかぶることになったキャップを目深にかぶり、待ち合わせ時間の１８時００分までここでじっと待っていることにしたのだった。

師匠はというと、俺と一緒に陽翔さんのアパートを出て、一度自宅に帰った。
俺たちが祭りに入るころに敷地内に入り、簡単な見張りをしてくれ

ることになっている。
よほどの問題が起きない限り連絡はしない、とのことだった。

俺は駅の外壁に背中を預け、深呼吸した。
心臓がどくどくと激しく脈打って、呼吸が浅い。
どうにかなってしまいそうだった。
師匠の言葉のおかげで多少プレッシャーはなくなったものの、俺にとって今回のお祭りは、間違いなく、大きな転機になりうる貴重な“可能性”なのだ。

5月は話すこともできなかった。
6月はビッグチャンスを棒に振った。
7月は掴みかけてそのまま。
8月こそは。

暑さと緊張からか、意識が朦朧としてくる。
俺はいい加減シャンとしようと、ギュッと目を瞑って、両手で自分のほっぺたをパシンと叩いた。

「あ…まことくん！」
目が覚めた…と同時に。
俺の耳に、幼いころから聞きなれた高い声が届いた。
俺は体に電流が走ったかのようにビクッと、声のした方に顔を向けた。

そこには……谷口さんが。
紺色にピンク色の花がちりばめられた浴衣を着て、やわらかい茶色の髪を高いところでお団子にした、谷口さんが、いた。
改札をでて、こちらに向かって軽く手を振りながら、小走りで、こちらに、向かってくる。

「まことくん、はやかったんだねー。またせちゃった？」
小走りをして少し息の上がった谷口さんが、言う。
俺はその姿に視線が張り付いたようになってしまい、すっかり頭の回転が止まっていたので、
「あ、いや……大丈夫、今…来たとこだから」
なんて、使い古された決まり文句しか言えなかった。
浴衣姿の谷口さんは、もうどうしようもなく、……可愛かったのである。

「そっかぁ、よかった。」
彼女はそう言って、丸い目を人懐っこく細めて笑う。

俺も、俺も早く、何か言わなければ。
思うように動いてくれない頭を何とか回転させて、必死に考える。
何か、なにか、いい台詞を思い出せ、俺。早く、はやく、ハヤク、
谷口さんが、喜ぶような、いいセリフを……。

そして、思い当った。
そうだ、今ここでこれを言わなくてどうする。
これだ、これしかない！
俺は、つっかえて上手く言葉が出ない喉に無理やり息を通して、言

った。
「た……谷口さん、え…えーと、浴衣、か……、うん、……似合ってるね。」
……“可愛い”と言えない自分のメンタルの弱さが恨めしかった。

谷口さんは、一瞬驚いたように目を丸くして。
そしてその後、彼女は前髪を手で直すようなしぐさをしながらちょっとうつむき、はにかんだ。
「え、えーと……ありがと」

俺のはじめて見る表情だった。
だが、彼女はもっとうつむいてしまって、前髪にやった手のせいで顔がほとんど隠れて見えなくなってしまう。
その言葉からほとんど間の開かないうちに、谷口さんは少し珍しいくらいのハイトーンで言った。
「あー…、まことくんは、浴衣きないの?…似合うとおもうんだけど。」

「あ……いや、俺は、髪を染めてるから……似合わないかな、と思……!」
俺はここまで言って、しまったと口をつぐむ。
谷口さんも、茶髪じゃないか…!!
なに言ってるんだ俺は!!
俺は慌てる。
大いに慌てる。
「いや!谷口さんは、ほら、茶髪でも似合うんだけど!!ほらなん

ていうか、俺は男だから男の和服はほら、黒の方がより良いっていうかって思ったというか」
谷口さんがうつむいていた顔をこちらに向けて、きょとんとした表情をしている。
もっと焦る俺。
何やってんだ、いきなり墓穴を掘るとか……！！
あああどうしよう…！！！

だが、次の瞬間。
谷口さんは、クスクスとおかしそうに笑い始めた。
これには今度は俺がきょとんとしてしまう。

「え……」
「ふふふ……まことくんがこんなにしゃべってくれたの、久しぶりかも。」
「え、あ……そう…かな？」
「うん、久しぶり。こんなに長く話すのも、久しぶり。」

彼女は、そう言って、また。
今度はいつも通りの笑顔を俺に向けてくれる。
「今日は、誘ってくれて、ありがとう。」

嗚呼、俺は。
もう、このやり取りだけで満足してしまいそうだった。

4. "Odd August" －c3 『道中』

－c3『道中』

大田駅からすこし外に出ると、あたりはもうすでに祭りに行く人、祭りから帰る人でごった返していた。
いつもはどちらかというと閑散とした雰囲気であることを思うと、鷹尾祭りの盛況ぶりがうかがえる。

「お母さんにね、今日はクラスのお友達とお祭りにいくっていってあるの。」
祭り会場へ向かって歩みを進める最中、谷口さんが言った。
「え……あ、そうなんだ」
「そう。お母さんに『まことくんとお祭り』なんていっちゃうと、なんだか面倒なことになる気がして。」

ちょっと悪戯っぽく笑う谷口さん。
確かにその通りだった。
我が中澤家と谷口家は母親同士の仲が大変良い。
どちらかに噂話が知れると、もう片方には確実に筒抜けになると思った方が正確なのである。
俺は母さんに、ただ『用事』とだけ言って外に出てきていたため、谷口さんのこの機転はとても有難かった。

「確かに……面倒だろうね」
俺も同意する。

谷口さんがうふふと笑う。
「そうなの。『まことちゃんとお祭り何てどうしたの！！』とかとか。ぜったい、いわれちゃうだろうなって。」
「……え、まこと“ちゃん”って……」

……『まことちゃん』という呼び名は、俺が幼稚園の時によく使われていたものだった。
おばさん、まだその呼び方なんて……。
俺は何とも言いようのない気持ちに駆られる。
「ちいさい頃から使ってるから、まだその呼び方がぬけないみたい。」
谷口さんは可笑しそうに笑って、言う。
「もうわたしたち、１６歳なのにね。」

谷口さん一家が俺の家の前に引っ越してきたのは、俺たちが3歳の時のことだ。
俺はその頃まだ幼すぎたためか、出会いの時の記憶はほとんど残っていない。
気がつけばお向かいの“のんちゃん”とはよく一緒に遊んでいた。

それから、１３年という長い年月が流れ。
俺は気恥ずかしさから“のんちゃん”とは呼べなくなり、谷口さんももう俺のことを“まことちゃん”とは呼ばなくなった。
…そう言えば、谷口さんが俺のことをちゃん付しなくなったのは、いつからだったのだろう……？

「あ！みてみて、まことくん！」
俺のことを“まことくん”と呼んで、彼女は、はしゃいだ様子で前方を指す。
「きっとあそこだね！うわぁ、思ってたよりおおきい！！」
駅からの直線の道を道なりに進み、左に折れた所にその広場はあった。
土地は我が鷹尾高校のグラウンドが悠に二つは入ろうかというほど大きく、遠巻きにみても人でごった返しているのがうかがえる。
俺もここまで規模が大きいとは予想していなかったので、思わず、
「……これはすごい……」
とつぶやいた。

「もしかして、まわりきれないかもしれないね…？」
エントランスに向かって歩みを進めながら、谷口さんが俺に言う。
首をかしげて下から覗き込むような仕草。
俺はその様子にノックアウトされそうになるのを必死で押さえながら、何とか答えた。
「え、あ……あれだ、面白そうなのだけ、回れば何とかなると、思う……よ。」
谷口さんは、
「そうなんだぁ、よかった！」
と言ってニコッと笑う。
その表情に、また、俺の心臓が大きく跳ねる……。

……と、同時だった。
ヴーヴーヴーと、俺の携帯がいきなり、勢いよくバイブレーションを始めたのだ。

「え?!ちょ……ちょっと、ごめん」
俺は慌ててジーンズのポケットに入れていた携帯を取ろうとする。
師匠だろうか。
何かあったのか?
……て、始まってもいないのにいきなり緊急事態か……?!

「メール?だいじょうぶだよー。」
谷口さんは朗らかに言う。
俺は谷口さんに「ご…ごめん」としどろもどろで断って、焦りで携帯を何度も落としそうになりながら、何とかメールを開いた。

案の定、メールは師匠からだった。

『計画が失敗したみたい。何故か会場に矢吹が出現。こっちはあたしが何とかするから、彼女には悟られないように。幸運を祈ります。』

俺は、自分ができる精一杯の無表情で携帯を閉じ、それをまたポケットにしまった。
谷口さんが首をちょっとかしげて言う。
「だいじょうぶだった?」
「……うん、大丈夫、OK、まーったく問題ない…。」

…これらが全て、自分に言い聞かせる言葉だったことは秘密である。

4．"Odd August" ―c4 『露店』

―c4『露店』

矢吹清彦。
俺はあんなに気前が良くて、友達思いで、お調子もので、ムードメーカーで、……それでいて、最高にタイミングが悪い男を他に知らない。
なんなんだ、アイツは。舞ランの時といい、今回といい、あまりにタイミングが良い……いや、悪すぎる。
ここまで行動がかぶってしまうと、もう『読まれている』としか思えなかった。

もしかしたら、今回ばかりは師匠の読みが浅かったのかも知れない。
相手はあの矢吹だ。
あの“ＴＨＥ　お祭り男”が、近所で行われるこんな大規模のお祭りに、一日行ったくらいで満足するはずなかったのである。
甘く見すぎていた。
そもそもあいつは……

「ねぇねぇ、まことくん！次、あそこの店をみてみない？」
「…！！」
俺の思考は、谷口さんの声によって現実に帰ってきた。

慌てて言葉をつなげる。
「…あ、う、うん。そうだね、行こうか。」
……いけない、なにをしているんだ俺は。
矢吹などに時間を割いて考えている場合ではない。
今、この一分一秒が貴重な一瞬。
まさに正念場なのだ。
とにかく、目の前のお祭りに集中しなくては。
俺は口の端をギュッと横に引いて、気持ちを引き締めた。

谷口さんは先ほど買った綿あめを少しずつ口に含みながら、楽しそうに俺の斜め前を歩いている。
お祭りはやはり大盛況で、どこもかしこも“人”で埋め尽くされている。
その中にはやはり鷹尾高校の生徒も何人か混じっているようで、時々人ごみの中にクラスメイトの顔が見えたりして、俺をヒヤヒヤさせた。

帽子をかぶってきてよかった……何度そう思ったことか。
俺は陽翔さんに心の中で感謝する。これのおかげでうまい具合に顔が隠れて、今のところ、俺は知り合いに気づかれることもすれ違う人に二度見されることもなく、平穏に過ごしていた。

時刻は１９：４０。
お祭りに入ってから結構な時間が経っていたが、まだ露店をすべてまわり切れていない。
この人の多さと敷地の広さでは仕方ないかも知れないが。

そしてそのおかげとおそらく師匠の尽力もあり、まだ矢吹とは一度も出くわしていなかった。

「みてみて！これ、手造り雑貨なんだって。かわいい！」

露店に行きついた谷口さんは本当にうれしそうに、並んでいる品物を見ている。

俺はそれだけで心がほっこりしてくるようだった。

正直、ほとんどが最初のプランの通りになってはいない。

谷口さんが見たい所を見て、雰囲気を壊さないように動いていたら、いつの間にか時間が経っていた。

『楽しい時はあっという間に過ぎる』。

この言葉の意味が、今ならとてもよくわかる。

「ねぇまことくん、昔お祭りにいっしょに行ったときも、こんな感じのお店があったの覚えてる？」

雑貨をひょこひょこ見回りながら、谷口さんが言った。

「え……そ…うだったっけ……？」

……正直、俺は全く覚えていなかった。

なんせ、もう十数年前の出来事である。

「うん、そう！」

谷口さんがうふふと笑って、半歩ほど下がって店を見ていた俺の所に戻ってきた。

なんとなく二人で、歩き始める。

「そこで、わたし、かわいい布で作ったドングリのブローチを買ったの。このくらいの」

彼女は指で丸を作って大きさを示す。

５００円玉くらいの小さな丸。

「今でも、それ持ってるんだよ。わたし。」

彼女はそこで一度言葉を切ると、少し黙った。
何かためらい事があるかのように。
あらゆる音たちだけがあたりに響き、時間を埋めていく。
だが、しばらくして。ゆっくり、耳を澄まさなければ掻き消えてしまいそうなくらい小さな声で、谷口さんは言った。
「この前貰ったガラスのオルゴールと一緒に、かざってるの。」

俺は自分の横の浴衣姿の彼女を、見る。
薄明かりの中、彼女と目が合った。
俺の肩くらいの位置からの、視線。
露店のオレンジ掛った明かりに照らされてキラキラ光る、ガラス細工のような、丸いどんぐりのような、瞳。
俺はそれに、それに、ふぅっと、吸い込まれそうになる……。

……だが。
突如彼女は、ふいっと視線を外してしまった。
「あ、あ……！見て、ヨーヨー釣り！あれ、やりたいなっ！！」
表情は見えない。
だが、なんだか高いテンションで、ヨーヨー釣りの屋台に向かって駆けていく。
俺はなんだか、さっきの状況が失われて残念なような、だけどどこかほっとしたような複雑な心境のまま、その後ろ姿を追った。

ヨーヨー釣りの屋台は、なかなかの盛況ぶりだった。
小さい子供が多い中、カップルと思われる男女の姿もちらほら見受けられる。
仲良く彼氏と手をつないで、ヨーヨーにこよりを垂らす彼女。
……もしかしたら、もしかすると。
俺たちも、そのうちのひと組として見られているのかな。
ふと、そんな考えが頭をよぎる。
そう思うと俺は、もう顔から火が出そうなくらい恥ずかしかったのだが、同時に、なんだかくすぐったいような、嬉しいような気持にも駆られた。

「実はわたし昔から、こういうの苦手なの。金魚すくいとかもそう。」
こよりをもらってきた谷口さんは、しゃがみ込みながら言う。
「すぐ糸が切れて、だめになっちゃう……」
俺は、彼女の後ろから覗き込むように、その様子を眺めた。
俺は昔からヨーヨー釣りが好きで、なかなか得意でもあった。
幼いころは夏祭りでもよくヨーヨーを何個も獲得したものだ。
少し上方からのこの位置は、皆の手元がよく見えて、様子を見るには持ってこいのポジションだった。

いきなり背後に立ったことで驚いたのか、ちょっとこちらを伺ってから、直ぐに下に視線を落とす谷口さん。
目の前でふわふわと揺れるお団子頭。
彼女の手元がかすかに、ふるえていた。
それを見て、俺は思わず言う。

「力……抜いた方が、上手くいくかも知れない。」
「え……？」
驚いたのか、びくっと身体を震わせて、こちらをふっと見上げる谷口さん。
「手元が震えるから。力……抜いて、ゆっくり下に落ろしていく感じが、いいと思う。」

俺のその言葉に呼応するように、視線がぶつかる。
だが、彼女はそれをまたすぐにそらしてしまう。
次の瞬間には、それはもうしっかりと、手元を凝視して。
「わ……わかった。がんばる。」
と、小さな声で言った。

谷口さんは、ふーっとひとつ息を吐くと、そーっと、こよりを下におろしていく。
俺はその様子を後ろから眺める。
そーっとそーっと、静かに。
こよりの先につけられた針金が、水面を揺らす。

「水……あまり水にこよりをつけたら切れてしまうから……表面の輪ゴムをひっかけるような……感じがいいと思う。」
俺は後ろからまたひとつ、言う。
谷口さんはうんと小さく頷く。
浴衣の右袖を左手で掴んで。
そして彼女は、正面より右手にあった、藍色ヨーヨーのゴムに針金をかけた。

「……やった！！とれたよ！！！」
それをそーっと持ち上げて、彼女は歓喜の声を上げた。
「はじめてとれたよ、まことくん！！」

俺を見上げ、とびっきりの笑顔を向けてくれる。
大きな瞳を人懐っこく細めて。
俺はその太陽のような表情に、魅入る。
あたりに花が咲いたような、もしくは光が舞い降りたような、そんな雰囲気。
柔らかい、本当に柔らかい春の日差しのような。
俺はその暖かさに包まれて、思う。

ああ、こんなことで、こんなに喜んでくれて。
本当に、なんて、この人は……。

……そんな、時だった。
「……あれ、谷口さん？」

俺の耳が。
絶対に出会いたくなかったあいつの声を。
確かに、彼女の名前を呼んだあいつの声を、とらえた。

「なんで谷口さんがいんの？！え、てか、谷口さんもこっちのお祭りに来てるなんて、オレっち知らなかったぜー！！」
「え、矢吹くん…？」

顔をあげてその人を確認した谷口さんは、細めていた眼をまんまるく見開いて、言葉をもらす。

俺は顔は上げずに目だけを動かした。
前方から、人波をかき分けるように、矢吹がこちらに向かって手を振りながらやってくる。
横に並んでいるのは、なんだか不機嫌な様子の知らないお姉さん。
後はよく見えないから分からない。
幸い矢吹は、帽子と顔を下に向けていたおかげか、俺を確認できていないようだった。

……だから、俺は。

「え?!まことく……?!」
「あれ、谷口さん?!」

谷口さんの腕を掴んで、逃げた。
人混みに紛れるように。
進んだ。
進んだ。

矢吹がいない方向へ。

4．"Odd　August"　－c5　『想出』

－c5『想出』

夏の夜は、長くも儚く過ぎ去っていく。
ただひたすらに急いで、急いで進むうちに、いつの間にかあたりの人混みは引いていた。
何故だろう、そこまで走ってもいないはずなのに凄く息が苦しい。
俺は肩で息をしながら、あたりを見渡した。
気がつかないうちに祭りの中心から離れた広場の淵にあたる場所まで来ていたらしい。
祭りの音が遠く聞こえる。

「ね……ねぇ、……まことくん……」
後ろから谷口さんの声がした。
今まで無我夢中で全く後ろを見ていなかった俺は、ハッとして振りかえる。
彼女の息はもうすっかり息があがってしまっているのか、肩を上下に揺らしながら頬を真っ赤にしていた。

「え、あ！！ご、ごめん……！！」
俺はすっかり我に帰って、掴んでいた彼女の腕を放す。
お、俺は……いきなりとはいえ、一体何を……！
自分のとんでもない行動に、内心頭を抱えた。
だが、彼女は首を横に振ってこたえる。
「ううん……だいじょうぶ。」

その眼は、とても潤んでいて。
遠くからの祭りの明かりを取り込んだかのようにきらり、きらりと光っている。
いつもの、ビー玉のような。
じっとこちらを見つめる、ふたつの瞳。
だが今の彼女の瞳には、いつもには無い、迫ってくるような、どこか力強いものがあった……。

「……え、あ！いや……え、ごめん……」
俺はとっさに言った。
これ以上こうしていたら、もう完全に飲まれてしまいそうだったのだ。
「あ……ちょっと、休む？」
広場の淵に上方へと続く石畳の階段が見えている。
俺はしどろもどろになりながら、そこを指さす。
谷口さんはゆっくり、コクンと頷いた。

俺たちは並んで階段に腰掛けた。
夏の夜の、熱を含んだ空気がしっとりと覆いかぶさってくる。
あたりには誰もいない。
俺たちが二人、ここにいるだけ。
そこまで遠くまで来ていないはずなのに、この空間だけ祭りからは切り取られた別の場所であるかのように、騒音が遠く、遠く聞こえた。

呼吸はなかなか整わない。
喉の奥が、胸の奥が、詰まってしまったかのように苦しい。
それは、早鐘を打ち続けてなかなか治まらないこの心臓のせいなのか。
鼓動が乱れたまま整わないのは、少し走ったせいなのか。
それとも……。

前方に明かりを見るだけで薄暗いこの場所で、俺達ふたりは、じっと黙って、そこにいた。
二人だけ。
時間が、流れる。
その流れは、ゆっくり穏やかに流れるような、はたまた一瞬で消えてしまう閃光のような、奇妙な感覚を伴っていた。

横で彼女がゆっくり呼吸する音が聞こえる。
耳を澄ませば、その胸の鼓動さえ聞こえるのではないかと錯覚するような、静かな空気。

彼女はじっと手元を見ていた。
さっきとった藍色のヨーヨーをじっと見つめている。
俺はその手元を視界の端に映しながら、ただ、祭りの風景を眺めるふりをする。
彼女の顔が、見られない。

目が合うと、何かが動き始めてしまいそうで。
止まらないまま加速して行きそうで。
俺にはそれが、その感覚が、怖かった……。

「ねぇ、まことくん。」
突然。
彼女が突然、静寂を破った。
俺はその呼びかけに、ふっと、彼女の方を見る。
……目が、合った。

「昔、さ。一緒にお祭りに行ったときのこと……おぼえてる？」
彼女は唐突にこう尋ねる。
「え……行ったことは覚えてるけど、そこまで詳しくは……」
「うん、ずっと、前のことだもんね。」
静かに頷く彼女。
「けど、わたしはおぼえてるの。」
少し首をかしげて、こちらをじっと見ながら、続ける。

「あの時……わたしがヨーヨーがつれなくて泣いてた時。まことくんが、それを見て、ヨーヨーをひとつ、取ってきてくれたんだ。」
彼女は手元のヨーヨーを触っている。何度も、何度も、確かめるように。
「すごくうれしかった。」

彼女はその言葉の一つ一つを、とても大事な想い出を大切に取り出すように、話した。
だが俺は、彼女の言うその“祭りの想い出”を全く思い出せないで

いた。
こんなに彼女の記憶に残っていたのに。
彼女の想い出の中の出来事を自分が何も思い出せないなんて…。

「だから、それからね。」
彼女はまた、口を開く。
「わたし、まこと“ちゃん”から、まこと“くん”に呼び方を変えたの。」
「え……？」
「“ちゃん”なんて、女の子を呼ぶみたいに呼んじゃダメだって、思って。ちゃんと男の子だって、思ったから。」

俺は言葉が出ない。
相槌の言葉さえ、出てこなかった。
そんな、そんなことを彼女が思っていたなんて。
俺は、俺は……。

「まことくん、いつの間にか、“のんちゃん”って呼んでくれなくなったね。」
彼女は、少しうつむき加減になっていた俺の顔を覗き込むように、言った。
俺はハッと、顔を上げる。
「え……！」
「えへへ、変なこと言って、ごめんね。」

彼女は少しはにかんだように笑う。
だが、スッと、その微笑みが抜け落ちて。
いつになく真剣な、どこか寂しそうな表情をして、彼女は続けた。

「実はちょっと、気になってたから……。」
「……そ、そんな、気にしなくても、よかったのに」
苦し紛れだった。
彼女がこんなこと、気にしているなんて、思ってもいなかった。
自分はただの幼馴染で。
ただ家が近いだけで。
たまたま親同士が仲が良くて、昔一緒に遊んでいたことがあっただけで、後はただのクラスメイトで、俺が一方的に気にしていて、それで……。

「わたしね。」
彼女は言う。
もう思考が焼き切れてしまいそうな俺に、言う。
「ずっと、まことくんに、さけられてると、思ってた。」
「そ……！そんなこと……！！」
俺は思わず声を荒げた。
そんなこと、あるわけがなかった。
俺は、俺は、ただ……。

「けど、思ってたの。ずっと話してくれないし。せっかく会っても、すぐどこかにいっちゃうし、さけられてるとしか、思えなかった。」
彼女の寂しそうな顔。
何かを思い出して、辛いとでもいうような表情。
だが、次の瞬間、その表情がぱっと晴れた。

「だからね。今日、誘ってくれて、すごくうれしかった！お祭り、すごく、楽しかった。一緒に逃げたりして、……うれしかった。」

彼女は、俺を、見詰める。
真剣な、憂いを帯びた、表情で。
じっと。
融けてしまいそうな程、しっとり潤んだ瞳。
視線と視線が絡まって、動けなくなる。

彼女の呼吸が聞こえる。
俺の呼吸は、止まる。
俺は、思考が、四肢が、麻痺する。

「ねぇ……なんで、のんちゃんって、呼んでくれなくなったの……？」

熱い。
あつい。
アツイ。
体が内側から熱で解かされていくようで。

「それは……」
“キミのことを気にし始めたから”
「それで……」
“ただそう呼ぶことが恥ずかしくて”

「だから……」
“どうしても、そう呼べなかったんだ……。”

声が出ない。
喉が熱い。
つっかえてしまう。
伝えられない。
怖い。
俺は……。

「だから……？」
彼女は、言った。
俺を、さらに見詰めた。
俺はその瞳の奥に、ぐっと、引き込まれ。
飲みこまれ。

さらに内側の熱が温度をあげて、俺の思考を、焼き切った。

「俺は……！！！」

『マコトとは、冬までの付き合いって契約してるんだから。』

突然だった。
切れた思考の片隅で、原野唯陽の声がした。

俺はその幻聴に、目を見開く。
あふれ出していた勢いが、止まる。
俺は。
もしここで谷口さんにこの言葉を言ったら。
……冬までの契約は、ここで、終わり？

次の瞬間。
ドーーーーン！！！！！
俺たちの頭上で、大きな音が鳴った。
一気に空が明るくなるのと同時に、ドッと大きな歓声が沸く。

俺たちは、ハッと我に帰って、まるで跳ねるように同時に、その場に立ちあがって上を見た。

頭上には次々に花火が上がっている。
俺は慌てて腕時計をみた。
時刻は２０時４０分。
気がつかないうちに、とてつもなく長い時間が過ぎていたのだ。

師匠の話していた派手な演出。
それは、祭りの最後にあがる、この花火のことだった。
“花火は男女のムードをいい方向へ持って行く”と師匠は語った。
だが。
今の俺達にとって、この花火は、ただの“ぶち壊し”でしかなかった。

「……花火、綺麗だね。」
俺は、ぽつりと言った。
「……うん。」
谷口さんも、ぽつりと答えた。

もう、切り取られたような空間は壊された。
二度と、戻らない。

俺たちはただ、その場に突っ立って、花火を眺めた。

4．"Odd　August"　－c6　『後夜』

－c6『後夜』

『今日はありがとう。とても楽しかった！　おやすみなさい。』

谷口さんからこんなメールが来たのは、俺たちが互いの家に入ってしばらくした後だった。
風呂から上がったばかりだった俺は、携帯を握りしめ、そのままベッドにダイブした。
蒲団はいつもよりふかふかしているように感じられて、俺はその中にじっと疲れた身体をうずめる。

あの後。
花火を見終わった俺たちは、そのまま何もなく、帰路についた。
何となく気まずいような雰囲気が流れていた。
明るいところへ行っても俺は谷口さんを直視できなかったし、谷口さんも俺の目を見ないようにしていたように思った。

俺はゴロンと仰向けに寝がえりをうつ。
広がる安堵感。
俺は初めて、自分が少しホッとしていることに気がついた。

俺はあの時確かに、告白しようとした。
あの空気の中で、確かに。

だが、今思えば。
もしあの時伝えてしまって、失敗していたら。
……俺は顔からサッと血の気が引くのが分かった。

花火があのタイミングで上がって、よかったのかも知れない。
俺はそう思うことにした。
後先考えない行動に出なくてよかったと、思おう。

“もうあんなチャンスはないかも知れないのに”なんて、思っては、いけない。
俺は静かな安堵感の底から吹き出しそうになる後悔を、押しこめた。

俺は立ち上がって、部屋の電気を消す。
今日はもう、寝よう。
今日はいろいろなことがあった。
俺の思考はもう回らない。
明日、師匠に報告のメールをして。
いろいろ考えるのはそれからでも遅くはないだろう。

眠りに落ちる前。
ふっと、俺は思い出した。

花火が上がる直前、聞こえたあの言葉を。

『マコトとは、冬までの付き合いって契約してるんだから。』

なぜあの時、俺はこの言葉を思い出したのだろう。

何故、俺は……。

底なしの眠りに引き込まれて、それから。

夢の中に現れたのは、“疑問”だけだった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…．

5．"Separate September" ―a1『強行』

『今年度は秋が飛んで、夏から冬になるでしょう』なんて恐ろしいことを天気予報が言っているらしい、九月上旬。
八月の終わりに二学期に突入してからもう二週間ほどが経過し、俺はすっかり学校の感覚を戻しつつあった。
だが、天気予報が言うように外はまだまだ真夏の陽気。
太陽はまだこれでもかという位真上から照りつけてくるし、気温はまるで当然とでも言うように３５度を超えてくる。
これはもはや“残暑が厳しい”なんてレベルではない。

だがしかし。
誰が何と言おうが、矢吹が教室で『まだ俺の夏は終わってねえ！』なんて叫んでいようが、世間の流れはもう秋である。
気の早い雑貨屋さんなんて、もうハロウィングッズを店に並べ始めているのだ。

秋は良い。
一番過ごしやすい季節だ。
食欲の秋、食べ物の秋、読書の秋、芸術の秋、……そして、そう。
学生にとっては、文化祭の秋。

我が鷹尾高校でも、１０月中旬付近に行われる文化祭、『鷹尾祭』

に向けての準備が着々と進められていた。

俺は今、教室の窓際の一番後ろというベストポジションにある自分の席に座っている。
もう机の中に沈み込むくらいの勢いで、椅子に深く腰掛けて、ぼーっと考えごとをしていた。
この場所は一人で物思いにふけるには絶好の場所である。
なんせ、一番後ろの席なのでクラスメイトからの視線がない。
太陽の日差しが少々暑かったが、これもカーテンのおかげで何とか弱まっている。

俺はぼんやりと前を見る。
考えごとの、論題は。
……教卓の前に立ってはきはきと鷹尾祭のクラスの出し物を決めるための進行を行っている、谷口和についてだった。

鷹尾祭りに行ったあの日から、俺たちは以前よりは会話をするようになった。
……まぁ、以前の会話ゼロの時点と比べて、ではあるが、それでも進歩は進歩である。
お祭りの時に頑張ったおかげか、俺も少しは谷口さんに普通に話せるようになったし、谷口さんも俺に気さくに話しかけてきてくれるようになっていた。

だが。
お祭りの最後の何となく気まずいような雰囲気は、まだ俺たちの中に残っていた。
何が具体的に気まずいというのはないのだけれど、漠然と気恥ずかしいような空気が消えないのである。
これが、谷口さんとの会話がいまいち弾まない原因となっていた。

『それはきっと、お祭りの時に何か中途半端なことをしたせいね。』と、我が師匠、原野唯陽はこの現象を分析する。
『貴方、彼女が悩むような、何か中途半端なことしたんじゃないの？』
……心当たりが無いわけではなかったが、当にこれに違いないという確信もなかったので、俺はこの指摘の解答は出さなかった。

目の前で谷口さんがハキハキと話している。
谷口さんはクラスの文化委員を務めており、鷹尾祭の準備に熱心に取り組んでいるようだった。
もう早くもクラスの出し物は決まり、後は、文化委員の補佐をするお手伝いを一人、選出するという項目だけが残されていた。

「このお仕事、きっと楽しいとおもうの。だれか、いっしょにやりませんか？」
谷口さんが前で一生懸命喋っている。
俺はさっきから全く進行を聞いていなかったので気づかなかったが、

どうやらなかなか立候補は出ていないらしかった。

そりゃ、きっとみんな、面倒くさいのだろう。
俺もそれは痛く理解できた。
文化祭は大変である。
必ず一度はクラスがもめるし、喧嘩が起きたりもする。
そして、こんな問題が起きないために一番重要なのは、これをまとめて仕切る人なのだ。
それに加えて、仕切り役は忙しい。
文化祭前は皆忙しくなるのに、それに輪をかけて忙しいのだ。

自分には出来ないな……と、俺は思う。
“谷口さんの補佐”というのは少々気になるところだが、俺には師匠との厳しい修行が待っている。
これと補佐を両立できる自信は無い。

……そこでふと俺は思い当たる。
そういえば最近、修行がないな……。
原野さんも鷹尾祭の準備で忙しいのだろうか。
後でメールしてみないといけない……。

「これさあ、誠が補佐やったらいいんじゃねーの!?」

いきなりだった。
俺の思考はぶちっと切られた。
ガヤガヤとしていたクラス中に、矢吹の大声が響き渡ったのだ。

……はあ?!
俺は思わずガタッと椅子の上でずっこけた。
「な……!!」

「だからさー、誠がやったら丁度いいんじゃね?谷口さんとも家近いしさ、帰りが遅くなっても二人で帰れるから安心じゃん!」
教室の丁度中央あたりに座っている矢吹は、いつもに増して大声でクラスに呼び掛ける。
俺はいきなりのことに何が起こっているのか理解がついて行かない。
そんな俺のわずかな抵抗など、矢吹の言葉に口ぐちにささやき始めたクラスメイトたちに届くはずはなかった。

「……確かに。」
「中澤だったらちゃんとするだろうし……」
「まあ……のんちゃんなら幼馴染だし……中澤君でも……」
「わたしも文化委員やればよかったかも……」

予想外に次々と聞こえてくる肯定の声。
俺はもっとパニックになる。
ちょ……ちょっと待て!!!

「ちょ、ちょっとみんなっ、そ……そんな、迷惑だよ、おしつけちゃ」
谷口さんも、もうすっかり慌ててしまって、教室の前で一人、わたわたしている。
だが矢吹はそんなことは些細なことは気にしない。

「いいのいいの！誠だったら大丈夫だって！」
クラス中の賛成のささやきに満足そうにうなずくと、矢吹は言った。

「んじゃあ、決定だな！」

そしていつものように、カハハと笑って。
俺を振り返り、得意げな顔を向けてくる矢吹。
こちらに向けてグッと、親指を立てている。

……なるほど、これが『余計なお世話』というやつなのか。
と、俺は身にしみて思った。

5．"Separate September" ―a2『迷想』

いくら師匠との修行で度胸がついたとはいえ、クラスのほぼ全員が賛成の声あげているのを覆すことなど、俺にできるはずがなく。唖然として反論もできない俺と、慌ててそれを制そうとする谷口さんを押し切る形で、俺は“文化委員補佐”に決定してしまった。

俺は戸惑いと後悔で席から動けないでいた。

俺に押し付けることでスムーズに話し合いが終わり、クラスメート達は早々と教室を出て行った為、クラスにはもう数名しか残っていない。

もちろん帰宅部の俺も、話し合いが終わると共に早々と教室を出るつもりだった。

……というのに。

谷口さんと二人で委員なんて、一ヶ月前の俺なら嬉しさで飛び上がっていただろう。

もちろん、心の中で、だが。

だが今は……できれば二人になりたくなかった。

なんとなくだが、あの夏祭り以来お互い感じている、気まずさや気恥ずかしさを、どう対処したらいいか分からない。

…いや、俺には対処できない。

あぁ、やっぱり矢吹には、余計なことをするなと釘をさしておくべきだった…。

俺は今更ながら後悔する。
…今まで、矢吹に俺の気持ちを知られてしまったと言っても実害はなかった。
それは俺や師匠が気を配っていたのもあるし、8月の時のようにただ運が良かったということもあるのだが、それでもそれはただの杞憂にとどまっていた。
今まで漠然と抱いていた『矢吹は余計なことをしてくるかもしれない』という予感の通り、やはり、奴に知られているということは大きなデメリットだったようである。

できることなら5月に戻って、あの時の俺に活を入れたい。
『おい、自分！ここでテンパったら矢吹にばれて面倒なことになるぞ！』と。
そうしたらもっと動きやすかっただろうし、予想外の事態も起きなくて済んだだろうに……。

俺は、クラスメイト達と楽しそうに会話をする矢吹を見やり、がくっとうなだれた。
ああ、どうしてこんなことに……。

テンションがさらに落ち込みかけた次の瞬間、突然ポケットに振動を感じた。
俺はそれに一瞬びくっとしたが、最近はまた鳴ること自体が珍しくなったそれを取り出す。
なんとなく画面を見た。
そこには。

『原野唯陽』

俺は表示された文字を見た途端、思わず背筋を伸ばした。
久しぶりの連絡である。
若干緊張しながら受信ボタンを押す。

『５時に鷹尾神社集合。遅刻厳禁』

…師匠らしいシンプルなメールだった。
俺は最後の四字熟語を見た途端、ぱっと顔をあげ時計を確認する。
時刻は４時１５分。

…１５分間もうなだれていたのか。
改めて自分の情けなさを知り、はぁ、と息を吐く。
本当に、なぜこんなことになってしまったのか。
そもそも俺をこんな状態にした原因は、矢吹である。
…急がなければいけないが、やっぱり一度釘をさしておくか。

そう思い、俺は帰り支度を済ませ、数人の男子クラスメイトの中心で一生懸命何かを叫んでいる矢吹の方へ向かった。

5．"Separate September"　－a3『残念』

「だあーから！ほんとだって！！」
何かを興奮して伝えているようだ。
「原野と鷹尾祭りに行ったんだって！！」

矢吹は、満面の笑みを浮かべながら、クラスメイトに師匠と祭りに行ったことを、大きい声で自慢していた。
師匠が俺と谷口さんの為に行った作戦とは知らず、嬉しそうにしている矢吹を見ていると、俺の心は罪悪感にさいなまれた。
…ごめんよ、矢吹。
俺は、心の中で呟き、矢吹を遠い目で見つめた。

だが矢吹はそんな俺の視線には気づかず、自慢話を繰り広げる。
「いや～、最初はオレっちもびっくりしたんだぜ？でも、よく考えたら、オレっちと原野って幼馴染じゃん！…これはキタなって」
矢吹は、おそらく自分の中ではキマッテいるのであろうポーズをとり、そして、これまたキマッテいるのであろう顔をしている。

ここで、矢吹の周りで大人しく聞いていたクラスメイト達が呆れたように口を開いた。
「矢吹…夢は所詮、妄想だぜ？」
「現実を見ろ！！矢吹！」
などなどの酷い言葉を投げかける。

しかし矢吹はそんなことには全く動じない。
まだ続けているキメ顔で、さらにふっと笑った。
「…皆の衆、それは嫉妬というものか？」
矢吹の言葉に俺はひやっとする。
こんなことを言って、反感を買ったらどうするんだ…！
俺は、恐る恐るクラスメイト達を見た。

しかし、彼らは俺の予想とは大いに違う反応をしていた。
彼らは矢吹を憐みの目で見つめ、そして肩に手を乗せ静かに首を横に振る。
「…矢吹、もういい。」
「今日は、俺らが奢るから。」
そして、穏やかな笑顔を浮かべ、ゆっくりと頷いた。
矢吹は、キメポーズのまま、ポカーンとしていた。

だが、ここですんなり食い下がる矢吹ではない。
状況を把握すると、彼は何故か半泣きになって、勢いよく机の上に立ちあがった。
「てめーら！！いいかげん信じろよ！！オレっちは嘘はつかない主義なんだぜ！！？」
まるで駄々をこねる子供のようである。
俺は何だか残念な気分になって、そんな矢吹を見つめていた。

すると。
机に乗って視線が高くなったことで今までクラスメイトに隠れていた見えていなかった俺に気づいたのか、矢吹は俺を見て、表情をぱあっと明るくさせた。
机から勢いよく飛び降り、俺の方へ駆け寄ってくる。

そして、俺をびっと親指で指し、今までの表情はどこへやら、クラスメイト達にニヒルな笑顔を向けた。
「…まぁ、待ちたまえ。そんなに信じれないのなら、子奴に聞けばよい。のう、誠よ。」
矢吹はきらきらした眼差しを俺に向けてくる。
なんでいきなり口調が変になったんだろう。
この発言により、クラスメイト達の視線を一気に受けることとなった俺は、
「あー…」
と思わず間抜けな声を出した。

クラスメイト達は口々に「嘘だよなー、中澤」「矢吹に合わせなくていいぞ」などの、矢吹にとっては酷い言葉を投げかけてくる。
ここは彼らに合わせて空気を読むべきか、とも考えたが、矢吹があまりに、俺に期待を寄せていたため、本当のことを言うしかなさそうだった。
「…本当だよ」

俺が言葉を発した瞬間、一瞬時が止まったかと思った。
全員が一斉にフリーズしたのだ。
俺の言葉を理解出来なかったのか…いや、正しくは理解したくなかったのかもしれない。

一方矢吹はというと、満面の笑みを浮かべ、満足気である。
「なっ!!言っただろ!なっ!!ほんとだろ!」
俺は、まだフリーズしていたクラスメイトに、残念ながら本当だよ、と付け足した。
その言葉にクラスメイト達は、「まじかよ…」「…嘘だろ」と口々

にため息を漏らす。
言いたい放題である。
俺はクラスで特に目立つこともせず真面目に取り組んでいる為、どうやらクラスメイトの間では“『中澤誠』は真面目な奴”と認識されているらしかった。
だから、恐らく証人としては充分だったのかもしれない。

一方矢吹はというと、一緒に祭りに行ったことを事実と受け入れた様子の彼らを見て、勝ち誇った表情を浮かべていた。
俺はその表情に若干呆れたが、今回ばかりは本当のことだから、仕方がなかった。
でも、俺が彼らの立場なら、絶対信じないだろうな…。
いや、信じたくないだろうな…矢吹には悪いけど。
俺は、クラスメイト達に憐みの目を向けた。

しかし。
次の瞬間、うなだれていた彼らの内の一人が、何かを思いついたように顔をあげた。
「なぁ、俺、思うんだけどさ…そのメール、吉井さんに送ろうとしたんじゃねーか？」
その言葉を聞いた途端、うなだれていた他のクラスメイト達の顔が、ぱっと明るくなるのが分かった。
「絶対そうだ！」「間違いない！！」とみんな一斉に声をあげる。
俺は初めて聞いたのだが、『吉井さん』という人物はなかなか有名なのか、クラスメイト達は全員知っている様子だった。

「原野さん、吉井さんを夏祭りに誘おうとして、アドレス帳で選択を間違えたんだよ！ほら、矢吹、吉井、って多分並んでるだろ？」

矢吹には悪いが、俺はその勝手な解釈を聞き、他のメンバーと一緒に頷いていた。
なるほど、確かにそう考えたほうが自然だ。
空想ながら、なかなか納得させられる意見だと思う。

だがやはり、かわいそうなのは矢吹で。
「なんなんだよ、お前ら！そんなに信じないならメール見せてやるよ！！」
矢吹はおもむろに携帯を取り出し、師匠からのメールを俺たちへ突きつけてくる。
そこには、師匠らしいシンプル且つ、分かりやすい文章が並んでいた。

「鷹尾祭り一日目、一緒に行きませんか？」

…って矢吹、このメールを保護してるのか。
そんなに嬉しかったのか。
…悪いことしたかな。

俺がぼーっと考えている間にも議論は激しく続いていた。
「だから、このメールを吉井さんに送ろうとしたんだよ！」
「もしお前らの言う通り送り間違えたんなら、原野から間違えたってメールがくるだろーが！」
「それは…。原野さんがお前にメールする前に、お前が返信したから、悪くなって諦めたんだよ！！どうせ、メールが来て一分も経たない内に、返信したんだろ！？」
「…うっ」
いや、頑張れ矢吹。
お前が正しいんだから。

「な…なんだよ、お前ら!!でも鷹尾祭りに一緒に行ったのは本当だから、経緯なんてどうでもいいんだよ!」
どうやら、矢吹は間違いメールだったと認めてしまったらしい。
根拠は無いのに妙に納得させられる意見に矢吹も折れたのだろう。

すると、矢吹と口論していた一人が、半泣き状態を持続している矢吹の肩にそっと手を置き、諭すように口を開いた。
「俺たちはお前が勘違いしないように、言ってるんだ。矢吹、鷹尾祭りのことは一夜の幻と思え。」
どうして俺のクラスは、矢吹を筆頭に、こうもユニークな奴らが多いのだろう。

一方矢吹は、もう完敗だとでも言うように、がくっと頭を下げていた。
だが、悔しそうにばっと顔をあげ、勢いよく叫ぶ。
「もういい!誠、帰ろうぜ!!」

こんな可愛そうな状態の矢吹の誘いを断るのは気が引けたが、このやり取りを聞いている内に時刻は4時30分を回ってしまっていたいた。
これは直行で行かないと間に合わない。
俺は、師匠のメールの『遅刻厳禁』の文字を思い出した。
…師匠との約束は絶対である。

「あ……ごめん、俺、ちょっと用事が……」
俺のその言葉を聞いて、矢吹は一瞬動きを止めた。
こちらを振り向く。
なんだか半泣きから涙目になっていた。

「お……お前！！友達だと思ってたのによー！！！」

矢吹はそう叫び、教室を出て行ってしまった。

悪いな、矢吹……。

俺は心の中でもう一度謝り、矢吹の背中を見送った。

5．"Separate September"　－a4『変容』

…あ、矢吹に釘をさすのを忘れていた。
一番肝心なことを……。
仕方ない、今日メールでもするか。

俺は、教室を出て急ぎ足で歩いていた。
思わぬところで時間を食ってしまった。
谷口さんにも今回の件について、フォローしておこうと思っていたのに。
特に何か言いたいことがあるわけではなかったが、なんとなく、そうしないといけない気がしていたのだ。
だが、今となってはそんな時間はない。
計画が丸つぶれである。

それはおろか、これはもう急がないと師匠との約束に間に合わないかも知れなかった。
早くしないと……。
そう思ってより足を速める。

……だが。もう少しで階段というところで突然、視界にふわふわしたものが入ってきた。

俺は慌てて急ブレーキをかける。

もう少しで完全にぶつかるところだった。
「す…すみません!!」
俺は思わず謝る。
相手はびっくりしたように目をまん丸にして、その場に立ちすくんでいた。
……その姿は。
「え…まことくん?」
谷口さんだった。

いきなりのことに頭の回転が完全にストップした。
「え!……あ…」
口から言葉ともいえない言葉が漏れる。
さっきまで話さなければいけないと思っていたはずなのに、何を話したらいいかわからない。
気まずい沈黙がながれる。谷口さんもその空気を感じたのか、持っていたプリントをぎゅうっと抱きしめ、俺からすっと視線を逸らした。

これは……これは、この空気を何とかしないといけない。
俺は、この居心地の悪い雰囲気をどうにかして打破しようと、考えも無しに口を開いた。
「あ…残ってたんだ?」
俺の言葉に、谷口さんはぱっと顔をあげ「委員会だったの。」と答えた。
「あ、そ…うだったんだ。」
そして、沈黙。

……。
馬鹿だろ、俺。

いきなり会話を終わらせてどうする。
谷口さんが委員会に行っていたことぐらい彼女を見ればすぐに分かるし、それからでも話の膨らませようはいくらでもあるのに……。

だが今さらどうしようもなくて、俺は何とか新しい話題を探す。
探す。
泳ぐ目線の少し下で、なんだか不安そうな、複雑な表情をしている彼女。
さらにしまったと思い、とにかく何かを話そうとしたが、まったく言葉が出てこなかった。
さらなる沈黙が走る。
俺はもはや、どうしようもなくなる。
やばい、やばい、どうすれば……。

ここで。この空気を破ったのは、谷口さんだった。
「…あ、文化委員の補佐役、まことくんにおしつけちゃう形になっちゃって、ごめんね。」
彼女はそういうと、俺にぺこりと頭をさげた。
俺は慌てる。
彼女に謝られるなんて思ってもいなかった。
まるで条件反射するように、否定の言葉を並べる。

「いや…谷口さんの、せい、じゃないよ…！それに…ほら！…俺、暇だし…！」
俺は必死に弁解した。
“嫌々引き受けた”なんて思われたくなった。
あくまであいう形になってしまっただけで、やりたいかもとか思っていたわけだし、こういう結果になったのもそもそもは矢吹のせ

いなんだから、押しつけたなんてそんな、全然谷口さんは思う必要もないわけで……。
相変わらず思っていることを言葉にできず、しどろもどろになる。

だが彼女はそんな俺を見て、ふっと笑った。
こわばった表情が緩む。
そんな何気ない仕草に、俺の心臓はとくんと跳ねる。
「よかった。まことくん優しいから。いやなのに断れなかったんだとおもって…。謝らないとっておもってたの。」

“いやなのに断れない”、か。
俺は、まだ谷口さんが“俺が彼女を避けている”なんて思っているのかと思うと、少し悲しくなった。この前やっと、“避けてなんかいない”と弁解出来たが、今まで話さなかった時間が長かった為、俺たちの間には誤解が何重にも絡まって、“友達以下”からのスタートになってしまっていた。
俺が長い間、彼女に誤解させるような行動をとっていたから。

…もしかしたら、今日は自分の駄目さに改めて気づく日なのかもしれない。
俺は沈んでいく気持ちをごまかすように、返事をする。
「嫌じゃないよ。…びっくりしたけど…。」

だが、…そんな俺の誤魔化し混じりの言葉に。
そんなくぐもった言葉に、谷口さんは、満面の笑顔ではにかんだ。
「…よかった！」

明るくてまっすぐな微笑みに、俺は見入る。
俺はふと昔を思い出した。
“のんちゃん”と一緒に遊んだ日々。
その微笑みは、幼いとき、彼女がよく自分に向けてくれていた表情だった。

…もしかしたら、彼女とのここ何年間もの溝が少し縮まってきているのかもしれない。
誤解が解けて、彼女も昔のような関係に戻ることを望んでくれているのかもしれない。
そう思うと、さっきの沈んだ気持ちがすっと消えていくのが分かった。

つくづく、俺は谷口さんに振り回されてしまっていると感じる。
彼女の一つ一つの何気ない言葉や行動が、俺の考え方や気分を変える。
さっきまで悩みの種だった矢吹の『余計なお世話』が、今では『ナイスサポート』という言葉に変換されていた。
矢吹に釘をさすのは、また今度でも……いいのかもしれない。

じっと彼女を見ながらそんなことを考えていると、その表情がふと表情を変わった。
まるで、小さい女の子が内緒話するようないたずらっぽい微笑みで、彼女がささやく。
「わたしね。ほんとは、まことくんが文化委員の補佐役をしてくれたらいいなっておもってたの。」

彼女のいきなりの言葉に、俺の思考は止まる。
「まことくんとだったら、安心してできるし、たのしいなっておも

って…」
そう言いまたはにかんで、少し俯く谷口さん。
もう、俺はショート寸前だった。
体温が顔に集まっていくのが分かる。
耳が焼けるようにあつかった。

応えないと…俺も、谷口さんとだったら嬉しいって…！
頭では分かっているが、やはり、言葉には出来ない。

谷口さんは固まっている俺を見て、はっと目を見開くと、焦ったように口を開いた。
「え、あ、ごめんね…！なんか困るようなこといっちゃって…！」
そして、彼女はしゅんと、俯いてしまった。
俺は、つっかえてでなかった声を振り絞った。
「俺…頑張るよ、文化委員の、補佐役…」
彼女の言葉には何一つ応えられていないが、これが今の自分の精一杯だった。
そんな俺に、彼女は視線だけをこちらにあげて、ちょっと首をかしげて微笑んだ。

その後。
彼女は、文化委員補佐役の仕事を教えてくれた。
俺には、一生懸命話してくれている彼女の声は入ってきていなかった。
ただ、彼女を見てぼーっと考えていた。

夏祭りの日。俺の気持ちをもし伝えたら、どうなっていたのだろうか。

彼女は受け入れてくれたのだろうか？

…もしかしたら彼女は、俺が言いかけた言葉を実は分かっているのではないだろうか。

俺の思考は、ただ一つのことをぐるぐる、ぐるぐると回る。

もし……あの時……もしかしたら彼女は……谷口さんは……分かっていて……俺は……

……何故あの時、師匠の言葉が浮かんできたんだろう。

師匠。

そのワードで、頭の中のぐるぐるが急にストップした。

…あれ？何か大事なことを忘れていないか？

俺は、時計を見る。

時刻は４時４５分。

遅刻厳禁。

５時集合。

遅刻厳禁。

修業。

遅刻厳禁。

……ああああああーーーーーーー！！！！！

一気に青ざめた。
やばいやばいやばい。
冷や汗が一気に噴き出す。
息が浅くなる。
完全に忘れていた…！！
肝心の、一番の優先事項だったはずの師匠との修業は、一連のやり取りのうちにすっかり忘却の彼方へと吹っ飛んでしまっていたのだ。
嗚呼、今から向かっても確実に遅刻だ…。

様子が一気に変わった俺に気づき、谷口さんが「まことくん？」と顔を覗き込んできた。
いつもなら、どうしようもなくなるようなそんな谷口さんの仕草でさえ、今の俺には無意味であった。
普段とは違う意味で一瞬、くらっと眩暈がして。

俺は「ごめん…！ちょっと、あれだから、また、教えて…！」と彼女にとぎれとぎれに告げ、鞄をかかえて前につんのめるような格好で、その場から走り去った。

もしかしたら、俺が振り回されているのは谷口さんではなく、師匠かもしれない。

5．"Separate September" ―a5

―a5『許容』

現在時刻は5時15分。
集合時間は5時。
俺は15分遅れで鷹尾神社に到着した。

完全に息が上がっている俺。
…そして目の前には…私服ですべり台に隣接しているジャングルジムにもたれかかっている原野さん。
黙ってこちらを見ている。
……見ている。

「…メール、見たわよね？」
「…はい。」
……怖い。
先月の出来事がフラッシュバックしてくる。
なんで俺はこう、師匠を怒らせてばっかり……。

「遅刻厳禁よね？」
彼女がそう言ったので、俺はその台詞にかぶせるように
「すみません！！！」
と謝った。
これしか方法が思い浮かばなかった。

「……まぁ、いいけど」
そう言い、彼女は汗だくの俺からふいと視線をそらす。
そして、ジャングルジムから降りると、鷹尾神社の入口のほうへ歩いて行ってしまった。

……やばい。
これは本格的に怒らせてしまった。
頭の中では、一ヶ月前の陽翔さんの家での出来事がフラッシュバックしている。
…いや、これは本当にやばい…。
今は陽翔さんもいない。
一人でこのピンチを切り抜けなくてはならない。

谷口さんと別れてからの俺のスピードは、凄かったと思う。
恐らく、１６年間生きてきて１番の走りだった。
タイムを測れば今までで一番速かっただろうに…と思うくらい。
この時ばかりは周りの反応を気にしている余裕など無かった。
だから、学校の生徒達の驚きの声なんて俺には…。
……いや、ばっちり聞こえてたけど…。
あぁ…明日学校に行くのが憂鬱だ…。

いや、今はそんなことどうでもいい。
師匠はおそらく帰ってしまった。
追いかけないと。
追いかけて謝って……許してくれるだろうか……。

そんな時。

じゃりっと、後ろから足音が聞こえてきた。

師匠が帰ってきた?!

まだ家に帰った訳じゃなかった!

俺は、勢いよく振り返り、思いきり頭を下げた。

「本当に、遅れて、すみません!」

最良の方法を実行する。

もう腰の角度が90度を超えるくらい頭を下げていた。

「…はあ。」

頭上でため息が吐かれた。

頭を下げている為、彼女の表情は分からない。

俺は次の言葉を待つ。

どんな言葉も甘んじて受ける覚悟はある……!

だが、彼女の次の言葉は。

「…いいって言ったじゃない。別に怒ってないわよ。それにマコトを見れば、走ってきたことも分かるし…」

「……へ?」

思ってもみなかった師匠の返答に、間抜けな声がでる。

顔をあげると、なんだかあきれ顔の原野さん。

そして彼女は、俺に右手を突き出した。

「はい。」

その手には、ジュースが握られていた。

何が何だかわからない俺にそれを渡すと、彼女はまた、ひょいっと

ジャングルジムに飛び乗り座る。

俺は、師匠からもらったジュースを見つめ、感動していた。
まさかこんないいことがあるなんて。
…あぁ、全力で走ってきて良かったな。
大袈裟かもしれないけど、人間頑張れば必ず良いことだあるんだな…。

俺がそんなことを思っていると、いきなり手元からジュースが奪われた。
……え?!
俺はいきなりのことに目を見開く。
まさか、『渡しただけでした』とか言うオチ……?
またジャングルジムから降りてきたのか、目の前の原野さんは、俺から奪ったジュースを片手に、なんだか照れているような怒っているようないぶかしんでいるような微妙な表情をして立っていた。

「…別に毒なんて入れてないわよ。飲まないならあたしが飲むけど…」
そう言いキャップを開けようする。
俺は慌てて、原野さんからジュースを奪い返す。
そして、
「飲みます!飲みます!!ありがとうございます!ほんと!!」
ジュースをさらに強く握りしめた。
テンションが急上昇していくのが分かった。

そんな俺を見て、彼女の微妙な表情が和らいで。
「……はは っ！」
原野さんは吹きだしたように笑った。

俺は原野さんの優しさに感動しながら、一口ジュースを飲んだ。
何故かいつもより美味しく感じるなあ。
俺はぼーっとそんなことを思った。

5．"Separate September" ―a6『再認』

「原野さんのクラスは文化祭何するんですか？」
俺は、ジュースを飲みながら、ジャングルジムにのっている師匠を見上げた。
師匠は「ん？」と声を発すと、足をぶらぶらさせながら答えた。
「…劇」
その声に少し不満さが感じられたが、俺は質問を続ける。
「へえ。劇かぁ…何をするんですか？」
「…リボンの騎士」

……なるほど。なんとなく分かったぞ。
俺は確信を持って原野さんに言う。
「原野さん、主役でしょ？」
この言葉に彼女は苦い顔をして頷いた。
俺は納得する。

「嫌なんですか？」
「別に…主役をやるのはいいのよ。」
「…じゃあ、何が嫌なんですか？」
「練習。出なくちゃいけないでしょ？…面倒だなって」

俺はここ４カ月彼女を見てきて分かったことがある。

彼女は凄く“面倒くさがりや”だ。
今の表情もそうだ。
一見クールに見えるが、こういう表情の時はだいたい心の中で「面倒だな」と思っている。

そんな彼女に苦笑いを浮かべながら、俺は聞くまでもないことを言葉にした。
「推薦ですか？」
師匠は俺を見て、コクっと頷いた。
「ぼーっとしてたのよ。そうしたら吉井が勝手に推薦して話進めてたみたいで…。気づいた時にはもうほとんど決まってて、拒否権がない状況だったのよ…」

なるほど、やはりそうか。
俺は納得した。
やはり原野さん、クラスでも人気者のようである。

それと同時に、俺は“吉井”という単語が耳に残った。
この名前、確かクラスでも聞いたような気がする。
どういう関係なのだろうか。
「…吉井さんって、仲良いんですか？」
俺の質問に原野さんは首をかしげる。
そして「んー」と唸った。
「…入学して初めに声をかけられたのよね。それから何かと一緒にいるけど…。」
そう言いまたも首をかしげる。

師匠…それを仲良いっていうんですよ。
俺は心の中で突っ込む。

話を聞いたところ、例の“吉井さん”は矢吹に近いところがあるのかもしれない。
多分一方的に気に入られて、それからくっつかれているのだろう。
でも吉井さんのことを話す原野さんの様子から、嫌ではないことが分かる。

あぁ、俺と矢吹の関係に似てるな…。
俺はふと思う。
俺も初めは、矢吹にいきなり話しかけられてつきまとわれて「何だ、こいつ」って思っていたのだが、今は一緒にいるのが当たり前だし、もちろん嫌じゃない。
寧ろ一緒にいない方が気持ち悪く感じる。
きっと原野さんと吉井さんもそんな感じなのだろう。

「マコトのクラスは何やるの？」
そんなことをぼんやり考えていると、原野さんからいきなり声をかけられる。
「え…あぁ、一応、喫茶店です。」
「へぇ～。もう役割分担決めたの？」
「それはまだですね。喫茶店っていうのも今日決まりましたから。」
「ふ～ん」
原野さんは足をぶらぶらさせている。

すると、師匠は何かを思いついたのかいきなり「あ！」と声をあげると、ジャングルジムから飛び降りた。
「マコト、ウエイターしたら？」
「え…？」
いきなりの師匠の言葉に頭が”？”になった。

「ウエイターって人前に出て、知らない人と話さないといけないでしょ？だから、修行も兼ねて」
師匠は名案を出したという満足げな表情を俺に向けてくる。
だが、今回は俺には断る理由があった。
「あ…俺、文化委員の補佐役なんで…。多分、経営方面です。」

俺の言葉に師匠は驚いた表情になる。
「へぇ～。珍しいわね。それってあたしのクラスでは立候補制だったけど…」
そしていきなり師匠がニンマリと笑った。
「もしかして…例の彼女が文化委員だったり？」

俺は驚いた。
こういう時の師匠のカンは凄く鋭い。
「…はい」
俺が答えると、師匠は「え…！？」と声をもらした。
どうやら冗談で言っていたらしい。

「マコト…立候補したの？」
師匠が期待を込めた眼差しで見つめてくる。
おお…これは新しい反応だ。
その思いに応えたくて俺は、思わず“はい”と答えそうになった。
だが。
『これからは絶対、私に、嘘つくな！！！これも契約に加えます！！！』

俺はこの言葉を思い出し、言葉を喉の奥でぐっと止めた。
原野さんを怒らせてしまったあの日…彼女に言われた言葉だった。
もしまたこの嘘がばれたら、契約違反でどうなるか分からない。

…とにかく、原野さんをがっかりさせてしまうのは嫌だけど、怒られるよりはマシだ。
そう決め、俺は本当のことを話す。

「あ…いや…矢吹の推薦です…」

その言葉で、俺から師匠のキラキラした眼差しが外されたのは悲しかったが、これでいいと少し沈む心に言い聞かせる。
「…まあ、そうね。流石にまだそこまではね。でも…結果オーライで良かったじゃない」
「はい…」

「矢吹のおせっかいも、たまには役に立つのね」
師匠はそう言いながらぶらんこに移動する。
俺もついていく。
ぶらんこに乗った彼女は、まだ「珍しいこともあるものね」と呟いていた。

彼女はブランコをこぎ始めた。
何かを考えているようだ。
そして、自分の前に立っている俺を見上げて話し始める。
「マコトも矢吹のおかげで文化委員補佐役になれたし、あたしも劇の練習があるし…。…とりあえず、修行は今までより頻度を減らさないとね。」

俺は彼女の言葉に頷く。
正直、文化委員補佐役になった俺は、文化祭に対して積極的に…クラスでは中心になって、頑張らないといけないだろう。
…出来れば傍観者レベルでいたかった。

だが、もうそんなことは言ってられない。
…文化祭は盛り上がる分、もめごとも多いからなぁ…。
今回はそれの中心になるのか…。

そう思うと、今からため息が止まらない。
そういうことも含めて考えると、今まで通り放課後に修業をするのは厳しかった。
…時間的にも、体力的にも…もちろん、精神的にも…。
だから、この師匠の言葉は俺にとって凄く有難かった。

「…じゃあ、お互い頑張りましょう。」
師匠がそう言い、立ち上がる。
考えごとをしていた俺は、師匠の言葉で我に返り、「はい」と答えた。

5．"Separate September" ―b1

―b1『会議』

九月下旬。
まだまだ暑い日が続いている。

文化祭まであと二週間を切った今、だんだんと文化祭の準備にも熱が籠ってきていた。
我が鷹尾高校は行事ごとになると、かなり熱くなる傾向がある。
それはどんなに小さな行事であっても、だ。
その為、学校1盛り上がる行事…文化祭においては、もう既にかなりの盛り上がりを見せていた。

だが、文化委員補佐役の俺はここまでこれといった仕事はしていなかった。
ほとんどの仕事を谷口さんが一人でこなしてくれていたからだ。
そのおかげで俺は、放課後もいつもよりは遅いといえども、まだ夕方といえる時間には家に帰りつけていたし、文化祭だからといって忙しくは無く、割といつも通りの日々を過ごせていた。

……が、彼女一人に背負わして自分だけ楽をしていると知り、流石の俺でも“これでは駄目だ”と思い、本格的に忙しくなり始める今、“せめても”と遠慮する彼女を押し切り、文化委員の会議に来ている。

……はずなのに…今の俺は前でまじめに話している文化委員長の話は全く耳に入ってきていなかった。

「ねぇ？？言ったでしょ！」

「本当だ…。初めて見たけどカッコイイね～！」

「初めてとか遅くない？わたし、入学式から中澤くんのこと知ってるもん♪」

「え～！？すごいね…。…でも、年下無理！…とか言ってなかったっけ？」

「中澤くんならいいの！！あ！あとでメアド聞こうっと♪」

さっきから、こんな感じの会話が四方八方から耳に入ってくる。

俺は、軽くため息をつき隣を見た。

隣では、髪の毛を揺らしながら一生懸命メモをとっている谷口さんの姿があった。

あぁ、結局任せっきりだな…。

折角谷口さんの補佐役としてきちんと補佐をしようと、無い勇気を振り絞り「…俺も、会議…行くよ」って言ったのに…。

だけど、補佐どころか何も出来ていない。

……こんなことでは、師匠に怒られてしまう…。

……。

……ん？

そういや、鷹尾神社で話して以来、師匠からいっさい連絡が来ない。

確かに“修行の頻度は減らす”とは言っていたけれど…。

こんなに連絡が来ないことは珍しかった。

やっぱり主役だけあって忙しいのだろうか。
……後でメールでもしておこう。

思考を巡らせていると、トントンという音と共に俺の頭に声が飛び込んできた。
「…では、何か質問がある人？」
文化委員長が一通り説明を終えた様子で、プリントの束を教卓の上で整え教室を見渡していた。
今までうるさかった人達も、こういう時は静かになる。

その様子を見て、文化委員長は口を開いた。
「次の会議は一週間後、また昼休みに生物準備室で行います。今日配った予算の経過報告書、そして、もしこの一週間で疑問や質問ができたら、次の会議の時にお願いします。では、解散。」
そう言い会議を終了した。
俺はその声とほぼ被る勢いで席を立つ。
そして谷口さんに「ごめん。…先、行くね…」とだけ伝え生物準備室を後にした。

その理由はただ一つ。
会議中に俺の話をしていた人達との接触を避ける為だった。
彼女達にメアドなんて聞かれたら最後。
……それこそ中学の時の二の舞である。
もうあんな恐怖体験はしたくない。

しかし、文化祭まであと二週間弱。
……一週間後と言わず、まだ会う機会はありそうだ…。

俺は深いため息をつく。
……やはりここは師匠に策を考えて貰おうかな…。

そんなことを考えながら俺は廊下を人目を避けて駆け抜けた。

5．"Separate September"　―b2『経過』

教室内に活気のある空気が広がっている。
机は前後左右に固められ、真ん中に大きなスペースが空いていた。
クラスメイト達がそこで楽しそうに作業をしている中、俺は教室の前方に寄せられた教卓で、予算の経過報告書を書いていた。

すると、俺の前で作業をしている男子達が話し始めた。

「1組の劇さぁ、原野さんが主役だろ？だからさっき覗きに行ったんだけどさぁ、1組の奴らドアもカーテンも閉め切って練習してんだよ…。折角、原野さんを見に行ったのに…」

その言葉に、ぼーっと報告書を書いていた俺の手が止まった。
どうやら原野さんの話題のようだ。

「まじ!?なんだよ…じゃあ本番しか見れないのか…。あ～、俺も原野さんと同じクラスが良かったな…」
「ほんとそれだよな～。どうにかして、原野さんとお近づきになりたいもんだよ……。」
「いやぁ～、お近づきは無理だろ…？矢吹曰く、“原野はあんまり人とつるまねぇからな！”だから。認識されて良いとこじゃないか…？」
「……だよな～。」

……原野さんとの関係がばれたら、俺は何人の男子を敵に回すことになるのだろう…。
…そんなこと恐ろしくて考えたくもなかった。
だが、この話を聞いて再認識したが、やっぱり、原野さんが俺と（いくら修業の為とはいえ）出かけたり、放課後あったりしてくれているのは本当に珍しいことのようだ。
あまり人とつるまない原野さんと（師弟関係だが…）仲良くさせてもらっている俺はラッキーなのかもしれない。

…そこで俺は気づく。
……そういや、師匠からメールが返ってきていないな。
昼休みの会議の後、俺は師匠にすぐにメールをした。

『劇の方、どうですか？俺の方はまずまず順調です。』

シンプルなメールだが、俺なりに考えて送ったつもりだ。
まず、師匠は疑問形でないと返信をしない。
これをわきまえて、きちんと疑問形の文章を作った。
そして、自分のことも一応報告した。
……なのに未だに何故か、師匠からメールは返ってきていなかった。

俺はポケットから携帯を取り出す。
それを開けて確認してみたが、やはり返事はきてなかった。
……やっぱり主役だけあって忙しいのかな？
そんなことを考えていると、珍しく矢吹の困った声が聞こえてきた。

「…あ～、でもな～…一階だよ？ここ四階だよ？それに重いよ？」

俺は矢吹に視線を映した。
矢吹は教室の扉にもたれかかりながら、廊下にいるのであろう誰かと話していた。
「……ん～…でもな～……。流石に女子一人に行かせるのは……」
そう言いながら矢吹はくるっと振り返り、教室内を見渡した。
困った顔で視線を動かす。
すると、矢吹の視線と矢吹を見ていた俺の視線がぶつかった。

その途端、矢吹の困った顔は一変、にこやかな……いや、にやけた笑顔になった。
何だかその顔に嫌な予感がした俺は咄嗟に顔を逸らした。
だが矢吹は（見ていないから分からないが、きっとにやけたあの顔で）俺に近づいて来て、ぽんっと肩に手を置いた。
そして何故か小声で俺に話し始める。

「…誠よ。こんな所で一人で報告書書いてるのなんて楽しくねーだろ？だ・か・ら！お前にもっと楽しくてドキドキしちゃう仕事を、オレっちがもってきてやったぜ！！！」
矢吹の言葉に、お前は何様だよ…、と思いながらも相槌をうつ。
「…なんだよそれ……」

俺の言葉に矢吹は満面の笑みを浮かべた。
そして、俺は矢吹に腕をガシッとつかまれ、「まあまあ、来たら分かるって！」と廊下へ引っ張っていかれた。
矢吹につかまれていた腕がいきなり解放され、一瞬バランスを崩しかけた俺は体勢を整える。

前を見ると。
そこには驚いたように俺を見上げる谷口さんがいた。

「谷口さん！誠も一緒に行ってくれるってさ！！」
その言葉に俺は固まる。
……なにを言っているんだ矢吹。

俺は矢吹に精一杯の冷たい視線をおくった。
…が、矢吹は何を勘違いしたのか、俺と目が合うと、“頑張れよ！”と言わんばかりに親指を立て、鼻歌交じりに廊下を駆け抜けていってしまった。
……って、お前どこに行くんだ。
俺はそんな矢吹の後ろ姿を相変わらずの冷たい眼差しで見つめていると、谷口さんが口を開いた。

「あ…あの、まことくん…！わたし一人で行ってくるから、大丈夫だよ…！」
彼女は焦ったように、俺に向けて一生懸命手を振ってくる。
だが、無責任な押し付けをしてきた矢吹のせいで、全くもって何も分かっていない俺は、とにかく状況を把握したかった。
「…あの…ごめん。行くって、どこに？…何をしに…？」

俺のその言葉に谷口さんは「え？」と首を傾げる。
その様子に胸が高鳴るのを抑えながら、俺は答える。

「あー…えっと……矢吹に、いきなり連れてこられただけだから……。…状況が、把握、出来てないんだ…」
谷口さんは「そうなんだ！」と、まん丸い目を大きく見開いた。
「え～っとね、“クラスTシャツが出来上がったので、校門まで取

りにきてください。ってさっき店のひとから連絡があった”って矢吹くんがおしえてくれてね、みんなほかの作業をしてたから、わたしが“ひとりで取りにいく”っていったの。そうしたら矢吹くんが“一人だと大変だ”って…。…それでまことくんを連れてきてくれたの。」

なるほど…そういうことか矢吹…。
またお前の『余計なお世話』ってやつだな…。

俺はため息をつく。
そんな俺に谷口さんはまた慌てたように話し始めた。
「でも、本当にひとりでだいじょうぶだよ！だから、まことくんはもどって？」
悔しいが…矢吹の言う通りだ。谷口さんじゃなくても、クラスＴシャツ４０人分を女子一人で取りに行かせるのは酷だろう。
矢吹の思惑通りになるのはムカつくが、今はそんな俺の感情よりも谷口さんの方が優先だ。

「…俺も、いくよ。……谷口さん一人じゃ…矢吹の言うとおり、大変だから……」
その言葉に、谷口さんは「いいの？」と聞いてくる。
俺は彼女の言葉に頷く。

すると、彼女は「ありがとう！」と俺に満面の笑みを向けてくれた。

5．"Separate September" ―b3『通過』

「まことくんって、すごくもてるよね」
谷口さんが関心したように言う。
「え……いや…そんなこと、ないよ」
俺は唐突な彼女の言葉に、しどろもどろになりながら答える。

俺達は、校門までクラスTシャツを取りに行く為に、四階から二階まで階段を下り、二階にある廊下を歩いているところだ。
我が鷹尾高校の校舎の造りは複雑で、ちょっとした迷路のようだ。
（矢吹曰く“ダンジョンみてーだ”らしい）
その為、入学したての1年生には迷う生徒が続出する。

そして、全クラスから校門に行くには必ず通らないといけない二階渡り廊下はいつも人がたくさんいる。
だから、俺にとってこの長い長い渡り廊下は入学当初から“地獄の渡り廊下”なのだ。
そして…今日はまた文化祭の準備ということもあり、いつもより本当に人がたくさんいた。
俺は自分にグサグサささる言葉を浴びながら、矢吹への怒りを募らせていた。

「ねぇ！！中澤くんだよ！」
「え？…あ！本当だ！かっこいい～！！」
「え？でも一緒にいる子…。もしかして、彼女？」
「え～！？違うでしょ～！！きっと委員が一緒なだけだよ！！」
「だよね～！！よかった～！」

こんな感じのお馴染みの会話が聞こえてくる。
……毎回思うが、彼女達は俺に聞こえていることを知っているのだろうか？
多分、彼女達的には声を潜めているつもりなのだろうけど…。

グサグサささる周りの視線に俺はテンションを下げられ、軽くため息をつく。
すると、谷口さんから「まことくん？」と少し心配した声が聞こえた。

俺は彼女に軽く笑いかけ、前を向く。
そうだ…ここでくじけていたら師匠に怒られる。

そう思った時だった。
いきなり後ろから「どいてどいて～！！」という声が聞こえた。

俺はその声に振り向く。
すると、目前にダンボールが迫ってきていた。
俺は咄嗟に谷口さんの腕を引っ張り、廊下の端に移動する。
きっと文化祭で使うのであろう、大きなダンボールを運んで走っていた声の主は、すれ違いざまに「ごめんね！」と言い、駆け抜けていった。

周りを見てみると他の生徒達も避難していたようで、「びっくりした～」などの言葉を発していた。

……それにしても、男前な女の子だったな。

俺がそんなことを考えていると、下からかすれる様な声が聞こえた。

俺はその声のした方に視線を下げる。

……そこで俺の思考は止まった。

「…まことくん。…あの…もう、だいじょうぶ…」

すぐ近くに…本当に近くに谷口さんの顔があった。

俺と目が合うと、彼女は赤い顔で視線をそらす。

俺は止まった思考を動かすために、ゆっくりと目を動かす。

そして、徐々に理解していく。

俺の右手は谷口さんの左腕をがっちり掴み、そして俺の左手は彼女を抱きしめるかのように彼女の肩にあった。

もちろん…俺たちの距離は、すっごく近くて……。

状況を把握した途端に俺の顔に熱が集まる。

そして、ばっと彼女から離れた。

谷口さんは赤い顔のまま、俺に掴まれていた左腕をそっと自分の右手で掴み、まだ俺から視線をそらしていた。

……俺は…何てことをしてしまったんだ……。
…とにかく……谷口さんに…言わないと……！！
「あ…あの…ごめん！いや…あの…！咄嗟に…」

自分でも何を言っているのか分からなかった。
だが、慌てている俺に視線を戻し、谷口さんは顔を赤くしたまま、くすりと笑った。

「…ありがとう…。ダンボール…いきなりだったから、びっくりしたね…。」
彼女はそう言い照れたように俺に笑いかける。
少し落ち着いた俺は、とにかくこの何とも言えない空気に耐えられなかった。

「あ…早く…行かないと…Tシャツ。……店の人、待ってるかも……」
そう言い彼女を見ないまま歩きだす。
谷口さんは「…そうだね」とだけ呟き、俺の少し後ろを歩いていた。

それから、俺達は終始無言だった。
でも、俺達の間に流れているこの空気は嫌じゃなかった。
何ていうか…少し恥ずかしいような、でも…何となく嬉しいような、そんな感じだった。

校門についてTシャツを受け取る。
Tシャツは１０枚ずつ紙袋に分けられていた。

谷口さんが紙袋を一つ持ち上げたところで、俺は残り三つを持ち上げた。
谷口さんは「あ…」と小さく声を漏らしたが、俺が「…行こう」と言うと、それ以上は何も言わず頷いた。
その顔がまだ少し赤いように感じて、俺は何だか嬉しくなる。

そしてそのまま校舎に入り、教室に向かう。
二階まで階段を上がり、渡り廊下を歩く。
…初めてすがすがしい気持ちで渡り廊下を歩いたな…。

そんなことを考えていると、前方に見なれた顔があった。
その顔に俺は思わず立ち止まる。
谷口さんはいきなり立ち止った俺を不思議そうに見ていた。

少し遠いところで、原野さんは誰かと話していた。
話しはすぐに終わったようで、彼女は忙しそうにこっちに向かって駆けてくる。
俺は何となくドキっとする。
……が、原野さんは俺の横を通り過ぎる少し前で携帯を取り出し、ボタンを連打しながら俺の横を通過した。

その行動に俺はムカっときた。
原野さんと俺が学校で会ってもお互い反応しないというのは、分かりきっている。
しかし、そういうのではなくて…何ていうか…絶対に今のは俺に気づいてないだろ…。

いつもは反応はしないものの、何かしら目くばせはしていた。
それに、目くばせはしなくても、ちらっとお互い視線は合わせていた。
…だから、今みたいに無視をされたのは初めてだった。

いや…でも、俺はそれに怒っているのではない。
無視されたのも確かにムカついた。
でもまぁ、忙しそうだったし……。
それは仕様がない。
それよりも……

俺はポケットから携帯を取り出す。
そして、受信ボックスを確認する。
…念の為、“新着メール問い合わせ”もしてみる。

“新着メールはありません”

俺はその文字にイラっとし、携帯をパンっと音を立てて閉じた。

……原野さん…。
今、あなた携帯さわってましたよね……？
だったら……何でメールを返してくれないんですか……？

俺は師匠に対する怒りをわき上がらせながら、歩きだす。
谷口さんが驚いたように「まことくん？」と聞いてきたが、俺は何も答えない。

「まことくん…？…どうかしたの？」

しかし、後ろから服を引っ張られてしまっては、無視することは出来なかった。
……それに、谷口さんに八つ当たりをしても仕様がないし、彼女に悪い。

俺はふつふつとわき上がる怒りを抑え、今できる最上級の笑顔を谷口さんに向け「何でもないよ」とだけ言う。
そんな俺に谷口さんは、驚いたような遠慮したような表情を向けていた。

あぁ…今の俺はきっと、目が笑っていないのだろう。

5．"Separate September"　－b4『返信』

文化祭の準備も本格的になってきた為、俺が家に帰りついたのは8時過ぎだった。

疲れ果てた俺は、鍵を開け無言で家に入る。
玄関にはもう父さんの靴があった。
リビングからはテレビの音と母さんの声が聞こえていた。

俺は玄関で靴を脱ぎ、そのまま階段を上がる。
すると、母さんがリビングの扉から顔だけ出してこちらに向かって叫んだ。
「まこと。あんた、ただいまくらい言いなさいよ！」
「あ…ごめん」
「着替えてすぐに降りてきなさいよ～。もう遅いしさっさとご飯食べちゃってね。」

それに俺は適当に「はい」と返すと、階段を上がり、すぐに自室に入る。
今は何だか、放っておいてほしい気分だった。

扉を閉めるなり、鞄を椅子に放り投げ、ベッドにダイブした。

仰向けになり俺は、はぁ、とため息をつく。

……今日は何だか疲れたな。

あの後、俺達はまた教室へ帰るまで終始無言だった。

…しかし、もうあのいい感じの空気は、俺達の間には流れていなかった。

原因は、確実に俺にあった。

でも、俺は何故かイライラを抑えることは出来なくて……。

教室に帰ってからもイライラしていた俺は、無言で予算報告書の続きを書いていた。

クラスメイト達は俺が何となく不機嫌なことに気づいていたのか、珍しく誰も声をかけてこなかった。

……そう、あの矢吹でさえも、だ。

だが、俺にとってはその方が有難かった。

今誰かに話しかけられても、いつも通りに話すことは出来なかったと思うから。

…今になって考えると、谷口さんには本当に悪いことをしたと思う。

……せっかく、少し距離が縮まったと思ったのに…。

これでまた一つ、チャンスを棒に振ったかもしれないな。

俺はまた一つ、ため息をついた。

“ため息をつくと幸せが逃げる”というけれど、もしそれが本当な

らば、今日の俺にはもう幸せが残っていないだろう。

いや、だけど。
俺はふと、考えないようにしていたことを思い出してしまった。
俺をこんな状態にしたのは師匠だ。
……そもそも、メールを返さなかった師匠が悪い……。
うん…そうだ。

……いや。
こんなことを思っていても仕方が無いことは分かっている。
それに…師匠が忙しかったことも、分かっている。
前までの俺ならこんなことくらい、何てことなかったのに……。
…何故だろう?自分の中で、ふと疑問が飛び出す。

よく考えてみると、俺は師匠がメールを返さなかったことに怒っている訳ではなかった。
俺にも、劇の主役が本当に忙しいんだろうってことくらい、分かっていた。
なら…俺は何にこんなにまでムカついているのだろう…?

……と、その時だった。
いきなり机の上でヴーーヴーーと携帯が鳴り響く。
俺は勢いよく飛び起き、携帯を取る。
そして、もう一度ベッドに戻り、携帯を開く。
すると画面には、俺が予想をした通り“原野唯陽”という文字が映

し出されていた。

俺はその映し出された名前を見て、心の中がスッとする。
さっきまでのムカムカした感じは無くなっていた。
原野さんからの本当に久しぶりなメールに若干緊張気味に、俺はメール受信ボタンを押した。

『文化祭、例の彼女を誘うこと。』

このメールを見た瞬間、俺の頭で何かがキレた。
……何なんだよ、これ。
……もういいです。
…そうですか…。
あなたは、俺のことはまるっきり無視で自分の用件だけ伝えるんですね。

俺の心に、さっき抜けたはずのムカムカがまた溜まっていく。
俺はそのまま携帯をベッドに投げ出し、部屋を出た。

何だかどうしようもなく腹立たしかったから。
俺は今日初めて、師匠にメールを返さなかった。

5．"Separate September" ―c1『勧誘』

だんだん深まっていく秋の中、着々と準備は進み、10月9日。
俺達はついに文化祭1日目を迎えた。

師匠にメールを返さなかったあの日から、俺は師匠と一切連絡を取っていなかった。
何となく寂しかった俺は陽翔さんにメールをしてみたが、陽翔さんは例の“大輔くん”と旅行に出かけているそうで、今日まで帰って来ないと連絡があった。
……色々陽翔さんに話したいことがあったけれど、それも諦めざるをえなかった。

そんなこんなで俺は、全ての時間を文化祭準備に費やした。
こんなに行事に積極的に参加したのは初めてだったが、なかなか楽しかった。

それから、ほとんど毎日、矢吹と一緒に帰ったり寄り道をしたりした。
これも、師匠と修業を始めてからはしていなかったことだった為、なかなか楽しかった。
その代わり、一気にお小遣いが減ったが……。

そんなこんなで向かえた文化祭1日目。
我が鷹尾高校の文化祭は、1日目は1年生の劇、2日目は2年生の劇が体育館で行われる。
模擬店のクラスは2日とも自教室で行う。
そして、学校は開放されている為、正門の受付に名前を書けば誰でも入れる仕組みになっている。
だが、誰の関係者かを名簿にチェックをつけないといけないが…。

そんな感じで、高校の文化祭にしては割と自由な感じになっていた。
その為、校内には人がたくさんで、一日目から店は大忙しだった。
一日目が店番だった俺は、ひたすらメニューの残り具合を家庭科室にいる谷口さんに電話で伝えていた。

「あ…コーラとオレンジがもう無くなりそうだから、よろしく。あ、あとそれから…パンケーキも…」
『うん。わかった。コーラとオレンジは、今から3本ずつもっていってもらうね。パンケーキは今たくさんつくってるから、出来上がり次第、いっきにもっていきます。』
「うん。よろしく。」

俺は、電話を切りメニューの食材一覧表にチェックをつけていく。
……これは、今日また買い出しに行かないといけないな…。
そんなことを考えていると、いきなり肩に手を置かれた。

「おっす！誠！頑張ってるな！！」
「……矢吹。お前もちゃんと仕事しろよ。」
俺が呆れ気味に言うと、矢吹は「ぬわぁにぃ～！！」と叫んだ。

「オレっちすっげー仕事してたんだぜ！！さっきまでずっと“１－５の喫茶店おいしいよー！安いよー！！”ってこれ持って叫びながら、校舎内駆け回ってたんだぜ！！」
矢吹が俺の目の前に看板をつきだす。
「……それはご苦労だったな、矢吹。…じゃあ、続き頼んだ」

そう言い俺は手元の紙に意識を集中させる。
すると、矢吹は机の上から食材一覧表をひったくった。
俺はいきなりの矢吹の行動に驚き顔をあげる。
矢吹はそんな俺を見て、ニカっと笑った。

「誠、休憩入ろうぜ！！」
「……何でだよ。…とにかくそれ返してくれ」
「もう昼飯の時間だぜ！？いいじゃん！俺達頑張ったんだしよー！」
矢吹に言われて初めて時計を見る。
時刻はもう１２時４０分だった。
今は少し落ち着いたが、文化祭が始まった１０時からさっきまでずっと、あまりにも店が忙しかったから、時間を気にしている余裕もなかった。
……もうこんな時間だったのか。

「な！行こうぜ！昼飯！」
時計を見て驚いている俺に、矢吹が念を押してくる。
「……じゃあ、１時まで待ってくれ」

「…ったく、しゃーねーなー」
矢吹はそう言いながら、俺の前にどかっと座る。
そして、机の上に食材一覧表を戻すと「さっさと終わらせて、早く昼飯行こうぜ!!」と俺に笑った。

俺は頷いて、手元の紙に視線を移した。
…その時、店番をしていた2人の男子の会話が聞こえてきた。

「あ…原野さんの劇、1時からじゃないの?」
「え…そうだったっけ?」
俺はその声のした方に顔を向ける。
すると、俺の様子に気づいた矢吹がくしゃくしゃになったパンフレットを取り出し確認すると、彼らに向かって叫んだ。

「しのはらー!すえー!1時からだぜー!」
その言葉を聞いた2人は、俺達に近寄ってきた。
そして、矢吹がひらひらさせているパンフレットを取り確認する。
「うわ…ほんとだ。…やべ、もう始まるじゃん!……店番抜けられねーかな…」
「いけんだろ?普通に!」
パンフレットを見つめたまま頭を抱えていた篠原は、矢吹の言葉に苦い顔をする。
「…あのなー矢吹。お前だけだよ、そんなことが普通にできるのは…」
「えー、そうか!?」
「いや…褒めてないから」
何故か嬉しそうな矢吹に篠原は「ははっ」っと力無く笑う。

篠原啓太。
彼は何事にもまじめで熱い性格な為、文化祭の準備も積極的に取り組んでくれた。
そんな彼は、一ヶ月前、矢吹の自慢話を大きく否定していた内の一人で、…どうやら原野さんの熱狂的なファンらしい。
その為、今、原野さんの劇を見る為にどうしたら良いかと考え、唸っていた。
ファンなら余計に絶対に見たいのだろう。

……というか、俺も他人事のように言っているが、そんな彼と同じで内心焦っていた。
このままだと俺も、原野さんの劇が見れない……。
だが、朝よりは落ち着いたといっても店はまだまだ混んでいた。今抜けるのは難しいだろう。
……どうするべきか。

俺は篠原と一緒に頭を悩ませる。
すると、篠原の隣で何かを考えていた末永が、「あ」と声を漏らした。
俺達3人は視線を末永に移す。だが、彼の視線は俺に向いていた。

「中澤が女子に頼んでくれたら、いけるんじゃないの？」
その言葉に今度は俺が「え？」と言葉を漏らす。
だが、篠原は「それだ！」と叫び、俺に視線を戻した。

「中澤！店番抜けれるように女子に頼んでくれないか！？お願いだ！」
篠原が俺に向かって手を合わせる。
…俺は内心戸惑った。
……何と言うか、そんなことをしていいものか…。
…だが、目の前の必死な篠原を放っておくこともできなかいだろう。
うん。
困った時はな、お互い様だ。

……というのは正直建前で、俺も原野さんの劇が見たかったから…
なのだが。
とにかく、俺は末永の案に乗ることにした。
「……分かった。…頼んでみるよ」
そう言い立ち上がる。

「…おぉー！！」
すると、俺のその言葉に三人から一斉に驚きの声が上がった。
「…え？なに…？」
「いや！誠は絶対断るだろうなーって思ってたぜ！」と矢吹。
「まじで！？中澤！本当にありがとう！」と篠原。
「…一か罰かのかけだったんだけど、乗ってくれるとは」と末永。

……そんなに俺が乗ったことが以外だったのか。
まだ俺を驚きの目で見つめている三人を置いて、俺は店番をしているクラスの女子の元へと急いだ。
やっぱり少し気が引けたが、時計を見ると１２時５０分だった。
……これはもうモタモタしていられない。俺は息を整え彼女に声を

かける。

「あ…あの」

すると、彼女は凄い勢いで振り向いた。

「え？中澤君！？どうしたのぉ？？」

俺はその口調にくじけそうになるが、踏んばる。

…ここで負けては駄目だ。

「お、俺達四人…矢吹と篠原と末永…昼ご飯、まだだから…今から行ってきてもいいかな？」

「え！？そうだったのぉ？？中澤君、頑張ってくれてたもんねっ！！全然いいよぉ！行ってきて？」

「あ…ありがとう」

俺は何とか彼女に負けず頑張って話したおかげで、あっさりＯＫをもらえた。

俺は不安そうな目でこっちを見ている篠原と、興味深そうに俺らのやり取りを見ていた末永と、何故かニヤニヤしながらこっちを見ている矢吹に向けて、ＯＫサインをだした。

その途端３人の表情は、ぱあっと明るくなる。

そんなこんなで。

１２時５５分。

俺達四人は凄い勢いで教室を駆けだした。

5．"Separate September" ―c2『友情』

……いや、凄いとしか言いようがなかった。
本当に凄まじくクオリティーが高くて…。
…やっぱり、流石です。師匠。

俺達４人は教室から猛ダッシュしたおかげで、息も絶え絶えで汗だくだったが、何とか滑り込みセーフで体育館についた。
そして、１組の劇はすぐに始まったので、適当に座って見た訳だが……。
いや…本当に凄かった。
正直、師匠の演技力には驚いた。
あなたは本当に何でも出来るんですね…。

俺はそんなことを考えながら、グラウンドへと続く外階段の端に座り一服していた。
他の三人はというと…

「誠のおかげで店番抜けだせたしな！しゃーねー！！オレっちが奢ってやるよ！」と矢吹。
「中澤！ほんとにありがとう！昼飯買ってくるからここで待ってろよ！」と篠原。
「取りあえず…適当に買ってくるね」と末永。

そんな訳で、俺は一人で3人の帰りを待っていた。
俺が師匠の雄姿を思い出して、再度尊敬の念を抱いていると、三人が戻ってきた。
「まことー！」
そう叫んだ矢吹の手にはたくさん袋がさげられていた。

三人は俺を囲むように腰かける。
そして、矢吹から焼きそばとホットドック、篠原からカステラとみたらし団子、末永からジュースを受け取る。
持ちきれなくなった俺は落ちないように、階段に置く。

「…すごい沢山、買ってきたな」
「明日もあるからって止めんたんだけどね。」
俺の言葉に末永は苦笑しながら答える。
「なぁーにを言ってんだ、すえ！！今を精一杯生きないでどうすんだよ！！」
「その通りだな。明日食べようと思ってても、時間が無くて食べれなくて後悔すんの嫌だろ？」
矢吹と篠原の言葉に末永は「そうだね」と適当に相槌をうつ。

末永彰人。
彼は入学当初から篠原といたイメージが強い。
出席番号が前後だった二人は、クラスのみんなからはセットで見られることが多いのだ。
今まであまり話したことは無かったが、彼は同級生にしてはとても

落ち着いていると思う。
口調といい行動といい。

俺はホットドックにかぶりつく。
うん…なかなか美味しい。

すると、篠原が焼きそばをすすりながら話始めた。
「それにしても…ズッ…やっぱり…ズゾゾゾッ…原野はんはふごかったよな。」
「…篠原。話すなら、焼きそばを食べ終わってからにしなよ」
末永の言葉に篠原は頷き、ジュースを流し込む。
そして、もう一度話し始めた。

「中澤。本当、ありがとな！俺、ほんと原野さんのファンだからさ。見れて良かったよ」
篠原の言葉に俺は頷く。
…本当に俺の周りは感情をストレートに出す人ばかりだな…。

俺はホットドックを食べ終え、次は焼きそばを食べ始める。
すると、今まで黙々と食べていた矢吹が話し始めた。
「やっぱ流石だよなー、原野！あいつ小学校の時から劇とかすると、ぜってー主役やんだよ！あ、もちろん推薦だけどな！そんで、すんげー演技するから、また一段とみんなの人気者になんだよ！」
「やっぱり原野さんは凄いな！」
「おう！あ…そういや幼稚園の時も主役やってたよーな…」
「へ～。矢吹と原野さんが幼馴染って噂、本当だったんだね」
「あったり前だろー！？でも、幼馴染っていうか腐れ縁ってやつだな！」
「幼馴染でも腐れ縁でも…原野さんとずっと一緒っていうお前が羨

ましいよ…。俺なんか、彼女の視界にも入ってないだろうから…」

篠原ががっくり肩を落とす。

矢吹はそんな篠原の背中をばんっと叩いて、二カっと笑った。

「なーに落ち込んでんだよ!!俺なんて12年間一緒だってのに、高校でクラス離れたから忘れかけられてたんだぜー!?」

矢吹ははかははと笑う。

そんな彼らの会話を聞いていた俺に、末永が声をかけてきた。

「中澤ってさ、凄く固い奴だと思ってたよ。」

「え…?」

「あ…俺も。融通がきかなくて、冗談の通じないクールタイプ。」

そう言い篠原は俺をみたらし団子で指し「でも」と続ける。

「さっき一緒に全力疾走して“あぁ、こいつ全然そんなことないな”って思ったよ」

篠原はみたらし団子を頬張る。

俺は焼きそばを食べながら、その言葉にどう反応するべきか考えていた。

すると、カステラを食べ終わった矢吹が口を開いた。

「確かにな、誠は一見クールに見えるよな!でもまぁ、あんまりそんなこと無いんだけどな!!」

矢吹…それは、喜んでいいのか?

「うん。でも、今日で分かったよ。なんで矢吹が中澤を気に入っているかね。な、篠原。」

「あぁ。お前って、案外おもしろいかもな」

「すえ!篠原!!分かってんじゃねーか!!」

そう言い、矢吹が篠原の背中をばしばし叩く。

みたらし団子を食べていた篠原は激しくせき込んだ。
「…何で俺だけだよ！」
「いやー、たまたまお前が近くにいたからな！！」
矢吹はまた笑って篠原を叩く。
末永はそんな彼らを見て笑っていた。

俺は昔から、人前に出ることが苦手なだけなのにクールと勘違いされ、友達からは一線引かれていた。
最初はそれが寂しかったが、もう慣れてきていた。
だから、友達からこんなことを言われるとは思っていなかったから、凄く驚いた。
それに、やっぱり嬉しかった。

俺はそう思いながら、残りの焼きそばを口に入れた…その時だった。

ヴーーヴーーヴーー

ポケットで俺の携帯が鳴り響いた。
俺は慌てて携帯を取り出す。
開くと谷口さんからの着信だった。
俺はジュースで焼きそばを一気に喉へと押し込む。
そして、電話に出た。

「もしもし」

『あ…もしもし、まことくん?』
「はい」
『あのね、今どこにいる?』
「今は…外階段のところ。…どうかした?」
『あ…えっとね。今、色々切れちゃってて…。今から買い出したのんでも、いいかな?』
「あ…いいよ。今、矢吹と…篠原と末永も、一緒にいるし…」
『ほんと!?よかった!じゃあ…』
「あ…ちょっと待って」

俺は谷口さんを止め、三人の方を向く。
すると、三人も俺を見ていたようで、すぐに目が合った。
「…今から言うこと、メモるか、暗記して欲しい。」
俺の唐突な発言に矢吹と篠原は「任せとけ!!」「よし!」と暗記する気満々だったが、末永が「携帯にメモるよ」と言ったので、俺は彼に頷いた。

そして、文句を言う矢吹と篠原を余所に、俺は末永に谷口さんから伝えられた、買い出しするものを伝えたのだった。

5. "Separate September" ―c3

―c3『良報』

「はぁ〜…」
「もう無理……」
「またあと1日これをするのか……」
教室中にため息が聞こえる。
俺もそれに交じってため息をつく。

何とか終わった文化祭1日目。
まだ1日目なのに、もうすでにみんな疲れ果てていた。

……まさか、こんなにも文化祭がハードなものだとは思っていなかった。
谷口さんから頼まれた買い出しは凄い量で…それを速攻で彼女に届けなくてはならなかった俺達は、本日二回目の全力疾走をしたのだった。
そして、帰ってきたらすぐに店番…というハードスケジュールだったせいで、俺達四人は他の人にも増してヘトヘトだった。
矢吹に至っては、もう教室の床で眠ってしまっていた。

そんな空気の中に谷口さんが戻ってきた。
彼女が戻ってくると、みんなは顔をあげる(矢吹は眠ったままだったが)。

谷口さんが軽く今日の反省会と明日のことを連絡し、今日は解散になった。

ヘトヘトになったみんなはすぐに帰って行った。
床に転がっていた矢吹は篠原と末永に頼んで連れて帰って貰った。

委員の谷口さんと俺はまだ残って作業をしなくてはならなかった為、まだ帰れなかった。
早く帰りたかった俺は、手早く教卓で予算の計算をしていた。

すると、谷口さんが俺に「はい」と何かを差し出した。
俺は視線をそれに向ける。
それは綺麗にラッピングされたクッキーだった。
俺は彼女を見る。

「料理部のお店で売ってるんだけどね…。でも、まことくんには…わたしが作ったものを、わたしておきたかったから……」
そう言い彼女ははにかんだ。
俺は早くなる鼓動を抑えながら、それを受け取る。
「あ、ありがとう」

その言葉に彼女は笑うと、教室を出て行こうとする。
だが、一瞬立ち止まって、もう一度振り向く。

「…まことくん。今日まで、たくさん頑張ってくれたから、明日は一日仕事しなくていいからね。」
「え…谷口さんは？…明日、仕事するの？」
「…わたしは…一応店長だから。でも…昼からは、おやすみしてい

いよって、みんなが言ってくれたの。」
「…そっか…」
沈黙が流れる。
俺は迷った。
ここで谷口さんを誘うべきか…。

ヴーーヴーーヴーー

……タイミングが良いのか悪いのか。
いつもは滅多にならない携帯が鳴り響く。
俺はポケットから携帯を取り出した。

その様子を見て谷口さんは、少し寂しそうに微笑むと「まことくん、その計算がおわったら、帰ってくれていいからね。」と言言い残し、教室を出て行ってしまった。

俺は去っていく谷口さんを見送る。
なんだかよくわからないもやっとした気持ちだけが残った。
ほんと、タイミングが悪いな、俺の携帯よ…。
もやもやを喉のあたりに持て余しながら、携帯を開く。

画面には“原野陽翔”と表示されていた。
その名前に一気にテンションが上がった。
陽翔さんだ!
さっきと打って変わってウキウキとした気持でメールを受信する。

『文化祭1日目、お疲れ様（＾０＾）／
僕は今日、旅行から帰ってきました（´∀`）
明日は文化祭行くね！
じちゃクエも持って行くからね！！』

メールの内容に俺は嬉しくなった。
……明日は久しぶりに陽翔さんに会える！
そう思うと、計算のスピードも上がった。

5．"Separate September" ―d1

―d1『受付』

１０月１０日。文化祭２日目。
……今日は昨日に増して人の数が凄い。

今日は１日休みを貰っていたが、陽翔さんが文化祭に来るのは１１時だと聞いていた俺は、暇だったので１時間だけ店を手伝うことにした。
…が、不覚にも受付を任されてしまった俺は、憂鬱な気分で時計を見つめていた。
まだ始ってすぐな為お客さんは少ない方だが、これも１０時半頃には列を作り始めるだろう。
こんなことなら、手伝うなんて言わずに、１時間どこかで暇つぶしでもしておけばよかった……。

そんな後悔の念が押し寄せてきている俺に「あの…」と声がかかった。
視線をあげると、そこには中学生くらいの髪が横にぴんぴん跳ねた少年が立っていた。
目が丸っこくて、可愛らしいような印象である。

「…はい。」
「えっと……コーラ２つとオレンジジュース１つ…それから……

何だったっけ？」
少年は後ろを振り返る。
少年の後ろには少年と同級生くらいの女の子2人と男の子1人が立っていた。
少年は三人からもう一度注文を聞くと、俺に向き直る。

「え～っと…たまごアイス2つと…パンケーキのイチゴ味を一つ…」
「ちゃう！！」
いきなり少年の後ろから関西弁の野次が飛んできた。
その声に少年は絵に描いたようにびくっとなる。
「イチゴちゃうって、チョコやって！」
「…チョコだそうです。」
「え……あ、はい…」

……俺も思わず、少年と一緒に野次にびくっとしてしまった。
「…以上でいいでしょうか？」
「あ…はい」
「７５０円です」

少年は自分の財布から１０００円札を出す。
それを受け取り、おつりと食券を渡す。すると少年はぺこりと頭をさげた。
俺も思わず下げ返す。
その後、少年は仲間を引き連れ教室の中へと入って行った。

まだ文化祭が始まって１０分。
この少年達が初めての客だった。
取りあえず無事に終わった初めての仕事にため息をつく。
……それにしても、あの後ろにいた子、怖かったな…。

そんなことを考えていると、廊下にいる生徒達が何やらざわつき始めた。
俺は顔をあげて生徒達の目線の先を見る。
……そこには並んで歩く原野さんと陽翔さんがいた。
急いで時計を確認する。
時刻はまだ１０時１０分…。

…あれ？昨日『何時に来るんですか？』って聞いたら、陽翔さん『１１時に行くよ！』って言わなかったっけ…？
俺はこちらに向かって歩いてくる原野さんと陽翔さんを見ながら、昨日のメールの内容を思い出す。

すると、陽翔さんは受付に座っている俺に気づき、「セイくん！！」と叫んだ。
……隣で原野さんの顔が歪む。
だが、陽翔さんはそんなことお構いなしといった様子で、こちらに駆け寄ってきた。

「セイくん！！久しぶりだね！店番かい？」
そう言いにっこりと微笑む。
陽翔さんは今日もシャイニングである。
「あ、お久しぶりです！はい、受付です。」
「受付か！僕も高校の時にしたことあるよー。なかなか大変だよね！」
「はい。俺は、こういうの苦手なんで…」
「そうかな？セイくんとっても似合ってるよ！」
「あ、ありがとうございます…。」

陽翔さんがあまりにいつも通りである。
俺もその感覚に慣れているので、いつも通りに会話をする。

だが。
気がつくと俺達三人（原野さんも含め）はかなり注目を集めていた。
…今更ながら焦る。
原野さんの方を見ると、彼女は「はぁー…」と深いため息をついていた。

だがやはり、陽翔さんは全然気にする気配はない。
「セイくん。受付はいつ終わるんだい？」
変わらず話しかけてくる。
……これは流石にまずいだろう。
この状況は余りにも目立ちすぎている。
俺は立ち上がる。
「すみません、ちょっと代わってもらってくるんで、ちょっと待ってて下さい」
陽翔さんにそう伝え、俺は教室の中に入る。

教室にはさっきの少年達1組だけだった。
その為、店番のクラスメイト達は暇そうにしている。
…そして、昨日さぼりすぎていた為強制的に働かされている矢吹は、何故かさっきの少年達と楽しそうに話していた。
俺は矢吹に近寄り、小声で話しかける。
「…矢吹」

彼は俺の声に気づき、少年達からこちらに視線を移す。

「おう！誠！なんだ？」
「あのさ、受付代わってくれないか？」
「…おう？どっか行くのか？」
「あぁ…ちょっとな。」
「なんだよ！…ま！別にいいけどよー。今日1日、逃げられそうにねーからなー。っていっても昼飯ん時に逃げるけどな！」
矢吹はカハハッと笑う。

俺は矢吹に短く「ありがとう」と告げると、急いで教室を出た。

5．"Separate September" ―d2『泡沫』

その後。
矢吹に受付を代わってもらい教室を出ると、廊下で待っていてくれた陽翔さんがすぐに俺に話しかけてきた。

「セイくん！代わってもらえた？」
「あ、はい」
「いやー、よかったよかった！」
「…ふうん、そう。」
陽翔さんの嬉しそうな声に原野さんの不機嫌な声が被る。
その声に、俺は恐る恐る原野さんを見る。

「じゃあちょっとこっち来て。」
彼女は俺達に有無を言わせない表情で言った。
…かなり語気が強かった。

彼女は俺たちに言い放った後、そのままくるりと後ろを向き、スタスタと歩いていってしまう。
…その背中からは、明らかに怒気が溢れ出していた。

やばい。これはやばいかもしれない。
原野さんの逆鱗に触れた…。
俺は顔がこわばる。

横からぽつりと、陽翔さんの「…とりあえず、行こっか。」という声。
流石の陽翔さんも、今回ばかりは顔がこわばっていた。

「……で、言いたいことはたくさんあるのですが……」
原野さんがそう切り出したのは、しばらく歩いき人気のない非常階段についてからだった。

彼女は俺達二人を交互に見る…いや、凝視…ではない。
睨んでいる。

「まず…兄」
原野さんは陽翔さんに視線をやる。
「兄のせいで、この5ヶ月間のあたし達の努力が無駄になったんだけど。…ちょとおこれ、どうしてくれるの?」

「え」
陽翔さんは気の抜けた声を出す。

その反応に、原野さんの視線がさらに冷たくなる。
「あたし達は学校では絶対に話をしないって約束だったの。だから修行も学校の生徒がいない場所をわざわざ選んでいたし」

「え?何でそんなことしてたの?」
その言葉に、陽翔さんは不思議そうな顔をする。
対して原野さんは呆れたようにため息をついた。
「…面倒でしょ?学校の人にばれたら…。」

「どうしてだい？友達なんだからいいんじゃないの？」
「どうしてって…。妙な噂をたてられたら困るでしょ！」
「ユウヒちゃんはそんなの気にしないでしょ？」
「……あたしが気にしなくても、マコトが困るの！」

俺はいきなり出てきた自分の名前にびくっとする。
すると、陽翔さんの視線がこちらへ向く。
「え、そうなの？セイくん。」
「……え…！？」
陽翔さんは本当に不思議そうに見つめてくる。
「そうよね！マコト！」
今度は原野さんが肯定を促してくる。
……どうしたらいいんだ。

「…お、俺は…」
二人に見つめられて困ってしまい、俯いて言葉を濁す。
それを見た陽翔さんが「もー」と、原野さんに視線を戻した。

「ユウヒちゃん、自分が困ったからってセイくんのせいにしたらだめでしょ！」
「え…あ、いや…」
「してないわよ！本当のことだもん！」

「ちょっとユウヒちゃん、セイくんは“困る”なんて言ってないんでしょー。ユウヒちゃんの勝手な思い込みじゃないの？」
「…う、それは……」

……陽翔さん、恐るべし。

口であの師匠を黙らせてしまった。
流石兄といったところだろうか。

……というか、言っていることは師匠の方が正しいのだけれども…。

ここで俺が口をはさんでも、また兄妹喧嘩が再発してしまうだけだろう。
俺はもう何も言わないことにして、この話の成り行きを見守ることにした。

5．"Separate September" ―d3『激昂』

二人の言い合いは暫くして、何とか一段落ついた。
結果を一言でいうと、”兄の勝利”だったわけだが。

説教をしていた陽翔さんは話をまとめると、いつものゆるりとした笑顔を俺に向けた。
「じゃあそういうことだよユウヒちゃん！」
俺とより一層不機嫌になった原野さんを見る。
「問題も無くなったことだし、三人で文化祭を回ろう！ユウヒちゃん、セイくん！案内よろしくね！」
「え…あ、はい！」

半ば無理やりではあったが、結果は俺が望んでいた方向へと収束した。
今日は陽翔さんとたくさん話せる！
そう思うと俺はおのずとテンションが上がってくるのを感じた。

どことなく足元がふわついた感じで、前にいる陽翔さんの方へ俺は歩きだし……たのだがその時。

「待って。」
いきなり、後ろからがしっと腕を掴まれる。

俺は歩いていたところを急に掴まれた為、バランスを崩す。
こけそうになりながらも体勢を整え後ろを振り向くと、原野さんが俺を睨みつけていた。

「えー、どうしたのユウヒちゃん。まだ何か不満なことがあるの？」
その様子に陽翔さんは困ったような声をあげる。
だが、原野さんに「兄は黙ってて！」と一喝された陽翔さんは、今度は大人しく黙ってしまった。

そして。
彼女の視線は俺に移される。

「…え…、な、何ですか？」
俺はあわてる。
がっちり掴まれている左腕。
……なんなんだこの状況は。

「あなた…あたしのメールは見たの？」
「…え？」
「送ったでしょ！“文化祭、例の彼女を誘いなさい”って」

不意を突かれて思わずきょとんとする。
あぁ…あの俳句メールか。
俺は思い出す。
あの時は彼女の対応が腹立たしくて、腹立たしくて。
俺はそのまま携帯を放り投げたのだ。
彼女に少しでも俺の気持ちを味わって欲しいとか、そんなことを思ったから。

メールの内容なんてそんなの…・・・すっかり忘れていた。今の今まで。

「もちろん、誘ったのよね？」

原野さんがドスの利いた声で尋ねてくる。

…俺は腹を括った。

「……誘ってません。」

その言葉を発した瞬間、俺は時が止まったかと思った。

原野さんの動きが、ぴたりと停止したのだ。

もうそれも、瞬きさえも停止した。

しばらくたった後、俺の腕を掴んでいる力が急激に強くなる。

「……ちょっと、マコト。…どういうつもり…？」

原野さんの声は、小刻みに振動しているかのように低く重低音で響いた。

俺はいつもの彼女のものとは思えない重く響く声に、思わず寒気を覚える。

原野さんは、静かに怒っていた。

それは、今まで見たことのある怒りとは質の違うものだった。

熱というよりは、冷気。

体の芯から冷えるような怒り。

…だが。
俺はくいしばった。
今回に関しては、こちらにもちゃんとした理由がある。

俺は、少ない勇気をなんとか絞り出し、口を開く。
「……いいじゃないですか」
「よくないわよ」
師匠が俺の言葉にかぶせて遮った。
それと同時に段々と距離をつめてくる。
冷気が増す。
俺はゾクッとする。

「早めにメールしたから誘う期間は十二分にあったはずよ。……あなたメールも返さないでいったいどういうつもりなの！！」
師匠は言葉を爆発させるように、早口で一気に叫んだ。

俺はその迫力に圧倒される。
ひるむ。
後ずさる。

……だが。
だが、最後の言葉。
……今、メールも返さないでっ…て、言いましたよね…？
頭の中であの時の感情がフラッシュバックする。

箍が、外れた。

「……メールをしても返さなかったのは原野さんの方でしょう？！！！！！」

口から一気に言葉がなだれ落ちた。

俺の叫ぶような大声に、彼女と陽翔さんがびくりとする。

だが師匠はすぐに目をしかめて、俺に突っかかる。

「したじゃない！だから修業内容を…」

「あんなのは返事じゃない。あれは一方的な命令メールでしょう？！」

「そ……しょうがないじゃない！あたし、忙しかったんだから！」

「ああそうでしょうね俺だって忙しかったですから！！」

俺の言葉に激怒に、師匠は「うっ…」と言葉を漏らす。

……そして、沈黙。

……え。

もしかして俺、今師匠に口げんかで勝った…？！

目の前の師匠が「はぁ～…」と大きくため息をつく。

「なによ、マコト。“俺、メール苦手です”とか言ってたくせに……」

原野さんは声を低くして、決して美しいとは言えぬ顔をする。

……師匠、それは俺の真似のつもりでしょうか？

その低クオリティーのものまねモドキ……いや、顔に正確にはイラ

ッとしてしまった。
不覚にも。
ちょっと、これはなんとも引き下がれない。

「ちょ、原野さん、それとこれとは話が別でしょう、話を逸らさないでください……それに俺はそんなん顔っ、しません！！」
「そうだよユウヒちゃん！！今のはユウヒちゃんが悪いよ！」
今まで静かに見ていた陽翔さんが、いきなり加勢してきた。
……半笑いなのには、つっこまないでおこう。

「……あー！！もういいわ！」
原野さんは投げやりに叫んだ。
陽翔さんが加勢してきたこともあり、原野さんは面倒くさくなったのかもしれなかった。
しかめっ面で右手をぱたぱたさせながら、まるで放り投げるように言った。
「今回はあたしが悪かったー、あー私が悪かった！！はいっ、これでいいんでしょ？！」

……全然謝られている気がしない。
だが、一応自分が悪いとは認めたようだ。

多少不満点は残るが、これ以上ぐだぐだ言っても仕方がない。
俺も、もうこれ以上師匠を問い詰めるのはやめることにした。
「じゃあ、俺もメールを返さなかったことは謝ります。」

俺はと師匠に頭を下げる。
師匠は一瞬少し意外そうな顔をしたが、「別に、もういいわよ」と呟いた。

「うんうん！よかったよかった！！」
後ろからいきなり陽翔さんの声が聞こえた。
俺が振り返ると、なんだかやけに嬉しそうな陽翔さんの姿がそこにあった。

彼はいつもよりさらににこにことして、俺たちに笑いかける。
その笑顔は、それはもうシャイニングである。
「よし！これで心置きなく一緒に回れるね！」

陽翔さんはそれはそれは朗らかにそう言うと、ルンルンしながら先に歩いていく。
俺は先に行ってしまおうとする陽翔さんに続こうとしたが、原野さんはまだ動こうとはせず、立ち止ったままだった。
俺は再度彼女の方を振り向く。
「原野さん？陽翔さん、行っちゃいましたよ？」

原野さんは何か言いにくそうに顔を歪めた。
「…マコト。例の彼女とは回らなくていいの？」
「……あ。」
……完全にそのことを忘れていた。

きょとんとしてしまった俺に、師匠はまだ言葉を投げる。
「別に全く気を使わなくていいのよ。兄はあたしが案内するし、文化祭は大事なイベントだし。ここってけこうポイントだとおもうし。だからマコトは…」
「いや、いいんです。」

原野さんの言葉を遮った俺に、彼女は驚いて顔を上げる。
「今日は折角、久しぶりに陽翔さんと会えましたし。……それに、原野さんとも」

俺の言葉に原野さんは苦い顔をする。
俺は、そんな彼女を見て少し吹き出してしまった。
「だから、今日は二人と一緒に回ります。」
そういい俺は歩きだす。
原野さんが後ろでため息をつく音が聞こえたが、彼女はすぐに俺に追いつく。

隣で原野さんが「マコトって根に持つタイプなのね…」と呟くのが聞こえた。

5．"Separate September" ―d4『旋風』

陽翔さんは予想通り…いや、予想を遥かに上回るハイテンションだった。
その為、俺と原野さんは、動きまわる陽翔さんに後ろからついていっていただけだった。

「ちょっと兄、はしゃぎすぎじゃないの…」
原野さんがため息交じりにつぶやく。
「確かに、陽翔さん楽しそうですね。」
陽翔さんはいつも楽しそうではあるが、今日はそれ以上に楽しそうに見えた。
「何かいいことでもあったのかしらね。」
原野さんが言う。

旅行中に何かいいことでもあったのだろうか。
旅行の内容もまた詳しく聞いてみたいな、と思った。

そんな普段に上乗せして陽気な陽翔さんの「折角だし、劇を見に行かない?」という提案で、俺たちはまず体育館に向かっていた。
一年の教室と体育館は校舎が離れており、移動になかなか時間がかかる。

そのため、体育館に到着したときにはもうすでに2年生の劇が始まっていた。
演目は「ピーターパン」。
途中から入ったため、俺たちは後ろの方で立ち見をすることにした。

俺は一人分の立ち見スペースを確保すると、膝に手をつき体を曲げた。
……疲れた。
もうそのまま地面にしゃがみこみたい気分である。

俺はこまでの道のりでもうすでにクタクタになっていた。
結構一緒にいる為、忘れていのだ。
原野さんが歩くだけで人目をかっさらう程度には、美人だということを。

だから道中、凄く大変だった。
……本当に大変だった。
いつも廊下を歩くときは女子だけを気にしていればよかったのに、今回はそこに男子も加わっていたからだ。

「え…ちょっと見て！何で中澤くんと原野さんが一緒にいるのお！？」
「あの二人、クラス違うかったよね！？」
「違うよお！！中学も違うでしょ！？だったら接点ないはずだよね！？」
という、女子の声。

「おい！原野さんだ！！」
「お！まじか！って、何で中澤と一緒にいるんだよ！？」

「知らねーよ！くっそー！！」
という、男子の声。

興味やら戦慄やらなんやらが入り混じった視線や言葉が飛び交う中、俺は死にそうになりながら歩いた。
いつもの精神的苦労が二倍だった。
……いや、二乗だったかもしれない。

師匠、あの時あなたの味方をしなくてすみませんでした。
もうちょっとよく考えるべきでした。ほんと。
後悔しても今更もう遅いのだが。

だがしかし、この状況を作った張本人の陽翔さんは「二人とも凄いね！人気者だね！」などと笑顔で言っていたのであった。

そういうわけで、俺たちはそんなこんなな現象を巻き起こし歩き、やっとの思いでここにたどり着いた訳である。
「セイくん、大丈夫かい？」
俺のぐったりした様子に気づいた陽翔さんが声をかけてくる。
「あ、大丈夫です。」
なるべく明るい声で答えたが、顔の筋肉がひきつっているのが分かった。
…体育館が暗くて良かった。

俺は、ゆっくり体を起して陽翔さんと反対側にいる原野さんに小声で話しかけた。

「…原野さんは、廊下の周りの声とかって、気にしないんですか？」
「そんなの一々気にしていたらキリがないわよ。」
……流石師匠。
さらっと言いのけた。

俺が感心していると師匠が「でも…」と付け加える。
「さすがに今回はまずいかもね…。」
「あ、やっぱりそうなんですか？」
師匠の方に顔を向ける。
師匠はまっすぐ舞台を見ていた。

細かい表情は暗くてよく見えない。
だが、彼女が何かを考えていることは分かった。

するといきなり。
一瞬のうちに、変化が分かるほどに原野さんの顔がひきつった。

その瞬間。
会場が一気にざわついた。
湧き上がる黄色い歓声。

「覚悟シロ！！Ｍｒ，Ｆｕｃｋ！」
体育館に抜けるような王子声が響く。
俺はそのあまりに聞き覚えのある独特のイントネーションに、すぐに舞台を見る。

…舞台の真中には、緑色の洋服に全身を包まれたピーターパン……
“フランソワ先輩”がいた。

5．"Separate September"　―d5『接触』

「いや～、ピーターパンおもしろかったね！」
陽翔さんが興奮したように身を乗り出す。
が、原野さんは「ある意味ね」と冷めた返答をし、ケーキを頬張る。

俺達はピーターパンを見終わると「お腹が空いた」という陽翔さんに連れられ、料理部の喫茶店に入った。
相変わらず視線やヒソヒソ話は痛かったが、原野さんと陽翔さんと一緒にいるおかげか、いつもよりはマシに感じられていた。

「でもあのピーターパン役の子、すごい演技だったね！」
陽翔さんはまだよっぽど気にいったのか、喫茶店に入ってからもずっとその話をしていた。
「まぁ、舞台向きなのかもね。いつものオーバーな動きは…」
「え？ユウヒちゃん、知り合いなの？」
「知り合いってほどじゃないわよ。ただ前に“ハーフなのに目が蒼いのは変ですよね？”っていう話をしただけよ」
原野さんは最後の一口を頬張る。

「そうなの？だったら、もう友達だよ！」
陽翔さんのその言葉に、原野さんは口をもぐもぐさせながら答える。
「ふぁんでほうはるほよ…」

「こら、ユウヒちゃん。ちゃんと食べ終わってから喋らないとお行儀悪いよー。」
陽翔さんがそう言うと、原野さんは少し顔を顰めたが言われた通りに黙った。

すると、陽翔さんは俺へと視線を移す。
「ねぇ、セイくん！セイくんは昨日、ユウヒちゃんの劇は見たかい？」
「あ、見ました」
「見たの！？」
原野さんが俺の言葉に被り気味に叫んだ。
俺が頷くと彼女は「見てないと思ってたわ…」と呟いた。

「そっか！見たんだね！僕も見たかったんだよ～！ユウヒちゃんの劇、どうだった？」
陽翔さんが嬉しそうな顔で俺をみつめてくる。
「凄かったです。劇全体のクオリティーも凄く高かったですし、原野さんの演技も…」
「ス…ストップ！！」
原野さんが今度は完全に俺の言葉に被せて叫び、手を俺の目の前につきだす。
彼女は真顔であった。
「…それ以上言ったら、怒るわよ」
そう言い、原野さんは紅茶を飲む。

もう俺は怒られるのは嫌だったので「…はい」と大人しく彼女の言うことを聞く。
だが、陽翔さんは凄く残念そうである。

「え〜、いいじゃないか〜ユウヒちゃん！」
「ダメ」
「も〜照れちゃって！」
「照れてない！」
相変わらず真顔な原野さん。
なるほど、これは照れているときの表情なのか…。
俺はこっそり心の中で納得する。

陽翔さんは、断固として劇の話をさせてくれない彼女に不満そうな声を上げ、俺に「後でこっそり教えてね」と耳打ちをした。
それに頷くと、その様子を見ていた原野さんは怪訝そうな顔をする。
それに対して俺は、「ははは」と乾いた笑い声を返した。

「よし！午後からはクラスの模擬店を回ろう！目標は模擬店全制覇だね！」
陽翔さんはパンフレットを見ながら立ち上がり、歩きだす。
俺は急いで残りの紅茶を飲みほし、続いて立ち上がった。
原野さんも俺達を置いて歩き出す陽翔さんに呆れながら、渋々立ち上がる。

俺は先先行ってしまう陽翔さんを追って、急いで店から出た。
あれ、陽翔さん、どっち行ったんだろう……。

そんな時だった。
「…え、まことくん？」

俺は背後から声をかけられた。

後ろを振り返ると。

そこには、たくさんのケーキやクッキーをお盆に乗せたエプロン姿の谷口さんがいた。

「まことくん。きてくれたんだ？」

谷口さんは、笑顔で話しかけてくる。

……しまった、そういえば谷口さん、料理部だった…！！！

俺は焦る。

すっかり忘れていた。

原野さんと一緒にいるこの時に、谷口さんとは会いたくなかったのに…！

谷口さんが”例の彼女”だとばれてしまったら、面倒なことになるのは目に見えていた。

俺は恐る恐る後ろをうかがう。

後ろには“？”という表情のまま突っ立っている原野さん。

よし！まだ何も気づかれてない！

心の中でガッツポーズをとった。

「…まことくん？」

谷口さん彼女もまた返事をしない俺に不思議そうな、不安そうな表情を浮かべていた。

そんな彼女に俺は

「う、うん。…それじゃあ！」

と短く答えると、またすぐに振り返る。

そして、俺の突然の機敏な動きにちょっと驚いていた様子の原野さんに「行きましょう」と囁き、谷口さんの方は見ずに、すぐに彼女の横をすり抜けた。

「……え？」

今の俺には、後ろから聞こえるその二つの声に反応する余裕はなかった。

5．"Separate September"　―d6『擦違』

それから俺は「いきなり何だったの？」という原野さんの言葉を上手くかわしながら、陽翔さんの模擬店回りに付き合った。
恐ろしいことに、陽翔さんは宣言通りに模擬店を全制覇した。
陽翔さんは終始楽しそうだったが、その高すぎるテンションに、俺と原野さんはもうすっかり疲れ果てていた。

そして。午後４時。
俺達三人は、朝話し合いを行った階段に戻ってきていた。

俺と原野さんは階段に座り大きなため息をつく。
その途端に今日一日の疲労がドッと降りかかってきた。
だが、一番騒いでいた陽翔さんは、もう本当に楽しそうに、鼻歌交じりで俺達の前に立っていた。

「セイくん、ユウヒちゃん！今日はありがとう！とっても楽しかったよ！」
使いすぎてしわくちゃになったパンフレットを握りしめながら、陽翔さんは俺達に笑顔を向ける。
…大変シャイニングである。

「…兄は本当に元気ね……。一番騒いでたのに……」
原野さんがゲンナリした顔で問うが、陽翔さんはシャイニングな笑顔のままで答える。
「全然疲れていないよ！今日一日、セイくんとユウヒちゃんと一緒にいれて凄く楽しかったからね！」

俺はその言葉に、一瞬で疲れを忘れた。
「俺もです」
思わず声がでた。
陽翔さんはいきなり声を出した俺を一瞬、驚いたように見たが、直ぐに笑顔に戻る。
「そうかい！それは良かったよ！！」
陽翔さんの言葉に俺も自然と笑顔になる。

俺達二人の会話を黙って見ていた原野さんも「……まぁ。あたしも、久しぶりに学校行事を全力で楽しめたし…。」と呟いた。

そして、原野さんは俺に視線を向ける。
「でも…マコト。巻き込んでごめんね」
続いて、苦笑い。

そんな、巻き込んだなんて！
俺は慌てて言う。
「いえ！原野さんと陽翔さんと一緒にいれて楽しかったですから…！それに俺も…二人といないと全力で楽しめなかっただろうし…」

言葉が上手く繋がらなくて焦る俺を見て、さっきまで渋い顔をしていた原野さんの表情が緩んだ。
「…ふっ」

彼女は吹き出したように笑う。
それにつられて陽翔さんも吹きだした。
俺はどうしたらいいか分からなくなったが、二人につられて笑顔になった。

すると、陽翔さんが何かを思い出したかのように「あ」と声をあげる。
「セイくん！昨日メールでいっていた、じちゃクエは持ってきた？」
「あ！はい」
俺は陽翔さんに言われるまで忘れていたゲーム機をポケットから取り出す。
「今日一日ずっと電源つけてました！」
「そうかい！僕もだよ！」
陽翔さんも、キラキラした瞳で答え、自分の鞄からゲーム機を取り出す。
原野さんは俺達二人の会話を聞いて不思議そうな顔をする。

「ねぇ。どうしてゲームしないのに、電源をつけたままにしてるの？ただの電力の無駄遣いじゃない。」
「違うよ！ユウヒちゃん！」
「…なにが…？」
確かに原野さんの言っていることは正しいが。
…なのだが、この場合は違う。

「違うんですよ、原野さん！！」
「だから…何がよ！」
陽翔さんは自分のゲーム機を原野さんの目前に掲げる。
「このじちゃクエ？はね、新機能がついているんだ！その機能がね、

すれ違った人と勝手に通信できちゃう！っていう優れものなんだよ！！」

「すれ違い通信ですよ！原野さん！！」

「……はぁ」

まだあまり理解していない様子の原野さんに陽翔さんは「これを見て！」といい画面を見せる。

そこには学校ですれ違ったであろう、プレイヤーの名前とそのキャラクターが並んでいた。

それを見た原野さんは興味なさげに「……ふぅん」と呟く。

その反応に「もうユウヒちゃんは！」と陽翔さんは叫ぶ。

「セイくん！ユウヒちゃんは昔から僕がゲームの話をしてもこんな反応なんだよ！！」

「だってしょうがないじゃない。兄のゲームの話、よく分からないんだもん」

「もったいないですよ、原野さん！」

俺も思わず叫ぶ。

…いや、本当にもったいないと思う。

俺は一人っ子故、こんなゲーム好きなお兄さんがいたら…と思うと、本当に羨ましい。

だが原野さんは「…そんなこと言われても」と不服そうな表情を浮かべていた。

俺は自分のゲーム画面を見る。

陽翔さんの画面と同じようにたくさんのプレイヤーの名前とそのキャラクターが出た。

俺はどんどんスクロールさせ、今日一日、学校内ですれ違った履歴を見ていく。

すると、ある所で今まで流して見ていた俺の手が止まった。
そこにいたキャラクターは今まで見てきた履歴の中で一際、イケていた。

プレイヤー名：ケイト

とかかれたそのキャラクターは黒髪に赤のメッシュが入った、何ともイケメンなお兄さんであった。
俺は思い出す。
……こんな感じの人といつすれ違ったんだろう？
あ……いや、でもこれは自分で髪の色や顔立ちまで決めることができる。
俺と陽翔さんは割と自分に似せてつくっているが、自分で好きなキャラクターをつくってプレイしている人も多いだろう。
だから、決してその人自身って訳ではない…けれど。

もしこのキャラクターが架空の人だったとしても、考えた人はかなりセンスいいな…。

そんなことを思いながら、俺はまだ言い合いを続けている陽翔さんと原野さんに参加した。

5. "Separate September" ―d7

―d7『無言』

「…書いてましたね…。」

俺は、手に持っている番号の書かれた小さな紙と、前にある掲示板に貼ってあるメモ用紙を交互に見つめ、面倒そうな表情を浮かべている彼女に伝える。

「……本当、面倒なことをしてくれたわ…。」

あれから。

陽翔さんと原野さんの言い合いを止めた俺に、陽翔さんは「そろそろ帰るよ」と、もたれていた壁から体を起こした。

そして、「セイくん。今度こそユウヒちゃんにじちゃクエの素晴らしさを分かってもらおうね！」と言うと颯爽と階段を降りていってしまった。

……かと思いきや、「あ！！」と叫ぶとまた戻ってきた。

「今度は何よ！」

少々ご機嫌斜めな原野さん。

だが、そんなことは気にせず陽翔さんは、「ちょっとちょっと、ユウヒちゃん」と原野さんを手招きした。面倒くさがりながらも彼女は陽翔さんの方へ向かう。俺も気になってついていく。

「はい。これ。渡すのをすっかり忘れていたよ！」

陽翔さんはポケットから小さな赤い紙を取り出すと、原野さんに手渡した。
原野さんはその紙を見つめ「え？何これ？」と問う。
俺は文化委員補佐をしていた為、その紙が何なのかは一発で理解できた。

陽翔さんは「えーっと」と言うと俺を見る。
「セイくんは、この紙のこと知ってる？」
「はい」
「そうかい！」
陽翔さんは嬉しそうな笑みを浮かべる。
……何だか嫌な予感がした。

「セイくん！ユウヒちゃんにきちんと説明してあげてね！じゃあ、僕はこれで！！」
陽翔さんはそう言い今度は逃げるように階段を降りて行ってしまった。
……俺はまた陽翔さんに面倒事を押し付けられたようである。

ため息を深くつく俺に、まだ小さな紙が何なのか分からない原野さんは訝しげな表情を向けている。
俺が説明するしか方法は無いようなので、その紙の説明を彼女にすることにした。
「えっと。その紙は今年の文化祭のイベントの一つでですね…。学校内で同じ番号の人と出会いましょう。っていう企画なんですよ。」
「番号？」
「はい」

俺は彼女の持っている紙を覗き込む。
その赤い紙には“１３５”と書かれていた。
「これには１３５って書いてあるんで…原野さんは１３５番の青い紙を持った人とペアなんです。」
「え…ペアって…どうやって探すのよ?」
「下足室のところに掲示板があるでしょ?そこにメッセージを書いて貼っておく。とかして探すらしいですよ。」
「…本当にそんなので見つかるの?……ていうか、何の為にするのよ。」
「このイベントの目的は“学校内で友達を増やそう”ってことらしいですけど…。赤は女子、青は男子なんで、友達っていうか…絶対異性と出会うようにできてるんですよ。」
「……」
「でも、在校生限定なんで…陽翔さんが持っているのはおかしいんですけど…」

…そう。
これは在校生限定の文化祭のイベント。
表向きは“学校内で友達を増やそう”だが、本当の目的は“イベントの力を借りて出会いを”とか、そんなところだろう。

このイベントがあると委員会で説明を受けたとき“こんなイベント誰が参加するんだ?”と思っていたが、１３５という数字を見る限り…学校内で３７０人以上がこのイベントに参加していることになる。
……みんな凄いな。

だが、そんなことより、本当に気になるのは陽翔さんがこの紙を

持っていたことである。
「兄のことだから、どうせ上手いこと言って貰ってきたんでしょ。あの人こういうの大好きだから」
原野さんはそう言うと、大きなため息をついた。

「…それ、どうしますか？」
「どうするも…。あたしは面倒だけど……相手が探していたら悪いでしょ」
原野さんは手元の赤い紙から、俺に視線を移す。
「とりあえず…その掲示板を見に行くわ…。…１３５番の人のメッセージがないことを祈って…。」
「…そうですね」

こうして、俺達は下足室に向かった訳だが……俺達二人の願いは叶わず。
掲示板には、“１３５番の人。後夜祭の時に一階のエレベーターホールで会いましょう！”と書かれたメモ用紙がばっちり貼られていたのであった。

二人してため息をつく。
俺は自分のことのように悩んでいた。
……どうするべきか。

その時、校内に放送が響きわたった。
「生徒のみなさん！間もなく後夜祭が始まります。グラウンドに集合してください！」
「……どうするんですか。原野さん」

「…行ってくるわ」
「え…！？」

俺は彼女の返答に驚いた。
自分の心臓の音がだんだんと大きくなってくることを感じる。
「マコト。今日一日付き合ってくれてありがとうね。だからせめて、後夜祭だけは例の彼女を誘いなさい」
原野さんの言葉に更に心臓の鼓動が速くなる。

「…え…。でも…原野さんは、一人で会いに行くんですか…？」
「うん。会えばいいだけでしょ？」
「…でも…」

上手く言葉が繋がらない。
俺は何に焦っているのかを自分自身でよく理解できていないまま、言葉を並べる。
「その後は…どうするんですか？」
「そんなの、あなたが心配することじゃないでしょ」
彼女はそう言い顔を少し歪める。

そして、後ろにくるりと向きを変え
「じゃあね」
と言い残し、歩いて行く。

…呼び止めないと！
何故かは分からない、だが。

頭の中には、それぱかりがぐるぐる回っていた。

”原野さん!!”

その言葉は、声にはならなかった。

5．"Separate September"　－d8『麻痺』

グラウンドの特設ステージでは生徒会がマイクで何やら叫んでいるようだ。
参加している生徒達が楽しそうにステージの周りで騒いでいるのが聞こえる。

俺はそのざわめきを聞きながら、ぼーっとしていた。
何故だか、参加する気分にならない。
心の端っこが、じんわりと麻痺したようになっていた。

その音の波が、聴いている内になんだか鬱陶しく感じられ始めたから、俺は。
教室で喫茶店の片づけを行うことにした。

教室には後夜祭に出ているのか帰宅したのか、生徒は誰もいなかった。
今は誰かと話す気分ではないから丁度良い。
片づけをしようと教室に来たものの、すでに大体は片付いていた。

……それならもう、帰ろうか。
どうせもう用事はない。

教室の隅に置いていた鞄を取る。
黒板には“打ち上げ7：30から！”と大きな字で書いてあったが、俺は見て見ないふりをした。
なんだか、そんな気分ではなかった。

後夜祭の騒音を聞きながら、下足室に向かう。
校舎内は静まり返っている為、自分の歩く音しか聞こえなかった。
そんなことを考えながら歩いていると、前方に見慣れた姿を見つけた。
谷口さんである。

俺は師匠の言葉を思い出す。
“後夜祭だけは例の彼女を誘いなさい”

今までは割と出来る範囲内ではあるが、谷口さんに関することで師匠に言われたことは、きちんとこなしてきたつもりだ。
だが最近、師匠に言われた指示を、素直に全部はこなしていない。
それは谷口さんを好きじゃなくなった、とかそういうものではなかったのだが。

ただ何となく。
そう、本当に何となく。
でも、それは本末転倒というものであって。
それに…俺と原野さんが仲良くしているのは、あくまで契約だから、であって…。
まとまらない考えが、頭の中をぐるぐると回る。

そして、俺の思考は、一番のわだかまりに辿り着く。

原野さんはペアの男子と、会えたのだろうか？
その後、どうしたのだろう…？

「まこと…くん？」
その声で我に返った。
考え事をしている内に、俺は谷口さんの方向へ歩き続けていたようだ。
そのせいで今、彼女の頭は俺のすぐ下にある。

「あ…ごめん」
俺はすぐに谷口さんから距離をとった。
彼女は「…うん」とか細い声で俯く。
数秒の沈黙が流れた。

…それが凄く長く感じられたから。
堪らなくなった俺は、口を開いた。
「あ…谷口さんは後夜祭、行かないの？」
俺が言葉をかけた途端、彼女はすぐに顔をあげた。

「うん…色々、仕事とかクラブの片づけがあったから。」
「え？あ…ごめん…！俺、クラスの片づけ…行った時には…」
「だいじょうぶだよ！まことくんはずっと頑張ってくれてたから！」
谷口さんは俺に対して、はにかむ。
彼女の笑顔に俺は、何も言えなくなった。

「…まことくんは、帰るの？」
今度は谷口さんが口を開く。
「…うん」
「打ち上げは？来ないの？」
「……うん」
返答に、彼女は凄く不安げな瞳で俺を見上げる。
「……どうして？」

その声に、その表情に…俺は動けなくなる。
俺は、恐らく焦点が合っていないであろう瞳で、彼女の瞳を見つめたまま口から文章にならない言葉を、単語を発した。

「…お金、ないし…それに、今日…疲れたから、ね…」

谷口さんが一瞬目を大きく見開いた…気がした。
が、それは気のせいだったのか、次にきちんと焦点を合わせて見た彼女は、少し困ったようにはにかんでいただけだった。

5．"Separate September"　－d9『再会』

谷口さんとは下足室まで一緒に向かった。
彼女は後夜祭に行くと言ったので、そこで別れた。
後夜祭も終盤に差し掛かっているのであろうか、グラウンドの熱気が伝わるほど、より一層盛り上がっていた。
俺はその音を背に校門へと向かう。
まだ胸のあたりにじんわりと、正体不明の痺れが残っていた。

……俺は。
ふいに名前を呼ばれた気がした。
その場に立ち止る。

「マコト！」
今度は聞こえたその声に、俺は後ろに振り向く。
声の主…原野さんは、自転車を押しながらこちらに向かって走ってきていた。

「え…原野さん…？！」
彼女は俺の隣までくると、肩からずれた鞄を自転車の前かごに入れる。

「ちょ、ちょっと…、後夜祭、誘ってないの？」
原野さんは走ってきた為か、息が絶え絶えだった。

俺は肩で息をしている彼女を見ながら答える。
一体。
どうしたんだろう。
どうして彼女が、ここに…？！

「…はい」
俺の気持ちの抜けた返答に原野さんは、これでもかという程、顔を顰めた。
「…あなた、はい、ってねえ…」
「え、けど、原野さんはペアの人…、どうしたんですか？！」

言葉を被せて尋ねた俺に、彼女はため息をつく。
いつもなら確実に怒られるのに、疲れているためか、今日は怒られなかった。
「…会ってないわよ」
「え…、…いなかったんですか？」
原野さんはゆっくり首を横に振る。
「吉井に押しつけたのよ。」

さらっとそんなことを言いのけた彼女は、もう一度大きなため息をついた。
「何となくは予想してたのよ…。でもまさか、ドンピシャだったとはね…」

原野さんが言うにはこうだった。

我が校ではクラスの体育委員が、文化祭の受付を交代にすることになっている。
吉井さんはクラスの体育委員の為、校門で受付をしていた。
そこに陽翔さんがやってきて名前を書いた。
その時に、原野という名字に反応した吉井さんが陽翔さんに声をかけた所、会話が弾んだそうだ。何故、原野という名字だけで反応したかは謎だが、そこは「吉井はそういう人なのよ」と原野さんが言っていたからそうなのだろう。
そして、面白い企画を発見した陽翔さんは、妹を参加させてあげたいから、と吉井さんに頼み紙を受け取ったのであった。

このことは、俺と別れてからたまたま会った吉井さんから聞きだしたらしい。
そして原野さんはこの紙を文句を言う吉井さんに押しつけた、という訳だ。

俺は思わず笑ってしまう。
原野さんは不満そうに「笑いごとじゃないわよ」と隣で呟いていた。
だが、俺は笑いが止まらなかった。
なぜか、本当に声をあげて笑いだしたいような気分だった。

校門から出て少しした所で、俺達はそれぞれの道を背に向かい合う。

「今日は本当に色々…お疲れさまでした」
原野さんが少しげんなりしたように言う。

俺もその言葉に、少し笑いながら頷く。
「でも、…凄く楽しかったですよ。」
「…確かにね」
原野さんも少し微笑んだ。
だがその表情も束の間、彼女はすぐに真顔になる。

「けど、9月は全然修業出来なかったから、これからまた強化していくわよ。」
「…え」
「あなた、特に今回はあたしの命令を凄い頻度で無視しているから。分かってる?これからはもっと厳しくいかないと…」
師匠はぶつぶつ呟くと、自分で納得したように何度か頷く。
まったく、この人は…。
俺は師匠を見ながら苦笑いするしかなかった。

「では…また学校で」
原野さんの言葉に、俺達は改めて向き合った。
「はい。さよなら。」

「じゃね。」
彼女は頷くと自転車で去って行く。
俺はその後ろ姿を見送た。

この一カ月ちょっと…なかなか大変だった。
でも、凄く充実していた気がする。
あれだ。

気づけば胸の痺れもどこかにいっている。
終わりよければ全てよし、とかいうやつだ。

俺は少し寒くなってきた空気を感じながら、帰路についた。

To be continue….

6．"11　SAMURAIs"　－a1　『的中』

－a1　『的中』

秋が深まってきた。
ツンと澄んだ空気がシャツの中をさっと通り抜けていく。
俺はそんな風を清々しく感じながら、夏頃に何度もくじけそうになった学校への坂道を上っていた。

秋はいい。俺は思う。
徐々に色づき始めた落葉樹のおかげか、いつの間にか坂道からちらちらとオレンジやブラウンに彩られた町並みが目に入るようになっていた。
夏はあんなに上るのが嫌だったのに、季節が変わるだけでこうも変わるものなのか。

秋はいい。こんな綺麗なものがたくさんある。
少し冷たいくらいの気温が心地いい。
俺は良い気分だった。
なんだかなんでもうまくいきそうな気がしてくる…。

だがしかし。
文化祭という大きな学校行事が終わり、代休を二日挟んだ水曜日。
俺はこの二日の休みで、大事なことを忘れていたようだった。

『えぇ?!ほんとなのぉ!?』
『ほんとだって!私も見たもん!!』
『え〜ショックー!!…やっぱり中澤くんも美人が好きなんじゃ〜ん』
『でも!まだ分からないよ!!たまたま一緒に回ってただけかもだしっ!!』
『でも原野さんでしょぉ〜……勝ち目ないって…。』

『おい、中澤が原野さんと回ってたってほんとかよ?!』
『マジだよ、俺みたぜ!!』
『なんだよー、侍らせるのは勝手だけどよりによって原野さんまで…』
『てか、原野さんにそっくりな男の人も一緒だったらしいぜ!』
『え…誰だよそれ』
『お兄さんとかじゃね?』
『おい、じゃあ、もう兄公認ってことかよ…!!なんだそれ!!!』

学校に近付くなり、聞こえてくる声、声、声。
校舎に入るともうそれは俺の通るところに嵐のように巻き起こっていた。
四方八方から、避けきれない数の噂話が飛んでくる。
本人がそこにいることなんて全く関係ない。
これは……あまりにあんまりな事態だった。

まさに、原野さんが当初予想した結果だった。
無駄に一緒にいたら、噂が噂を呼んで大変なことになる……。
だがまさか、ここまで大事になるとは思わなかった。
これでは噂が一人で歩いていってしまっているどころか、一人で踊り狂っているようなものである。

あーやばい。
今日は一日クラスに引きこもるしかないか…。
俺は強く決心して、なんとか嵐の廊下を潜り抜け、クラスの扉を開けた。

……だが。
俺が扉を開けた途端、クラス内のざわめきが静まり返った。
……え？
俺はきょとんとなる。

おう…もしかして、クラスもアウトなのか。
俺はクラスメイトからの視線を浴びていた。
続く沈黙…。

その沈黙を破ったのは矢吹だった。
机に座ってクラスメイトと話していたのであろう矢吹は、その状態のまま顔だけこちらに向けて「おっす、誠ー！」と挨拶してきた。

いつもどおりである。

良かった、矢吹はいつもと同じだ…。
俺は少し安心して、口元が緩む。

「お、おう、おは」
俺が言いかけた瞬間だった。

「…なんて、言うと思ったかァアー！！」

グアッ！！っと効果音がつきそうな形相で矢吹がいきなり叫び、机から飛び降りた。
…ええ？！！

「奴を捕らえよ！」
矢吹がそのままのテンションで俺を指したかと思うと、俺は左右から両手を拘束されていた。
ちょ…ちょっと、なんだ？！

驚いて右を向くと、右腕を掴んでいたのは末永だった。
「ごめんね。ちょっと付き合ってあげてね。」
末永はちょっと苦笑しながらそういうと、俺の左側に目線を送る。
俺は末永につられて左を見た。

「…な…なか…ざわ…なかざわ……なぁかぁざぁわあぁぁアー！！！」

凄い形相で左腕を絞めていたのは、篠原だった。
……なるほど、こっちの方が痛い訳である。
篠原は俺よりも大分背が高い為、上から叫ばれる俺はそのままその迫力に押しつぶされてしまいそうだった。

「篠原、ここだと邪魔だから。」
今にも噴火しそうな篠原を、末永が冷静にたしなめる。
篠原は今にも叫び出しそうだったが、「ぐぁっ…あー…」と言葉を噛み殺すと、まだ俺達から少し離れて教室の中にいる矢吹に視線を移した。
視線を受けた矢吹は、ゆっくり頷く。
「連れてゆけっ！」
びしっ！と効果音かつきそうなくらい鋭い動きで教室外を指差した。
それを合図に、篠原は俺の左腕をぐいぐい引っ張りながら廊下を歩き始める。
末永はその様子に、
「中澤も大変だね」と苦笑し、俺の右腕を離した。

「おい、すえ！ちゃんと捕まえとけよー！」
いつの間にか後ろにいた矢吹が末永を軽く小突いた。
「大丈夫だよ。中澤は逃げないよ。」
末永がそう言うと、矢吹はちょっと考える。
「…それもそうだな！」
そう言って笑うと、俺を抜かしてその前を歩き出した。

…よかった、やっぱり矢吹はいつも通りみたいだ。

俺は少し安心する。
考えてみたら、さっきの口調も大分演技じみていたし。
楽しんでいるだけなのかのしれない。

だが、問題は篠原だった。
誤解しているのが知らない人だったら、俺と原野さんのことで噂を立てられたりするのも、それはそれで仕方ないと考えることができたし、わざわざ俺からその人達に説明する義理はないだろうと割り切ることも出来る。
嫌だし面倒ではあるけれども。

だけど、今は相手が篠原だ。
相手が友達だから、放置するとか、そういう訳にはいかないのである。
ただ単に何となく、俺の私情だけど…篠原と気まずくなるのは嫌だった。

…これは一体どうするべきか。
俺は、今自分の左腕を引っ張っている人物に対して、必死に頭を悩ませた。

－a2『詰問』

俺が拉致られて数時間が経った、昼休み。
俺達は人が来ない非常階段の踊り場に来ていた。
文化祭の時に原野さんたちと話し合いをした場所だ。
篠原もこの場所の存在を知っていたらしく、朝も俺はここへ引っ張って来られたのだが、その時は朝礼前で時間が無く、結局すぐに退散する羽目になってしまった。
矢吹は元からさぼる気満々だったが、篠原がそれを制したのである。
篠原は何事にもアツイ奴だが、それと同じくらい真面目だった。
その為、この会議は昼休みに持ち越されたというわけだ。

授業を受けている間は、本当に長かった。
とにかく居心地が悪かった。
今までは目立ちすぎないように気をつけてきたので、ここまでひどい状況を経験したことがなかったのである。
周りから発せられる好奇やら疑心やらの感情が塊になって俺を圧迫してくるようだった。

そしてなにより怖かったのが、谷口さんのことだ。
谷口さんはこのことをどう思っているのだろうか。
想像するのも怖かった。
俺は周りの視線も谷口さんの表情も篠原の殺気も見ないように、気づかないふりをして、机に突っ伏して午前中を過ごした。

そして現在。
またもや篠原に引きずられるようにして、ここにやってきたのである。
俺達は誰も来ないことをいいことに、踊り場に座りこんでいた。
矢吹は立膝で俺の左、末永は体育座りして俺の右側、そして篠原は俺の目の前でドンっと胡坐をかいている。
俺はというと、そんな篠原を目の前に、正座して冷や汗をかいていた。
どうしたらいいのか分からない。
朝あんなに気持ち良かった秋風が妙に寒かった。

「…な…なか…ざわ…なかざわ……なぁかぁざぁわあぁぁー！！」
何かが途切れたかのように、篠原がわなわなと震え始める。
グアッ！！と背後から何か得体のしれないものでも出してきそうな程の熱気である。
「一体どういうことだ……！！朝から噂になってる…アッ、アレは本当なのかよ　ま　ま　まさかお前原野さんとっつ、つ！！いやもう詳しく説明してもらうまで絶対ゆるさ」
「篠原。」
オーバーヒート状態の篠原を、末永が華麗に遮った。
「早く聞きたい気持ちは分かるんだけどさ、取りあえず昼飯食べない？」
コンビニのサンドイッチを片手に微笑む末永。
矢吹はもうすでに弁当を?き込んでいる。
篠原は「う…」と言葉を漏したが、暫く考えた様子を見せると、

「…分かった。じゃあ食いながら話す！」
と膝の上で弁当を広げ始める。

「あ、じゃあ…」
俺も持ってきていた弁当を広げようとしたが、
「中澤はまだ駄目だ！！！！」
篠原に凄い形相で遮られた。
……全部話すまでは食べるなってか…。
しぶしぶ弁当から手を離した俺の横で、末永が苦笑しているのが目に入った。

「…それでだ、中澤。お前は何故、文化祭の時原野さんと一瞬にいたんだ。簡潔に分かりやすく、だが洗いざらい答えるんだ。」
弁当を準備するや否や、篠原はまた俺を見据える。凄い目力だ。

俺は困り果てた。
…この場合、何て言うのが最善なんだろう。
原野さんと文化祭を回っていたことが事実な以上、とぼけるのは無駄だ。
だからと言って、修業とか、そういった本当のことを話すわけにもいかない。
このことだけはばれたくなかった。

これには俺の自己防衛のような真理が働いているのかもしれない。
プライドとか、見栄とか。
話したくないのは踏み込まれるのが嫌だからなのか。
変化が嫌だからなのか。
逃げられない以上、ここで潔く話してしまって楽になるのが一番平

和なのかもしれない。
だが、俺はなぜか、それだけはしたくなかったのである。

黙りこむ俺を見て、篠原がはぁーっとため息をつく。
「中澤、別に俺は怒ってるんじゃない。気になるんだよ、女子ともほとんど話さないようなお前が、どうしてよりによって原野さんと文化祭を回ってたのか。」
「だよなー」
弁当をもぐもぐさせながら矢吹が相槌を入れてくる。
「原野と誠って、オレっちがらみで五月にちょっと喋ってたくらいだと思ってたからよー」
「ん、なにそれ気になる。詳しく。」
末永は早くもサンドイッチを食べ終えたのか、空き袋を綺麗にたたみながら矢吹に尋ねた。
「あ?えーっとな、誠と帰ってるときに偶然原野に会ったことがあったんだよ。そのあと原野の落とした財布を一緒に探してー」
「へえー。」

「なんだよその美味しい出来事は!!!」
篠原が吠えた。
「もう篠原はちょっと落ち着けってー!で、オレ用事出来たからそのあと誠に任せて帰ったんだよなー…」
矢吹がそういうと、袋をたたんで綺麗に結び終えた末永（器用だ）がぽつっと言った。
「その時に仲良くなったとか?」
「いやちがうそれはちがう。」
俺は即答した。
…ちょっと即答気味だったかも知れない。

あまりに的を射ていて思わず、だった。
あの時がきっかけであるのは紛れもない事実だったが、そこから話を展開させて俺の望むような方向に収束させるのは無理な気がしたのだ。
5月から10月の半年。
それは意図せずとも、かなりまとまった時間なのである。
いらぬ誤解を生む程度には。

俺のこの返事に、末永は「んー？」とだけ言うと、深く追求はせずに結んだ袋をビニールに入れた。

矢吹は俺の態度には気づかなかったのか、話し続ける。
「しかも原野の兄貴も一緒だったんだろ！家族ぐるみのおつきあいじゃねーか、なあおい。どういうことだ、誠よ。」
にやにやしながら俺に視線をよこしてきた。
『お前、いつの間に乗り換えたんだよ、え？え？』
とでも言いたげな顔である。
放っておくと余計面倒なことになりそうだったので、俺はありったけの“これ以上喋ったら分かってるだろうな”の視線を送った。
矢吹はそれを察知したのか、「へーい」と言うとおかずの卵焼きを口に放り込んだ。

そうだ、陽翔さんと回ってたことも説明しないといけないんだった。
俺は、話せば話すほど逃げ道が消えていくのを感じていた。
事実を話すのが一番なのか…？
だが、この期に及んでもやはり俺は事実を話すことに乗り気になれ

なかった。

考えろ。

何か良い方法は……出来るだけ嘘はつきたくない、何とか原野さんといたことを正当化出来る方法を考えるんだ……。

「おい中澤、どうなんだ。」

篠原の催促の声。

俺は考える。

原野さん……陽翔さん……どうやって仲良くなった…。

そうだ、じちゃクエだ…陽翔さんとはゲームショップのＡＬで……

その後……？

その時、俺はひらめいた。恐らく最も良い切り抜け方を。

「じちゃクエだよ」

俺は言った。

「はあ？！じちゃクエ？！」

「それって、ちょっと前に発売したＲＰＧだよね。」

篠原と末永が思い思いのことを口にする。

「けど原野さんとじちゃクエに何の関係が……。」

「俺はじちゃクエを買いにいったゲーム屋で、原野さんのお兄さんと仲良くなったんだ。」

俺は篠原の言葉に被せるようにいった。

「それで、お兄さんの関係で原野さんともしゃべるようになって……」

俺の考えはこうだった。
実際の順序としては“原野さんと仲良くなってから陽翔さんと仲良くなった”が正しいが、俺はこれを入れ替えて伝えた。
そうすることで“原野さんと仲良くなっても不自然じゃない状況”を作り出そうとしたのだ。
先に同性である“お兄さん”の方と仲良くなったことにすれば、異性である原野さんとその繋がりでしゃべるようになるのもそこまで不自然ではない。
それに陽翔さんの積極的に人と絡んでいくあの性格を考えると、この設定はかなり正当性を帯びたものとなるはずである。

「あーなるほど。原野の兄貴って結構面白い性格してるからなー。」
事実、陽翔さんの性格を知っている矢吹はこの話に納得したようだった。
「面白い性格って？」
末永の質問に、
「いろんな人にめちゃくちゃ声かけていくんだ。オレっちも原野とずっと同じクラスだったから、何度か話しかけられたことあるぜー。」
と矢吹が笑いながら答える。
「……なるほど。」
篠原は顎に手をやって何やら考え始めた。

…うまく切り抜けられるかもしれない。
俺はひやひやしながら事の成り行きを見つめる。
“矢吹が原野兄妹のことを知っている”というのはこの設定の大き

なメリットだった。
俺が説明しなくても話が思った方向へ進む。
これは怪しまれない大変良い流れだ。

それにこの設定には俺にとっての大きなメリットがあった。
出来事が起こった順番を変えただけでほとんど嘘をついていないのである。
いくら事実を隠したいといえども、俺はこいつらに嘘だらけの話をしたくなかった。
嘘で自分を固めたくなかったのかもしれない…。

「……うん、なるほど。納得した。」
暫く考え込んだ後、篠原が顎にやった手を離して、言った。
「それならああいう状況になってもおかしくないな。」
俺はその一言にほっと安堵する。
良かった、うまく切り抜けられた……。

「だがしかし!!」
ほっとしたのも束の間、篠原はまた眉間にしわを寄せると俺の両肩をガシッとつかんだ。
気を抜いたところだった俺は飛び上がる。
「正当な理由があろうとも、これはやはり抜け駆けだ、中澤……。世の中には彼女と仲良くなりたいがために、様々な血のにじむような活動をしている人たちもいる。俺のクラブの先輩もその一人だ……。」

篠原のドアップに耐えきれなくなって、俺は右側に視線を向けて末永に助けを求めた。

末永は苦笑している。
「だから、中澤。分かるな？」
篠原はゆーっくりと息を吸うと、今までの険しい顔が嘘だったかのように、ニィーっと笑い。

「原野さんを紹介してくれ！」

俺はその歪みない笑顔に、
「お……おう」
と言うしかなかった。

6．"11　SAMURAIs"　－b1『格闘』

－b1『格闘』

それから少し時は流れ。
文化祭がきっかけのあの騒動も、そこそこ落ち着きをみせ始めていた。
少なくとも歩くだけで嵐を巻き起こすような事態は収まってきたのだ、それだけでも進歩である。

噂が落ち着くまでの間は、篠原との交換条件（？）が成立したこともあって、そこまで辛い思いをせずに済んだ。
篠原は時にアツく俺を慰めてくれたし、末永はあることないこと付け加えられた噂話をちまちまと潰してくれていたようだったし、クラスメイトの俺に対するありがたくない視線は矢吹のバカ騒ぎが和らげてくれた。
…矢吹は通常運転だっただけかもしれないが、結果として良い効果を享受したので、まあそれは良い。
良い友人を持った、と俺は改めて思ったのだった。

そして、そろそろ上着が必要になってきた１０月最後の日。
俺は陽翔さんの家に来ていた。
最近大学が始まったばかりという陽翔さんが『レポート片付いたから遊びにおいでよ！』と誘ってくれたのである。

文化祭からほとんど陽翔さんと接点がなかったので、俺は喜んで遊びに行った。

陽翔さんの家に遊びに行かせてもらうのは夏休み以来だ。
秋以降は忙しくてご無沙汰だったので、俺はテンションが上がる。
今日は陽翔さんと楽しくじちゃクエをプレイ！
通信対戦でエンジョイだ！！

…と思っていたのだが、だがしかし。
俺は何故か今、洗面台の鏡の前に座っていた。
洗面台の前に設置された椅子に無理やり座らされた自分と、俺の首にせっせとタオルを巻いている原野さんが映っている。

「あのー…原野さん…？」
俺は恐る恐る、背後でごそごそとスーパーの袋を触っている彼女に声をかける。
鏡の中の自分の顔が引きつっていた。
だが当の本人は俺の呼び掛けには一切反応を示さず、今度はゴム手袋をつけ始める。
そして、袋から出してきた箱を開けた。独特の薬品の匂いが洗面所に広がる。

その匂いが気に入らなかったのか、鏡越しの原野さんは顔をしかめた。
「あー…これこれ。この匂いよ…。」
「ちょっ原野さん、本当に今染めるんですか！？」

そう、俺は今、師匠に髪を染められかけているのだ。
…黒染めである。
俺は本格的にやばくなってきたことを感じ、抵抗する為に椅子から立ち上がって逃れようとする。

しかし、原野さんに肩を掴まれ無理やり座らされた。
「ここまで準備しておいて、しない訳ないでしょ。いい加減グダグダ言わない！」
「い、いやいや！いくらなんでも…」
「…あのねー、マコト。」
原野さんの低い声が俺を遮る。
「出来るだけ目立ちたくないと思ってるみたいだけど…。茶髪とか、自分で目立つ要因を作ってるようなものじゃない！」
俺は鏡越しの彼女のどすの効いた声に、思わず黙った。
…マジで怖かった。

「それに、今のその頭…。なんか、プリンみたい！我慢出来ないんだけど！」
プ、プリンって！
「プ…プリンって表現されたの初めてなんですけど！」
原野さんの言葉に若干傷ついた俺は、鏡越しに負けじと反論する。

「いや、それはプリンね！間違いないわ！！」
「そんな…俺が良いって思ってるんですから良いじゃないですか！」
「あたしが嫌なの！」
「原野さんのことは知りません！」
「目につくのよ！！」
「じゃあ見なければいいじゃないですか！！」

俺の言葉に一瞬黙ると。
「……あたしは…あたしはね、マコト…」
原野さんがわなわなと震え始め、そして。
「…屁理屈を言えるようになる為に貴方のヘタレ矯正を引き受けたんじゃ無いわ！！！」
噴火した。
凄い大声だった。
原野さんはそれでもまだ何か収まらないものがあるのか、両手をバタバタさせている。

…今回俺にしてはかなり頑張った方だったが、最後の勢いと声量には流石に反論が途切れてしまった。
耳がきーんとなっている。
俺が黙ったことに気付いた原野さんは、何かが少し収まったのか我にかえったのか、勝ち誇ったように鼻を鳴らす。

……今、鼻で笑ったな…。
ちょっとばかしカチンときて、また反抗心に火がついた俺は、もう一度反撃を試みた。

「じゃ、じゃあせめて、ちゃんとした髪染めを使ってください！！」
「なによ、プリンの時は髪染めよりも白髪染めの方がいいのよ、知らないの？」
「そ！…それは、ちょ…っとだけ聞いたことありますけど！」
…ほんとは知らなかった。
強がってしまった。

俺は知ったかぶりがバレないように勢いで続ける。

「白髪染めで黒染めなんてしたら、墨を流したみたいになっちゃうじゃないですか、逆にカッコ悪いです！」
「髪染めでもそれは同じでしょ！」
「だ、だから染めたくないんです！自然に黒に戻したいんです！」
「どれだけ長期計画なのよ！！！！」

原野さんはそう叫ぶやいなや、痺れを切らしたのか箱から櫛を取り出し、俺の頭とっかかろうとする。
「ちょ…マジで嫌です！嫌です！！」
俺は椅子から無理やり立ち上がると、洗面台の伸びるタイプの蛇口を手にとって原野さんに対抗した。
「いい加減あきらめなさいって！！」
「い…嫌です！！」
「あー！！もう無理やりにでも染めるわ！！！」

原野さんが髪染めチューブをひっつかみ俺に飛びかかろうとしたその時。
入口の方から「おーい？」という声がした。
そのままの体勢で声のした方を振り向くと、陽翔さんがひょこっと扉から顔だけ出している。
「陽翔さん！！」
「兄！！」
俺達は思い思いに叫ぶ。

陽翔さんは最初、いつも通りにこにこと微笑んでいたのだが、俺達の様子を見るなり。
「え…二人とも洗面所で何やってるの？」

無表情になっていた。

…自分の家の洗面所で、右手に櫛、左手に何かしらのチューブを構えた女子高生と、首にタオルを巻いてシャワーヘッドを振り上げている男子高生が取っ組みあっているのだから、当たり前の反応かもしれなかった。

－b2『便乗』

「いやーセイくん、似合ってるよセイくん。」
「……はい。」
「そういや黒髪のセイくんって見たことなかったからね、似合ってるよほんと。」
「……はい。」
「さ…最近の髪染めは凄いね！こんなにきれいに黒くなるんだね！ほんと真っ黒だよ！！」
「髪染めじゃなくて白髪染めよ、兄。白髪染めはブリーチせずに色を乗せるからプリンが綺麗に染まるの。」
「へ、へえ、そうなんだ……と、とにかく似合ってるから元気だしなよセイくん、大丈夫だよ！！！」
「……。」

…結局抵抗しきれなかった、それだけだった。
俺の修業はまだまだ足りなかった。
少し口答えできる程度では、師匠に勝てるわけなど無かったのである。

あの後。
俺達は陽翔さんが帰ってきてからも格闘を続けた。
にらみ合いの均衡状態。

…だが健闘も虚しく、程なくして俺は敗北した。
原野さんにシャワーヘッドを取り上げられてしまったのである。
唯一の武器を失った俺が制圧されるのに、時間はほとんど必要なかった。
今になって考えると、俺の敗因は何と言っても、振りかざしたシャワーヘッドの蛇口をひねる勇気が無かったことだろう。
原野さんを水浸しにしてしまったとして、後のことを考えるとそれだけで鳥肌物だった。
……その時点でもう敗北は確定していたのかもしれない。

俺が屈してから全工程は手際よく進行し、それはもうあっという間に。かつてナチュラルブラックを目指していた俺の髪色は、黒染めによって人工的なブラックになっていた。
……それはそれは真っ黒に、墨汁でも流したかのように真っ黒だった。

時計もすっかり3時を回った昼下がり。
髪を乾かし終わった後のリビングで、テーブルの代わりに置かれた炬燵に座り手鏡に鏡に映った自分の真っ黒な頭を呆然と眺めている俺。
黙々と後片付けとしている原野さん。
陽翔さんはというと、この空気をどうにかしようとしているのか、俺に色んな言葉をかけてくれていた。

「大丈夫だよ、セイくん！そんなに…その気にすることじゃないって！」

「……はい。」
「すぐにね、色が馴染んできていい感じになるよ！だからね！」
「……分かってはいるんですよ……」

意気消沈だった。
確かに、確かにプリンみたいになっていたけれども…。
噂の勢いも下火になり、ようやく変な気をもまずに学校に行けるようになった矢先にこれである。
暫くはなんの変化も無く過ごしたかった。
そうしたら余計な気苦労はいらなかったのに、これじゃあまた何を言われるか……。

「そ…そういえば！ねえねえセイくん！」
陽翔さんは取り越し苦労でさらに鬱に入ってきた俺に気がついたのか、いつもの2割増しくらいのテンションで話しかけてきた。
「……はい」
「どうして髪染めてたの？染めるタイプには見えないからなー！今まであんまり気にしてなかったんだけど、考えてみたらなんでなのかなーってね！思ってね！！」
陽翔さんは身振り手振りで、面白いくらいのハイテンションである。

「そういえばそうよね、あんまり気にしてなかったけど。」
後片付けが終わったのか、原野さんも話に入ってきた。
手をタオルで拭きながら、俺の左斜め前に座って炬燵にくるまる。
もはや顔だけしか出ていない。
「マコトに限って、モテたいとかオシャレしたいとかの理由ではないだろうし。」

原野さんのその言葉に
「あー……」
俺はあいまいに返事をする。
「えー…、…あれですよ、えっと、不可抗力っていうか、ね……」
「なによ、はっきりしないわね。」
原野さんはくいっと片眉を上げた。
「そ、そんなことは無いですよ、ほら不可抗力です。」
「どういうことよ、それを詳しく。」

ぐっと顔を近づけ詰め寄って、彼女は俺を威嚇する。
「ちょ…」
俺は肩辺りで両手を上げ、彼女と間合いをとった。焦って息が喉に詰まる。や…やめてくれ、ほんと!

「あ、分かったセイくん!友達でしょ、友達!!ね!!!」
俺の心の叫びが届いたのか、はたまたただの偶然なのか。
俺が自己防衛を洩らすのと、陽翔さんが気付いたように叫んだのが、まったく同じタイミングだった。
俺の発した言い訳はそのセリフにうまい具合に掻き消されて、ただのうなり声になった。

「不可抗力って、友達に無理やりやられたんでしょ!ほら、今日みたいに!!」
陽翔さんはなるほどと言わんばかりににこやかである。
そして意図的なのかそうでないのか、『今日みたいに!!』が強調されているような気がした。

「……む」

原野さんも強調に気がついたらしい。

気まり悪そうな表情をすると、乗り出していた体を元の位置に戻した。

陽翔さんは相変わらずにこやかで、その笑顔はどこまでも曇りない。

原野さんは納得し、俺は解放された。

陽翔さんは「ふふ」とにこやかにほほ笑む。

だが、緊張と焦燥は解かれるどころか更に酷くなっていた。

蘇る『絶対に嘘をつくな!!!』という原野さんのセリフ。

記憶の中で、夏にこの場所で経験したあの時の威圧感がフラッシュバックしている。

厳密には陽翔さんの勘違いを彼女が納得してしまったのであって、

俺は嘘を付いていない、嘘は付いていないんだけれども……。

必死な自己弁解の最中、陽翔さんと目が合った。

彼はいつもの笑顔のままで俺に軽く目配せをする。

『言いたくない事ならこのまま黙っちゃえば良いよ!』と、そんな視線。

本当は。高校入学を控えた春、母親に引きずられて行ったおしゃれな美容院で、いまどきな美容師のお姉さん相手にうまくしゃべれるはずなど無く、母親と美容師さんの強い押しになす術もないまま気づいたら茶髪になってしまっていたというのが真相なのだが、だがしかし。

これ以上ヘタレエピソードを明かしたくなかったとはいえ、陽翔さんの助け船に乗って弁解しなかったのは事実であるわけで。

後々師匠に事実を伝えなかったことがばれたらどうなるのかと、俺はその恐ろしさに背中が寒くなるのを感じた。

6．"11　SAMURAIs"　―b3『席次』

―b3『席次』

「……はあー…。」

俺はひとつ、漏れるようなため息をついた。

一体全体どうして俺は、こうも気弱なのだろうか。

小さい頃は、どうってことないただの子供だったはずである。

…まあ、母さんから幼小時の話を詳しく聞いたことは無いので自分の希望的観測が強いのだが。だがお隣の“のんちゃん”とも普通に仲良くなっていたことを思うと、その当時は今ほど人見知りでは無かったと思われる。

…それなのに。小学校高学年になってからというもの、俺のメンタルは弱化の一途をたどっているように思う。

学年が上がるにつれて、何故か不得意になっていくコミュニケーション。口ごもり、言葉が出てこなくなることが苦痛で、俺はあまり人と話さなくなった。

それに伴い、誤解や憶測が増えていくわけで。

まあ、俺が人と話さないのだから、それに対して弁解や釈明をする機会も無かったため、それは当然の結果だった。

友達はいないわけではなかったが、彼らの俺に対する印象は噂をしている人たちと大差なかったので、代弁は期待できなかった。

誤解されたまま弁解も釈明も説明も放棄した結果が、今の俺の周囲の反応に繋がっている事は分かっている。
だが、自業自得な状況を振り切って、割り切って、何も無いように振舞える度胸があれば、俺はそもそもこんな錯誤に捕われていない。
……酷いジレンマである。

そんなこんなで俺は、ここ数年、目立たないように努力して過ごしていた。
出来るだけ自然に、出来るだけ無色透明になって、景色に溶け込むように、波風を立てないように。
…最近はそれが出来ていない傾向にあるのだが、今回の文化祭の件を見て見ても分かるように、余計な行動は状況を圧迫するだけなのである。
成り行きに任せて、出来るだけ意思を持たず、決めることすらを放棄していた、そんな中学時代。

だがしかし。そんな生活を送っていた3年間でただ一つだけ、強い意志をもって取り組んだことがあった。
鷹尾高校への受験である。

翌年に受験を控えた中学2年当時、俺はそこまで頭のいい方ではなかった。
サボっていたわけではないけれども、だからと言って勉強が好きなわけでも、ましてや良い成績をとろうとも思わなかったので、大体真ん中くらいの成績をキープしていたのだ。

両親もそこまで学業にうるさく無かったので、俺はこの点に関しては、ほとんどストレスなく生活をしていた。

きっとこのまま、中堅の公立高校に入るんだろうな、なんて思い始めていた中2の冬。

難関公立高校志望のクラスメイト達が段々内申点を意識し始める中、俺はふと、女子たちの会話を耳にしたのである。

『えー！のんちゃん、鷹尾高受けるの？！』

『あ、一応、まだ希望してるだけなんだけどね？』

『いいじゃんいいじゃん、鷹尾！あそこ伝統校だし！！』

『うん！……けど、鷹尾高校ってこの辺じゃトップの進学校だし、届くかどうか…』

『のんちゃんなら大丈夫だよ！凄く頭いいし！！』

『そ、そんなことないよお！』

……鷹尾高校。舞園市、鷹尾市一体の学区でのトップの公立高校であった。

その当時から谷口さんを意識していた俺は、焦った。

谷口さんが鷹尾高校に行ってしまったら、俺なんか絶対相手にされなくなる……！！！

今思えば、かなり早とちりだったかもしれない。だが、この会話を聞いたことが、確実に俺の転機だった。

恐怖心が先だって何もできない焦りで飽和していた俺に火をつけるには、それは十分なきっかけだったのである。

ここから俺の猛勉強の日々が始まった。
中2当時の成績では、鷹尾高校なんて夢のまた夢。担任の先生に絶句されたり、母さんにあんぐりされたりと周囲の反応は決して手放しな応援ムードではなかったが、協力はしてくれた。
連日塾に通い、予習復習の嵐をさばき、寝る間を惜しんで勉強した。

その結果。
中3の一年間でみるみる成績が上がり、俺は悲願の鷹尾高校進学を果たしたのである。
谷口さんも無事に受かって、あの時はもうほんとに嬉しかった。
…ほんと、嬉しかった。

とまあ、こんな感じで。俺は中学時代の強い意志の全てを掛けたといっていいほどの心意気で受験勉強したわけであって。
…まあ、それ以降は…そこまで、うん、勉強に…強い情熱を掛けているわけでもなく。
ましてや、そんな状態で良い成績がとれるほど、元のスペックが高い訳でも無いわけで。

だから今俺は、先程から師匠と陽翔さんの間で繰り広げられている高校の成績の会話に、戦々恐々としているのである。

「…そういや、ちょっと兄聞いてよ！この前はびっくりしたわー。いきなり実力テストがあるんだから。もうすっかり忘れてた！！」

さっきまで嬉々として語っていた高校の授業の難易度の話を一段落させて突然、原野さんがこう言った。
「えっ、ユウヒちゃんらしくないねー！テストの日程忘れてたなんて。」
「文化祭ですっかり記憶から飛んでたのよ。」
彼女は不満そうな顔をして続ける。
「まあ、何とかなったから良かったけど。」

「ふうん、そうなんだー。席次はどれくらいだったの？」
陽翔さんのその質問に、原野さんはちょっと口をとがらせると
「８位。」
……至って不満そうに、言った。

「？？！！」
俺は思わず叫び声をあげそうになったのを押し殺した。
……８位？！３２０人中の？！
鷹尾高校の８位って、どんなレベルなんだよ……！

「えーそうだったのー。それはユウヒちゃんらしくないねーやっぱり。」
だがそんな俺の心境をよそに、それが残念極まりないことのような口ぶりの陽翔さん。
……俺の真逆を行く反応である。
「そうなのよー…ちょっとサボりすぎたかも。」
もっと顔をしかめて、しかも反省までし始めた我が師匠。

「……はあ…」
思わずまた息がでた。
……住む世界が違う。
俺は自分の席次を思い出して寒々とした気分になる。その成績で失敗というのなら、こっちの成績は大失敗もいいところだった。

「そういや、貴方はどうなのよマコト。」
明後日の方向を見つめていた俺に、いきなり声がかかった。
突然のことに、俺はびくっとなる。
「え！」
「貴方って、成績どれくらいなの？そういや知らなかったわ。」
「……えー……」

…こうなることを一番恐れていた。
だからこの話題が回って来ないように、出来るだけ大人しくしていたのに……。
その場にいる人を会話からあぶれさせるようなことをする師匠では無かったのである。
……これは切り抜けられるのだろうか…？
もうこれ以上残念なエピソードは明かしたくなかったのに……。

目の焦点がずれている俺に、原野さんは不思議そうな顔をする。
「…なによ、言いにくい？…あ、もしかして私より良かったの？」
「え！いや！」
原野さんのとんでもない勘違いに慌てる。
８位以上ってどれだけ頭いいんだよ！！

「ええ！そうなの、セイくん！！」
だが、まさかのタイミングで陽翔さんが乗ってきた。
「今回ユウヒちゃんも調子悪かったみたいだしねー！！」
「それ言わないでよ、兄。」
原野さんの冷ややかな視線に、陽翔さんがだまる。
原野さんはそれを確認すると、グイっと俺に迫り、圧迫するように言った。
「どうだったの？実力テストの席次。教えて！」

……“俺もテストのことすっかり忘れてて勉強できてなかったんですよー！あはは！”
……といって許してもらえる席次なのだろうか。
…ほんとはテストの存在はばっちり覚えて勉強しなかっただけだけれども。

もしかしたら、師匠は成績の良さなんてあまり気にしないなんてことはないだろうか。
…自分の成績は凄く気にしているけれども。

だが少なくとも、ここで嘘をつくと重大な契約違反になるわけで。
俺は今日だけでもうすでに事実を伝えないという危ない橋を渡っているのであって。
……ここで自然にはぐらかせる程のコミュニケーション能力など、絶対的にあるはずもなく。

「……２５６番でした。」
俺は白状した。

……あたりが一瞬で、静かになった。原野さんの表情が、にこやかなまま、時間停止でもしたかのように固まっている。

「……に…２の８乗だね！！！！！」
という陽翔さんの謎なフォローが部屋に響き渡った。

6．"11　SAMURAIs"　－b4『既視』

－b4『既視』

「……別にね、あたしは怒ってる訳じゃないのよ。怒ってる訳じゃね。」
「……はい。」
「ただね、どうしてそんな状態になるまで放っておいたの、ってことがね、ただ疑問なのよ、ほんと。」
「……はい。」
「分からないものを分からないままで放置しといて気持ち悪くない？なんかこう……モヤモヤッ！ってしない？」

「それは人それぞれの感じ方だからねー、ユウヒちゃん。」
「そうにしても！！もうちょっとあったでしょう、ほら！もっとこう……なんか取りあえずしっくりこないのよ！2の8乗とか！そんな席次で放っておけるってのが！」
「だからねユウヒちゃん、それは2の8乗っていうのがユウヒちゃんの感覚でしっくりこないだけで、順番付ける上で必ず発生する数字なんだからね？それにみんながみんな一番とか、そんな訳無いでしょ？」
「それは分かってるんだけど！そのことじゃなくて、あたしは2の8乗のままでいいのかってマコトに聞いてるの！！」

そんなに2の8乗って言わないでほしいなー…、などと思いながら。

俺は陽翔さんのおかけで逸れていた原野さんの注意がこちらに戻ってきた事を感じ、背筋を伸ばした。
師匠、よほどしっくりこないのか眉間にしわが寄っている。
先程からずっとこの表情で、この手の問答を繰り返していた。

「勉強なんてやればできるようになるのよ、やれば。」
「それはユウヒちゃんの感覚でしょー？やっぱり勉強の才能ってあると僕は思うよ。」
「兄なんか“やったらできるのにやらない”の典型じゃない！今はマコトの話をしてるの、ちょっと黙ってて！！」
「……はーい」
陽翔さんが少ししゅんとした様子で肩をすくめる。
陽翔さんも勉強出来る人だったんだな……やっぱり兄妹か……。
俺の心に地味にダメージが蓄積されていく。

決して楽観視していたわけではなかったが、まさかここまで問題視されるとは。
これがいい成績なんてこれっぽっちも思っていなかったが、外からの評価として『悪い成績』という扱いを受けることがこれ程に傷つくものだとは。
自分で思っている分には一向に構わないのだが、外からの評価として同じ事を言われると想像以上にショックなものである。

成り行きに任せて、出来るだけ意思を持たず、決めることすらを放棄してきたこの生き方。
その結末としてのこの結果。
生きやすいように最善を尽くしたことで、逆にそれの生む副作用に

苦しんで。
俺はいつまでも、そのジレンマに捕らわれたまま抜けだせないのだ。
そう、ずっと……。

「……ちょっとマコト、聞いてる？」
「…え」
俺は原野さんの声に、ハッとした。
彼女の声が全く頭に入っていなかった。
慌てて焦点を合わせる。
原野さんは相変わらず眉間にしわを寄せたまま、腕を組んでいた。
「あたしはずっと、このままでいいのか聞いてるんだけど。」

「そ……！」
…そんなの嫌に決まってる。
だけど、どうしようもないのだ。俺は……。

「ちょっと、マコト。」
俺の言葉を、思考を、遮るように原野さんは大きくため息をついた。
“どうしようもない”って、思うのは無し。」

「…あ……。」
俺は思い出す。
そして気づく。このデジャブ、この既視感。

「確か、だいぶ前にも言ったわよね。それじゃ最初から諦めちゃってるじゃない。変わろうと思わないから変わらないのよ。」
聞き覚えのあるセリフを言うと、彼女はまた一呼吸置いて、続ける。

「ま、言ってみたら、あれよあれ、」
「“ヘタレ”…ですか。」
「…そう、分かってるじゃない。」
原野さんの言葉に被せるように呟いた俺に、彼女は少し驚いたように言う。

「勉強なんて、やれば出来るようになるのよ。何度も言うけどね。」
原野さん……いや、師匠は。
「要はやらないから出来ないだけ。単純に勉強時間を増やせばいいの。それだけ！」
そう言ってくいっと首を傾けて。

俺は師匠に見入る。その凛とした姿に魅入る。
そして師匠はニヤリと笑って、言った。

「だから私が勉強、見てあげるわ！次の定期テストは2の8乗から抜け出すわよ！！」

嗚呼、彼女は。
俺が自分で巻き付けた言葉の暗示をいとも簡単に解いてしまって、
なのにそれには全く気付かずに。
至って自然体に、至って無意識にやってのけてしまって。
尚も笑う。それはもう、楽しそうに。

やはり俺をこの無限ループから助けてくれるのは、彼女を置いて
他にはいないのだろうな。
俺はふと、そう思った。

6．"11　SAMURAIs"　－b5『場所』

－b5『場所』

ではここで、“勉強を見る”とは具体的にどのような内容を指すのか考えてみよう。
この場合、俺は高校範囲の勉学の基礎の基礎からぐらついていた為、そこを徹底して固める作業の事を指す。
つまりそれはどういうことかと言うと、教科書や問題集の基本問題をしっかり理解することである。

だがここで考えてみてほしい。
“問題集を開き、問題を解答することで出てきた疑問点を、教科書で調べつつ解消していく”というプロセスを自発的にこなすやる気と根気を持った人が、はたして2の8乗の席次をとるだろうか。いや、とる訳がない。
仮に俺が珍しくそのやる気を持ったとしても、この低スペックの理解力では、すぐ疑問にぶち当たり、一瞬でモチベーションが消滅してしまうのは目に見えている結果である。

だから、ここで言う“勉強を見る”とは、『徹底した基礎固めの為の問題演習を“強制”し、さらに疑問を“解消”する』という事を指している。
その為には勉強する俺の横に付き、勉強習慣を無理から矯正していくことが必要になってくるのだ。

…ここまで考察したうえで考えてみてほしい。果たしてこれだけの徹底したケアを、一体“どこで”行うというだろうか。

「で、決まったのはいいんだけど、一体場所をどこにするのかが問題よねー…。」

流石我が師匠、俺の自己分析など伝えるまでもなくこの問題点にいち早く気がついた。
傾いていた首を更にひねって難しい顔をしている。

「兄、ここって使っていい？どう？」
「うーん…さすがに平日はねえ…。僕も大学云々で忙しいからなあ。」

陽翔さんも困り顔である。
その返事を聞いて、原野さんもはあーっとため息をつき、机にこてんと頭を預けた。
「やっぱりそうよねー……」

「どうしましょう？原野さん。」
「うーん、いきなり躓いたわねー…。ゆっくり定期的にやれる場所がないと、絶対うまくいかないし…。徹底的に叩き込まないと…きっと基礎からガタガタだろうし…うーん……」
おでこを机にぐりぐりしながら考えている原野さん。
俺はその台詞を聞いて、思わず言葉が漏れた。
「…あれですか、そんなにがっつりする感じですかやっぱり……。」

“勉強しなくては”と自己分析はしていたし、原野さんがそれを意図している事も想像はついていたが、それをするにはあまり乗り気になれなかった。
分析するだけして、放置。考えているだけ。
行動に移せていたらもっと早く俺の成績は向上していたはずだが、もしそれができていたら、俺は今ここにいない。

わかっているのに俺は。
この件を引き受けてくれた時の師匠の自信に満ちた姿から、他の良い方法があるのかもしれないなんて、勝手に甘く考えてしまったのだ。
人任せで無責任な幻想が、思わず口からこぼれて落ちた。

そんな俺の発言に、原野さんはくるっとこちらを向き。
「……。……はあーーーーーあ。」
わざとらしく大きなため息をついた。
…“ため息とついた”と言うか、“ため息のような音を喋った”と言った方がよさそうなわざとらしさである。
彼女はジト目でこちらを眺めている。
頬は机にくっつけた姿勢のままだったのに、遥か上から眺められているように感じる視線だった。

「あのねー……勉強出来るようになろうと思ったら、勉強するしか無いのよ。近道なんてないし、裏技もないわ……まっすぐ正攻法

で攻めるしかないの。逆に言うと、勉強なんてしたら誰でもできるようになると私は思う。」

「……ですか。」

「そ。……で、あれでしょ。今までそれをしなかったから成績低迷してるんでしょ。あたしが思うにね、マコトは……」

…原野さんは、俺の勉強姿勢に関しての考察を、つらつらと述べ始めた。

それはあまりに的確で、まるで今までどこかでずっと観察されていたかのような錯覚を受けるほどだった。

マコトはまず勉強しようとしてない、モチベーションがない、しようとしたらしたで続かない、続かないのは分からないから、……。

やはり人間と言うのは不思議なもので、自分で思っていた事を他人に言われると想像以上にダメージを受けるのである。

俺は本日2度目のそんな台詞を、心が折れそうになりながら聞いていた。

「……要するにね、基礎をしっかり固めることと、その為の十分な時間が何としてもいるわけよ！ここさえできれば後は組み合わせなんだから、とにかくそこを何とかしなきゃ……その為には場所が……ほんとにマコトは……」

「ねえ、けどユウヒちゃん、一体どうやって勉強する気なの？」

また俺に砲弾を浴びせかけようとし始めた彼女をたしなめるように、陽翔さんが尋ねた。

……正直助かった、と思った。
「基礎固めって簡単にいうけど、それが一番難しかったりするんだよ？」
「うん、わかってる…だから学校の授業みたいに…一からやるつもりなんだけど……」
「ふうん、学校ねえ。」
「うん、学校……。……。」
「……。」
「……。」

沈黙が流れた。
原野さんは相変わらず机に頬をくっつけて突っ伏しているし、陽翔さんも俺の斜め前の位置に座って炬燵で暖まっている。
俺は俺で、窓からさしてくる光と炬燵の温かさで頭がぼんやりしてくるようだった。
…もしかしたら考えることを放棄したいだけかもしれないが、それはいいとして。
こんな問題について考えてさえいなかったら、ほんとにのどかな昼下がり。

「……あ。」

しかし。その静寂は原野さんの間抜けな声によってかき消えた。

「……ん。なに？」
陽翔さんはこの陽気に眠気が襲ってきたのか、目がトロンとしてる。

それは俺も同じだった。
目が半分しか開かない。

だが、原野さんは違った。
目がびっくりするくらい、くりっとあいている。
いつもは本気で目を開けていなかったんだ…と思うくらい、あいている。

「なんで気付かなかったんだろ。学校ですればいいじゃない、学校で。」
「あー、学校ねえ、良いんじゃない？」
適当に返事する陽翔さん。
「図書館とか良い感じに静かだし、良いわね。」
「そうだねーいいねー」

なぜかトントンと話が決まって行く。
もう決まったとばかりに陽翔さんはあくびをしだすし、師匠に至っては「良い案思いついたらなんだか私も眠くなってきたわ」とか言い始めた。
目がさっきの大きさの半分になっている。

だが、俺はこのおかげですっかり目が覚めた。
思わず背筋が伸びてしまうくらい。
学校で勉強するなんて！！そんなの困る！！！

「がっ学校って！そんな、それはやめましょうよ、せっかく噂が収まってきて……」

「なによ、まだ気にしてたの？マコトは…」
「けど！そんなこと言いますけど、俺がどれだけ…」
「噂なんて無視よ、無視。私達は何も変な事はしてないし、起きてしまった事はもう仕方ないし。」
「そうだよセイくん、他人は自分でコントロールできないんだよ。」
「分かってますけど！そんな新たに噂立てるようなことしたら…」
「一回たってしまったんだがらもう遅いって。それに他に場所あるの？」
「そ……それは……ない、ですけど」
「そうでしょ？仕方ないのよ、腹くくりなさいマコト。」
「いや！！けど！！！」
「２の８乗でいいの？」
「……いやそれはほら、良い訳ないですけど、けど、そこまでして まで、ほら」
「セイくん、往生際悪いよセイくん。」
「……陽翔さんまでそんな！！！！」

必死の阻止も、もうすっかりお昼寝モードに突入したこの兄妹に届くはずはなく。
俺は程なくして、はたまた本日２度目の制圧を受けたのだった。

…“平穏な生活”なんて幻想は、いい加減捨ててしまった方が楽になるのかもしれなかった。

6．"11　SAMURAIs"　－c1『風流』

－c1『風流』

11月も半ばにさしかかってきた。
紅葉もピークを迎え、あたりは色とりどりの景色である。
日は徐々に短くなって、五時過ぎの学校の廊下をオレンジ色に照らしていた。
空高く馬肥ゆる秋かな。

だが、流石にこのくらいの季節になると、あたりはすっかり肌寒い。
風もだんだん冷たくなってきて、冬がもうそこまで顔を出している気配である。
今の俺にはそれが憂鬱の種だった。
秋は好きだが、冬はあまり好きではないのである。

いつまでも秋だったらいいのに。
そう思うが、そんなことは四季折々進んでいくこの国で叶う訳はないし、むしろ叶ってしまったら駄目な気さえしてくる。
移ろいゆく中の秋。
それが良いのかもしれない。

そんなことを思いながら、俺は手に持っていたブレザーを羽織直して、窓から見える銀杏に視線を戻した。

授業が終わってしばらく経った後の廊下は、なかなか閑散としている。
皆さっさとクラブに行ったり帰宅したのだろう。
長い廊下には、俺一人。

誰もいないのは気を遣わなくていい。
俺は思う。
まるで“例の計画”のせいで再び訪れたドタバタな毎日で疲れた心をいやしてくれるようだ。
窓の外の銀杏の真っ黄色が、そんな思考に彩りを添える。

俺は静けさを存分に堪能。
普段の喧騒がまるで嘘のよう。
こんな静かで素敵な毎日をひそかに希望。
……あ、韻踏んだな、今。

なんだか今日は頭の中が風流な感じだ……。
そんなしょうもないことで可笑しくなった、その時。

俺は手元の携帯に振動を感じた。

携帯を開くと。

『休憩終わりしこと甚だし』

「……、はあ。」

師匠まで風流で被せてくるとは思わなかった。
……もうそんなに経ったんですか、なるほど……。

画面に表示されたメールをみて思わずため息。
その一人和やかタイムを打ち破る勢いのある短文に現実に回帰、である。
儚い時間だった……まるで、どこかに行ってしまった俺の静かな秋のようだ……。

だが、まあ、仕方ない。
彼女も自分の時間を割いて付き合ってくれているのだ。

俺は首を振って風流な思考回路を振り払い、気合いを入れて向かいの図書室のドアを開けた。

6．"11　SAMURAIs"　－c2　『失念』

－c2『失念』

図書室にあまり人はいなかった。
最近できた自習室に受験生が流れていることと、まだ期末テストまでそれなりに時間があるからだろう。

居る人と言えばごく僅かで、カウンターに座っている図書委員一人と、静かに本を読んでいる人が数人と、そして。
奥の自習スペースで扉に背を向けるように陣取っている、原野さんだけであった。

「戻ってきました。」
俺は休憩前に座っていた席に戻る。
目の前には散々苦しんだ古文の教科書とノートと、学習の奮闘の後が残っている（今思えば風流思考はこれが原因だったのかもしれない）。

「思ってたんだけどね、やっぱり貴方ばてるの早いわよ。」
原野さんはそう言いながら、数学?の問題集をパラパラめくっている。

「これでも最初よりはもつようになったんですよ。」
「けど、もうちょっと頑張ってもらわないとね…。ただでさえ貴方の希望で始めるのを放課後1時間経ってからにしてるんだから、時間足りないのよ…。」
「そうでもしないとまた要らない噂が経ちまくるじゃないですか…。現に前よりはこそこそ噂される量も減りましたし。あまり目立たずにやれているんですからいいと思いましょうよ。」

思い返せば勉強を開始した当初。
やはり周囲の目と言うのは目ざとく、俺達はまた学校内の噂の種となってしまった。
クラスにはまた居づらくなってしまったし、篠原に問い詰められることも多々あった（その度に助け舟を出してくれた末永には本当に感謝である）。

さらに困ったのが、流石にこれではいけないと思うような状況だったのにも関わらず、師匠はまるで気にする様子を示さなかった事である。
勉強の方は予想通りのスパルタだし、昼休みも堂々と人目の付くところに呼び出してくるし、放課後も人が見ている中でともに帰宅することをためらわなかった。
その気持ちいいまでの開き直りっぷりは見習うべきなのか否か、俺には分からなかったが、とにかく。
このままこれを続けていては、あまりに目立ちすぎて絶対に良くない事は確かであった。

なんとか勉強会を継続し、目立たないような方法はないのか。
俺は頭を絞りに絞って、この案を考えたのである。
人が一気に減る放課後から始めれば、めちゃくちゃに人目につくことも少なくなるだろうと、そういう考えだった。

実際これには、実感としてそれなりの効果があった。
噂の量も、勉強会を始める直前くらいまでには収まってきているように感じる。

…のだが。
こんな俺の苦労を知ってか知らずか、原野さんはしれっとこう言った。

「あら、誠。案外見積もりが甘いのね。そういう事に関してはもっと敏感だと思ってたけど。」
「……え、なんですかその含みのある言い方」
思わず怖くなった俺に、原野さんはさらりとこう返す。

「こういうのって、表面が静かなだけで、水面下ではいろいろあったりするのよね。まあ、私は現状がどうなってるのかはよく知らないけど。」
「……なにそれ。」
「そんなもんよ。」
「……まじですか。」

俺は、疲労感がドッと背中に乗っかってくるのを感じた。
……噂って、表立って言われるものだけじゃないんだ……まあ、そりゃそうだろうけど……。
今まで直接的なものしか経験していなかったのと、原野さんに言われるまでは意識したことがなかったので、その可能性をすっかり失念していたのである。

どうすればいいんだ、ほんとに。
…ほんと、まじで、これって…

「……今更何かやってどうにかなるもんじゃないですね。そんなこと陰で言われてたら……。」
ポロっと、思ったことが漏れた。

「……ほー」
するといきなり、原野さんがきょとんとした顔をした。
その表情をみて、俺もきょとんとなる。
「…え、なんですか急に」

「誠もそうやって考えられるようになったのねー…」
「え」
「『どうにかなるもんじゃない』って。前なら絶対そのことでくよくよしてたでしょ。」
「…あ……」

俺は気づいた。
確かにそうだ。
以前はそんな嫌な状況の全てについて悩んでいた。
なぜこうならないのか、なぜこうなったのか、と。
自分の力ではどうにもならないことも全部ひっくるめて、考えていた。

「そう思えるようになったらもう少しね。もう少し。」
そう言って笑う我が師匠。

俺は思う。
これがもしかしたら修行の成果なのかもしれない、と。
だが一番に感じるのは何より。

原野さんと居るようになって、俺は変わったということだった。

修行とか、そういうのは後付けのような気さえする。
彼女という存在に感化されて、影響されて、俺は知らず知らずのうちに変化して……。

「……もう少しで、契約も終わりね。」

…彼女の次の言葉に、俺は思わず固まった。
原野さんは相変わらず問題集をめくっていて、顔の前に垂れた髪で顔がよく見えなかった。

そう、契約、だ。

契約。

契約、けいやく、ケイヤク。

ふと、衝動的に。
俺は傍らにあった英語の教科書をひっつかんで、適当にページを開いた。

ラインマーカーを引いた短文。

”Ｊｏｙ ａｎｄ ｓｏｒｒｏｗ ａｒｅ ｎｅｘｔ ｄｏｏｒ ｎｅｉｇｈｂｏｒｓ.”

……誰がこんな時にうまいこと言えって言ったんだよ。

「ちょっと、誠、次数学よ?」

彼女が隣でそう言っている。

6．"11　SAMURAIs"　－c3『過敏』

－c3『過敏』

さて、もう冬まっしぐらなこの時期。日が落ちるのは驚くほどに早い。
勉強を再会して一時間もしないうちにあたりは薄暗くなり、二時間経った今では、手元を照らすのは室内の照明だけになっていた。

スピーカーから下校を促す音楽が流れてくる。
「え、7時か…。どうする誠、終わった？」
読んでいた本を閉じて、原野さんが言った。

数学の解説をしてもらって演習に励んでいた俺は、憔悴していた。
…というか、解らなすぎて逆にイライラしていた。

二次関数が解らない。
どうして原点から動くんだ。
お前はそんな簡単に自分の居場所を変えるような奴だったのか。
…見損なった！
空気を読め、空気を！動いたら最大値が解らないだろ！！

そんなストレスフルな状況の中、どうでもいいことばかりを考え

るあまり、果たして“場合分け”というものがこの世界に必要なのかなんて問いに直面してすっかり手が止まっていたのである。
当然の結果だろうが、演習課題は原野さんに言われた量の半分も進んでいなかった。

「…決して芳しいとは言い難い戦況であります」
「……出来てないだけでしょ、なにちょっと格好つけてんのよ」
…オブラートぐるぐる巻きにしてみたが誤魔化せなかった。

「あーもー!!貴方、期末まであとどれくらいか知ってる?!」
「…二週間です」
「期末試験が何教科か知ってる?!」
「……それはそれは沢山の教科が」
「アウト!なにそれアバウト!!」
突っ込みが被り気味だった。

原野さんは唸って俺のルーズリーフを引ったくり、出来具合を調べ始める。
「とにかくね、数学は早めに理解してもらって演習がしたいのよ私は。ここって結構難しいのよ、全体的に……、…って!ここほら、平方完成しないとどうにもならないでしょ!」
ぺいっと俺の試行錯誤の結晶がこっちに放り投げられて返ってきた。
「俺、やっぱ平方完成苦手で…使いどころが解らなくて…」
「だぁかぁらぁ!!平方完成は!まず始めにやるの!手始め!イツモココカラ!分かる?!」
原野さんが俺に詰め寄る。

思わず喉の奥がグッと鳴る。

口をつぐんだ俺を見て、彼女は態勢を戻すと、乱暴に髪をかきあげた。

「あ〜ー、解ってないでしょ？…てか今解ってもすぐ忘れちゃうのね、解った、納得！なる程、いいでしょう！！」

そうまくし立てて原野さんは、呆れたような半笑いなような、微妙な顔をして言った。

「居残り決定。場所変えるわよ。」

居残り…。

今まで散々チラつかせられていたが実行には至らなかった、居残り……。

満を持して決行、といった感じか。

俺は表情にでてくる落胆を何とか隠そうと、眉間に力を入れた。

出来れば教えてもらうなりに頑張って、すぐに理解したかったのだが。

やはり、そんなにスマートにはいかないらしい。

それは現在の俺にはあまりに当然の結果なのかもしれなかった。

思ってるだけで行動になかなか現れない、俺には。

そうこう考えている内に、原野さんはテキパキ自分の荷物をまとめて、読んでいた本をカウンターに返しに行ってしまった。

こうしている場合ではない。
俺も慌てて教科書類を鞄に放り込みながら、その姿を目で追う。
窓から差す日差しが無くなり、奥の方の証明も消されている夜の図書室は薄暗い。
デスクスタンドの効果か、まだ図書委員が一人居たカウンター周辺だけ、明るく浮いて見えた。

「済みません、返却お願いします」
「はい」

荷物をまとめ終え、俺もカウンター近くまで足を運んだ。
手続きにはパソコン処理が要るのか、もう少し時間がかかりそうな雰囲気だった。
外でまっておくのが無難だろう。

扉に向かって行く最中、何気なくカウンターで返却手続きをしている男子生徒に目をやった。
遅くまで大変な係である。
ふとそう考えたとき、彼の赤セルフレームの眼鏡の奥の目と、視線が絡んだ。
ジトっと、そんな感じで。
…え？

俺は突然の事に慌てて、見てない振りをする。
引きちぎるように視線を外し、廊下にでた。
知らずのうちに心拍数が上昇していた。

まてまて…こんなことでビビるなんて……。
いや、これはまさかあんな一瞬のうちに目が合うとは思わなかったから少し面食らっただけだ。

…もしかしたらそもそも、目があった気がしただけかもしれない。
なんせ、表情も良く見えなかったのだ。
何かの見間違いを誘発する程度には辺りは薄暗かった。

落ち着け、深い意味なんてないのだ。
おれが過敏に反応してるだけだ。

「おまたせ」
後ろ手にドアを閉めて、原野さんが出てきた。
「ごめん、ちょっと教室に寄りたいから、先に靴履き替えといてくれない？すぐ行くから」
「…あ、はい。」

そう言って先に行ってしまう彼女の後ろからゆっくり歩きだして、

俺は思った。
きっと神経が過敏になっているんだ。気にするようなことじゃない。
気にするだけ神経の無駄遣いだと、俺は彼女に教わったのだ。

夜の学校は薄暗い。
後方でバタバタと誰かが廊下を走る音が聞こえてきた。
あれ、まだ誰か残っているのか。部活動だろうか。
そう思って、ふと気がついた。
そういや、同じような物音を昨日も帰り際に聞いた気がしたのだ。
…一昨日も、考えてみたら、その前も。

……おっと、こんな細かいことにまで過剰に反応しすぎだ。これは完全に疲れてる。
誰かがもの音を立てるなんて、学校なんだから当たり前だろ？
さっきの視線も気のせいだ。勘違いに決定。

そうそう。
……絶対そうだ。

俺は胸のあたりのもやっとした不安を押し込めて、一階へ続く階段を降りる。

しっかりしなければ。
今日の放課後はまだまだ長い。

6．"11　SAMURAIs"　－d1『対話』

－d1『対話』

居残りを決行した次の日。今日は金曜日である。
来週の月曜日でとうとう期末テスト二週間前だ。

結局昨日は、近くのドーナツショップで九時近くまでこってり絞られた。いくら飲み放題のコーヒーをかったからといっても、ドーナツも買わずに居座りすぎたと思う。
しかもコーヒーのカフェインが効いてしまい、昨夜よく眠れなかったのだ。
数学と寝不足と積もった気苦労で、俺はげんなりしていた。あー帰りたい。帰って寝たい。マジ帰りたい。

「ねえ中澤、どうしたの。今日ずっと目が死んでるけど。」
昼休みを告げるチャイムが鳴って、末永が声をかけてきた。
「え、マジで……目、死んでる？」
「うん、凄く。というか、一時間ずっと墨摺ってたでしょ。」
「……あ、…あー…。」
末永に言われて、俺はだらだらと墨を刷り続けていたことに気がついた。元は水だったはずのそれは、一時間の成果か、ギョッとするほど真っ黒になっている。

「……相当キてるね。まぁ、あの二人よりマシかもしれないけど」
末永がチラッと見た方向に目をやると、教室の一番後ろの机で矢吹

と篠原が思い思いの体勢で爆睡していた。篠原は腕組みして顔を下に向けているからまだ良いものの、矢吹なんて首から上が天井を向いたまま口をあけて寝ている。

「…とにかく、何か書いて提出しちゃいなよ。」
「あー…今日の課題、なんだっけ」
「好きな四字熟語。」
「……なる程。うーん……。」

……驚くほどに何も思いつかなかった。
だが、もう時間が時間だったので、俺は素早く筆を持って紙の上を走らせる。

【睡眠不足】

「……中澤、直接的過ぎるよ…」
「……思いつかないから仕方ない…」
「睡眠不足なわりに墨が真っ黒なのが、なんともアンバランスだよね…」
「ギャップを狙ってみたんだよ、ギャップ。」

適当なことを言って、要らない半紙を硯に突っ込む。真っ黒な墨が紙に吸われていった。
末永と連れ立って課題を教卓に提出した後、そのまま習字道具を洗うために教室から出た。

「ところでさ、中澤。もしかして、最近また何か噂になるようなことしてる？」
手洗い場で硯を洗っている最中、急に末永が言った。
「…え」
俺は驚いて隣を見る。
末永はいつもと変わらぬまま、雑巾をたたんでいた。
「いや、どうなのかと思って」
「……何か、陰で色々言われてたりするのか…？」
「うーん、当たらずとも遠からず、ってとこかな」
心のどこかで否定の言葉を期待しただけに、彼のこの言葉は少し堪えた。やっぱり陰の噂、あるのか…。

「マジで…」
「まぁね。けど、一時期みたいに酷くないから安心して。」
「俺としては、そういう話があるってだけで心臓に負担が…」
「ははは！だろうね」
末永は少し笑ったが、すぐに真剣な表情になる。
「ま、俺も詳しくは知らないんだけど…。最近はなかなか趣向が違う噂が出回ってるんだよ。」
「…趣向が違う？」
「そう。今までは“中澤君と原野さんが付き合ってるらしい”って類の噂ばっかりだったんだけど、最近“原野さんと中澤が付き合ってる訳ない”って雰囲気の噂ばっかり聞くようになってね。」

……ん？
俺はその言葉に拍子抜けした。

「……いや、てか、その通りなんだけど」
「でしょ？」

末永も首をかしげて、不思議そうな表情をしている。
「だから俺も今までみたいに訂正とかはしてないんだけど…。急にこういう感じになったから、中澤が何かしたのかと思ってた。」
「……いや……心当たりないな。」

てっきり“付き合ってる”という方向の噂が加速しているとばかり想像していたが。というか、最近の行動はもっぱら、それを加速させるのに十分なものばかりだと思っていた。
なのに、この１８０度違う噂。
別にこちらに害があるわけではないが、何だかしっくりこないものがあった。
確かに、付き合っていないのだから、その通りであるし、何も間違っていないのだが…。

「ふーん、そっか。」
末永も腑に落ちないのか、少し難しい顔をしていたが、
「けど良かったね。これで要らぬ誤解は避けられるんじゃない？」
ちょっと微笑んで、俺にこう言った。
「だな……まあ、俺としては、陰で噂されなくなるのが理想なんだけど。」
「んー…、それは諦めた方がいいんじゃない？」
「え、なっ、」
「だって中澤、目立つからね。髪を染め直した時なんて、ほんと凄かったよ。覚えあるでしょ？」

末永が笑う。俺は原野さんに髪を黒染めされた次の日の学校を思い出した。思わず眉間に皺、である。
「……あれは不可抗力だ。」
「もー、あれは真っ黒だったよね！」

末永が声をあげて笑う。
……分かってたよ、真っ黒なことは……。
そんな渋い思いをする俺をよそに末永は可笑しそうにしているので、俺は苦笑いするしかなかった。

ひとしきり思い出し笑いをした末永は、洗った硯を雑巾で拭きながら言う。
「あー、けど最近はその噂話も落ち着いてきてるよ。まあどっちにしろ、中澤はもっとスルースキルを身につけるべきだね。」
「それが出来たら苦労しない」
「それか、噂される事を楽しむか。」
「楽しむとか、無理だよ俺には……」
「だろうねー。なら、もっと気に留めないって方向性で行けばいいんじゃない？」
「……だな…」

習字道具をひとしきり洗い終えた俺達は、教室に戻ることにした。
少し話しすぎたかもしれない。
俺はひとしきりの会話を思い出して、ふと思ったことを口にした。
「…てか、お前って凄いよな。」
「ん…なにが？」
末永が不思議そうな顔をする。俺は続けた。
「どうしてそんなに校内の噂に精通してるの。矢吹でも大概凄いと思うんだけど、そういうのってどこで仕入れてくるんだ？」
「あー…」
末永は指先で頬をかくと、相変わらずの飄々とした様子で言った。
「俺の場合ね、ほら、美術部だから」

……そうだった。俺は痛く納得した。すっかり忘れていたが、末永は美術部に所属していたのだ。圧倒的女子率を誇る美術部の黒一点、それが末永なのである。

『あいつ、男の割にちっちゃいし可愛いとかって、女子部員からちょー可愛がられてるらしいぜー！！かーっ、うらやましー！！！』

と、かつて聞いた矢吹の台詞が脳内リピートされた。

「……なるほどな。」

俺は小さく相槌をうつ。

手洗い場から教室まで、そこまで距離はない。あの二人もそろそろ目を覚ましている頃だろうか。あの二人がつるんで、どうして起こしてくれなかったのだと詰ってくる声が聞こえるようだ。

「末永」

俺は教室の手前で彼に呼び掛けた。

「んー？」

「ありがとうな。」

「…え、なに？急に。」

「いつも噂を訂正したりとかさ、してくれてるだろ。」

急な俺の台詞に驚いたように末永は一瞬目を見開いたが、軽く笑って続ける。

「別に大したことしてないけどね。」

「そうはいうけどさ」

「けど、中澤」

末永は立ち止ると

「俺、そうやって言ってもらえて、ちょっと嬉しいわ。」

珍しくにへっと目を細めて笑って、ひらひらと手を振りながら先に教室の中へ消えていった。

6．"11　SAMURAIs"　－e1『事実』

－e1『事実』

今日は月曜日、テスト二週間前である。

そんな分かり切った噂話が流れていると聞いた日から数えて三日が経過した。

『中澤誠と原野唯陽は付き合っていない。』

朝の授業前の廊下は相変わらずがやがやしていて、その喧騒が疲れきった頭に響く。

この休日は一瞬のうちに掻き消えてしまった。

原野さんに出された、ぎょっとするほど凄い量の課題の消化に追われていたのである。

やばい、終わらない、寝れない。

これぱっかりをぐるぐる考えていた。

休みなしで部屋に缶詰になって母さんに心配されながらねばっても、脳みそを酷使しすぎて知恵熱を出しそうになりながら頑張っても、まるで目処が立たなかった。

……まあ、そんな鬼のような量の課題こなす為に犠牲になったのは、類にもれず睡眠時間だったわけである。

しかも今日は原野さんに言い渡されて早朝から図書室で勉強していたため、朝家を出たのは7時頃だった。

ここ2日、まともに寝ていない。

今日も一体何度学校を休もうと考えただろうか。
だが、早朝図書館学習を守らないと後からどうなるか分かったもんじゃない。
それにテスト二週間前だとまだ授業もガンガン進むのだ。
ここでまた分からない事を増やして死亡フラグを立てるわけにもいかなかった。

ツケは後で必ず自分で払わなくてはいけないのである。
そのことを俺は身をもって知っていた。

朝から疲れてぼんやりしながら図書館からの廊下を抜けて、俺はホームルームの引き戸を開けて中に入る。
「おっす、誠ー！」
「中澤ー、はよーっす」
俺の姿が見えたのか、話していたらしい矢吹と篠原がすぐに声をかけてきた。
そちらの方を向くと、末永も二人と一緒にいたようで、こっちの向かって小さく手を振っている。

「よーっす……」
俺はいつもと同じように適当に返事を返すと、自分の席に直行した。
そのまま3人の所に喋りに行っても良かったのだが、今はただただ眠い。
自分の机で突っ伏して寝たい。

…だが。
そんな希望とは裏腹に、席に着いて寝る体勢に入ろうとした俺を待っていたのは、どう頑張っても寝ることができない状況であった。

「ねえねえ、のんちゃん！知ってる？中澤くんと原野さん、付き合ってるって話！」

斜め後ろから、ひそめながらも興奮した様子の声が飛び込んできたのである。
瞬間、俺の背筋が泡立った。
決して大きくはないその声を拾ってしまったのは、耳に慣れた聞き覚えがある単語ばかりが並んでいたせいなのだろうか。

「え…え？中澤って…まことくん……？」
続いて驚いたような谷口さんの声。

俺は組んだ腕に頭を乗せた体勢のまま、全神経を集中させて聞き耳を立てた。
耳の奥がドクドクと早鐘を打っている。

「あれ、知らない？凄く噂になってたでしょ？文化祭辺りからなんだけど。」
「え……。なにそれ……わたし、しらない」
「えーそうなの？！結構有名だと思ってたー。」
「あ、えっと……原野さんって誰？うちのクラスじゃないよね。」
「あれ？のんちゃん知らない？１組の超美人さん。男子の間じゃ凄く有名でね…」
「……もしかして、黒髪でクールな雰囲気の人？」
「そうそう！多分その人だよ！！」
「……そっか…そっか……」

谷口さんが言う。
その言葉から心情は図りとれない。
同じ言葉を小さく繰り返す声。

喉の奥が乾いてくる。
俺は完全に焦っていた。

どうしよう。
どうしよう、しられてしまった。
一番知らてはいけない噂を知られてしまった。
どうやったら弁解できるのだろう。
このままじゃ原野さんに、師匠に、なんて言われるかわからない。

なのに、ただ聞き耳を立てているだけの俺は、見えない空気のようにじっと息を凝らすことしかできないのだ。
その事実にただただ眩暈を起こしそうだった。

だが。
「けどね！……その噂、実は違うらしいんだ！！」
「……え？」
心労が吹き飛ばされるのは一瞬だった。

俺は目を見開いたのと谷口さんの驚いた声が聞こえたのが、ほぼ同時の出来事。
とたんに、眼下に先日の出来事がフラッシュバックする。
俺が思い当たるのに合わせるように、クラスメイトの女子の声が続けた。

「最近になって聞いたんだけどね。ほんとは付き合ってないみたい！」
「……そうなの？」
谷口さんが不思議そうに尋ねる声。
対照的に、クラスメイトは嬉々として語っている。
「そう！もー、私も安心しちゃってー！よかったーって！！」

「そっか…そうなんだ……」
よかった。
谷口さんは小さくそう言うと、黙った。

俺は、体中の力が抜けていくのを感じた。
ストレスが一気に取り除かれて行く感覚をかみしめながら、安堵に

身を任せて脱力する。
よかった……本当にどうなるかと思った。
もし勘違いされてしまったら、俺は何と言って原野さんに報告すればよかったのか。
その時の彼女の反応を想像するだけで、また背筋に悪寒が走った。

新しい噂話には、感謝しなければならないかもしれない。
俺はさっきのことですっかり覚醒した思考を巡らせる。
誰が何のために流したのか。
意図が読めない“ただの事実”の噂話ではあったが、こんなところで役に立つとは思わなかった。

だけど。
まあ、出来たら放っておいてほしいことには変わりない。
俺と原野さんのことは、噂してほしくない。
付き合っているなんてのはただの虚実だし、付き合っていないなんてのもただの事実なのだ。

ただ放っておいて欲しい。
俺達の関係はそんな単純なものではない。
たとえどう噂されても、しっくりくるものなんてないのだから。

俺は身を起こした。
鞄から数学の問題集とルーズリーフを引っ張り出す。

落ち着いたら、なんだかぼーっと考え事をする気分でもなくなってしまった。どうせなら自習でもしていよう。

問題集を開く。

……するとそこには。

【東澤誠】

と、中央に大きく大雑把な墨字で書かれた半紙が、挟まっていた。

「……はあ？？？」

…思わず声に出してしまった。

6．"11　SAMURAIs"　－e2『悪戯』

－e2『悪戯』

初めて謎の半紙を見つけたのが2日前、今日は水曜日である。

5時少し手前の校舎は放課後直後よりはまだ人も少ない。

勉強会が始まるまでの1時間、原野さんが来るまで一人で自習に励むことにしている俺は、さっきまで図書室で英文法を勉強していた。

そこまでしないととても終わる量の課題ではないのだ。

少しでも内容に追いつこうと自主的に始めた学習だったわけだが、相変わらず直ぐに集中力が切れてしまう訳で。

早々に疲れてしまった俺は、いつものように廊下に出て休憩を行っていた。

…決してサボっているわけではない。

鋭気を養っているのである。

窓からは、色づいた銀杏が落葉しているのが見えていた。

この前と同様の綺麗な景色。

……ふむ。

大変黄色い。

いつもなら風流さを感じるのだが、今日はそんな感想しか出てこなかった。

同じ風景でも見る人の状態によって、その人が何を感じるのかは変わるものだ。
それは秋に風情を感じるタイプの俺も例外ではない。
黙っているときは結構な頻度で考え事をしていたが、今日はいつにもまして激しく脳内議論を繰り広げていたのである。

論題は、“ここ三日に立て続けに起こってる不可解な出来事について”、だった。

【東澤誠】と書かれた半紙が挟まっていたのが月曜日の朝礼前の出来事。
その朝から、俺の周りで良くわからない出来事が頻発するようになった。

たとえば、授業でパソコンルームを使った時脱いでいた校内靴が、帰り際に片方だけ突飛な所にいっているのが見つかったりとか。
『東澤』とだけ書いた紙が張ってある空き缶が、教室付近の窓枠に置かれていたりもした。
他にも、注意し始めてから少なくとも5、6個はそんな小さな謎な出来事が起こっているのである。

それは“嫌がらせ”なんて大層なものでは無かったが、だからとい

って無視することはできない程度には“謎な出来事”だった。

それに、月曜日に問題集に挟まっていた“微妙に間違った名前が墨で書いてある半紙”も、昨日もまた同じ問題集に挟まっていた。
ただし、今度は【車澤誠】と書かれていたのだが。

……“中”くらい書けるだろうに、と思う。
これに関しては、一体何がしたいのかまったく意味が分からない。
なんの悪気があって、人の名前の、しかも凄く簡単な漢字をマイナーチェンジしてくるのだろうか。
逆に画数多くなっている。

…もしかしたら、俺の気にしすぎなのか。
最近周りに無意味に注目されることが多すぎて、自意識過剰になっているだけなのかも。
いやだけど、今までこんなこと感じたこと無かったし…。

……。
……ふむ。
よく分からない。

さっきから色々考えてみてはいるのだが、結局ここに戻ってきてしまうのである。

……これはいけない、堂々巡りになっている。
同じことを何度も考えるのは俺の性格上良くないのだ。
無駄な深読みをしてしまう。
俺は一旦、志向を変えて考えてみることにした。

『きっと気にしすぎだ、これに誰かの裏の意図なんてない。』

すると、『東澤』って書かれた空き缶なんて、俺の過剰反応なだけな気がしてきた。
あの半紙に書かれていただけじゃないだ、本名でもなんでもない。
てか、ほんとに東澤くんがいるのかもしれない。
高校は人数が多いし、探してみたら案外……。

だが、それらを全て勘違いにくくるとしても、半紙の件がある。
大きくて大雑把な文字で書かれた墨字の半紙。
あれだけは何が何だか全く分からない。
挟まっている事は事実なのだから、こればかりは勘違いじゃ説明できなかった。

それに、どうやって問題集に半紙を挟んでいるのかという疑問も残る。
俺はいつもむやみに荷物をほったらかしておくわけじゃないし、移動教室にしても、空になった部屋には鍵がかけられる。
荷物に細工するなんて、いつのタイミングで行われているだろうか……。

俺は頭をひねる。
……なにか俺に言いたいことでもあるのだろうか。
……いや、あれだけだと全く伝わらないんだけど……。
それにどうして、数学の問題集なんだろう…。

……あ、待てよ。
俺はそこでふと思い出した。

そういえば今日の昼間は例の問題集を篠原に貸していたのだ。
いつもは何かと末永にノートや参考書を借りる篠原だったが、昨日珍しく俺に頼んできたのである。
最近俺がいつもあの問題集を持っているからかもしれない。

『中澤ー！借りてた問題集返すぜさんきゅー！』
放課後、そういって俺に問題集を手渡して颯爽とクラブへと消えていった篠原を思い出す。
所属のバレー部でミーティングがあるらしいと末永に聞いてその後、俺は直ぐに問題集を鞄に入れた。

問題集が俺の手元になかった以上、今日はなにもできないじゃないか！
そう思いあたった。

俺は何だか気が楽になるのを感じる。
そうだ、きっと誰かのちょっとした悪戯だったのだ。
それこそ矢吹あたりの出来心とか。

何がしたかったのか全然解らなかったけど、そうに違いない。
自分の力でどうにもならない事をくよくよ考えていてはいけない、
俺はそれを最近学んだのである。

すっかり気を取り直して、俺は図書室に戻った。
部屋にはいつもと同じ眼鏡の図書委員と、やはり人がパラパラと数人。
俺はいつもの席に再び腰を下ろすと、後でやろうと机の上に置いていた数学の問題集を手に取る。
最近は図書室で専ら数学の問題集をしているのだ。
原野さんの課題の中でも一際量が多く、時間を目一杯使わないと終わらない。

さて、改めまして楽しい二次関数だ。
問題集をめくる。ぱらり。

【申澤誠】

そこには、例の半紙が挟まっていた。

……。

まさか、思いもしなかった“犯人篠原説”が浮上した瞬間だった。

6．"11　SAMURAIs"　－e3『変化』

－e3『変化』

もしかしたら、例の半紙の悪戯は篠原がやっているのかもしれない。
そんな疑惑が浮かんだ2日後の昼休み。今日は金曜日だ。
俺の“気のせい”という前向きな結論をまるで無視するかのように、相変わらず“よくわからない出来事”は続いていた。

その頻度はそんなに多くない。
ふと、忘れかけたころに起こる程度だ。
いつしか控えるようになっていたその回数は、数え始めてから大体9回。
5日でこの程度なのだが、これは多いのかどうなのか、いまいち判断に苦しむ回数である。

そして今も。
俺はトイレにて、さっき綺麗にそろえて脱いだはずの自分のスリッパが、なぜか上下互い違いに並びかえられているのを発見したのである。
…なにこれ、すごく履きにくい。
俺はそれを見て思わずげんなりした。

一体何なのだろう。
もう一週間もこんな“ちょっと変な出来事”が続いていた。
ここまで来ると逆に、次は一体何が来るのかと身構えてしまう自分がいる。

そろそろ一連の原因を目撃するチャンスがあるんじゃないかとか、そもそもこれって俺だけじゃなくてみんなに起こっているのかもとか、いろんな可能性を考えた。
だが、それとなく矢吹に探りを入れた限りでは、そんな“妙なこと”が周囲の人に頻発している様子はなさそうだった。

俺は履きにくいながらもスリッパを履き、トイレから出ると教室へと向かう。
昼休みももうすぐ終わり、ＳＴ（ショートホームルーム）の時間が近づいている。

俺はさっさと弁当を食べ終わって、さっきまで図書室にこもっていたのだ。
昼休みは放課後ほど静かではないのだが、教室よりはいくらかましだろうという判断だった。

それに。
俺は一つ息をつく。
篠原のことがどうしても気になっていた。
貸していた問題集からあの半紙が出てきて以来、ちょっとだけだが、どう接していいのかわからないところがあるのだ。

例の半紙はというと、やはり昨日も問題集に挟まっていたわけで。
次に書いてあった文字は、【　中　沢　誠　】。
…微妙な間違いに、返って今までより残念な気分になった。
段々近づいてきているのだが……。

あれはどういうつもりで、一体何がしたいのか。
そもそもこれは、篠原がやっていることなのか。
本人に直接聞くのが一番早いのだろうが、ここで俺はいつも詰まってしまう。
篠原に直接聞きにくいのだ。

文化祭直後に『原野さんを紹介してくれ！』と交換条件（？）を出されたのがつい一か月前のこと。
だがその後、俺は篠原に原野さんを紹介していなかったのである。
……なんていうか、紹介したくなかったというか。
これ以上いろいろと考え事の種を増やすのは嫌で、どうしても乗り気になれない。

まあ何にしても、俺は篠原に対するちょっとした引け目があるのだ。
それが聞きにくさに繋がっていた。

もしかしてこのことを怒っているのだろうか、なんて考えたりもする。
…なら、直接言ってくれれば……。
いや、けど、催促されてもちょっと困るんだけれども……。
俺は思わず眉間にしわを寄せる。

そんなこんなで俺は今、教室には居づらい。
良く分からなくてもやもやする。
凄くもやもやして胃のあたりが気持ち悪い。
いろんなことを考えているのはいつものことなのだが、よく知らない人に対しての悩みと友達関係の悩みは、心の疲労の仕方が段違いだ。

教室に戻りにくいなあ。
篠原、やっぱり怒ってるのかなあ……。

そう思った時だった。
「あ、まことくん…！」
俺の後ろから聞きなれた高い声がした。

驚いて振り返ると、そこには小柄な女子生徒が立っていた。
毛先のふわふわした二つくくりをした彼女の手には、大きなゴミ袋が二つ下げられている。

「あれ、谷口さん……？」
俺はちょっとびっくりして、目の前の谷口さんを見た。

その両手のごみ袋に思わず反応する。
「え…ごめん。今日の掃除って昼休みだっけ？」
「あ…！ううん、ちがうよ！！」
谷口さんは慌てた様子で付け加える。
「教室にほったらかしになってたから…。時間あるし、捨てちゃおっかなーって思って。」
「あー、なるほど。」
そういえば昨日の掃除当番（矢吹）がちゃんと捨てに行ってなかったのだ。
あいつは春からまるで進歩がない。

俺はそう思いながら、五月の事を思い出す。
そういえば前にもこんなことがあったっけ。
あのときは矢吹もいて、そして俺は谷口さんとうまく話せなくて、そしてその後……。

「……よかったら、代わりに俺が行こうか？」
あのとき矢吹が言ったように、俺は言う。

谷口さんの目が丸く見開かれる。
驚いたように肩をすくめて、俺を見ている。
「えっ……！？」

そんな谷口さんの声に続けるように俺は言う。
「今帰っても、ＳＴにはちょっと早いから。行ってくるよ。」
それに、なんだか帰りにくいし。

心の中で付け加えた。

「や、けどまことくん、荷物あるみたいだし……。それに……」

谷口さんはなんだか凄く慌てている。

俺から目をそらすように視線を泳がせていたが、やがて、戻ってきた。

目が合う。

「……。」

「……。」

束の間の沈黙…。

「……じゃあ、一緒についてきてくれる……？」

そう言って、谷口さんは俺にゴミ袋を一つ差し出した。

心なしか表情がこわばっているように見えた。

6．"11　SAMURAIs"　－e4　『違心』

－e4『違心』

「まことくん……もしかして、最近なにか悩んでることある…？」
谷口さんにそう尋ねられたのは、中庭に向かう道も中程にさしかかった時だった。

「え」
驚いて、反射的に谷口さんを見る。
だが谷口さんはこちらを見ていたふと視線をそらしてしまった。
なんだか言いにくそうに口ごもる。
「あ……いやね、なんだかいっつも考え事してるみたいだから……。」

「あー……」
俺は戸惑った。
自分では隠しているつもりだったのに、まさかこう簡単に周囲に悟られるとは思わなかった。
そんなにわかりやすかったのだろうか。

「……まあ、考え事は良くしてるかな。」

軽くはぐらかす。

「……、そっか……」

谷口さんは少し考えるように間をあけたが、そう相槌を打った。

渡り廊下を通り、隣の校舎を抜けて理科棟にさしかかる。

ここは理科系の特別教室ばかり集まっている棟で、この時間帯は人があまりおらず薄暗い。

中庭に続く近道だ。

俺たちは黙って歩く。

理科棟がいつも薄暗いのは、廊下に面する窓が無いからなのだろう。

そんなどうでも良いことを考える。

カサカサとビニール袋がすれる音。

すると、静寂を破って谷口さんがおもむろに言った。

「……いつも、なににについて、考えてるの……？」

「……！」

俺は不意をつかれる。

まさかそこまで突っ込んで聞かれるとは思わなかった。

「えー……うーんと」

ちらっと谷口さんに視線を投げる。
彼女は意を決したような顔をして、こちらを見ていた。
口をキュッと横に結んで、目をパチパチさせている。

俺にはその様子が、なんだかすごく一生懸命に感じられた。
何だか複雑そうなその視線は、不思議と不快には感じなかった。

それに、ここまで真正面から聞かれたら、応えるしかない。
俺は腹を括る。

「例えばなんだけど。」
一呼吸おいてこう前置きした後、言う。
「谷口さんの身近な人のことを考えてほしい。」

谷口さんの表情が少しこわばった気がした。
だが、彼女はうなずく。
「…うん。」

言いにくさを振り切りながら、俺は今一番の悩みを口にした。

「その人が『もしかして、自分のことをこう思ってるのかも』って感じる出来事があったとして、谷口さんは、それを本人に直接確かめようとする？

この人が自分のことをどう思ってるか知りたいって思ったとしたら、なんだけど。」

自分自身が篠原本人に中々尋ねられないからこその質問だった。
もし俺じゃない他の人がこの状況に置かれたら、一体どんな選択肢を取るのか気になった。

すると。
谷口さんはその言葉に、目を大きく見開く。
そのまま引き剥がすように視線がそらされた。
さっきまでの会話なんてなかったかのように押し黙る。
辺りは、隣の校舎の喧騒が聞こえてくるくらい静かになった。

俺は谷口さんの様子をうかがう。
突然訪れた、間。
なんだ、この気まずい空気は。
言ってはいけないことを言ってしまった、みたいな。
そんな変なことを聞いてしまったのだろうか。

彼女はじっと、斜め下を見るようにして歩みを進めている。
俺は再び前を向く。
どうしていいのかわからない。
谷口さんと並んで階段を下りる。

ただただ歩みを進めるうちに、
「……わたしは」
彼女はゆっくり切り出した。

「……わたしは、確かめたい。……と、思うよ……」
だって、と。
谷口さんは口ごもる。
「その人の気持ち、知りたいもん…」
暫く間があいて、小さな声が聞こえてきた。

「そっか。」
俺は再び谷口さんをみる。
その表情は薄暗くてよく見えない。

そして、重ねて尋ねた。
「それを聞いて、もしかしたら自分が傷つく結果になるとしても?」

それにもやはり同じくらいの沈黙を要して。
「……そう…だね」
谷口さんはそう相槌を打った。
「……、やっぱり、わたしだったら、聞くと思うな……」

谷口さんはこちらを見る。
ふと視線が絡め取られる。
その瞳はなんだか、どこか焦ったような、不安げな様子で泳いでいた。

俺はそのままじっと、少し細められた目を見る。

谷口さんはまた俺から視線をそらして……吐き出すように、つぶやいた。

「だって、ずっと知らないままでいて、聞かずに後悔するよりは……。…ずっといいと思うもの……」

それから。
中庭にゴミを捨ててから教室に帰るまでにそう時間はかからなかった。
「…手伝ってくれてありがとう」
はにかむ谷口さんに、
「こちらこそ。」
そうお礼を言って別れる。

それを見ていた矢吹が

「おいおい誠クンよ、おいおいだな！！まじでか誠クン！！」
とよく分からない絡みをしてきたが、軽くいなして席につく。
間もなくＳＴが始まった。

そうだ、後の勉強会の時に、原野さんにも相談しよう。
担任の話を聞きながら、俺はぼんやりとそう思った。

6．"11　SAMURAIs"　－e5『澱心』

－e5『澱心』

同じ日の放課後、図書室のいつもの場所にて。

「あのですね、原野さん。」

「ん？なによ」

俺は斜め前で現代社会のノートを見ていた原野さんに声をかけた。

原野さんがなんだか不機嫌な様子で返事をしてくる。

顔だけ上げて、こちらを向いた。

俺は物理の問題集を閉じる。

さっき言い渡された課題が一段落ついたのだ。

良いタイミングだと思い、昼間から考えていたことを彼女にぶつけてみることにしたのだった。

「原野さんは、“周りの人が自分のことをどう思ってるか”って気になったりします？」

「えー……。」

原野さんも現代社会の教科書を閉じてわきに置いた。

髪を梳いきながらだるそうにしている。

眉根が寄せられていた。

「なに、どうしてそんなこと聞くの。」

「ちょっと興味があって」

「なにそれ」

こちらの要領を得ない返答に、彼女はより怪訝そうな顔をした。
だが、なんだか考えるような仕草の後、こう答える。
「うーん……、全く気にならないわけじゃないけどね」
「えっ？！まじですか！」

…思わず、思ったことをそのまま外に出してしまった。
原野さんは露骨にいらっとした顔をする。
「なによその反応は。」
俺は慌てて弁解する。
「だ……だって、原野さんってそういうの全然気にしなさそうだなぁと思ってたから」

「…まぁそうだけどね。」
んー、と思案するように視線を横に流して、彼女は言う。

「けどあたしの場合、別に聞かなくても相手の態度とか見てたら大体分かるから。」
「……なんですかそれ。」
そんなのまるで、読心術だ。
俺は目を見開く。

だが原野さんはどうってことないとでも言うように続けた。
「人の様子とか、観察するの好きなのよね。そうしたらいつもと雰囲気が違うだとか、そういうのって見えてくるっていうか。」

「……なるほど！」

俺はそれに、痛く感心した。
今まで彼女に提案されてきた恋愛関連のプランはとても的を射ていて、一体どのようにして身に付けたのかと思っていたのだ。
もしかしたらこの人間観察のたまものなのかもしれない。
羨望、である。
「特殊スキルですね、流石原野さん！」

そういうと。
彼女はいきなり、驚くほど無表情になった。
「……大袈裟よ」
そっけなく言う。
さっきまで凄く不機嫌そうな顔をしてたのに、いきなりの変化だ。
……あれ、今度は思いっきり褒めたはずなんだけど……。

「けど、まあ……」
俺の疑問を遮るように無表情をちょっとだけ崩して、原野さんは言う。
「敢えてその言葉を借りるんだったら、“条件付き特殊スキル”ってとこね。」
「条件、ですか。」
「興味がなかったら全然駄目なのよ、私。だから、どうでもいい人の事は全く分からないわ。」
肩をすくめながら片手をひらひらと振った。

なるほど、確かに原野さんは万人に注意を向けるタイプではない。
自分の興味の対象を絞ってるから、余計なところからの噂は全く気にならないし、逆に興味がある相手の様子の変化には気づくのか。

そういえば、篠原が“原野さんのファンは多い”なんて言っていたが、彼女がそれに気付いている様子は全くない。

俺は納得する。
すると丁度、その瞬間だった。

「てか思ってたんだけど、また何か悩んでるんじゃない？」
原野さんが俺にこう声をかけてきた。
「……あえ？」
いきなりの事に変な声がでる。

「違うの？」
「いや…まぁ、そうです、けども。」
「やっぱり。」
原野さんはにやにやしている。
「いつも思うけど、マコトってすっごく解りやすいわぁー」

俺は固まった。
思考だけがぐるぐる巡る。
原野さんが俺の変化に気付いているということ、つまりこれは、そういうことだ。
良く考えたら、下の名前で呼ばれているということ。
その希少性を、俺は今まで気づかなかったのだ。

だがしかし、まあ。

俺は押し出すように息を吐く。
落ち着け、仲のいい相手なんて、原野さんにかかれば五万といるはずだ。
俺はその中の一人にすぎない。
Ｏｎｅ　ｏｆ　ｍａｎｙ　ｍａｎｙ　ｈｅｒ　ｆｒｉｅｎｄｓ．
そうだ、間違いない。
俺は急激に熱に浮かされた自分の内側を無理やり冷やす。
それに、これの流れは好都合だ。
最初の質問で変な空気になってしまって言えなかったことも、この流れなら言えるだろう。

「あの、……そのことでちょっと、相談が。」
俺はこう切り出した。
「ん？」
原野さんが片眉を上げて応じる。
タイミングを逃さないうちに一気に言ってしまわなければ。
俺は昼に谷口さんにしたのと同じ質問を彼女にぶつけた。

「自分と親しい人が『もしかして、自分のことをこう思ってるのかも』って感じる出来事があったとして、原野さんは、それを本人に直接確かめようとしますか？
この人が自分のことをどう思ってるか知りたいって思ったとしたら、なんですけど。」

「……。」
「……。」

…少し間が空いて。
「……おお。」
何故か、原野さんが感嘆の声を上げる。
予想外の反応に戸惑う俺。

「……え、え？なんですか」
「つまり焚き付けるわけ？やるわねマコト、なかなかやることがあざとい。」
「は？…いや……」
…焚きつける？あざとい？？

「けども！それはダメよマコト、探りをいれるようなことしちゃ！」
「え……え？」
「それは女の子しか使っちゃ駄目な手だとあたしは思うわ。」

原野さんは腕を組んでうんうんと頷いている。
俺は、会話が一体どこに向かっているのか全く分からない。

「ちょ、ま」
「やっぱりね、男はバシッと！自分からよ！！」

原野さんはそう力強く主張して、ふう、と息をついた。
言いたいことを言い終わったらしい。
そのまま満足したように、彼女が手元の教科書に意識を戻した。

……一体何の話をしてたんだ、原野さん。
俺はぽかんとする。
「ちょ……原野さ」
「マコトも……成長したわねー……」
「……え」
原野さんの言葉に、俺は思わず黙った。
しみじみとそんなことを言う彼女。

「ふーん……そっかそっか。」
原野さんはそう言って頷くと、少し思案するようにしていたが、やがてぼそっとつぶやく。
「やっぱり契約もそろそろ……よね」
「……え、なんのこと」

何故ここで出てくるのか分からない“契約”という言葉に反応して俺は思わず聞き返したが、
「けど、さっき言ったことは私の意見にしか過ぎないから。」
それは原野さんによって遮られる。

「最終的に、選ぶのは貴方。それを忘れたら駄目よ。」
俺を見詰める彼女の瞳は、まっすぐだった。

「……はぁ。」
俺はそれに気圧されて、気の抜けたような返事しかできない。
何がなんだか分からないまま。

彼女はそのまま暫くそんな俺を見ていたが、いきなりふと我に返ったように眉を釣り上げた。
「そうだ、そんなことより！！今はそんな時間はないわ、数学よ数学！！一つでも多く解法を覚えてくれないと！！」

まるでさっきの話なんてなかったかのような切り替え様に、拍子抜けする。
まあ、確かに関係ない話を持ち込んだのはこっちなんだけど。
思わず心の中で苦笑いした。

原野さんは、はきはきと俺の数学の問題集を手にとって、今日の部分のページを探していたが、
「てか、マコト。なにこれ」
やがて怪訝そうに、問題集から紙をめくりあげた。

「貴方の下の名前の漢字って、こんな書き方したらもはや“コトナリ”としか読めないんだけど。」

俺の前に掲げられる半紙。
見覚えのある墨字。

【中澤言成】

「……おしい！！！！」

……思わず机をダンっと叩いた。

「え、ちょ……しーっ！」
隣で師匠が焦った顔をしている。

6．"11　SAMURAIs"　―f1『自曝』

―f1『自曝』

週末がまた明けた。
今日はちょうどテスト一週間前、月曜日である。

さっき、いつもの日課である図書室での勉強を終えてきた。
一週間も続けると流石に場所に溶け込んできて、俺はすっかり図書室の住民のようになっていた。
……まだ一週間前か。
何だか最近、時間の流れが極端に遅い。

相変わらず朝から疲れてぼんやりしながら図書室からの廊下を抜けて、俺はホームルームの引き戸を開けて中に入る。

「おっす、誠ー！」
「中澤ー、はよーっす」
俺の姿が見えたのか、話していたらしい矢吹と篠原がまた、すぐに声をかけてきた。
そちらの方を向くと、末永も二人と一緒にいたようで、こっちに向かって小さく手を振っている。

……あ、篠原だ。
そう思った瞬間、一気に目が覚めた。
俺は先週一週間の出来事を思い出す。
毎日のように挟まれていた半紙、微妙に間違って書かれていた名前、
不可解な出来事の数々……。

「お…、おっす！！」
返事として出た声は、素っ頓狂に高かった。
無意識に緊張したのだと思う。

「おお？！なんだよ誠、お前今日元気だなー！最近なんだか元気なかったのによー。」
「え……え？！そうか？！」
「うんうん。」
矢吹と篠原が言う。
俺は三人の居る所に向かった。

「そ、そんなことないぞ」
「ははは！！中澤最近、すごい頑張って勉強してるもんな！」
篠原が笑う。
「は…はは！！！」
俺も笑う。
意識しすぎておかしな笑い方になっているような気がしてならない。
額に変な汗がういている。

「またノートとか色々貸してくれよー！最近、あっきーが貸してくれなくてさあ」
「あっきーっていうな。」
末永が被せ気味にぴしゃりと言った。
「篠原はもうちょっと自分でなんとかすべきだよ。」
「なんだよ、きびしー！」
末永の厳しい言葉に、篠原は耳を押さえて首を振る。

そのまま俺の方に向き直ると。
「てわけだから、な！また貸してよ、数学の問題集とか！」
そういった。

「……っ」
俺は自分の顔が引きつるのを感じた。
数学の問題集。
いつも半紙が挟まっている、あの。
どういうことだ、やっぱり篠原は……、篠原が……？

「なんだよ篠原ー！！オレっちも頼ってくれよー淋しいじゃねえかあ」
今まで黙っていた矢吹がいきなり乱入してきた。
「えー、矢吹、お前いっつも寝てるくせに！」
「けどオレっちの成績知ってるだろー？もっと頼って！！」
「なんかそれ嫌だ！！お前だけには頼らねー！！！」

矢吹と篠原が騒いでいる。
助かった、と俺は思った。

だが、“その場をごまかせた”なんてのはただの楽観的な観測にしか過ぎなかったらしい。
その日の放課後だった。
授業が終わって帰る準備も済ませた俺が、掃除に行こうとしたときだ。

「あのさ、中澤。ちょっといい？」
俺の所にやってきた末永が、こう言った。

「最近、何かあったの？」

―f2『誘導』

「先週の月曜までは何もなかった。けど、その後からちょくちょく気がかりができてきて、特に強く意識し始めたのは水曜辺りから。その事について今も心配してる。違う？」

これは末永の台詞だ

あの後。

いきなりの事に慌てた俺は、何を言っていいのか解らないままうろたえた。

首を横に振って、目で訴える。

『ここでは駄目だ、聞くな、話を変えてくれ。』

教室では誰が聞いているか分からない。そんな中、この話題に触れたくなかった。

すると、こちらの様子から都合が悪い事を察したのか。

末永はすぐ、

「……ちょっと美術室に荷物取りに行きたいんだけど、付き合ってくれない？」

と周りに聞かせるような声で言い直した。

こういう気遣いが彼のすごい点で、同時に抜け目ない点でもある。

末永の機転に助けられ、そんなこんなで美術室にて。
部屋に入った途端にかけられた彼の言葉に俺は驚嘆する。
曖昧な記憶になりつつあったが、先週起こったことに照らしてみても、末永の考察は狂いなかった。

月曜に半紙を初めて見つけ、同時に“不可解な事”が起こり始めた。
水曜日に半紙の犯人が篠原かもしれないという疑惑が上がった。
そして、それらはどちらもずっと続いている。
そう、一週間経った今日もだ。
ここまで詳細に事実を当てられるとは。

「……間違いない。」
大人しく認めた俺に、
「やっぱり」
末永は微笑み混じりに返した。

「まぁ『何かあったな』って確信したのは今日の朝なんだけど。…中澤、分かり易すぎるよ。」
「……うそ」
この前も誰かさんに同じことを言われた気がする。

「てか、隠してるつもりだったの？」
「そりゃ、一応は…」
「……中澤はもっと、普段の自分の行動パターンを意識すべきだよね……。」
「……頑張ります。」
「うん。それがいいよ。」

末永は教室内に並べられた六つのテーブルのうち、一番奥の壁側のものに腰掛けた。
俺も続いて座る。
丁度末永の真正面だ。

机に右肘をつき体半分乗り出すようにして、末永が続けた。
「やっぱ、あんまりソワソワするのは良くないよ？」
「……え、してる？」
「ここんとこ良くキョロキョロしてるし、最近は特に挙動不審。」
「……まじで？」
「まじ。」
「……うっわぁ……」
「まぁ、他の人はあんまり気づいてないと思うけど。少なくとも矢吹と篠原は、全く気付いてないんじゃないかな。」
単純だからね、と末永は笑う。

だが、直ぐその笑みは消えた。
「それで、なんだけど。」
「……うん」
「どうしたの？」
「……、あー、うん。」
「何かあったんなら聞くけど？」
末永はいつの間にか両肘を机に突いて、組んだ手の上に顎を乗せている。
何時も眠そうな彼の節目が今はもっと細められていて、何故か眼光

が鋭く感じられた。

思わず黙る。
“不可解な出来事”に関しては、俺の気のせいである可能性の範疇を出ないし、半紙のことも取るに足らないような些細なイタズラかもしれない。
これぱかりは末永に詳しく話しても、何の解決にもならないだろう。
だが。
ここまで真剣に心配してくれる友人の気持ちを無碍にするのは、絶対に嫌だった。

「……実は、な。ちょっと最近、気になることがあってだな。」
「噂のこと？」
「いや、それじゃなくて。……なんて言うか、まぁそれを気にしてたせいで挙動不審に見えたんだと思う。」
「……なるほど。」

末永は頷く。
凄く真剣な面持ちだ。

そんなに真剣に聞いてもらうほどの話じゃないかもしれない。
焦った俺は、慌てて付け加える。

「まぁ、けどそれは俺の勘違いとか、気にしすぎとか、そんなとこだと思う。だから」
「けど、気にしてるんでしょ？態度にでるくらい。」

末永は俺の言葉を遮った。
何時もの飄々とした雰囲気は、もうすっかり無い。
「それなら、中澤にとっては大問題でしょ？」
「……。」

大問題、か。
言葉が胸に染みる。
もやもやしたものに名前がつけられて、すとんと落ちるところに落ち着いたような感覚がした。

「……そうなのかもなぁ。」
自然と言葉が漏れる。

しばらくは、俺たちはどちらもなにも喋らなかった。
そうか、俺、気にしてたんだな。
今まで『気にしてはいけない』と思い続けて無視してきた気持ちに、やっと気づいたような感じだ。
“気にするな”という否定が逆に、気にしそうになる自分を焦らせる結果になってしまっていたのだろう。

静寂をかみしめる中。
それを破るように突然、末永が言った。

「ここは美術室だねー」
「……は？」
……何を言ってるんだ末永。

「誰もいなくて静かだねー」
「お……、おう。」
「心置きなく話せるよねー！」

今までにないくらい微笑んでいる。
……なんだこれ？
「え？ちょ、それがなに」
「まぁ幸い時間もあるし。」

末永はくいっとクビを傾けると、
「俺にも流れが解るように、何があったのか、一からどうぞ！」
普段なかなか見ない、にっこり笑顔をこちらに向けた。

……やっぱり食えない奴だ、末永は。
俺も吊られてニヤリとした。

6．"11　SAMURAIs"　―f3『推測』

―f3『推測』

説明が億劫と思われることも、いざ話し始めてみると思ったよりすらすらと言葉が続くものである。
俺は先週一週間の事を、覚えている限り細かく説明した。
携帯で“不可思議な事”の備忘録を付けていたことが、こんな所で役立つとは思わなかった。

「……それで、今日の昼休みに『言　成』って書かれたペットボトルが教室の近くの窓辺に置いてあった。これが今のところ最後だ。」
10分ほどかけて説明し終わる。

「……へー…なんか、大変だったんだね……。」
末永は困惑したような妙な顔をしていた。
そりゃそうだろう、まったく意味が分からないのは俺も同じだ。

「ここまで続くと、最近は『また来た!』みたいな感じのテンションになってきてさ。ちょっとしたイベント感がある。気にならないって言ったらウソになるけど。」
「確かに、害はないか…。けど、ほんと良く分からないね……。それで今日は、半紙は問題集に挟んであったの?」
「あ、うん、あった。昼間見たときに、ばっちりいつもの場所に挟んであった。」

俺はブレザーのポケットから生徒手帳を取り出して、そこにしまっていた今まで挟まっていた半紙5枚を末永に渡した。今日の分を開いて渡す。
今日の分にはいつもの字で
【中沢言成】
と書いてある。

「墨を使ってる割には字が下手だな…。」
巧い字を見慣れてると目が肥えて困るよ。と、末永がそれをまじまじ見て言った。

そうなのだ。この半紙の犯人は字が下手なのだ。
漢字を文字じゃなくて記号みたいに書いてるというか、全くバランスがとれてないというか。
この大雑把な感じも、俺にとって篠原説の裏付けになってしまっている。
何故墨字なのかはいまいち解らないが、いかにも体育会系の篠原が書きそうな字だった。
そう、篠原が……。

…だめだ、まだ篠原と決定した訳じゃない。
俺は思考を振り払うように言う。
「見たとき、『組み合わせてきた!』って思ったよ、ほんと。」
「そろそろネタ切れ感が否めないね……。というか、【言成】って表現、相手方は気にいったんだろうね。使用頻度高いよ。こんなに頻発したらチープになるのにね。」
「けど、この間違いが一番秀逸だと思ったわ、俺は。」
「確かに【車澤】とか【申澤】よりよっぽどシンプルで面白い。正

直、最初の二つは滑ってるよね。何を狙ってるのか知らないけどさ、もうちょっと考えるべきだよ。センスがないというか。」
……末永が真顔でかなりの毒舌を吐いた。
犯人、『滑ってる』とか、言われたい放題である。

そんな一部の女子には『女の子みたいで可愛い！』と人気の末永は、いつもの伏し目がちな瞳をもっと細めて、クールに言った。
「まあ取りあえず、今の状況を軽く整理してみようよ。」

末永は立ち上がると、壁際の金属ラックに近寄り、ざらばん紙とマジックを取ってきた。
元居た席にそれを広げると、上の方から曜日を書いていく。
「先週の月曜から今週の月曜まで、休日を抜くと6日。で、大体“変なこと”は1日二つくらい起きてて…半紙は毎日。」
今の状況を紙に書き付けていく。

「合計１２個か…」
「結構な量だよね。スタンダードで継続的って、かなりマメだよ。」
末永は曜日の横にイタズラの詳細を書き添えていく。

「こうやってみてみたら、今週の月曜の内容って、他の日のイベントと被ってるんだね。」
全てを書き終えて、末永が言った。

確かにそうだった。
今日起こったことは、【　言　成　】ペットボトルとスリッパ互い違い。
それぞれ、先週の月曜と金曜の欄に似たようなことが書いてある。

「……似た内容のイベントは、同じ人が担当してやってるとか、か？」

「そうなのかもしれないし、そうでないかもしれない。なんにせよ確証は持てないよ。ここら辺までは事実整理だけど、ここからは完全に俺の推測になるわけだし。……まあどっちにしても半紙の件は、字の感じからして同じ一人がやってるんだろうね。」

末永は紙の右端に大きく『1』と書く。

「……じゃあイベントも含めて、その半紙の一人がずっと俺にちょっかいかけてた可能性もあるってことか？」

「いや、それはないんじゃないかな。流石に何人か居ないとこの量はこなせないと思うんだよね。…一人の人がせっせと悪戯を考えて実行してるのを想像すると、ちょっと面白いけど…」

末永は半笑いになっている。

俺もその様子を想像してみた。

…だが、背筋がぞわっとするような悪寒がしただけだった。

末永はペンの後ろで紙をトントンと叩く。

「起きてることも場所もバラバラだし、複数人で分担してると考えるのが妥当なんじゃないかな。」

「グループ、ってことか？」

「多分ね。」

末永はそう返してペンを構える。

「今日の内容が前に見たのと似てるっていう点には注目すべきだと思う。もしかしたら」

金曜と月曜の欄の間に、さっと横線が引かれた。

「ここが切れ目なのかも。」
「ローテーション組んでるってことか？」
「真偽は解らないけど、そう考えたら自然じゃない？だから、単純に計算して…半紙を書いてる人だけ別カウントにするけど…」

末永は『1』の下にまた書き始める。

5×2＝10
10＋1＝11

「人数は、多くて11人だ。」

「じゅ……11って」
末永の言葉に、俺は目眩を覚える。
なんだその人数……そんな大人数に集団で目を付けられてるってことか？
信じたくない事実だ。これはもう、本当に信じたくない。

「けど、それって一番多い場合なんだよな？俺、そんな大人数に悪戯されるようなことしてないと思うんだけど。…やっぱり実際はもうちょっと少ないんじゃないかって思うんだけ」
「中澤」
こちらは必死でさっきの論理を崩そうとしているのに、末永はそれ

を遮るように言う。

「多分、１１人でビンゴだ。」

「……え、どうして、さっきは推測って」

「中澤、思い当たらないの？確かに、これが先月だったらもう少し人数が少ないって考えるのが妥当だと思うよ。けどさ、中澤。最近、君が噂になって困ったことは？校内中知れ渡って苦労したことって？まず、噂になるような原因ってなんだった？」

末永がたたみかけるように問うてくる。

…嫌という程、思い当たるものがあった。

「ま、まさか」

「原因は、原野唯陽だよ。」

末永は言い切った。

さっき、『ここからは自分の推測』なんて言ってた奴とは思えないくらい、確信に満ちた目をしている。

「ほぼこれで間違いないよ。だって１１人って、」

「自称『原野唯陽親衛隊』の人数と同じだ。」

「……はぁあ？！」

良く知っているはずだった我が師匠の全く知らない情報に、俺は自分でもびっくりするくらい素っ頓狂な声を上げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4604l/

Contrast

2011年12月17日12時03分発行